

須流須邊乃奈左
今のごと戀しく君がおもほえばいかにかもせむするすべのなさ
(三九二九)

更贈越中國歌二首
多妣爾伊仁思 吉美志毛都藝底 伊米爾美由 安我加多孤悲乃
思氣家禮婆可聞
旅にいにし君しもつぎて夢に見ゆ吾が片戀のしげければかも
(三九三〇)

美知乃奈加 久爾都美可未波 多妣由伎母 之思良奴伎美乎
米具美多麻波奈
道の中國つみ神は旅行きもし知らぬ君をめぐみたまはな
(三九三一)

平群氏女郎贈越中守大伴宿禰家持歌十二首
吉美爾餘里 吾名波須泥爾 多都多山 絶多流孤悲乃 之氣吉
許呂可母
君により吾が名はすでに立田山たえたる戀のしげきころかも
(三九三二)

須麻比等乃 海邊都禰佐良受 夜久之保能 可良吉戀乎母 安
禮波須流香物

思良難久
草まくら旅いにし君が歸り來む月日を知らむすべのしらなく
(三九三八)

可久能未也 安我故非乎浪牟 奴婆多麻能 欲流乃比毛太爾
登吉佐氣受之底
かくのみや吾がこひ居らむぬばたまのよるの紐だにときさけず
して
(三九三九)

佐刀知加久 伎美我奈里那婆 古非米也等 母登奈於毛比此
安連會久夜思伎
里ちかく君がなりなば戀ひめやともとな思ひし吾ぞくやしき
參照 モトナ

(三九四〇)
餘呂豆代爾 許己呂波刀氣底 和我世古我 都美之乎見都追
志乃備加禰都母
萬代に心はとけて我がせこが抓みし手見つしのみかねつも
(一) 爾の字元曆校本には等と書かれて居る。此場合はニ、トいづれで
も妨はない。
(二) 乎の字元曆校本に手とあるを可とする。「抓みし手」の意である。
(三九四一)

萬葉集(卷第十七)

須麻比との海邊つねさらすやく鹽のからき戀をも吾はするかも
(三九三三)

阿里佐利底 能知毛相牟等 於母倍許會 都由能伊乃知母 都
藝都追和多禮
ありさりて後もあはむと思へこそ露のいのちもつぎつ渡れ
(三九三四)

奈加奈可爾 之奈婆夜須家牟 伎美我目乎 美受比佐奈良婆
須敬奈可流倍思
中々に死なばやすけむ君が目を見ず久ならばすべなかるべし
(三九三五)

許母利奴能 之多由孤悲安麻里 志良奈美能 伊知之路久伊泥
奴 比登乃師流倍久
こもり沼の下ゆこひ餘り白波のいちじろく出でぬ人の知るべく
(三九三六)

久佐麻久良 多妣爾之婆之婆 可久能未也 伎美乎夜利都追
安我孤悲乎良牟
草まくら旅にしはしかくのみや君をやりつつ吾がこひをらむ
(三九三七)

草枕 多妣伊爾之伎美我 可敬里許牟 月日乎之良牟 須邊能

翼能 奈久久良多爾之 字知波米底 夜氣波之奴等母 伎美乎
之麻多武
鶯の鳴くくらたにのうちはめてやけば死ぬとも君をしたまむ
(一) 之の字舊訓シと點し、元曆校本等には々とあるが、クラタニノと
訓み「クラタニの如く」の意と解すべきである。ウチハメテ(打込ん
で)焼けて死ぬともといふことの譬喩に、家持の行く途中の一地點で熱
湯の涌くクラタニを用ひたに過ぎぬ。鶯のナクはクラ(暮)にかゝる
序である。——新考に鷓を鷓鳥の誤字としたのは論にならぬ。
參照 クラタニ(地)

(三九四二)
麻都能波奈 花可受爾之毛 和我勢故我 於母敬良奈久爾 母
登奈佐吉都追
松のはな花かすにしも我がせこが思へらなくにもとな咲きつつ
右件十二首歌者時時寄便使來贈、非在一度所送也
(三九四三)

八月七日夜集于守大伴宿禰家持館宴歌
秋田乃 穗牟伎美我底利 和我勢古我 布佐多乎里家流 乎美
奈敬之香物
あきの田の穂むき見がてり我がせこがふさ手折りけるをみなへ
しかも

七七三

右一首守大伴宿禰家持作

參照 フサ

(三九四四)

乎美奈徹之 佐伎多流野邊乎 由伎米具利 吉美乎念出 多母
登保里伎奴
をみなへし咲きたる野邊を行き廻り君を思ひ出たもとほり來ぬ

(三九四五)

安吉能欲波 阿加登吉左牟之 思路多倍乃 妹之衣袖 伎牟餘
之母我毛
秋の夜はあかとき寒し白たへの妹が衣手着むよしもがも

(三九四六)

保登等藝須 奈伎底須疑爾之 乎加備可良 秋風吹奴 余之母
安良奈久爾
霍公鳥なきて過ぎにし岡びから秋風吹きぬよしもあらなくに

右三首掾大伴宿禰池主作

(三九四七)

氣佐能安佐氣 秋風左牟之 登保都比等 加里我來鳴牟 等伎
知可美香物
今朝のあさけ秋風さむし遠つ人かりが來なかつ時ちかみかも

(三九四八)

安麻射可流 比奈爾月歷奴 之可禮登毛 由比底之紐乎 登伎
毛安氣奈久爾
あまさかる鄙に月へぬ然れども結ひてし紐をときもあけなくに

右二首守大伴宿禰家持作

參照 アマサカル

(三九四九)

安麻射加流 比奈爾安流和禮乎 宇多我多毛 比母毛登吉佐氣
底 於毛保須良米也
あまさかる鄙にある我をうたかたも紐もとき放て思ほすらめや

右一首掾大伴宿禰池主

(一) 底を受の誤とする古義の説は非。紐トキサケは待人のまじなひで
ある。元曆校本には比母登吉佐氣底とし、毛の字を除いてある。

參照 ユタカタ

(三九五〇)

伊弊爾之底 由比底師比毛乎 登吉佐氣受 念意緒 多禮賀思
良牟母
家にして結ひてし紐をときさけずおもふ心を誰か知らむも

右一首守大伴宿禰家持作

(三九五二)

日晩之乃 奈吉奴流登吉波 乎美奈弊之 佐伎多流野邊乎 遊
吉追都見倍之
日ぐらしの鳴きぬる時は女郎花咲きたる野邊を行きつつ見べし

右一首大目秦忌寸八千鳥
(一) 千の字元曆校本には十とある。

(三九五三)

古歌一首 大原高安真人作 年月不審、但隨聞時記
載茲焉
伊毛我伊弊爾 伊久理能母里乃 藤花 伊麻許牟春毛 都禰加
久之見牟
妹が家にいくりの森の藤の花いま來む春もつねかくし見む

右一首傳誦僧玄勝是也

參照 イクリの森

(三九五三)

鴈我禰波 都比爾許牟等 佐和久良武 秋風左無美 曾乃可
波能倍爾
雁がねはつかひに來むとさわぐらむ秋風さむみ其河のへに

(三九五四)

馬並底 伊射宇知由可奈 思夫多爾能 伎欲吉伊蘇末爾 與須
馬並底 伊射宇知由可奈 思夫多爾能 伎欲吉伊蘇末爾 與須

(三九五七)

參照 ナゴの浦、タナ、アベテ
右館之客屋居望蒼海、仍主人八千鳥作此歌也

哀傷長逝之弟一歌一首并短歌

安麻射加流 比奈乎佐米爾等 大王能 麻氣乃麻爾末爾 出而
許之 和禮乎於久流登 青丹余之 奈良夜麻須疑底 泉河 伎
欲吉可波良爾 馬駐 和可禮之時爾 好去而 安禮可弊里許牟
平久 伊波比底待登 可多良比底 許之比乃伎波美 多麻保許
能 道乎多騰保美 山河能 弊奈里底安禮婆 孤悲之家口 氣
奈我枳物能乎 見麻久保里 念間爾 多麻豆左能 使乃家禮婆
宇禮之美登 安我麻知刀敷爾 於餘豆禮能 多婆許登等可毛
婆之伎余思 奈弟乃美許等 奈爾之加母 時之波安良牟乎 婆
太須酒吉 穗出秋乃 芽子花 爾保弊流屋戸乎 言斯人爲性好
愛花草花樹 而多植於寢院之庭 故謂之花蕪庭也 安佐爾波爾 伊
泥多知奈良之 暮庭爾 敷美多比良氣受 佐保能宇知乃 里乎
往過 安之比紀乃 山能許奴禮爾 白雲爾 多知多奈妣久等
安禮爾都氣都流 佐保山火葬 故謂之佐保乃宇知乃佐乃由吉須疑
あまさかる 夷をさめにと 大君の まけのまにまに 出でて
來し 我をおくと 青によし 奈良山すきて いづみ川 清
き河原に 馬とどめ わかれし時に さきく行きて 吾かへり
來む 平らけく いはひて待てと かたらひて 來し日のきは
み 玉梓の 道をた遠み 山河の へなりてあれば 戀しけく

け長きものを 見まく欲り 思ふ間に 玉づさの つかひのけ
れば うれしみと 吾がまち問ふに およづれのたわ言とかも
はしきよし な弟のみこと 何しかも 時しはあらむを はた
薄 ほに出づる秋の 萩の花 にほへる宿を 朝庭に いで立
ちならし 夕庭に 踏み平らげず 佐保のうちの 里を歩きす
ぎ あしびきの 山の木ぬれに 白雲に 立ちたなびくと 吾
につげつる

參照 アマサカル、マケ、イツミ川、オヨヅレ、タハ、ハシキヨシ

(三九五八)

麻佐吉久登 伊比底之物能乎 白雲爾 多知多奈妣久登 伎氣
婆可奈思物
まさきくといひてしものを白雲に立ちたなびくと聞けば悲しも

(三九五九)

可加良牟等 可禰底思理世婆 古之能宇美乃 安里蘇乃奈美母
見世麻之物能乎
かゝらむと豫て知りせば越の海のありその波も見せましものを

右天平十八年秋九月二十五日越中守大伴宿禰家持遙聞
弟喪感傷作之也

(三九六〇)

相歌歌二首 越中守大伴宿禰家持作

庭爾敷流 雪波知敬之久 思加乃未爾 於母比底伎美乎 安我
麻多奈久爾

庭にふる雪は千重しく然のみに思ひて君を吾が待たなくに

(三九六一)
白浪乃 余須流伊蘇末乎 榜船乃 可治登流間奈久 於母保要
之伎美

白波のよする磯まをこぐ舟のかちとる間なくおもほえし君

右以天平十八年八月、椽大伴宿禰池主附大帳使赴向
京師、而同年十一月還到本任、仍設詩酒之宴、彈絲飲
樂、是日也白雪忽降、積地尺餘、此時也、復漁夫之船入海
浮瀾、爰守大伴宿禰家持寄情一眺一聊裁所心

(三九六二)

忽沈枉疾殆臨泉路、仍作詞以申悲緒一首
并短歌

大王能 麻氣能麻爾麻爾 大夫之 情布里於許之 安思比奇能
山坂古延底 安麻射加流 比奈爾久太理伎 伊伎太爾毛 伊麻
太夜須米受 年月毛 伊久良母阿良奴爾 宇都世美能 代人奈
禮婆 宇知奈妣吉 等許爾許伊布之 伊多家苦之 日異益 多

良知禰乃 波波能美許等乃 大船乃 由久良由久良爾 思多異
非爾 伊都可聞許武等 麻多須良武 情左夫之苦 波之吉與志
都麻能美許登母 安氣久禮婆 門爾餘里多知 己呂母泥乎 遠
理加弊之都追 由布佐禮婆 登許宇知波良比 奴波多麻能 黑
髮之吉底 伊都之加登 奈氣可須良牟會 伊母毛勢母 和可伎
兒等毛波 乎知許知爾 佐和吉奈久良牟 多麻保己能 美知乎
多騰保彌 間使毛 夜流余之母奈之 於母保之伎 許登都底夜
良受 孤布流爾之 情波母要奴 多麻伎波流 伊乃知乎之家騰
世牟須辨能 多騰伎乎之良爾 加苦思底也 安良志乎須良爾
奈氣枳布勢良武

大君の まけのまにまに ますら男の 心ふりおこし あしび
きの 山坂こえて あまさかる 鄙にくだり來 いきだにも
いまだ休めず 年月も いくらもあらぬに うつせみの 世の
人なれば うちなびき 床にこい臥し いたけくの 日にけに
まさる たらちねの 母の命の 大舟の ゆくらゆくらに 下
ごひに つかも來むと またすらむ 心さぶしく はしきよ
し 妻の命も あけくれに 門によりたち 衣手を 折りかへ
しつ つ 夕されば 床うちはらひ ぬばたまの 黒髪しきて
いつしかと 嘆かすらむぞ 妹も兄も わかき子どもは 遠近

に さわぎ泣くらむ 玉梓の 道をた遠み 間使も やるよし
もなく おもほしき 言つてやらす 戀ふるにし 心はもえぬ
靈きはる 生命をしけど せむすべの たどきを不知 かくし
てや あらし雄すらに 嘆きふせらむ

(一)之を久の誤とする新考説可。

參照 アマサカル〔枕〕、タラチネ〔枕〕、ヒニケニ、ユクラユクラ、ハ
シキヨシ、マヅカヒ、タマキハル〔枕〕

(三九六三)

世間波 加受奈吉物能可 春花乃 知里能麻可比爾 思奴倍吉
於母倍婆

世の中は數なきものか春花のちりのまがひに死ぬべきおもへば
(三九六四)

山河乃 曾伎徹乎登保美 波之吉余思 伊母乎安比見受 可久
夜奈氣加牟

山川のそぎへを遠みはしきよし妹を逢ひ見ずかくや嘆かむ

右天平十九年春二月二十日、越中國守之館臥病悲傷、聊

作此歌

參照 ノギ、ソグヘノキハミ

(三九六五) 守大伴宿禰家持贈大伴宿禰池主一悲歌二首

云以藤原錦、鞠振二歌吟一耳

夜麻可比爾 佐家流佐久良乎 多太比等米 伎美爾彌西底婆

奈爾乎可於母波牟

山峽にさける櫻をただ一目君に見せては何をかおもはむ

(三九六八)

宇具比須能 伎奈久夜麻夫伎 宇多賀多母 伎美我手敷禮受

波奈知良米夜母

うぐひすの來なく山吹うたかたも君が手ふれず花ちらめやも

沽洗二日椽大伴宿禰池主

(一)契沖によれば沽は姑の誤記で、姑洗は三月をいふ。

參照 ユタカタ

(三九六九)

更贈歌一首并短歌

含弘之德垂恩蓬體、不貲之恩報慰陋心、載荷未春無

堪所喻也、但以稚時不涉遊藝之庭、橫翰之藻自乏乎

彫蟲焉、幼年未達山柿之門、裁歌之趣詞失乎藁林矣、

爰辱下以藤續錦之言、更題將石同瓊之詠、因是俗

愚懷癖不能默止、仍捧數行式酬嗤咲其詞曰

於保吉民能 麻氣乃麻爾麻爾 之奈射加流 故之乎遠佐米爾

忽沈枉疾、累旬痛苦、禱特百神、且得消損、而由身體
疼痛、筋力性軟、未堪展謝、係戀彌深、方今春朝春花流
馥於春苑、春暮春鶯轉聲於春林、對此節候、琴罇可翫
雖有乘興之感、不耐策杖之勞、獨臥惟幄之裏、聊
作寸分之詞、輕奉机下、犯解玉頤、其詞曰

波流能波奈 伊麻波左加里爾 仁保布良牟 乎里底加射佐武
多治可良毛我母

春の花今はさかりに匂ふらむ折りてかざさむ手力もがも

(三九六六)

宇具比須乃 奈枳知良須良武 春花 伊都思香伎美登 多乎里
加射左牟

うぐひすの鳴き散らすらむ春の花いつしか君と手折りかざさむ
天平二十年二月二十九日大伴宿禰家持

(三九六七)

忽辱芳音、翰苑凌雲、兼垂倭詩、詞林舒錦、以吟以詠
能獨戀緒、春可樂、暮春風景最可伶、紅桃灼灼戲蝶回

花儂、翠柳依依、嬌鶯隱葉歌、可樂哉、淡交促、席得意志

言、樂矣美矣、幽襟足賞哉、豈慮乎、蘭蕙隔、衰琴罇無用、
空過令節、物色輕人乎、所怨有、此不能默止、俗語

伊泥底許之 麻須良和禮須良 余能奈可乃 都禰之奈家禮婆
宇知奈妣伎 登許爾已伊布之 伊多家苦乃 日異麻世婆 可奈

之家口 許已爾思出 伊良奈家久 曾許爾念出 奈氣久蘇良

夜須家奈久爾 於母布蘇良 久流之伎母能乎 安之比紀能 夜

麻伎弊奈里底 多麻保許乃 美知能等保家波 間使毛 遺緣毛

奈美 於母保之吉 許等毛可欲波受 多麻伎波流 伊能知乎之

家登 勢牟須辨能 多騰吉乎之良爾 隱居而 念奈氣加比 奈

具佐牟流 許已呂波奈之爾 春花乃 佐家流左加里爾 於毛敷

度知 多乎里加射佐受 波流乃野能 之氣美登妣久久 鶯 音

太爾伎加受 乎登賣良我 春菜都麻須等 久禮奈爲能 赤裳乃

須蘇能 波流佐米爾 爾保比比豆知底 加欲敷浪牟 時盛乎

伊多豆良爾 須具之夜里都禮 思努波勢流 君之心乎 牟流波

之美 此夜須我良爾 伊母禰受爾 今日毛之賣良爾 孤悲都追

會乎流

大君の 任のまにまに しなさかる 越ををさめに 出でて來

しますら我すら 世の中の 常しなればば うちなびき 床

にこい臥し 痛けくの 日にけに益せば 悲しけく ここに思

ひ出 いらなけく そこに思ひで なげくそら 安けなくに

思ふそら 苦しきものを あしびきの 山來へなりて 玉梓の

道の遠けば まづかひも やる由もなみ 思ほしき 言もかよ
 はす たまきはる 生命惜しけど せむすべの たどきを不知シラニ
 こもり居て 思ひ嘆かひ なぐさむる 心はなしに 春花の
 咲けるさかりに 思ふどち 手折りかささず をとめらが 春
 菜つますと くれなゐの 赤裳のすその 春雨に にほひちづ
 ちて 通ふらむ 時のさかりを いたづらに 過ぐしやりつれ
 しぬばせる 君が心を うるはしみ 此夜すがらに いも寝ず
 に 今日もしめらに 戀ひつつぞ居る

(一) 此句不可解。新訓は代匠記及暑解の説を參酌して末眷と改めた。
 或は然らむ。

(二) 契沖が「家」の字の下に久の字脱としたのは非。ヤスケクナクとい
 ふ言葉はあり得ぬ。ヤスケナクはヤスカラナクの古語で、六音とな
 つて面白くないが、家持はことさらに之を用いたものと思はれる。

語法要録參照。

(三) 牟の字元曆校本に宇とあるを可とする。
 參照 マケ、シナサカル「枕」、ヒニケニ、イラナケク、ナゲクソラ、オ
 モフソラ、マツカヒ、タマキハル「枕」、スガラ、シミラ(シメラ)

(三九七〇)

安之比奇能 夜麻左久良婆奈 比等目太爾 伎美等之見底婆
 安禮古非米夜母
 あしびきの山さくら花一目だに君とし見ては吾こひめやも

雲曇酌^レ桂^二清酒 羽辭催^レ人九曲流
 縱醉陶心忘^レ彼我 酌無^レ處不^レ流留

三月四日大伴池主

(一) 契沖は「遊覽」の次に詩の字脱とし、新考は「七言」の二字を遊覽の
 下に移すべしとした。新考説がよいやうである。

(二) 臉は臉の誤とする新考説可。

(三) 略解に含苔は含黛の誤とある。或は然らむ。

(四) 過は暑解に過の誤とあるを可とする。

(五) 元曆校本には琴罇とある。

昨日述^レ短懷、今朝汗^レ耳目、更承^レ賜書、且奉^レ不次、死
 罪謹言、不^レ遺^レ下賤、頻惠^レ德音、英雲星氣逸調過^レ人、智水
 仁山既韞^レ琳瑯之光彩、潘江陸海自坐^レ詩書之廊廟、騁^レ
 思非^レ常、託^レ情有^レ理、七步成^レ章、數篇滿^レ紙、巧遣^レ愁人之
 重患、能除^レ戀者之積思、山柿譚泉、比^レ此如^レ蓼、彫龍筆海
 粲然得^レ看矣、方知僕之有^レ幸也、敬和^レ歌、其詞云

憶保枳美能 彌許等可之古美 安之比奇能 夜麻野佐婆良受
 安麻射可流 比奈毛乎佐牟流 麻須良袁夜 奈爾可母能毛布
 安乎爾余之 奈良治伎可欲布 多麻豆佐能 都可比多要米也
 己母理古非 伊枳豆伎和多利 之多毛比余 奈氣可布和賀勢
 伊爾之弊由 伊比都藝久良之 餘乃奈加波 可受奈枳毛能賀

(三九七一) 夜麻扶枳能 之氣美登毗久久 鷺能 許惠乎聞良牟 伎美波登
 母之毛

山吹のしげみ飛びくうぐひすの聲を聞くらむ君はともしも

參照 クキ

(三九七二) 伊尼多多武 知加良乎奈美等 許母里爲底 伎彌爾故布流爾
 許己呂度母奈思

いでたむ力をなみとこもり居て君に戀ふるに心ども無し

三月三日大伴宿禰家持

參照 ココロド

(三九七三)

七言晚春三日遊覽(一)首并序
 上已名辰、暮春麗景、桃花照^レ臉以分^レ紅、柳色含^レ苔而競^レ
 綠、于^レ時也携^レ手曠望^レ江河之畔、訪^レ酒過^レ野客之家、
 既而也開^レ罇得^レ性、蘭契和^レ光、嗟乎今日所^レ恨德星已少歟、
 若不^レ扣^レ寂含^レ章何以^レ攄^レ逍遙之趣、忽課^レ短筆、聊勒^レ四
 韻云爾

餘春媚日宜^レ恰賞、上已風光足^レ覽遊、
 柳陌臨^レ江海^二被服、桃源通^レ海之^二仙舟、

奈具仕牟流 已等母安良牟等 佐刀能等能 安禮爾都具良久

夜麻備爾波 佐久良婆奈知利 可保等利能 麻奈久之婆奈久

春野爾 須美禮乎都牟等 之路多倍之 蘇泥乎利可弊之 久禮

奈爲能 安可毛須蘇妣伎 乎登賣良波 於毛比美太禮底 伎美

麻都等 宇良吳悲次奈里 已許呂具志 伊謝美爾由加奈 許等

波多奈(三)

大君の みこと惶み あしびきの 山野さはらず あまさかる
 夷もをさむる ますら男や 何かものもふ 青によし 奈良路
 きかよふ たまづさの 使たえめや こもり戀ひ 息づき渡り
 下もひに 嘆かふ我がせ 古へゆ 言ひつぎくらし 世の中は
 數なきものぞ なぐさむる こともあらむと 里人の 吾につ
 ぐらく 山邊には さくら花ちり かほ鳥の まなくしばなく
 春の野に すみれをつむと 白たへの 袖折りかへし くれな
 ゐの 赤裳すそびき をとめらは 思ひみだれて 君まつと
 うらごひすなり 心ぐし いざ見にゆかな ことはたなゆひ

(一) 余は余の誤とする眞淵説に従ふ。

(二) 賀は曾の誤寫であらう(暑解)。

(三) 宣長は由比を志禮の誤としたが、コトハタナシンでは意が通ぜぬ。
 案するに「言ハタ莫イヒ」の意であらう。ユ、イは相通する。

參照 アサマカル「枕」、カホ鳥、ココログシ、スミレ

(三九七四)

夜麻夫积波 比爾比爾佐伎奴 宇流波之等 安我毛布伎美波
思久思久於毛保山

山吹は日に日にさきぬうるはしと吾が思ふ君はしくしく思ほゆ

(三九五)

和賀勢故爾 古非須弊奈賀利 安之可伎能 保可爾奈氣加布
安禮之可奈思母
あがせこに戀すべなかり葦垣のほかに嘆かふ吾しかなしも

三月五日大伴宿禰池主

(三九七六)

昨暮來使、幸也以垂_レ晚春遊覽之詩、今朝累信、辱也以賦_レ相招望野之歌、一看_レ玉藻稍寫_レ鬱結、二吟_レ秀句、已觸_レ愁緒、非_レ此眺翫孰能暢_レ心乎、但惟下僕稟性難_レ彫、闇神靡_レ瑩、握_レ翰腐_レ毫對_レ研忘_レ渴、終日因流、綴_レ之不_レ能、所謂文章天骨、習之不_レ得也、豈堪_レ探_レ字勒_レ韻叶_レ和雅篇哉、抑聞_レ鄙里少兒、古人言無_レ不_レ酬、聊裁_レ拙詠_レ敬擬_レ解吟焉、如今賦_レ言勒_レ韻、同_レ斯雅作之篇、豈殊_レ將_レ石同_レ瓊唱_レ聲遊走曲_レ歟、抑小兒豈_レ濫_レ諂、敬寫_レ葉端_レ式擬_レ亂曰

抄春餘日媚景麗

初已和風拂自輕

(三九七八)

來燕術_レ泥賀_レ宇入_レ 歸鴻引_レ蘆廻_レ赴_レ瀛
聞君嘯侶新流_レ曲 禊飲催_レ爵泛_レ河清
雖_レ欲_レ追_レ尋良此宴_レ 還知染隕脚跽_レ跽
短歌二首
佐家理等母 之良受之安良婆 母太毛安良牟 已能夜萬夫吉乎
美勢追都母等奈
咲けりとも知らずしあらば黙もあらむ此山吹を見せつともとな
(一) 西本願寺本には目流とある。
(二) 同書には問瓊とある。
(三) 聲遊は遊聲の轉置で、走曲に對するものではあるまか。次の一句は「抑も小兒の譬は濫諂か」とよむのであらう。
(四) 宇入は入字は轉置か「畧解」。
(五) 廻の字元曆校本に迴とあるを可とする。
(六) 良此宴は此良宴の誤記とする説がある「畧解」。
參照 モトナ
(三九七七)
安之可伎能 保加爾母伎美我 余里多多志 孤悲家禮許會婆
伊米爾見要家禮
葦垣の外にも君がより立たし戀ひけれこそは夢に見えけれ
三月五日大伴宿禰家持臥_レ病作之

述_レ戀緒_レ歌一首并短歌

妹毛吾毛 許已呂波於夜自 多具弊禮登 伊夜奈都可之久 相見婆 登許波都波奈爾 情具之 眼具之毛奈之爾 波思家夜之 安我於久豆麻 大王能 美許登加之古美 阿之比奇能 夜麻古要奴由伎 安麻射可流 比奈乎左米爾等 別來之 會乃日乃伎 波美 荒璞能 登之由吉我弊利 春花乃 宇都呂布麻泥爾 相見禰婆 伊多母須弊奈美 之伎多倍能 蘇泥可弊之都追 宿夜於知受 伊米爾波見禮登 宇都追爾之 多太爾安良禰婆 孤悲之家口 知弊爾都母里奴 近在者 加弊利爾太仁母 宇知由吉底 妹我多麻久良 佐之加倍底 禰天蒙許萬思乎 多麻保己乃路波之騰保久 關左閉爾 弊奈里底安禮許會 與思惠夜之餘 志播安良武會 霍公鳥 來鳴牟都奇爾 伊都之加母 波夜久奈里那牟 宇乃花乃 爾保弊流山乎 余曾能未母 布里佐氣見都追 淡海路爾 伊由伎能里多知 青丹吉 奈良乃吾家爾 奴要鳥能 宇良奈氣之都追 思多戀爾 於毛比宇良夫禮 可度爾多知 由布氣刀比都追 吾乎麻都等 奈須良牟妹乎 安比底早見牟
妹も吾も 心は同じ たぐへれど いやなつかしく 相見れば
とこ初はなに 心ぐし 目ぐしもなしに はしけやし あがお

萬葉集(卷第十七)

七八三

く妻 大君の 嬬かしこみ あしびきの 山越え野ゆき あま
さかる 夷をさめにと 別れ來し 其日のきはみ あらたまの
年行きかへり 春花の うつろふまてに 相見ねば いたもす
べなみ しきたへの 袖かへしつ つぬる夜おちず 夢には見
れど うつつにし ただにあらねば 戀しけく 千重につもり
ぬ 近からば 歸りにだにも うち行きて 妹が手枕 さしか
へて 寝ても來ましを 玉梓の 路はし遠く 關さへに へな
りてあれこそ よしゑやし 由はあらむぞ 霍公鳥 來鳴かむ
月に いつしかも 早くなりなむ うの花の にほへる山を
よそのみも 振りさけ見つつ あふみ路に い行きのりたち
青によし 奈良の 吾家に ぬえ鳥の うらなきしつ つ下戀
に 思ひうらぶれ 門に立ち タト問ひつ つ 吾をまつと な
すらむ妹を あひて早見む
(一) ハシケヤシは離詞であるから、オクは目ケシモナシニつゞき、
置いて來た妻の意とせればならぬが、言葉が足らぬ憾がある。加之
新考説の如く「妻ヲ」とあるべき所であるから、六音ならばヲを畧く
理由がない。或はオクはオキク(置來)の誤記ではあるまいか。――
オキクルを古語ではオキクというた――奥の意とし心の奥に思ふ妻
と説くことの誤なるは勿論で、其やうな畧語は成立し得ぬ。
右の外新考には字をかへて改訓した所が二、三見えるが、原字、舊訓の
儘でも意はよく通ずる。

【參照】 オヤジ、タケヒ、ココログシ、メグシ、ハシケヤシ、アマサカル
「枕」、ヨシエヤシ、メエトリ、ウラナキ、ユフケ

(三九七九)

安良多麻乃 登之可弊流麻泥 安比見禰婆 許己呂母之努爾
於母保由流香聞

あらたまの年かへるまで相見ねば心もしぬにおもほゆるかも
(三九八〇)

奴婆多麻乃 伊米爾波母等奈 安比見禮騰 多太爾安良禰婆
孤悲夜麻受家里

ぬばたまの夢にはもとなあひ見れど直にあらねば戀止まずけり

【參照】 モトナ、ズケリ

(三九八一)

安之比奇能 夜麻伎弊奈里底 等保家騰母 許己呂之遊氣婆
伊米爾美要家里

あしびきの山來へなりて遠けども心し行けば夢にみえけり

(三九八二)

春花能 宇都路布麻泥爾 相見禰婆 月日餘美都追 伊母麻都
良牟會

春花のうつろふまでに相見ねば月日よみつつ妹まつらむぞ
右三月二十日夜裏忽兮起戀情一作、大伴宿禰家持

(三九八三)

立夏四月、既經累日、而由未聞霍公鳥喧、因作恨
歌二一首

安思比奇能 夜麻毛知可吉乎 保登等藝須 都奇多都麻泥爾
奈仁加吉奈可奴

あしびきの山も近きをほととぎす月たつまでに何か來鳴かぬ

(一) 左註によれば三月二十九日の作とあるにも拘はらず、立夏四月既

經累日としては齟齬するから、新考は四月を己來の誤であらうと

いうたが、恐らくは作者家持が四月に發表するやうに豫め作つて置

(三九八四)

多麻爾奴久 波奈多知婆奈乎 等毛之美思 己能和我佐刀爾
伎奈可受安流良之

珠にぬく花たちばなをともしみし此わが里に來鳴かすあるらし

霍公鳥者立夏之日來鳴必定、又越中風土希有橙橘也、因

レ此大伴宿禰家持感發於懷聊裁此歌、三月二十九日

【參照】 ハナタチバナ、トモシ

(三九八五)

二上山賦一首 此山者有射水郡也
伊美都河泊 伊由伎米具禮流 多麻久之氣 布多我美山者 波

流波奈乃 佐氣流左加利爾 安吉乃葉乃 爾保弊流等伎爾 出

立底 布里佐氣見禮婆 可牟加良夜 會許婆多敷刀伎 夜麻可

良夜 見我保之加良武 須賣加未能 須蘇未乃夜麻能 之夫多

爾能 佐吉乃安里蘇爾 阿佐奈藝爾 餘須流之良奈美 由敷奈

藝爾 美知久流之保能 伊夜麻之爾 多由流許登奈久 伊爾之

弊由 伊麻乃乎都豆爾 可久之許會 見流比登其等爾 加氣底

之努波米

射水川 い行きめぐれる 玉くしげ 二上山は 春花の 咲け

るさかりに 秋の葉の にほへる時に 出でたちて ふりさけ

見れば 神からや そこば貴き 山からや 見が欲しからむ

皇神の すそみの山の 澁谷の 崎のありそに 朝なぎに 寄

する白波 夕なぎに みち來る潮の いやましに 絶ゆること

なく 古ゆ 今のをつつに かくしこそ 見る人ごとに かけ

てしぬばめ

(一) 新考に末句現在格ならざるべからずとして米を幣の誤字と斷した

のは道理のあることであるが、作者は意嚮法としてシヌバメ(シヌ

バム)といふ語を用ひたのかも知れぬ。

【參照】 フタカミ山、フリサケミレバ、神カラ、ヤマカラ、スメカミ、

(三九八六)

シブタニ(地)、チツツ

之夫多爾能 佐伎能安里蘇爾 與須流奈美 伊夜思久思久爾

伊爾之弊於毛保由

澁谷の崎の荒磯によする波いやしくしくにいにしへ思ほゆ

(三九八七)

多麻久之氣 敷多我美也麻爾 鳴鳥能 許惠乃孤悲思吉 登岐

波伎爾家里

玉くしげ二上山になく鳥のこゑの戀しき時は來にけり

右三月三十日依與作之、大伴宿禰家持

(三九八八)

四月十六日夜裏遙聞霍公鳥喧、述懷歌一首

奴婆多麻能 都奇爾牟加比底 保登等藝須 奈久於登波流氣之

佐刀騰保美可聞

ぬばたまの月にむかひてほととぎす鳴くおと遙けし里遠みかも

右大伴宿禰家持作之

(三九八九)

大目秦忌寸八千島之館錢守大伴宿禰家持 宴歌二首

奈吳能宇美能 意吉都之良奈美 志苦思苦爾 於毛保要武可母

多知和可禮奈波

奈吳の海の沖つ白波しくしくに思ほえむかも立ち別れなば

參照 ナリ〔地〕

(三九九〇)

我加勢故波 多麻爾母我毛奈 手爾麻伎底 見都追由可牟乎
於吉底伊加婆乎思

我がせこは珠にもがもな手にまきて見つつ行かむをおきて行かば惜し

右守大伴宿禰家持、以正稅帳須入京師、仍作此詞、聊陳相別之歎、四月二十日

(三九九一)

遊覽布勢水海賦一首并短歌 此海者有射水郡舊江村也

物能乃敷能 夜蘇等母乃乎能 於毛布度知 許己呂也良武等
宇麻奈米底 宇知久知夫利乃 之良奈美能 安里蘇爾與須流
之夫多爾能 佐吉多母登保理 麻都太要能 奈我波麻須義底
宇奈比河波 伎欲吉勢其等爾 宇加波多知 可由吉加久遊岐
見都禮騰母 曾許母安加爾等 布勢能宇彌爾 布禰宇氣須惠底
於伎弊許藝 邊爾己伎見禮婆 奈藝左爾波 安遲牟良佐和伎
之麻末爾波 許奴禮波奈左吉 許己婆久毛 見乃佐夜氣吉加
多麻久之氣 布多我彌夜麻爾 波布都多能 由伎波和可禮受

見都追思勢播牟

ふぜの海の沖つしら波ありがよひいや年のはに見つしぬばむ

右守大伴宿禰家持作之 四月二十四日

(三九九三)

敬和遊覽布勢水海賦一首并一絶

布治奈美波 佐岐底知里爾伎 宇能波奈波 伊麻曾佐可理等
安之比奇能 夜麻爾毛野爾毛 保登等藝須 奈伎之等與米婆
宇知奈妣久 許己呂毛之努爾 曾己乎之母 宇良胡非之美等
於毛布度知 宇麻宇知牟禮底 多豆佐波理 伊泥多知美禮婆
伊美豆河泊 美奈刀能須登利 安佐奈藝爾 可多爾安佐里之
思保美底婆 都麻欲比可波須 等母之伎爾 美都追須疑由伎
之夫多爾能 安里蘇乃佐伎爾 於積追奈美 余勢久流多麻母
可多與理爾 可都良爾都久理 伊毛我多米 底爾麻吉母知底
宇良具波之 布勢能美豆宇彌爾 阿麻夫禰爾 麻可治加伊奴吉
之路多倍能 蘇泥布理可邊之 阿登毛比底 和賀己藝由氣婆
乎布能佐伎 波奈知利麻我比 奈伎佐爾波 阿之賀毛佐和伎
佐射禮奈美 多知底毛爲底母 己藝米具利 美禮登母安可受
安伎佐良婆 毛美知能等伎爾 波流佐良婆 波奈能佐可利爾
可毛加久母 伎美我麻爾麻等 可久之許會 美母安吉良米米

安里我欲比 伊夜登之能波爾 於母布度知 可久思安蘇婆牟
異麻母見流其等

ものふの 八十伴のをの 思ふどち 心やらむと 馬なめて
うちくちぶりの 白波の ありそによる 澁谷の 崎たもと
ほり まつだえの 長濱すぎて うなひ川 清きせごとに 鶺鴒
川たち か行きかく行き 見つれども 所も不飽と ふぜの
海に 舟うけすゑて 沖へ漕ぎ 邊にこぎみれば なぎさには
あぢむら騒ぎ 島まには 木ぬれ花さき ことばくも 見のさ
やけきか 玉くしげ 二上山に はふ薦の 行きはわかれず
有りがよひ いや年のはに 思ふどち かくし遊ばむ 今も見
ること

(一) 舊訓はウチコチフリとあり、ナチコチフリ「神田本」といふ訓もあるが、契沖は之に従ひ、新考は宇知牟禮來利の誤寫と推定した。「馬なめてうち來」とかゝるのであるから、久は字の通り讀まればならぬ。案するにウチはオチ(落)の音便、フリは(邊)の變形でアキサ(秋頃)をアキサリといふと同例、川口の邊といふ事であらう。されば、こそ次句に「白波の荒磯に寄する」とあるのである。

參照 フセの海、ヤットモノチ、ウチ川、マツダエ、ウナヒ河、ウカハ、アザムラ、シママ

(三九九二)

布勢能宇美能 意積都之良奈美 安利我欲比 伊夜登能波爾

多由流比安良米也

藤なみは 咲きて散りにき うの花は 今ぞ盛と あしびきの
山にも野にも ほととぎす 鳴きしどよめば うちなびく 心
もしぬに そこをしも うら戀しみと 思ふどち 馬うちむれ
て たづさはり 出で立ち見れば 射水川 みなとの渚鳥 朝
なぎに 瀉にあざりし 潮みてば つまよびかはす ともしき
に見つつ過ぎ行き 澁谷の ありその崎に 沖つ波 よせく
る玉藻 かたよりに かつらにつくり 妹がため 手にまきも
ちて うらくはし ふぜの水海に あま舟に ま梶かいぬき
白たへの 袖ふりかへし あどもひて 我が漕ぎ行けば をふ
の崎 花ちりまがひ なぎさには 葦鴨さわぎ さざれ波 立
ちても居ても こぎめくり 見れども飽かず 秋さらば もみ
ぢの時に 春さらば 花のさかりに かもかくも 君がまにま
と かくしこそ 見もあきらめめ 絶ゆる日あらめや

(一) 新考に久を伎とし。

(二) 等を爾と改めたのはあらずがなである。

參照 イミツ河、ミナト、トモシ、アドモヒ、ナフの崎

(三九九四)

之良奈美能 與世久流多麻毛 余能安比太母 都藝底民仁許武
吉欲伎波麻備乎

白なみのよせ来る玉藻よのあひだもつぎて見に来む清き濱びを
右掾大伴宿禰池主作 四月二十六日追和

(三九九五)

四月二十六日掾大伴宿禰池主之館、餞_ニ税帳使守大伴
宿禰家持_ニ宴詞并古歌四首

多麻保許乃 美知爾伊泥多知 和可禮奈婆 見奴日佐等麻禰美
孤悲思家武可母

一云、不見日久彌、戀之家牟加母

玉椀の道に出で立ち別れなば見ぬ日さまねみ(見ぬ日久しみ)戀
しけむかも

右一首大伴宿禰家持作之

(一)等の字元曆校本以下諸本にない。舊訓もまた此字を除いて居る。

(三九九六)

和我勢古我 久爾弊麻之奈婆 保等登藝須 奈可牟佐都奇波
佐夫之家牟可母

わが背子が國へましなば霍公鳥なかむさ月はさぶしけむかも

右一首介内藏忌寸繩磨作之

(三九九七)

安禮奈之等 奈和備和我勢故 保登等藝須 奈可牟佐都奇波
多麻乎奴香佐禰

吾_アなしとなわび我がせこ時鳥鳴かむさつきは珠をぬかさね

右一首守大伴宿禰家持和

(三九九八)

石川朝臣水通橋歌一首

和我夜度能 花橋乎 波奈其米爾 多麻爾曾安我奴久 麻多婆
苦流之美

我がやどの花たちばなを花ごめに玉にぞ吾がぬく待たば苦しみ

右一首傳誦、主人大伴宿禰池主云爾

(三九九九)

守大伴宿禰家持館飲宴歌一首 四月二十六日

美夜故弊爾 多都日知可豆久 安久麻底爾 安比見而由可奈
故布流比於保家牟

都へに立つ日近づくあくまてに相見て行かな戀ふる日多けむ

(四〇〇〇)

立山賦一首并短歌 此山者有新河郡也

安麻射可流 比奈爾名可加須 古思能奈可 久奴知許登其等
夜麻波之母 之自爾安禮登毛 加波波之母 佐波爾由氣等毛

須賣加未能 宇之波伎伊麻須 爾比可波能 曾能多知夜麻爾
等許奈都爾 由伎布理之伎底 於婆勢流 可多加比河波能 伎

欲吉潮爾 安佐欲比其等爾 多都奇利能 於毛比須疑米夜 安
里我欲比 伊夜登之能播仁 余增能未母 布利佐氣見都都 余

呂豆餘能 可多良比具佐等 伊末太見奴 比等爾母都氣牟 於

登能未毛 名能未母伎吉底 登母之夫流我禰

あまさかる 夷に名かかす 越_{ナカ}の中 國內_{クニチ}ことごと 山はしも

しじにあれども 河はしも さはに行けども すめ神の うし

はきいます 新川の その立山_{タチヤマ}に 常夏に 雪降り重きて お

ばせる 片貝川の 清きせに 朝よひ毎に 立つ霧の 思ひす

ぎめや ありがよひ いや年のはに よそのみも ふりさけ見

つつ 萬代に かたらひ草と いまだ見ぬ 人にも告げむ 音

のみも 名のみも聞きて ともしぶるがね

タチャマ「地」、ニヒカハ「地」、アマサカル「枕」、シ(滋)、スメ

カミ、ウシハキ、カタカヒ川、アリガヨフ、フリサケミレバ、トモ

(四〇〇一)

多知夜麻爾 布里於家流由伎乎 登己奈都爾 見禮等母安可受

加武賀良奈良之

立山に降りおける雪をとこなつに見れども飽かず神からならし

参照 カミカラ

(四〇〇二)

可多加比能 可波能瀬伎欲久 由久美豆能 多由流許登奈久
安里我欲比見牟

片貝の川の瀬清くゆく水の絶ゆることなくあり通ひ見む

四月二十七日大伴宿禰家持作之

(四〇〇三)

敬和三立山賦一首并二絶

阿佐比左之 曾我比爾見由流 可無奈我良 彌奈爾於婆勢流

之良久母能 知邊乎於之和氣 安麻曾會理 多可吉多知夜麻

布由奈都登 和久許等母奈久 之路多倍爾 遊吉波布里於吉底

伊爾之邊遊 阿理吉仁家禮婆 許其志可毛 伊波能可牟佐備

多末伎波流 伊久代經爾家牟 多知底爲底 見禮登毛安夜之

彌禰太可美 多爾乎布可美等 於知多藝都 吉欲伎可敷知爾

安佐左良受 綺利多知和多利 由布佐禮婆 久毛爲多奈毗吉

久毛爲奈須 己許呂毛之努爾 多都奇理能 於毛比須具佐受

由久美豆乃 於等母佐夜氣久 與呂豆余爾 伊比都藝由可牟

加波之多要受波

朝日さし そがひ見ゆる 神ながら 御名におぼせる 白雲の

千重をおしわけ 天そそり 高き立山_{タチ} 冬夏と わくこともな

く 白たへに 雪は降りおきて いにしへゆ あり來にければ

ごしかも 岩の神さび たまきはる いく代へにけむ 立ち
て居て 見れどもあやし 峯高み 谷を深みと おちたぎつ
清きかふちに 朝さらす 霧たちわたり 夕されば 雲ゐたな
びく 雲ゐなす 心もしぬに 立つ霧の おもひすぐさず 行
く水の 音もさやけく よろづ代に いひつぎゆかむ 河した
えずば

(一) 吉は新考説の如く久であらねばならぬ。

參照 ソソリ、カムサビ、タマキハル「枕」、アヤ「感」、カフチ

(四〇〇四)

多知夜麻爾 布里於家流由伎能 等許奈都爾 氣受底和多流波
可無奈我良等會

(四〇〇五)

於知多藝都 可多加比我波能 多延奴期等 伊麻見流比等母
夜麻受可欲波牟

おちたぎつ片貝川の絶えぬごと今見る人もやまず通はむ

右掾大伴宿禰池主和之 四月廿八日

(四〇〇六)

入京漸近、悲情難撥、述懐一首并一絶
可伎加蘇布 敷多我美夜麻爾 可牟佐備底 多底流都我能奇

もしみ しぬびつつ 遊ぶさかりを すめるぎの 食す國なれ
ば 命もち 立ち別れなば おくれたる 君はあれども 玉梓
の 道ゆく我は 白雲の たなびく山を 岩根ふみ 越えへな
りなば 戀しけく けの長けむぞ そこ思へば 心しいたし
ほととぎす 聲にあへぬく 玉にもが 手にまきもちて 朝よ
ひに 見つつ行かむを おきて行かば惜し

(一) 新考に「出タチて我がタチ見れば」ではタチが重複するから、ウチ
の誤記であらうとある。或は然らむ。其外に一二改訓した所がある
が、其は作者と新考の著者との意見の相違と見るべきものである。

參照 ッガノキ、オヤツ、ハシキヨシ、イヅミ河、カフチ、アユの風、
ミナト、アヤ「感」、トモシ、ケ「日」

(四〇〇七)

和我勢故婆 多麻爾母我毛奈 保等登伎須 許惠爾安倍奴伎
手爾麻伎底由加牟

我がせこは玉にもがもなほととぎす聲にあへぬき手にまきて行
かむ

右大伴宿禰家持贈三椽大伴宿禰池主 四月卅日

(四〇〇八)

忽見入京述懐之作、生別悲兮、斷腸萬回、怨緒難
禁、聊奉三所心、一首并二絶

毛等母延毛 於夜自得伎波爾 波之伎與之 和我世乃伎美乎
安佐左良受 安比底許登騰比 由布佐禮婆 手多豆佐波利底
伊美豆河泊 吉欲伎可布知爾 伊泥多知底 和我多知彌禮婆
安由能加是 伊多久之布氣婆 美奈刀爾波 之良奈美多可彌
都麻欲夫等 須騰理波佐和久 安之可流等 安麻乃乎夫爾波
伊里延許具 加遲能於等多可之 曾己乎之毛 安夜爾登母志美
之怒比都追 安蘇夫佐香理乎 須賣呂伎能 乎須久爾奈禮婆
美許登母知 多知和可禮奈婆 於久禮多流 吉民波安禮騰母
多麻保許乃 美知由久和禮播 之良久毛能 多奈妣久夜麻乎
伊波爾布美 古要弊奈利奈婆 孤悲之家久 氣乃奈我氣牟會
則許母倍婆 許己呂志伊多思 保等登藝須 許惠爾安倍奴久
多麻爾母我 手爾麻吉毛知底 安佐欲比爾 見都追由可牟乎
於伎底伊加婆乎思

かきかぞふ 二上山に 神さびて 立てるつがの木 本も枝も
同じ常葉に はしきやし わがせの君を 朝さらす 逢ひて言
とひ 夕されば 手たづさはりて 射水川 清きかふちに 出
て立ちて 我が立ち見れば あゆの風 いたくし吹けば 水門
には 白波たかみ 妻よぶと 渚鳥はさわぐ 葦かると 海人
の小舟は 入江こぐ かぢの音たかし そこをしも あやにと

安遠爾與之 奈良乎伎波奈禮 阿麻射可流 比奈爾波安禮登
和賀勢故乎 見都追志乎禮婆 於毛比夜流 許等母安利之乎
於保伎美乃 美許等可之古美 乎須久爾能 許等登里毛知底
和可久佐能 安由比多豆久利 無良等理能 安佐太知伊奈婆
於久禮多流 阿禮也可奈之伎 多妣爾由久 伎美可母孤悲無
於毛布蘇良 夜須久安良爾婆 奈氣可久乎 等騰米毛可爾底
見和多勢婆 宇能波奈夜麻乃 保等登藝須 爾能未之奈可由
安佐疑理能 美太流流許己呂 許登爾伊泥底 伊波婆由遊思美
刀奈美夜麻 多牟氣能可味爾 奴佐麻都里 安我許比能麻久
波之家夜之 吉美賀多太可乎 麻佐吉久毛 安里多母等保利
都奇多多婆 等伎毛可波佐受 奈泥之故我 波奈乃佐可里爾
阿比見之米等會
青によし 奈良をきはなれ あまさかる 夷にはあれど 我が
せこを 見つつし居れば 思ひやる こともありしを 大君の
命かしこみ 食す國の 事とりもちて 若草の 脚結たづくり
村鳥の 朝たちいなば おくれたる 吾やかなしき 旅に行く
君かも戀ひむ 思ふそら 安くあらねば 嘆かくを とどめも
かねて 見わたせば うの花山の ほととぎす 音のみし泣か
ゆ あさ霧の 亂るる心 ことに出て 言はばゆゆしみと

なみ山 たむけの神に 幣ヌサまつり 我がこひ祈ノまく はしけや
し 君がただかを まさきくも 有りたもとほり 月たはば
時もかはさず なでし子が 花のさかりに 逢ひ見しめとぞ

參照 アマサカル、アユヒタツクリ、オモフソラ、ユユシ、トナミ山、
タムケ、ハシケヤシ、タダカ

(四〇〇九)

多麻保許能 美知能可未多知 麻比波勢牟 安賀於毛布伎美乎
奈都可之美勢余

玉梓の道の神たちまひはせむ吾がおもふ君をなつかしみせよ
(四〇一〇)

宇良故非之 和賀勢能伎美波 奈泥之故我 波奈爾毛我母奈
安佐奈佐奈見牟

うらこひし我せの君はなでしこが花にもがもな朝なさな見む
右大伴宿禰池主報贈和歌 五月二日

(四〇一一)

思放逸鷹夢見感悅作歌一首并短歌

大王乃 等保能美可度會 美雪落 越登名爾於弊流 安麻射可

流 比奈爾之安禮婆 山高美 河登保之呂思 野乎比呂美 久
佐許會之既吉 安由波之流 奈都能左加利等 之麻都等里 鶉
養我登母波 由久加波乃 伎欲吉瀬其登爾 可賀里左之 奈豆

久安良波 伊麻布都可太未 等保久安良婆 奈奴可乃字知波
須疑米也母 伎奈牟和我勢故 禰毛許呂爾 奈孤悲會余等會
伊麻爾都氣都流

大君の 遠の御門と。み雪ふる 越と名におへる あまさかる
ひなにすれば 山高み 川とほ白し 野をひろみ 草こそし
げき 年魚走る 夏のさかりと 鳥つどり 鶉かひがともは
行く川の 清き瀬ごとに かがりさし なづさひ登る 露霜の
秋にいたれば 野もさはに 鳥すだけりと ますらをの 伴い
ざないて 鷹はしも あまたあれども 矢形尾の 吾が大黒に
白ぬりの 鈴とりかけて 朝狩に 五百つ鳥たて 夕狩に 千
どり踏たて 逐ふごとに ゆるす事なく 手ばなれも をちも
かやすき これをおきて またはありがたし さならべる 鷹
はなけむと 心には 思ひほこりて ゑまひつつ 渡るあひだ
に たぶれたる しこつ翁の ことだにも 吾にはつけずと
のぐもり 雨の降る日を 鳥狩すと 名のみをのりて みしま
野を そがひに見つつ 二上の 山とび越えて 雲がくり か
けりいにきと 歸り来て しはぶれつぐれ 招ぐよしの そこ
になければ 言ふすべの たどきを不知 心には 火さへ燃え
つつ おもひ戀ひ 息づきあまり けだしくも 逢ふことあり

左比能保流 露霜乃 安伎爾伊多禮波 野毛佐波爾 等里須太
家里等 麻須良乎能 登母伊射奈比底 多加波之母 安麻多安
禮等母 矢形尾乃 安我大黒爾 大黒者蒼鷹之名也 之良奴里能
鈴登里都氣底 朝菟爾 伊保都登里多底 暮菟爾 知登理布美
多底 於敷其等爾 由流須許等奈久 手放毛 乎知母可夜須伎
許禮乎於伎底 麻多波安里我多之 左奈良弊流 多可波奈家牟
等 情爾波 於毛比保許里底 惠麻比都追 和多流安比太爾
多夫禮多流 之許都於吉奈乃 許等太爾母 吾爾波都氣受 等
乃具母利 安米能布流日乎 等我理須等 名乃未乎能里底 三
鳥野乎 曾我比爾見都追 二上 山登妣古要底 久母我久理
可氣理伊爾伎等 可弊理伎底 之波夫禮都具禮 呼久餘思乃
曾許爾奈家禮婆 伊敷須弊能 多騰伎乎之良爾 心爾波 火佐
倍毛要都追 於母比孤悲 伊伎豆吉安麻利 氣太之久毛 安布
許等安里也等 安之比奇能 乎底母許乃毛爾 等奈美波里 母
利弊乎須惠底 知波夜夫流 神社爾 底流鏡 之都爾等里蘇倍
己比能美底 安我麻都等吉爾 乎登賣良我 伊米爾都具良久
奈我古敷流 曾能保追多加波 麻都太要乃 波麻由伎具良之
都奈之等流 比美乃江過底 多古能之麻 等比多毛登保里 安
之我母能 須太久舊江爾 乎等都日毛 伎能敷母安里追 知加

やと あしびきの をてもこのもに 鳥網はり もり部をする
て ちはやぶる 神の社に てる鏡 倭文布にとりそへ こひ
祈みて 吾がまつときに をとめら 夢に告ぐらく 汝が戀
ふる その秀つ鷹は まつだ江の はま行きくらし つなし取
る 氷見の江すぎて 田子の島 飛びたもとほり 葦がもの
すだく舊江に をとつ日も 昨日もありつ 近くあらば 今二
日だみ 遠くあらば 七日のうちは 過ぎぬやも 來なむ我せ
こ ねもころに な戀ひそよとぞ 夢につげつる
(一) 古義に曾は登の誤とあるを可とする。トはトテの意。一字の通
リゾと訓み切るべしとする説は従はれぬ。こは指定語を用ひて句
を切る所ではない。
(二) 新考に等を爾と誤としたのは不可。九句を隔て、「鳥スダケリト」
とあるに對立するものであるから、原字舊訓を可とする。
(三) ナチモカヤスキとあるナチを從來ナチカヘリ(若戀)のナチと同語
とし、拳にかへる意と説いたが、ナチ(若)だけに復歸の意があるべ
き筈はなく、語義を解し得ざる爲の當推量に過ぎぬ。廢用となつた
放鷹術語であるといふものもあるかも知れぬが、語原の不明なる限
り肯定することは出来ぬ。案する此作者(家持)はウをナと訛る僻を
有したらしく、ウツツをナツツと用ひた例もあるから(三六五)、此ナ
チもウチ(搏)の訛であらう。カは感動詞である。——ゾの誤とする
新考説はとらぬ。
(四) 次句とのつづきが不明であるので、新考はこゝに脱句ありとした

が、或は七句を隔て、シハブレグレにかゝるのではあるまいか。
——三島野は和名抄に射水郡三島とある地——次の山トビコエテは
元曆校本に上とあるが、原字を可とする。

(五) シハブレはシハブク(咳)の意であらうが、此形に於て用ひられた
例はない。

(六) シヅは今のシデ(幣)の原語である。

(七) 春海は未を余の誤としたが二日ダニといふべき場合ではない。
ダミは回の意でバカリに相當する方言であらう。

(八) 麻は米の誤とする眞淵説可從。

【參照】 トホのミカド、アマサカル(枕)、シマツトリ(枕)、ヤカタチ、
トノクモリ、フタカミ山、ナチ、ケダシ、ナテモ、マツダ江、ツナ
シ、ロミの江、タコの鳥

(四〇一一)

矢形尾能 多加乎手爾須惠 美之麻野爾 可良奴日麻爾久 都
奇會倍爾家流

矢形尾の鷹を手にする三島野に狩らぬ日まねく月ぞへにける

(四〇一二)

二上能 乎底母許能母爾 安美佐之底 安我麻都多可乎 伊米
爾都氣追母

二上のをてもこのものに網さして吾がまつ鷹を夢に告げつも

(四〇一四)

麻追我弊里 之比爾底安禮可母 佐夜麻太乃 乎治我其日爾

賣比能野能 須須吉於之奈倍 布流由伎爾 夜度加流家敷之
可奈之久毛倍遊

めひの野のすすきおし靡べ降る雪に宿かる今日し悲しく思はゆ

右傳誦此歌三國真人五百國是也

(一) 舊訓オモヘユとあるが、新考の訓を可とする。——倍は保の誤な
りとするいふ契沖説によつて古義に保遊と改記したのは輕卒の誹を
まぬかれぬ。

【參照】 メヒの野

(四〇一七)

東風 越俗語東風謂之 伊多久布久良之 奈吳乃安麻能 都利須流
安由乃可是也 乎夫爾 許藝可久流見由

あゆの風いたく吹くらしなごの海人のつりする小舟こぎ隠くる
見ゆ

【參照】 アユの風、ナゴ(地)

(四〇一八)

美奈刀可世 佐牟久布久良之 奈吳乃江爾 都麻欲比可波之
多豆左波爾奈久

一云、多豆佐和久奈里

みなと風さむく吹くらしなごの江に妻よびかはし鶴さはになく
(たづさわぐなり)

母等米安波受家牟
松がへりしひにてあれかもさ山田のをちがその日に求め逢はず
けむ
【參照】 マツガヘリ(枕)
(四〇一五)
情爾波 由流布許等奈久 須加能夜麻 須可奈久能未也 孤悲
和多利奈牟
こころにはゆるぶことなくすかの山すかなくのみや戀ひわたり
なむ

右射水郡古江村取獲蒼鷹、形容美麗、鷲雉秀群也、於時養
吏山田史君鷹調試失節、野獵乖候、搏風之翅高翔匿雲、
腐鼠之餌呼留鷹、於是張設羅網、窺乎非常、奉弊
神祇、恃乎不虞也、奧以夢裏有娘子、喻曰、使君、勿下作
苦念、空費精神、放逸彼鷹獲得未幾矣哉、須臾覺寤、有
悦於懷、因作却恨之歌、式旌感信、守大伴宿禰家持
九月二十六日作也

(一) 奥は略解の説の如く奥の誤であらう。

【參照】 スガの山、スガナシ

(四〇一六)

高市連黒人誦一首 年月不詳

(四〇一九)
安麻射可流 比奈等毛之流久 許已太久母 之氣伎孤悲可毛
奈具流日毛奈久

あまさかる夷ともしるくここだくも繁き戀かもなぐる日もなく

【參照】 アマサカル(枕)

(四〇二〇)

故之能宇美能 信濃濱名也乃波麻乎 由伎久良之 奈我伎波
流比毛 和須禮底於毛倍也

越の海のしなぬの濱を行きくらし長き春日も忘れておもへや

右四首天平二十年春正月二十九日大伴宿禰家持

(四〇二一)

礪波郡雄神河邊作歌一首
乎加未河泊 久禮奈爲爾保布 乎等賣良之 葦附 水松之類 等
流登 湍爾多多須良之

をかみ川くれなゐにほふをとめらしあしつきとると瀬にたす
らし

【參照】 トナミ(地)、ナカミ川

(四〇二二)

婦負郡渡三嶋坂河邊一時作歌一首
宇佐可河泊 和多流瀬於保美 許乃安我馬乃 安我枳乃美豆爾

伎奴奴禮爾家里

うさか川渡る瀬多みこの吾が馬の足搔の水に衣ぬれにけり

參照 ウサカ川

(四〇三三)

見潛鷗人作歌一首

賣比河波能 波夜伎瀬其等爾 可我里佐之 夜蘇登毛乃乎波

宇加波多知家里

めひ川の早き瀬ごとにかがりさし八十とものをは鵜河たちけり

參照 メヒ(地)、ヤットモノナ、ウカハ

(四〇三四)

新河郡渡延槻河時作歌一首

多知夜麻乃 由吉之久良之毛 波比都奇能 可波能和多理瀬

安夫美都加須毛

立山の雪とくらしもはひつきの河のわたりせあぶみつかすも

(一)之は止の誤とする眞淵説に従ふ。

參照 ハヒツキ河

(四〇三五)

赴參氣比大神宮行海邊之時作歌一首

之乎路可良 多太古要久禮婆 波久比能海 安佐奈藝思多理

船梶母我毛

妹にあはず久しくなりぬにぎし河清き瀬ごとに水うらはへてな

(一)風は元曆校本には風と改めてある。

(二)ウラ(ト相)をウラハへともいうたものと思はれる。從來ミナウ

ラ(水占)を名詞とし、ハへを獨立動詞と解して牽強し(正卜考)、或

は波を安の誤としたのは従はれぬ。水で占ふことであるが、ミナは

皆にもかゝるのである。

參照 ニギシ河

(四〇二九)

從珠洲郡發船還太沼郡之時泊長濱灣仰見

月光作歌一首

珠洲能字美爾 安佐比良伎之底 許藝久禮婆 奈我波麻宇良爾

都奇底理爾家里

すずの海に朝びらきしてこぎ來れば長浦の濱に月てりにけり

右件詞者依春出舉巡行諸郡當時所屬目作之、大

伴宿禰家持

(一)太沼郡は所在を詳にせぬ。恐らくは誤記であらう。元曆校本には

治布とあるが、治布といふ地も亦所在不明である。

參照 スズノ海、アサビラキ、ナガハマの浦

(四〇三〇)

怨鷺晚啼歌一首

宇具比須波 伊麻波奈可牟等 可多麻底波 可須美多奈妣吉

萬葉集(卷第十七)

潮路からただ越えくればはくひの海あさなぎしたり船梶もがも

參照 ケヒの大神、ハゲヒ(地)

(四〇二六)

能登郡從香島津發船行於射熊來村往時作歌二首

登夫佐多底 船木伎流等伊有 能登乃島山 今日見者 許太知

之氣思物 伊久代神備會

とぶさたて舟木きるといふ能登の島山、今日見れば木立しげし

も幾世神びぞ

(一)元曆校本に行於の二字がない。恐らくは撥入であらう。

(二)有の字元曆校本に布とあるを可とする。

參照 トアサタテ

(四〇二七)

香島欲里 久麻吉乎左之底 許具布禰能 可治等流間奈久 京

師之於母保由

かしまよりくまきをさしてこぐ舟の梶とる間なく都しおもほゆ

參照 カシマネ、クマキ

(四〇二八)

鳳至郡渡饒石河之時作歌一首

伊毛爾安波受 比左思久奈里奴 爾藝之河波 伎欲吉瀬其登爾

美奈宇良波倍底奈

都奇波倍爾都道

うぐひすは今鳴かむとかた待てば霞たなびき月はへにつつ

參照 カタマチ

(四〇三二)

造酒歌一首

奈加等美乃 敷刀能里等其等 伊比波良倍 安賀布伊能知毛

多我多米爾奈禮

中臣の太のりとごといひはらへ贖ふいのちもたがためになれ

右大伴宿禰家持作之

(一)結句をタガタメカナレ、タガタメソナレ、タカタメニトカなど

改訓したものがあるが、古義に或人説としてあげた奈を阿の誤とす

る説が最も近いやうである。タガタメニは「何が故に」といふ意で、

タに誰の字をあて、其字に捉はれて解くのは固陋である。タは「何」

の意にも「誰」の義も通ずる語であるから、語法要録參照——こ

こは「何が爲にあれ」といふ意で、ニアレを約してナレと稱へたもの

と見て姑く舊訓に従ふ。

此歌「造酒歌」とあるが故に疑を來し、珍説奇説が多いが、之は神酒を

醸む儀式にうたふ爲の歌で、普通の酒造とは全然趣を異にするもので

ある。此頃までは國々に於ても神酒を醸む式が残つて居たものと思は

れる。參照 ナカトミ、フトノリトゴト、ハラハ

【卷第十八】

(四〇三二)

天平二十年春三月二十三日左大臣橘家之使者造酒司
令史田邊福麿饗干守大伴宿禰家持館、爰新(二)歌并使

誦古詠各述心緒

奈吳乃字美爾 布禰之麻志可勢 於伎爾伊泥底 奈美多知久夜
等 見底可徹利許牟

なごの海に舟しましかせ沖に出でて波立ち來やと見て歸り來む

(一) 西本願寺本に「田邊」の下に史の字がある。此人のカバネはフヒト
(史)であるが、之を略して田邊福麿とのみ稱へることも此當時にあ
つてはめづらしからぬ例である。

(二) 「爰」の次に西本願寺本、神田本其他に作の字あるを可とする。

(三) 初句は聊か無理な語つかひである。爾を乃の誤とする説もあるが
「新考」、ナゴの海ノ舟といふのも妥當ではない。

參照 ナゴ「地」

(四〇三三)

奈美多底波 奈吳能字良末爾 余流可比乃 末奈伎孤悲爾會
等之波倍爾家流

乎敷乃佐吉 許藝多母等保里 比禰毛須爾 美等母安久倍伎
宇良爾安良奈久爾

一云、伎美我等波須母

をふの崎こぎたもとほり日ねもすに見ともあくべき浦にあらな
くに(一五)きみがとはすも

右一首守大伴宿禰家持

(一) 一云は第二句の外に入れる所がないが、其にしても頭句とのつづ
きがおもしろくない。或は五句の終につけたのではあるまい佛足石
歌にも例のあることである。

參照 ナフの崎、ヒネモス

(四〇三八)

多麻久之氣 伊都之可安氣牟 布勢能字美能 宇良乎由伎都追
多麻母比利波牟

玉匣ツツいつしかあけむ布勢の海のうらを行きつつ玉藻ひりはむ

(四〇三九)

於等能未爾 伎吉底目爾見奴 布勢能字良乎 見受波能保良自
等之波倍奴等母

音のみに聞きて目に見ぬふぜの浦を見ずば登らじ年はへぬとも
(四〇四〇)

布勢能字良乎 由吉底之見弓波 毛母之綺能 於保美夜比等爾

波立てば奈吳の浦まによる貝のまなき戀にぞ年はへにける

參照 ウラマ

(四〇三四)

奈吳能字美爾 之保能波夜悲波 安佐里之爾 伊泥牟等多豆波
伊麻會奈久奈流

なごの海に潮のはや干ばあざりしに出でむと鶴ツルは今ぞ鳴くなる

(四〇三五)

保等登藝須 伊等布登伎奈之 安夜賣具佐 加豆良爾勢武日
許由奈伎和多禮

ほととぎすいとふ時なしあやめ草かつらにせむ日此ゆなき渡れ

右四首田邊史福麿

(四〇三六)

于レ時期下之明日將レ遊覽布勢水海、仍述懷各作歌
伊可爾世流 布勢能字良會毛 許已太久爾 吉我彌世武等

和禮乎等登牟流

いかにせる布勢の浦ぞもここだくに君が見せむと我ワレを留ワレむる

右一首田邊史福麿

參照 フセの海

(四〇三七)

可多利都藝底牟

布勢の浦を行きてし見れば百しきの大宮人にかたりつぎてむ

(四〇四一)

宇梅能波奈 佐伎知流會能爾 和禮由可牟 伎美我都可比乎
可多麻知我底良

梅の花さき散る園に我行かむ君がつかひを片まぢがてら

參照 カタマチ、ガテラ

(四〇四二)

敷治奈美能 佐伎由久見禮婆 保等登藝須 奈久倍吉登伎爾
知可豆伎爾家里

藤なみの咲き行く見れば霍公鳥なくべき時に近づきにけり

右五首田邊史福麿

參照 フヂナミ

(四〇四三)

安須能日能 敷勢能字良末能 布治奈美爾 氣太之伎奈可須
知良之底牟可母

一頭云、保等登藝須

あすの日の(ほととぎす)布勢の浦まのふぢなみにけだし來なか
ず散らしてむかも

右一首大伴宿禰家持作之
前件十首歌者二十四日宴作之

參照 ウラマ、ケダシ

(四〇四四)

二十五日往_ニ布勢水海道中馬上口號二首

波萬部余里 和我宇知由可波 宇美邊欲利 牟可倍母許奴可
安麻能都里夫禰

(四〇四五)

於伎敵欲里 美知久流之保能 伊也麻之爾 安我毛布伎見我
彌不根可母加禮

(四〇四六)

至_ニ水邊遊覽之時各述_レ懷作歌

可牟佐夫流 多流比女能佐吉 許伎米具利 見禮登裳安可受
伊加爾和禮世牟
神さぶる足姫の崎こぎめぐり見れどもあかずいかに我せむ

右一首田邊史福麿

參照 タルヒメの浦

右一首椽久米朝臣廣繩

(四〇五一)

多胡乃佐伎 許能久禮之氣爾 保登等藝須 伎奈伎等余米波
婆太古非米夜母
田子の崎木のくれしげに霍公鳥きなきどよめばはた戀ひめやも

右一首大伴宿禰家持

前件十五首歌者二十五日作之

(一) シゲニはシゲミの轉呼であらう。——ニ、ミ相通。

(四〇五二)

椽久米朝臣廣繩之館饗_ニ田邊史福麿宴歌四首

保登等藝須 伊麻奈可受之_レ 安須古要牟 夜麻爾奈久等母
之流思安良米夜母
霍公鳥今なかずして明日こえむ山になくともしるしあらめやも

右一首田邊史福麿

(四〇五三)

許能久禮爾 奈里奴流母能乎 保等登藝須 奈爾加伎奈可奴
伎美爾安敵流等吉
木のくれになりぬるものを時鳥なにか來なかね君にあへるとき

萬葉集(卷第十八)

(四〇四七)

多流比賣野 宇良乎許藝都追 介敷乃日婆 多奴之久安會敵
移比都伎爾勢牟

右一首遊行女婦土師

(四〇四八)

多流比女能 宇良乎許具夫禰 可治末爾母 奈良野和藝敵乎
和須禮氏於毛倍也
たる姫の浦をこぎつつ今日の日は楽しく遊べ言ひつぎにせむ

右一首大伴家持

(四〇四九)

於呂可爾會 和禮波於母比之 乎不乃宇良能 安利蘇野米具利
見禮度安可須介利
愚にぞ我は思ひしをふの浦のありそのめぐり見れど飽かずけり

右一首田邊史福麿

(一) オロカはオホロカの約

參照 オホロカ、チフの崎、ズケリ

(四〇五〇)

米豆良之伎 吉美我伎麻佐波 奈家等伊比之 夜麻保等登藝須
奈爾加伎奈可奴

右一首久米朝臣廣繩

(四〇五一)

保等登藝須 許欲奈積和多禮 登毛之備乎 都久欲爾奈蘇倍
會能可氣母見牟
ほととぎす此よ鳴き渡れともし火を月夜になぞへその影も見む

(四〇五五)

可敵流末能 美知由可牟日波 伊都波多野 佐加爾蘇泥布禮
和禮乎事於毛波婆
かへるまの道行かむ日はいつはたの坂に袖ふれ我をしおもはば

右二首大伴宿禰家持

前件歌者二十六日作之

(一) カヘルは地名であるが、末の字について古義に未の誤としたのは
ミがマの訛なることを知らざるものである。新考に「夜」の字脱とし
てカヘルヤマノであらねばならぬと断定したのは従はれぬ。カヘル
ヤマノ道行カム日とはいへぬことはないが、カヘルマを不可なりと
すべき理由がない。舊訓を尊重すべきである。

參照 カヘル〔地〕、イツハタ〔地〕

(四〇五六)

大上皇御_ニ在於難波宮之時哥七首 清足姬天皇也
左大臣橘宿禰歌一首

保里江爾波 多麻之可麻之乎 大皇乎 美敷禰許我牟登 可年
且之里勢婆

堀江には玉敷かましを大君を御舟こがむとかねて知りせば

(一)眞淵が乎を之の誤としたのは却つて誤である。天皇ヲ乗セ奉リテ
といふやうな意で、ことさらにナとしたのである。此ノの語法は古
語にはめづらしくない。

(四〇五七)

御製歌一首和

多萬之賀受 伎美我久伊且伊布 保理江爾波 多麻之伎美且且
都藝且可欲波牟

或云、多麻古伎之伎且

玉しかず君が悔いていふ堀江には玉しきみてて(珠こきしきて)
つぎて通はむ

右一首件歌者御船浜江遊宴之日、左大臣奏并御製

(一)コキはココ(許多)の轉呼であらう

(四〇五八)

御製歌一首

多知婆奈能 登乎能多知波奈 夜都代爾母 安禮波和須禮自
許乃多知婆奈乎
たちばなのとのの橋彌つ代にも吾はわすれじ此たちばなを

意とする説は従はれぬ。ミフネサスは御舟の操針をする、ことである
から、字の通りミチビキシツツと解してよい。

(四〇六二)

奈都乃欲波 美知多豆多都之 布禰爾能里 可波乃瀬其等爾
佐乎佐指能保禮

夏の夜は道たづたづし舟にのり川の瀬ごとに竿さしのぼれ

右件歌者御船以綱手一浜江遊宴之日作也、傳誦之人田邊

史福麿是也

參照 タヅタヅン

(四〇六三)

後追^ニ和橋歌^二首

等許余物能 己能多知婆奈能 伊夜氏里爾 和期大皇波 伊麻
毛見流其登

常世もの此たちばなのいや光りにわご大君はいまも見るごと

(四〇六四)

大皇波 等吉波爾麻佐牟 多知波奈能 等能乃多知波奈 比多
底里爾之底

大君はときはにまさむ橋の殿のたちばなひた光りにして

右二首大伴宿禰家持作之

(四〇六五)

(一)眞淵以來乎は之、能又は乃の誤として「殿の橋」の意と解して居る。
次の歌にもトノノヲチバナといふ言葉が用ひてあるから、姑く之に
従ふ。

(四〇五九)

河内女王歌一首

多知婆奈能 之多泥流爾波爾 等能多且天 佐可彌豆伎伊麻須
和我於保伎美可母

橋の下てる庭に殿たててさかみづきいます我が大君かも

參照 サカミツキ

(四〇六〇)

栗田女王歌

都奇麻知且 伊徹爾波由可牟 和我佐世流 安加良多知婆奈
可氣爾見要都追

月まちて家には行かむ我させる赤らたちばな影に見えつつ

右件歌者在^ニ於左大臣橋卿之宅一肆宴御歌并奏歌也

(四〇六一)

保里江欲里 水乎妣吉之都追 美布禰左須 之津乎能登母波

加波能瀬麻宇勢

堀江より滯びきしつ御舟さす賤男の伴は河の瀬まうせ
(一)ミチビキは濯導引と解した新考説可。但しシツツをセサセツツの

射水郡驛館之屋柱題著歌一首

安佐妣良伎 伊里江許具奈流 可治能於登乃 都波良都婆良爾
吾家之於母保由

朝びらき入江こぐる梶のおとのつばらつばらに吾家し思ほゆ

右一首山上臣作、不審名、或云憶良大夫之男、但其正名

未詳也

參照 アサビラキ、ツバラ

(四〇六六)

四月一日椽久米朝臣廣繩之館宴歌四首

字能花能 佐久都奇多知奴 保等登藝須 伎奈吉等與米余 敷
布里多里登母

うの花の咲く月たちぬ霍公鳥き鳴きとよめよふふみたりとも

右一首守大伴宿禰家持作之

(一)里は美の誤とする略解説可。

(四〇六七)

敷多我美能 夜麻爾許母禮流 保等登藝須 伊麻母奈加奴香
伎美爾伎可勢牟

二上の山にこもれるほととぎす今も鳴かぬか君に聞かせむ

右一首遊行女婦土師作之

參照 フタカミ山

(四〇六八)

乎里安加之 許余比波能麻牟 保登等藝須 安氣牟安之多波
奈伎和多良牟會

をり明かし今夜はのまむ雀公鳥あけむ朝は鳴きわたらむぞ

二日應ニ立夏節ニ故謂ニ之明日將ニ喧也

右一首守大伴宿禰家持作之

(四〇六九)

安須余里波 都藝豆伎許要牟 保登等藝須 比登欲能可良爾
古非和多流加母

明日よりはつぎて聞こえむほととぎすひと夜のからに戀ひわた
るかも

右一首羽咋郡擬主帳能登臣乙美作

(四〇七〇)

詠ニ庭中牛麥花ニ一首

比登母等能 奈泥之故宇惠之 會能許己呂 多禮爾見世牟等
於母比會米家牟

一本のなでしこ植ゑし其こゝろ誰に見せむと思ひそめけむ

右先國師從僧清見可入ニ京師ニ因設ニ飲饌ニ饗宴ニ干レ時主

一、古人云

都奇見禮婆 於奈自久爾奈里 夜麻許會波 伎美我安多里乎
徹太豆多里家禮

月見ればおなじ國なり山こそは君があたりをへだてたりけれ

(一)「戀」の下脱字あるか。古義は戀緒とした。

(二)元曆校本には云々とある。

(四〇七四)

一、屬レ物發レ思

櫻花 今會盛等 雖人云 我佐夫之毛 伎美止之不在者
さくら花今ぞさかりと人はいへど我はさぶしも君としあらねば

(四〇七五)

一、所心耳

安必意毛波受 安流良牟伎美乎 安夜思苦毛 奈氣伎和多流香
比登能等布麻泥

相思はずあるらむ君をあやしくも嘆きわたるか人の問ふまで

(一)耳の字西本願寺本には歌と改めてあるが、尙一考を要する

(四〇七六)

越中國守大伴家持報贈歌四首

一、答ニ古人云

安之比奇能 夜麻波奈久毛我 都奇見禮婆 於奈自伎佐刀乎

萬葉集(卷第十八)

人大伴宿禰家持作ニ此哥詞ニ送ニ酒清見ニ也

(四〇七一)

之奈射可流 故之能吉美能等 可久之許會 楊奈疑可豆良枳
多努之久安蘇婆米

しなさかる越の君らとかくしこそ柳かつらぎ樂しく遊ばめ

右郡司已下子弟已上諸人、多集ニ此會、因守大伴宿禰家持

作ニ此歌ニ也

(一)能の字元曆校本以下諸本に良とあるを可とする。

(四〇七二)

奴波多麻能 欲和多流都奇乎 伊久欲布等 余美都追伊毛波
和禮麻都良牟會

ぬばたまの夜わたる月をいくよ經とよみつつ妹は我まつらむぞ

右此夕月光遲流、和風稍扇、即因屬レ目聊作ニ此歌ニ也

(四〇七三)

越前國椽大伴宿禰池主來贈歌三首

以ニ今月十四日ニ到ニ來深見村ニ、望ニ拜彼北方ニ常念ニ芳徳ニ、

何日能休、兼以ニ隣近ニ忽増レ戀、加以ニ先書ニ云、暮春可レ惜

促レ膝未レ期、生別悲兮、夫復何言、臨レ紙悽斷、奉レ狀不備

三月十五日大伴宿禰池主

許己呂徹太底都

あしびきの山はななくもが月見ればおなじき里をこゝろへだてつ

(四〇七七)

一、答ニ屬レ目發レ思、兼詠ニ云遷任舊宅西北隅櫻樹ニ

和我勢故我 布流伎可吉都能 佐具良波奈 伊麻太敷布賣利
比等目見爾許禰

わが背子が古き垣内のさくら花いまだふふめり一目見に來ね

(四〇七八)

一、答ニ所心ニ、即以ニ古人之跡ニ代ニ今日之意ニ

故敷等伊布波 衣毛名豆氣多理 伊布須徹能 多豆伎母奈吉波
安賀未奈里家利

戀ふといふはえも名づけたり言ふすべのたづきもなきは吾が身

なりけり

(四〇七九)

一、更瞞レ目

美之麻野爾 可須美多奈妣伎 之可須我爾 伎乃敷毛家布毛
由伎波敷里都追

三島野に霞たなびきしかすがに昨日も今日も雪は降りつつ

三月十六日

(四〇八〇)

姑大伴氏坂上郎女來贈越中守大伴宿禰家持歌二首
都禰比等能 故布登伊敷欲利波 安麻里爾互 和禮波之奴倍久
奈里爾多良受也

(四〇八一)

可多於毛比遠 宇萬爾布都麻爾 於保世母天 故事部爾夜良波
比登加多波牟可母

片おもひを馬に太馬におほせもて越邊にやらば人かはむかも
(一) 多を行字として「人買はむかも」の意とした新考説可從。

(四〇八二)

越中守大伴宿禰家持報歌并所心三首

安萬射可流 比奈能都夜故爾 安米比度之 可久古非須良波
伊家流思留事安里

あま放る夷のやつこに天人しかくこひすらば生けるしるしあり
(一) 都夜の二字轉置とする宣長説「略解」可。

(四〇八三)

都禰能孤悲 伊麻太夜麻奴爾 美夜古欲利 宇麻爾古非許婆
爾奈比安倍牟可母

常の戀いまだやまぬに都より馬にこひ來はにひあへむかも

此續作三首

安夫良火能 比可里爾見由流 和我可豆良 佐由利能波奈能

惠麻波之伎香母

油火の光に見ゆる我がづらさゆりの花のゑまはしきかも

右一首守大伴宿禰家持

(四〇八七)

等毛之火能 比可里爾見由流 佐由理婆奈 由利毛安波牟等

於母比會米豆伎

ともし火の光に見ゆるさゆり花ゆりも逢はむと思ひそめてき

右一首介内藏伊美吉繩磨

參照 ユリ

(四〇八八)

左由理波奈 由利毛安波牟等 於毛倍許會 伊末能麻左可母

宇流波之美須禮

さ百合花ゆりも逢はむと思へこそ今のまさかもうるはしみすれ

右一首大伴宿禰家持 和

(四〇八九)

獨居幄裏遙聞霍公鳥喧作歌一首并短歌

高御座 安麻能日繼登 須賣呂伎能 可未能美許登能 伎己之

萬葉集(卷第十八)

(一)「馬戀來バ」の意なりとせば甚拙い修辭といはればならぬ。新考は古非をツミの誤記としたが、或は贈歌に「人カハムカモ」とあるにより、カハ來バといふべきをわざと訛つてコヒコバとしたのであるかも知れぬ。

(四〇八四)

別所心一首

安可登吉爾 名能里奈久奈流 保登等藝須 伊夜米豆良之久
於毛保由流香母

あかときの名のり鳴くなる時鳥いやめづらしく思ほゆるかも

右四日附使贈上京師

(四〇八五)

天平感寶元年五月五日饗東大寺之占墾地使僧平

榮等干時守大伴宿禰家持送酒僧歌一首

夜岐多知乎 刀奈美能勢伎爾 安須欲里波 毛利敝夜里蘇倍

伎美乎等登米牟

燒太刀をとなみの關に明日よりは守部やりそへ君を留めむ

參照 ヤキタチ「枕」、トナミの關

(四〇八六)

同月九日諸僚會少目奏伊美吉石竹之館飲宴於時
主人造百合花綴三枚疊置豆器捧贈賓客各賦

乎須 久爾能麻保良爾 山乎之毛 佐波爾於保美等 百鳥能

來居呂奈久許惠 春佐禮婆 伎吉能可奈之母 伊豆禮乎可 和

枳豆之努波無 宇能花乃 佐久月多豆婆 米都良之久 鳴保等

登藝須 安夜女具佐 珠奴久麻泥爾 比流久良之 欲和多之伎

氣騰 伎久其等爾 許己呂豆吳枳豆 宇知奈氣伎 安波禮能登

里等 伊波奴登枳奈思

高御座 天のひつぎと すめろぎの 神のみことの 聞こしを

す 國のまほらに 山をしも さはに多みと 百鳥の 來ゐて

鳴くこそ 春されば 聞のかなしも いづれをか わきてしぬ

ばむ うの花の 咲く月たてば めづらしく 鳴くほととぎす

あやめ草 玉ぬくまてに 晝くらし 夜わたし聞けど きく毎

に 心つごきて うちなげき 哀の鳥と いはぬ時なし

(一) 豆の字都とした本が多い。いづれにしてもツの假字で、心ト、ウ

ゴキテを約してココロツゴキテと誦したのであらう。類聚古集に吳

を美に作り、契沖、眞淵が豆を宇の誤としたのは從はれぬ。

參照 クニノホ、マホロバ

(四〇九〇)

反歌

由具敝奈久 安里和多流登毛 保等登藝須 奈枳之和多良婆
可久夜思努波牟

八〇七

行方なくあり渡るともほととぎす鳴きし渡らばかくやしぬばむ
(四〇九一)

宇能花能 開爾之奈氣婆 保等得藝須 伊夜米豆良之毛 名能
里奈久奈倍

うの花の咲きにしさげば時鳥いやめづらしも名のり鳴くなべ

(一) 舊訓サクニシナケバとあり、新考及新訓は元曆校本に登開爾之とあるによつてトモニシナケバと改訓したが、結句によればナケバといふことは出来ぬ。——新考はナベの語義を誤解して居るやうである。——案するに奈は左の誤記で、サキニシサケバと訓むのであらう。卯の花が咲きに咲くから霍公鳥が名乗り鳴くのは尤だといふ意である。

參照 ナベ

(四〇九二)

保登等藝須 伊登禰多家口波 橘能 播奈治流等吉爾 伎奈吉
登余牟流

霍公鳥いとねたけくは橘の花ちる時に來なきどよむる

右四首十大伴宿禰家持作之

(四〇九三)

行英遠浦之日作歌一首

安乎能宇良爾 餘須流之良奈美 伊夜末之爾 多知之伎與世久
安由乎伊多美可聞

之家久 伊余與於母比豆 大伴能 遠津神祖乃 其名乎婆 大
來目主登 於比母知豆 都加倍之官 海行者 美都久屍 山行
者 草牟須屍 大皇乃 敝爾許會死米 可弊里見波 勢自等許
等大豆 大夫乃 伎欲吉彼名乎 伊爾之敝欲 伊麻乃乎追通爾
奈我佐敝流 於夜能子等毛會 大伴等 佐伯氏者 人祖乃 立
流辭立 人子者 祖名不絶 大君爾 麻都呂布物能等 伊比都
雅流 許等能都可佐會 梓弓 手爾等里母知豆 劍大刀 許之
爾等里波伎 安佐麻毛利 由布能麻毛利爾 大王能 三門乃麻
毛利 和禮乎於吉豆 且比等波安良自等 伊夜多豆 於毛比之
麻左流 大皇乃 御言能左吉乃 一云乎 聞者貴美

一云、貴久之安禮婆

葦原の みづほの國を 天くだり 知らしめしける すめろぎ
の 神のみことの 御代かさね 天の日嗣と しらし來る 君
の御代御代 しきませる 四方の國には 山河を ひろみあつ
みと 奉る 御調たからは かぞへ得ず つくしもかねつ 然
れども 吾大君の もろ人を 誘ひたまひ 善き事を はじめ
たまひて 黄金かも 足しけくあらむと 思ほして 下なやま
すに とりが鳴く あづまの國の みちのくの 小田なる山に
黄金ありと まうしたまへれ 御心を あきらめたまひ 天地

あをの浦によする白波いやましに立ち重き寄せ來あゆをいたみ
かも

右一首大伴宿禰家持作之

參照 アチの浦、アユの風

(四〇九四)

賀陸奥國出金詔書 哥一首并短歌

葦原能 美豆保國乎 安麻久太利 之良志賣之家流 須賣呂伎
能 神乃美許等能 御代可佐禰 天乃日嗣等 之良之久流 伎
美能御代御代 之伎麻世流 四方國爾波 山河乎 比呂美安都
美等 多豆麻豆流 御調寶波 可蘇倍衣受 都久之毛可禰都
之加禮騰母 吾大王能 毛呂比登乎 伊射奈比多麻比 善事乎
波自米多麻比豆 久我禰可毛 多能之氣久安良牟登 於母保之
豆 之多奈夜麻須爾 鷄鳴 東國能 美知能久乃 小田在山爾
金有等 麻宇之多麻敝禮 御心乎 安吉良米多麻比 天地乃
神安比豆奈比 皇御祖乃 御靈多須氣豆 遠代爾 可可里之
許登乎 朕御世爾 安良波之豆安禮婆 御食國波 左可延牟物
能等 可牟奈我良 於毛保之賣之 豆毛能乃布能 八十伴雄乎
麻都呂倍乃 牟氣乃麻爾麻爾 老人毛 女童兒毛 之我願 心
太良比爾 撫賜 治賜婆 許已乎之母 安夜爾多數刀美 宇禮

の 神相うづなひ 皇御祖の 御靈たすけて 遠き世に なか
りしことを 朕が御世に あらはしてあれば 食す國は 榮え
むものと 神ながら 思ほしめして ものふの 八十伴の雄
を まつろへの むけのまにまに 老人も 女のわらは兒も
しが願ふ 心足らひに 撫でたまひ をさめ賜へば ここをし
も あやに貴み うれしけく いやよ思ひ出 大伴の 遠つ神
祖の 其名をば 大來目主と おひもちて つかへし官 海行
かば 水つく屍 山ゆかば 草むす屍 大君の 邊にこそ死な
め かへり見は せじと言だて ますら男の 清き其の名を
古へよ 今のをつつに 流さへる 親の子どもぞ 大伴と 佐
伯の氏は 人の祖の たつる言だて 人の子は 祖の名絶たず
大君に まつろふものと 言ひつける ことのつかさぞ あづ
さ弓 手にとりもちて 劍大刀 腰にとりはき 朝護り タの
護りに 大君の 御門のまもり 我をおきて 人はあらじと
いやたてて 思ひしまさる 大君の 勅のさきの(を) 聞けば
貴み(貴くしあれば)

(一) 能の字元曆校本に之なきを可とする。タシクは足シク即ち潤澤の
意である。——舊訓の如くタノシケクとしては「樂いこと」といふ意
になる。其故に古義はタヌシを少の意とし(あり得ぬことである)、
新考は氣を衍字として其上にヌクナクアラム・ソチエテバの二句を

補うたのであるが、いづれも甚しい邪説であるといはねばならぬ。
(二) スメミオヤノと六音に訓むべきである。スメロギと訓しては上句の「神」と重複する嫌がある。次に神祖と書いてカムオヤと訓ませた例があるのである。

(三) 可^レ可^レ奈可^レの誤とする略解説可。

(四) 且^レを衍字とする新考説可從。マタヒトハアラジトと九音に訓むことは律調が之を許さぬ。

(五) 且^レの下に々の一字脱とする契沖説をとる。言ダテを彌立テテといふ意である。

(六) 吉の字元曆校本及類聚古集に右とあるによつて新考はミコトノサマと訓したが、尙原字舊訓を可とする。勅のサキは「御言葉の端」といふことで、幸と譯するは非。乃、乎兩傳は結句二案のいづれにも適合せしめんが爲に乃を取るべきであらう。

參照 シキマス、トリガナク「枕」、スメミオヤ、スメロギ、ウツナヒ、モノノフ「枕」、オホクメの命、コトダテ、ナツツ

(四〇九五)

反歌三首

大夫能 許已呂於毛保由 於保伎美能 美許登能佐吉乎 一云能聞者多布刀美

一云、貴久之安禮婆

ますら男の心おもほゆ大君の勅のさきを聞けば貴み(貴くしあれば)

高御座 天の日つぎと 天の下 知らしめしける すめろぎの神のみことの かしこくも 始めたまひて 貴くも 定めたまへる み吉野の 此大宮に ありがよひ めしたまふらしものふの 八十伴の緒も おのが負へる 名名にそむかず 大君の まけのまにまに 此河の たゆることなく 此山の いやつぎつぎに かくしこそ 仕へまつらめ いや遠長に

(一) 舊訓オノガナニナニとあり、オノガナオヒ「古義」、オヤノナオヒ「新考」、オノガナオヒ「新訓」など、改めたものもあるが、上句にオノガ負ヘルといひ、更に負ヒといふ言葉を用ひることは、縦ひ語法上許されるとしても、歌詞の修辭としては甚拙劣であるから、家持と雖之を敢てしなかつたらうと思はれる。案するに於能^レ我^レ三字は上句のものが攪入したので、原文は名名不負とあつたのを名名負負と誤り、更に名負名負とかき改められたのであらう。若し然りとせばナナニソムカズと訓むべきである。

(二) 久は余の誤とする眞淵説可從。——新訓に字によつて任ノマクマクとしたのは任ク任クの意と解した爲であらうが、言葉をなさぬ。

(四〇九九)

反歌

伊爾之敵乎 於母保須良之母 和期於保伎美 余思努乃美夜乎 安里我欲比賣須

古をおもほすらしもわご大君よし野の宮をありかよひめす

(四〇九六)

大伴能 等保追可牟於夜能 於久都奇波 之流久之米多底 比等能之流倍久

大伴の遠つ神祖のおくつきはしるくしめたて人の知るべく

(四〇九七)

須賣呂伎能 御代佐可延牟等 阿頭麻奈流 美知能久夜麻爾 金花佐久

すめろぎの御代榮えむとあづまなる陸のく山に金花さく

天平感寶元年五月十二日、於越中國守館、大伴宿禰家持作之

(四〇九八)

爲下幸行芳野離宮之時儲作歌一首并短歌

多可美久良 安麻能日嗣等 天下 志良之賣師家類 須賣呂伎乃 可未能美許等能 可之古久母 波自米多麻比豆 多不刀久母 左太米多麻敏流 美與之努能 許乃於保美夜爾 安里我欲比 賣之多麻布良之 毛能乃敷能 夜蘇等母能乎毛 於能我於敏流 於能我名負名負 大王乃 麻氣能麻久麻久 此河能 多由流許等奈久 此山能 伊夜都藝都藝爾 可久之許曾 都可倍麻都良米 伊夜等保奈我爾

(四一〇〇)

物能乃布能 夜蘇氏人毛 與之努河波 多由流許等奈久 都可倍追通見牟

もののふの八十氏人もよしぬ川たゆることなく仕へつつ見む

爲贈京家願眞珠一哥一首并短歌

珠洲乃安麻能 於伎都美可未爾 伊和多利豆 可都伎等流登伊布 安波妣多麻 伊保知毛我母 波之吉餘之 都麻乃美許登能 許呂毛泥乃 和可禮之等吉欲 奴婆玉乃 夜床加多古里 安佐禰我美 可伎母氣頭良受 伊泥氏許之 月日余美都追 奈氣久良牟 心奈具佐余 保登等藝須 伎奈久五月能 安夜女具佐 波奈多知波奈爾 奴吉麻自倍 可頭良爾世餘等 都追美氏夜良牟 すすの海人の おきつ御神に い渡りて かつぎ取るといふ 鰻玉 五百箇もがも はしきよし 妻のみことの 衣手の わかれし時ゆ ぬばたまの 夜床かたふり 朝ね髪 かきもけづらず 出でてこし 月日よみつつ 嘆くらむ 心なぐさに 霍公鳥 きなく五月の あやめ草 はなたちばなに ぬきまじへ かつらにせよと つつみてやらむ

(一) 契沖が古は左の誤としたのは從はれぬ。夫を待つ爲ならば「床を

片去り」といふこともあらうが、此場合にはあたらしぬから、原字の通りカタフリと訓むべきであらう。カタは接頭語で、單に古くなるといふ意である。

(三) 余を尔の誤とする契沖説可。

參照 ススの海、カタ、ハシキヨシ、ハナタチバナ

(四一〇二)

白玉乎 都々美氏夜良波 安夜女具佐 波奈多知婆奈爾 安倍母奴久我禰

白たまをつつみてやらなあやめ草はな橋にあへもぬくがね

(一) 波は那の誤とする古義の説可從。

(四一〇三)

於伎都之麻 伊由伎和多里豆 可豆具知布 安波妣多麻母我 都々美豆夜良牟

沖つ島い行きわたりて潜くちふあはび珠もがつつみてやらむ

(四一〇四)

和伎母故我 許己呂奈具左爾 夜良無多米 於伎都之麻奈流之良多麻母我毛

我妹子が心なぐさにやらむため沖つ島なる白珠もかも

(四一〇五)

思良多麻能 伊保都都度比乎 手爾牟須妣 於許世牟安麻波

講案 先件數條、建法之基、化道之源也、然則義夫之道、情存無別、一家同財、豈有忘舊愛、新之志哉、所以綴作數行之歌、令悔棄舊之惑、其詞曰

於保奈牟知 須久奈比古奈野 神代欲里 伊比都藝家良之 父母乎 見波多布刀久 妻子見波 可奈之久米具之 宇都世美能 余乃許等和利止 可久佐末爾 伊比家流物能乎 世人能 多都流許等太豆 知左能花 佐家流沙加利爾 波之吉余之 曾能都末能古等 安沙余比爾 惠美美惠末須毛 宇知奈氣伎 可多里家末久波 等己之部爾 可久之母安良米也 天地能 可未許等 余勢天 春花能 佐可里裳安良多之家牟 等吉能沙加利會 波居豆 奈介可須移母我 何時可毛 都可比能許牟等 末多須良 無 心左夫之苦 南吹 雪消益而 射水河 流水沫能 余留弊 奈美 左夫流其兒爾 比毛能緒能 移都我利安比豆 爾保騰里能 布多理雙坐 那吳能宇美能 於伎乎布可米天 左度波世流 伎美我許己呂能 須敝母須弊奈佐 言佐夫流者遊行女婦之字也 大汝 すくな彦なの 神代より いひつぎけらく 父母を見 れは貴く 妻子見れば かなしくめぐし うつせみの 世のこ とわりと かくさまに いひけるものを 世の人の 立つる言 だて ちさの花 咲ける盛りに はしきよし 其妻の子と 朝

牟賀思久母安流香

一云、我家牟伎波母

しら玉の五百箇つどひを手にむすびおこせむ海人はむがしくもあるか(我うむぎはも)

右五月十四日大伴宿禰家持依興作

(一) 家の字類聚古集には字とある。ウムギはムガシの原形ウムガシと白蛤とをいひかけたもので、ウムガシがウムギの形に於て用ひられたのであるまい。

參照 ムガシ、ウムガシ、ウムギ

(四一〇六)

教諭史生尾張少咋歌一首并短歌

七出例云

但犯一條即合出之、無七出、輒棄者徒一年半

三不去云

雖犯七出不合棄之、違者杖一百、唯犯姦惡疾得棄之

兩妻例云

有妻更娶者徒一年、女家杖一百、離之

詔書云

啓賜義夫節婦

よひに るみみ笑ますも うちなげき かたりけまくは とこしへに かくしもあらめや 天地の 神ことよせて 春花の さかりもあらばと かたりけむ 時の盛を さかり居て なげかす妹が いつしかも 使の來むと 待たすらむ 心さぶしく 南咲く 雪消はふりて 射水河 ながる水沫の よるべなみ さぶる其兒に 紐の緒の いつがりあひて にほ鳥の 二人ならび居 ながの海の おきを深めて さどはせる 君がこゝろの すべもすべなさ

(一) 財は鉢の誤であらう(新考)。

(二) 之の字元曆校本に久とあるを可とする。

(三) 「安良」の次に脱字のあることは疑がない。契沖は最初波の字とし「多」の下に能の字を補うてサカリモアラバ・タノシケムと訓し、後官本により、牟等末の三字脱としてサカリモアラムト・マタシケムと改めた。後の學者之に従うて異としなかつたが、「長にかくしもあらめや」といふ上句から推しても、「盛もあらむと待たしけむ」とはいひ得ぬ筈であり、カタリケマクハといふ一句の結び所がない。案ずるに本初は安良婆可多利家牟とあつたのを婆可を逸した爲め、後人がさかしらに利を之に改めたのであらう。されば此サカリは離の意で、「春花の盛」にひかけたものと解すべきである。

(四) 曾は宣長説の如く乎の誤、波は眞淵に従うて放の誤記としてトキノサカリヲ・サカリキテと訓むべきである。

(五) 「四二六」に雪消溢とある所を見ると、古義の説の如く益は溢の誤記

又は省割としてハフリと訓むのであらう。

ミツカフツミ(徒)、メグシ、コトダテ、チサ、ハシキヨシ、サ
ブル兒、イツガリ、ニホ鳥、ナゴ(地)、サドハス

(四一〇七)

反歌三首

安乎爾與之 奈良爾安流伊毛我 多可多可爾 麻都良牟許己呂
之可爾波安良司可
あをによし奈良にある妹が高々にまつらむ心しかにはあらじか

(四一〇八)

左刀妣等能 見流目波豆可之 左夫流兒爾 佐度波須伎美我
美夜泥之理夫利
里人の見る目はづかしさぶる兒にさどはす君が宮出しりふり

參照 ミヤデ、シリフリ

(四一〇九)

久禮奈爲波 宇都呂布母能會 都流波美能 奈禮爾之伎奴爾
奈保之可米夜母
くれなゐは移ろふものぞ椽ツルバネのなれにし衣になほしかめやも

右五月十五日守大伴宿禰家持作之

(四一一〇)

會 神乃御代欲理 與呂之奈倍 此橋乎 等伎自久能 可久能
木實等 名附家良之母
かけまくも あやにかしこし すめみおやの 神の大御代に

田道間守 常世にわたり 八矛もち まゐで來し ときじくのかぐの木の實を かしこくも 残したまへれ 國もせに 生ひ
たちさかえ 春されば ひこ枝もいつつ 藪公鳥 なく五月に
は 初花を 枝に手折りて をとめらに つとにもやり見 白
たへの 袖にもこきれ かぐはしみ おきてからしみ あゆる
實は 玉にぬきつつ 手にまきて 見れどもあかず 秋づけは
しぐれの雨降り あしびきの 山の木ぬれば くれなゐに 匂
ひちれども たちばなの なるるその實は ひた光りに いや
見がほしく み雪降る 冬にいたれば 霜おけど 其葉もかれ
ず ときはなす いや榮サカはえに しかれこそ 神の御代より
よろしなべ 此たちばなを 時じくの かぐの木實と 名づけ
けらしも

(一) 田道間守が常世國に派遣せられたのは垂仁朝のことであるから、
スメロギの神の御代といふことは出來ぬ。字によつてスメミヤノ
と六音に訓むべきである。さればこそ次句は八音であるのである。
(二) 契沖以下諸家種々解讀して居るが、支な久の誤として新訓の如く
マキテコシ・トキジクノと五音二句に訓むべきである。七音句に代

先妻不待夫君之喚使自來時作歌一首

左夫流兒我 伊都伎之等能爾 須受可氣奴 婆由麻久太禮利
佐刀毛等騰呂爾

さぶる兒がいつきし殿にすずかけぬ早馬くだれり里もどろに

同月十七日大伴宿禰家持作之

參照 ハユマ

(四一一一)

橘歌一首并短歌

可氣麻久母 安夜爾加之古思 皇神祖能 可見能大御世爾 田
道間守 常世爾和多利 夜保許毛知 麻爲泥許之 登吉時支能
香久乃菓子乎 可之古久母 能許之多麻敏禮 國毛勢爾 於非
多知左加延 波流左禮婆 孫枝毛伊都追 保登等藝須 奈久五
月爾波 波都婆奈乎 延太爾多乎理豆 乎登女良爾 都刀爾母
夜里美 之路多倍能 蘇泥爾毛古伎禮 香具播之美 於枳豆可
良之美 安由流實波 多麻爾奴伎都追 手爾麻吉豆 見禮騰毛
安加受 秋豆氣婆 之具禮能雨零 阿之比奇能 夜麻能許奴禮
波 久禮奈爲爾 仁保比知禮止毛 多知波奈能 成流其實者
比太照爾 伊夜見我保之久 美由伎布流 冬爾伊多禮婆 霜於
氣騰母 其葉毛可禮受 常磐奈須 伊夜佐加波延爾 之可禮許

ふる五音を以てすることは家持時代にあつては異例であるが、此橋
合は語音の性質上少しも耳立たぬのである。

(三) モイツツは甫エツツの意なること勿論である。恐らくは音便であ
らう。

(四) 母の字は蛇足である。新考説の如く之を行とすべきであらう。

(五) 爾は奴の誤か「新考」。或はニと誦へてもメの音便と心得べきもの
であらう。

參照 スメミヤ、タゲマモリ(人)、ホコ、トキジク、カグノコノミ、
コキレ、アエ、ヨロシナベ

(四一二)

反歌一首

橘波 花爾毛實爾毛 美都禮騰母 移夜時自久爾 奈保之見我
保之
橘は花にも實にも見つれどもいや時じくに尙し見がほし

閏五月二十三日大伴宿禰家持作之

(四一三)

庭中花作歌一首并短歌

於保伎見能 等保能美可等等 末伎太末不 官乃末爾末 美由
伎布流 古之爾久太利來 安良多末能 等之能五年 之吉多倍
乃 手枕末可受 比毛等可須 末呂宿乎須禮波 移夫勢美等
情奈具左爾 奈泥之故乎 屋戸爾末枳於保之 夏能能之 佐由

利比伎宇惠天 開花乎 移低見流其等爾 那泥之古我 曾乃波
 奈豆末爾 左由理花 由利母安波無等 奈貝佐無流 許己呂之
 奈久波 安麻射可流 比奈爾一日毛 安流部久母安禮也
 大君の とほの御門と まきたまふ 官ツカサのまにま み雪降る
 越に下り來 あらたまの 年の五年イットセ したたへの た枕まかず
 紐とかず まる寝をすれば いふせみと 心なぐさに なでし
 こを 宿にまき生ナふし 夏の野の さ百合引きうゑて 咲く花
 を いで見るとに なでしこが 其花づまに さ百合花 ゆ
 りも逢はむと なぐさむる 心しなくば あまさかる 夷に一
 日も あるべくもあれや

(一)「庭」の上に見の字を脱したのであらう「代匠記」。

(二)マク(任)であらねばならぬが、マキとしたのは音便であらう。

參照 マケ、イフセミ、ハナツマ、ユリ、アマサカル(枕)

(四一一四)

反歌二首

奈泥之故我 花見流其等爾 乎登女良我 惠末比能爾保比 於
 母保由流可母

なでしこが花見るとにをとめらが笑ひのほひ思ほゆるかも

(四一一五)

佐由利花 由利母相等 之多波布流 許己呂之奈久波 今日母

須 可久之都彌見牟 於毛我波利世須

大君の まきのまにく 取りもちて 仕ふる國の 年の内の

ことかたねもち 玉梓の 道に出立ち 岩根ふみ 山こえ野行

き 都邊に まゐし我ワガせを あらたまの 年ゆきかへり 月か

さね 見ぬ日さまねみ 戀ふるそら 安くしあらねば ほとと

ぎす 來なく五月の あやめ草 よもぎかづらき さかみづき

遊び和ナぐれど 射水河 雪げはふりて 行く水の いやましに

のみ たづが鳴く 奈古江の背の ねもころに 思ひ結ほれ

嘆きつつ 吾が待つ君が 事をはり かへりまかりて 夏の野

の さ百合の花の 花ゑみに にふぶに笑みて 逢はしたる

今日を始めて 鏡なす かくしつね見む 面がはりせず

參照 カタネ、コフルソラ、アヤメ草、ヨモギ、ナゴ(地)、サカミヅ

キ、ニフツ

(四一一七)

反歌二首

許序能秋 安比見之末爾 今日見波 於毛夜目都良之 美夜

古可多比等

こぞの秋相見しままに今日見れば面やめづらし都かた人

(一)元曆校本には末爾末とある。

(四一一八)

萬葉集(卷第十八)

倍米夜母

さ百合花ゆりもあはむと下はふる心しなくば今日もへめやも

同閏五月二十六日大伴宿禰家持作

參照 ユリ

(四一一六)

國掾久米朝臣廣繩、以天平二十年附朝集使入京
 其事畢而天平感寶元年閏五月二十七日、還到本任、
 仍長官之館設詩酒宴樂飲、於時主人守大伴宿禰家
 持作歌一首并短歌

於保伎見能 末伎能末爾末爾 等里毛知底 都可布流久爾能

年内能 許登可多禰母知 多末保許能 美知爾伊天多知 伊波

禰布美 也末古衣野由伎 彌夜故敵爾 末爲之和我世乎 安良

多末乃 等之由吉我敵理 月可佐禰 美奴日佐末禰美 故敷流

會良 夜須久之安良禰波 保止支須 支奈久五月能 安夜女

具佐 余母疑可豆良伎 左加美都伎 安蘇比奈具禮止 射水河

雪消溢而 逝水能 伊夜末思爾乃未 多豆我奈久 奈吳江能須

氣能 根毛己呂爾 於母比牟須保禮 奈介伎都都 安我末川君

我 許登乎波里 可敵利末可利天 夏野能 佐由利能波奈能

花咲爾 爾布夫爾惠美天 阿波之多流 今日乎波自米氏 鏡奈

可久之天母 安比見流毛能乎 須久奈久母 年月經禮婆 古非

之家禮夜母

かくしても逢見るものをすくなくも年月経れば戀ひしけれやも

(一)コヒシケレヤモは戀シクアレヤモといふに同じく、モは感動詞で

アレヤはアルカナといふ意の古語である。先學之を解し得ずして猥

りに改字改訓を施したのは歎すべきことである。歌の意は「かうし

て再會することもあるに少し年月を隔てると戀しいことよ」といふ

のである。

參照 スクナクモ

(四一一九)

聞霍公鳥喧作歌一首

伊爾之敵欲 之奴比爾家禮婆 保等登伎須 奈久許惠伎吉氏

古非之吉物能乎

古ゆしぬびにければ霍公鳥なく聲聞きて戀ひしきものを

(四一二〇)

爲下向京之時見貴人及相美人飲宴之日述懷上儲

作歌二首

見麻久保里 於毛比之奈倍爾 加都良賀氣 香具波之君乎 安

比見都流賀母

見まく欲り思ひしなべにかつらかけかぐはし君を相みつるかも

八二七

(一) カツラは鬘の意であるから、轉じて鬘の材料となる植物の名となり、香木等の字をあてる。カゲも亦頭飾を意味し、往々冠の訓に用ひられて居るから、カツラカゲは香木の鬘の意で、こゝではカケハシの序に用ひられ、且カツラ、カゲ、カケハシと頭韻を押してあるのである。——之をカツラ掛ケと釋し「新訓」、或は宇都良都良の誤記とするが如きは妄誕論するに足らぬ。

參照 カツラ、カゲ

(四二二)

朝參乃 伎美我須我多乎 美受比左爾 比奈爾之須米婆 安禮故非爾家里

一頭云、波之吉與思、伊毛我須我多乎

まのいりの君がすがたを(は)しきよし妹がすかたを(見)ず久に鄙にしすめば吾こひにけり

同閏五月二十八日大伴宿禰家持作之

(一) マテイリノと訓した本もある。契沖はアサマキ、眞淵はマキリ、宣長はアサトテ(朝戸出の誤字として)、新考はテウサンと訓したが舊訓が最も適切である。マキリと約せず(用ひられたのは當初マキ(御居)、イリ(入)といふ二單語であつたからであらう。——勿論家持時代には既にマキリ、マキテといふ複合語は存したのであるが、マキイリといつても耳立たなかつたものと思はれる。

(四二三)

天平感寶元年閏五月六日以來起ニ小早ニ百姓田畝稍有ニ

湖色一也、至六月朔日、忽見ニ雨雲之氣、仍作ニ雲歌一首、短歌一絶

須賣呂伎能 之伎麻須久爾能 安米能之多 四方能美知爾波
宇麻乃都米 伊都久須伎波美 布奈乃倍能 伊波都流麻泥爾
伊爾之敝欲 伊麻乃乎都頭爾 萬調 麻都流都可佐等 都久里
多流 會能奈里波比乎 安米布良受 日能可左禮婆 宇惠之
田毛 麻吉之波多氣毛 安佐其登爾 之保美可禮由苦 會乎見
禮婆 許己呂乎伊多美 彌騰里兒能 知許布我其登久 安麻都
美豆 安布藝弓會麻都 安之比奇能 夜麻能多乎理爾 許能見
由流 安麻能之良久母 和多都美能 於积都美夜敝爾 多知和
多里 等能具毛利安比且 安米母多麻波爾

すめろぎの しきます國の 天の下 四方の道には 馬の爪
い盡す極み 船のへの い泊るまでに 古よ 今のをつつに
萬調 まつるつかさを 作りたる 其なりはひを 雨降らず
日の重なれば うゑし田も 蒔きし畑も 朝ごとに 萎み枯れ
行く 其を見れば 心をいたみ みどり子の 乳こふが如く
天つ水 仰きてぞまつ あしびきの 山のたをりに 此見ゆる
天の白雲 わだつみの 沖つ宮邊に 立ちわたり との曇りあ
ひて 雨もたまはね

(四二四)

反歌一首

許能美由流 久毛保妣許里且 等能具毛理 安米毛布良奴可
許己呂太良比爾

此見ゆる雲ほびこりてとの曇り雨も降らぬか心足らひに

右二首六月一日晚頭守大伴宿禰家持作之

(四二五)

賀ニ雨落ニ歌一首

和我保里之 安米波布理伎奴 可久之安良波 許登安氣世受孖
母 登思波佐可延牟

わが欲りし雨は降り來ぬかくしあらば言舉せずとも年は榮えむ

右一首同月四日大伴宿禰家持作之

(四二六)

七夕歌一首并短歌

安麻泥良須 可未能御代欲里 夜洲能河波 奈加爾敵太且且
牟可比太知 蘇泥布利可波之 伊吉能乎爾 奈氣加須古良 和
多理母理 布禰毛麻宇氣受 波之太爾母 和多之氏安良波 會
能倍由母 伊由伎和多良之 多豆佐波利 宇奈我既利爲氏 於

萬葉集(卷第十八)

母保之吉 許登母加多良比 那具左牟流 許己呂波安良牟乎
奈爾之可母 安吉爾之安良禰波 許等騰比能 等毛之伎古良
宇都世美能 代人和禮母 許己宇之母 安夜爾久須之彌 往更
年能波其登爾 安麻能波良 布里左氣見都追 伊比都藝爾須禮
天照す 神の御代より やすの河 中に隔てて 向ひ立ち
で振りかはし 息の緒に なげかす子ら 渡り守 舟も設けず
橋だにも 渡してあらば 其邊ゆも い行き渡らし 携はり
うながけり居て おほほしき 事もかたらひ 慰さむる 心は
あらむを 何しかも 秋にしあらねば こと問ひの ともしき
見ら うつせみの 世の人我も こゝをしも あやにくすしみ
往かはる 年のは毎に 天の原 ふりさけ見つつ いひつぎに
すれ

(一) 宇は乎を誤とする契沖説に従ふ。

參照 アメのヤスの河、ウナガケリ、トモシ

(四二七)

反歌二首

安麻能我波 波志和多世良波 會能倍由母 伊和多良佐牟乎
安吉爾安良受得物

天の川橋わたせらば其邊ゆもい渡らさむを秋にあらずとも

(四二七)

夜須能河波 許牟可比太知豆 等之能古非 氣奈我伎古良河 都麻度比能欲會

やすの河い向ひ立ちて年のこひけ長ききらが妻どひの夜ぞ
右七月七日仰見天漢大伴宿禰家持作之

(一) 許は伊の誤とする古義説可。

(四二二八)

越前國掾大伴宿禰池主來贈戲歌四首

忽辱恩賜驚欣已深、心中含咲獨座稍開、表裏不_レ同相違
何異、推_レ量所_レ由率爾作策歟、明知加_レ言豈有_レ他意乎、凡
賀_レ易本物、其罪不_レ輕、正賊、倍贓宜_レ急並滿、今勒_レ風雲
發_レ遣徵使、早速返報不_レ須_レ延回

勝寶元年十一月十二日物所貿易下吏

謹訴 貿易人斷官司 廳下

別白、可_レ怜之意不_レ能_レ默止、聊述_レ四詠、准_レ擬睡覺

久佐麻久良 多比能於伎奈等 於母保之天 波里會多麻徹流

奴波牟物能毛負

草枕たびの翁とおもほして針ぞたまへる縫はむものもが。

(一) 新考に策は錯の誤又は通用とある。或は然らむ。

(二) 略解には加を如の誤とし、新考には言は意の誤寫で、明に知つて意を加へたといふことであらうと解してある。

(三) 負の字元曆校本に賀とあるを可とする。

(四二二九)

芳理夫久路 等利安宜麻徹爾於吉 可邊佐倍波 於能等母於能
夜 宇良毛都藝多利
針袋とりあげ前におきかへさへばおのともおのや裏もつきたり

參照 オノトモオノヤ

(四一三〇)

波利夫久路 應婢都都氣奈我良 佐刀其等爾 天良佐比安流氣
騰 比等毛登賀米授

針袋帯につけながら里ごとに銜さひあるけど人もとがめず

(一) 上の都は爾の誤とする新考説可。

(四一三一)

等里我奈久 安豆麻乎佐之天 布佐倍之爾 由可牟登於毛倍騰
與之母佐禰奈之
とりが鳴く東をさしてふさへしに行かむと思へどよしも實なし

右歌之返報歌者脱漏不_レ得_レ探求也

參照 フサヘ

(四一三二)

更來贈歌二首

依下迎_レ驛使_レ事_レ今月十五日到_レ來部下加賀郡境、面蔭見_レ

宴席詠_レ雪月梅花_レ一首

由吉能宇倍爾 天禮流都久欲爾 烏梅能播奈 乎理天於久良牟

波之伎故毛我母

雪の上にてれる月夜に梅の花折りておくらむ愛しき子もがも

右一首十二月大伴宿禰家持

(四一三五)

和我勢故我 許登等流奈倍爾 都禰比登能 伊布奈宜吉思毛

伊夜之伎麻須毛

わが背子が琴とるなべに常人のいふ嘆しもしやしきますも

右一首少目秦伊美吉石竹館宴、守大伴宿禰家持作

(四一三六)

天平勝寶二年正月二日、於_レ國廳_レ給_レ饗諸郡司等_レ宴

歌一首

安之比奇能 夜麻能許奴禮能 保與等里天 可射之都良久波

知等世保久等會

あしびきの山の木ぬれのほよとりて挿しつらくは千歳ほぐとぞ

右二首大伴宿禰家持作

參照 ホヨ

(四一三七)

射水之郷、戀緒結_レ深海之村、身異_レ胡馬_レ心悲_レ北風、乘_レ

月徘徊、會無_レ所_レ爲、稍開_レ來封、其辭_レ云著者、先所_レ奉書、

返畏_レ度_レ疑歟、僕作_レ囉_レ羅_レ且惱_レ使君、夫乞_レ水得_レ酒從來

能口、論_レ時合_レ理何題_レ強吏_レ乎、尋誦_レ針袋詠_レ詞泉酌不_レ

渴、抱_レ膝獨咲、能獨_レ旅愁_レ陶然遣_レ日、何慮何思、短筆不宣

勝寶元年十二月十五日徵_レ物下司

謹上 不仗使君 紀室

別奉云云歌二首

多多佐爾毛 可爾母與已佐母 夜都故等會 安禮波安利家流

奴之能等能度爾

豎_レさにも此にも横_レさも奴とぞあれはありけり主_レの殿どに

(一) 云著の二字元曆校本に云々とあるを可とする。其辭_レ云々者_レと訓む

のである(新考)。

(四一三三)

波里夫久路 已禮波多婆利奴 須理夫久路 伊麻婆衣天之可

於吉奈佐備勢牟

針袋これはたばりぬすり袋今は得てしか翁さびせむ

參照 スリブクロ、オキナ、サビ

(四一三四)

判官久米朝臣廣繩之館宴歌一首
牟都奇多都 波流能波自米爾 可久之都追 安比之惠美天婆
等积自家米也母

むつき立つ春のはじめにかくしつ相しゑみてば時じけめやも
同月五日守大伴宿禰家持作之

參照 ムツキ、トキツク
(四一三八)

縁上檢察墾田地事、宿禰波郡主張多治比部北里之家、于レ時忽起風雨不レ得辭去作歌一首

夜夫奈美能 佐刀爾夜度可里 波流佐米爾 許母理都追牟等
伊母爾都宜都夜

二月十八日守大伴宿禰

參照 ヤブナミ〔地〕、アマツツミ

【卷第十九】

(四一三九)

天平勝寶二年三月一日之暮、眺臨春苑桃李花作歌

(四一四三)

攀折堅香子草花歌一首

物部能 八十乃熾熾等之 抱亂 寺井之於乃 堅香子之花
もののふの八十をとめらが汲みまがふ寺井の上のかたかごの花

(一) 乃の字元曆校本に之なきを可とする。

參照 カタカゴ

(四一四四)

見歸鴈歌二首

燕來 時爾成奴等 鴈之鳴者 本郷思都追 雲隱喧
つばめ來る時になりぬとかりがねは國しぬびつつ雲がくりなく

(一) 古義の訓に従ふ。

(四一四五)

春設而 如此歸等母 秋風爾 黃葉山乎 不超來有米也

一云、春去者、歸此鴈

春まけてかく歸るとも(春さればかへる此鴈)秋かぜにもみぢの
山を越え來ざらめや

(一) モミテム〔略解〕、モミヂム〔古義〕、モミヅル〔新考〕といふ訓があるが、此場合現在格(不定法)を用ひるか、未來格でいふかは作者の氣もちによるもので、語法からいへばどちらでもよい。但し此語が上二段活か、下二段活であるかは尙決しかれる點があり(四段に活用せられた例もある)、且、こゝでは動詞として用ひられたと断定すべき

二首

春苑 紅爾保布 桃花 下照道爾 出立熾熾
春の園くれなる匂ふ桃の花したてる道にいであつをとめ

(四一四〇)

吾園之 李花可 庭爾落 波太禮能未 遺有可母

吾が園のすももの花か庭にふるはだれの未だのこりたるかも

參照 ハダレ

(四一四一)

見飛翫翔鳴作歌一首

春儲而 物悲爾 三更而 羽振鳴志藝 誰田爾加須牟

春まけてもの悲しきにさ夜ふけて羽振鳴くし誰が田にか住む

(一) 飛の字元曆校本等に之なきを可とする。

(二) 舊訓による。ハフキと讀んでも差支はないが、フキとフリとは語義が違ふからハフキであらねばならぬとする古義の説は陋である。古事記神代卷に「後手に布伎つつ」とあるフキをフリの意でないと思ふことが出来るであらうか。

(四一四二)

二日攀柳黛思京師歌一首

春日爾 張流柳乎 取持而 見者京之 大路所思

春の日に張れる柳をとりもちて見れば都の大路しおもほゆ

理由もないから、モミヂのヤマと訓むのが最も無難なやうに思はれる。若し動詞とすればモミテムを取る。其は山には常葉の山もあり必ず紅葉するものとは限らず、活用は下二段の方が古いやうに思はれるからである。

因に記す。語誌にはモミヂの語原を不明とし、或はモエ(萌)のモと關係があるかも知れぬと記したが、再考するに應神紀に吉野の國權は煮蝦蟇爲上味一名曰毛瀨とあるから、カヘルテ(楓)と同義を以て吉野土人がモミヂと稱へたのが、大和語に採用せられたのであるともいひ得られる。斷言はしがたいが一考に値すると思ふ。

參照 モミヂ

(四一四六)

夜裏聞千鳥喧歌二首

夜具多知爾 寢覺而居者 河瀬尋 情毛之奴爾 鳴知等理賀毛
夜くだちに寢さめて居れば川瀬とめ心もしぬに鳴く千鳥かも

(四一四七)

夜降而 鳴河波知登里 宇倍之許曾 昔人母 之奴比來爾家禮
夜くだちて鳴く川千鳥うべしこそ昔の人もしぬび來にけれ

參照 ウベ

(四一四八)

聞曉鳴雉歌二首

相野爾 左乎騰流雉 灼然 啼爾之毛將哭 己母利豆麻可母
すぎの野にさをどる雉いちじろく音にしもなかもり妻かも

參照 スギの野

(四一四九) 足引之 八峯之雉 鳴響 朝開之霞 見者可奈之母
あしびきのやつ丘の雉なきどよむあさけの霞見れば悲しも

(四一五〇) 遙聞^ニ浜^レ江船人唱歌一首

朝床爾 聞者遙之 射水河 朝已藝思都追 唱船人
朝床に聞けば遙けし射水川あさ漕ぎしつうたふ舟人

(四一五一)

三日守大伴宿禰家持之館宴歌三首

今日之爲等 思標之 足引乃 峯上之櫻 如此開爾家里
今日の爲と思ひしめにしあしびきの尾上の櫻かく咲きにけり

(四一五二)

奥山之 八峯乃海石榴 都婆良可爾 今日者久良佐禰 大夫之徒
奥山のやつをの椿つばらかに今日はくらさねますらをの伴

(四一五三)

漢人毛 杖浮而 遊云 今日會和我勢故 花縵世余
から人も舟を浮べて遊ぶちふ今日ぞ我せこ花かつらせよ

(一) 杖は概又は筏の誤寫なることは勿論であるが、契沖がイカダと訓したのは従はれぬ。筏もまた古語ではフネと稱し、イカダは竹製の

ら 枕づく つま屋の内に 鳥くらゆひ するてぞ我が飼ふ
ましら斑の鷹

參照 シナサカル〔枕〕、シキマス、オヤジ、ミサケ、トモシ、イハセ
野、タギ、マクララツク〔枕〕、ツマヤ

(四一五五)

反 詠

矢形尾乃 麻之路能鷹乎 屋戸爾須惠 可伎奈泥見都追 飼久
之余志毛

やかた尾のま白の鷹を宿にすゑかき撫で見つつ飼はくしよしも

參照 ヤカタチ

(四一五六)

潜^{カケル}鷗歌一首

荒玉能 年往更 春去者 花耳爾保布 安之比奇能 山下響
墮多藝知 流辟田乃 河瀬爾 年魚兒狹走 島津鳥 鷗養等母
奈倍 可我理左之 奈津左比由氣波 吾妹子我 可多見我氏良
等 紅之 八鹽爾染而 於已勢多流 服之欄毛 等實利氏濃禮奴
あらたまの 年行きかはり 春されば 花さき匂ふ 足びきの
山下どよみ 落ちたぎち 流るさき田の 川の瀬に 年魚子さ
走る 島つ鳥 うかひ伴なへ かがりさし なづさひ行けば
吾妹子が かたみがてらと 紅の 八しほに染めて おこせ

袋に限つて用ひられる語である。其故に新古今及朗詠にもフネナとして轉載せられて居るのである。

參照 イカダ、フネ

(四一五四)

八日詠^ニ白大鷹^ニ歌一首并短歌

安志比奇能 山坂超而 去更 年緒奈我久 科坂在 故志爾之
須米婆 大王之 敷座國者 京師乎母 此間毛於夜自等 心爾
波 念毛能可良 語左氣 見左久流人眼 乏等 於毛比志繁
會已由惠爾 情奈具也等 秋附婆 芽子開爾保布 石瀬野爾
馬太伎由吉氏 乎知許知爾 烏布美立 白塗之 小鈴木由良爾
安波勢也里 布里左氣見都追 伊伎騰保流 許已呂能宇知乎
思延 宇禮之備奈我良 枕附 都麻屋之内爾 鳥座由比 須惠
氏會我飼 眞白部乃多可

足びきの 山坂越えて 行きかはる 年の緒ながく しなざか
る 越にし住めば 大君の しきます國は 都をも こども同
じと 心には 思ふものから かたりさけ 見さくる人目 と
もしみと おもひし繁し そこゆゑに ころなぐやと 秋づ
けば 萩咲きにほふ いはせ野に 馬たぎ行きて をちこちに
鳥ふみ立て 白ぬりの 小鈴木ゆらに あはせやり ふりさけ
見つつ いきどほる 心のうちを おもひのべ うれしびなが

たる 衣のすそも とほりて濡れぬ

(一) 元曆校本には「並短歌」とある。

(二) 耳は開の誤とする眞淵説に従ふ。

參照 サキタ川、シマツトリ〔枕〕、ナツサヒ、ヤシホ

(四一五七)

反 詠

紅 衣爾保波之 辟田河 絶已等奈久 吾等看牟
くれなゐに衣にほはしさき田川絶ゆることなく吾かへり見む

(一) 看の字諸本に眷とあるを可とする。

(四一五八)

毎年爾 鮎之走婆 左伎多河 鷗八頭可頭氣氏 河瀬多頭禰牟
年ごとに鮎し走らばさきた川鷗八つ潜けて河瀬たづねむ

(四一五九)

季春三月九日、擬^{スヤコ}出舉^{スヤコ}之政^{スヤコ}行^{スヤコ}於舊江村^{スヤコ}道上、屬^{スヤコ}目物

花^{スヤコ}之詠并興中所^{スヤコ}作之歌

過^{シブタニ}澁溪^{シブタニ}一見^{シブタニ}巖上樹^{シブタニ}歌一首 樹名都萬麻

儀上之 都萬麻乎見者 根乎延而 年深有之 神佐備爾家里
いその上のつままを見れば根をはへて年深からし神さびにけり
(一) 興を興の誤記とする新考の説可なるが如し。
(二) ツママの語義、實物並に不明。大楠なりとする説がある〔新考〕。

(四一六〇)

悲世間無常歌一首并短歌

天地之 遠始欲 俗中波 常無毛能等 語續 奈我良倍伎多禮
 天原 振左氣見婆 照月毛 盈昊之家里 安之比奇能 山之木
 末毛 春去婆 花開爾保比 秋都氣婆 露霜負而 風交 毛美
 知落家利 宇都勢美母 如是能未奈良之 紅能 伊呂母宇都呂
 比 奴婆多麻能 黑髮變 朝之咲 暮加波良比 吹風能 見要
 奴我其登久 逝水能 登麻良奴其等久 常毛奈久 宇都呂布見
 者 爾波多豆美 流涕 等騰米可禰都母
 天地の 遠き始よ 世の中は 常なきものと 語りつぎ なが
 らへ來れ 天の原 振りさけ見れば てる月も みちかきしけ
 り あしびきの 山の木ぬれも 春されば 春さき匂ひ 秋づ
 けば 露霜おひて 風まじり 紅葉ちりけり うつせみも か
 くのみならし くれなるの 色もうつろひ ぬばたまの 黒髪
 かはり 朝のゑみ タかはらひ 吹く風の 見えぬがごとく
 行く水の とまらぬ如く つねもなく 移るふ見れば にはた
 つみ 流るる涕 とどめかねつも

(一) 米の字元曆校本には未とあるが、どちらでもよい。
 (二) フリサケミレバ、ニハタツミ

(四一六一)

反歌

言等波奴 木尙春開 秋都氣波 毛美知遲良久波 常乎奈美許會
 一云、常無牟等會
 こと問はぬ木すら春さき秋づけばもみち散らくは常をなみこそ
 (常無けむとぞ)

(四一六二)

宇都世美能 常無見者 世間爾 情都氣受氏 念日會於保伎
 一云、嘆日會於保吉

うつせみの常なき見れば世の中に心つげずておもふ日ぞおほき
 (嘆く日ぞ多き)

(一) 此句には種々の解釋があるが、氣をぐと訓み、「心告げずて」の意
 とすべきである。

(四一六三)

豫作七夕歌一首

妹之袖 和禮枕可牟 河湍爾 霧多知和多禮 左欲布氣奴刀爾
 妹が袖我まくらかむ川の瀬に霧立ちわたれさ夜ふけぬとに

(四一六四)

慕振三勇士之名一歌一首并短歌

知智乃實乃 父能美許等 波播蘇葉乃 母能美己等 於保呂可

(四一六六)

詠霍公鳥并時花一詩一首并短歌

每時爾 伊夜目都良之久 八千種爾 草木花左伎 喧鳥乃 音
 毛更布 耳爾聞 眼爾視其等爾 宇知歎 之奈要宇良夫禮 之
 努比都追 有争波之爾 許能久禮罷 四月之立者 欲其母理爾
 鳴霍公鳥 從古昔 可多理都藝都流 鷲之 宇都之眞子可母
 菖蒲 花橋乎 嬾婦良我 珠貫麻泥爾 赤根刺 晝波之賣良爾
 安之比奇乃 八丘飛超 夜干玉之 夜者須我良爾 曉 月爾向
 而 往還 喧等余牟禮杼 何如將飽足
 時ごとに いやめづらしく 八千種に 草木花さき なく鳥の
 聲もかはらふ 耳に聞き 目に見るごとに うち嘆き しなえ
 うらぶれ しぬびつつ あらそふはしに 木のくれの う月し
 立てば 夜ごもりに 鳴く霍公鳥 古ゆ かたりつぎつる う
 ぐひすの うつしま子かも あやめ草 花たちばなを をとめ
 らが 玉ぬくまでに 赤根さす 晝はしめらに あしびきの
 やつを飛び越え ぬばたまの 夜はすがらに 曉の 月にむか
 ひて 往きかへり 鳴きどよむれど なにか飽き足らむ
 (一) 舊訓による。有は發音を示す爲に添へた假字で、相競の相と同一
 用法である。宣長が争を來の誤字とし、アリクルハシニと改訓した
 のはアラソフを「争」の義として之を不可解とした爲と思はれるが、

(四一六五)

反歌

大夫者 名乎之立倍之 後代爾 聞繼人毛 可多里都具我禰
 ますらをは名をし立つべし後の代に聞きつぐ人も語り繼ぐがね
 右二首追和山上憶良臣作歌

(一) 此次に落句あるべしとする略解の説は非。マクルは「春マケテ」な
 どいふマケの活用で、向、設と同語。こゝでは、差向かふ心が障をう
 けず」といふ意である。但しサシが劔大刀の縁語であることはいふ
 までもない。

(二) 乃を爾の誤とする説もあるが「新考」、後人ノ語り續クマキ名とも
 解せられるから、強ひて改めるにも及ぶまい。

參照 チ、ノミ「枕」、ハハソハ「枕」、ナケヤ

大夫者 名乎之立倍之 後代爾 聞繼人毛 可多里都具我禰
 ますらをは名をし立つべし後の代に聞きつぐ人も語り繼ぐがね

右二首追和山上憶良臣作歌

このアラソフは原義にもとづき「アリ添フ」ことを意味したのであらう。

(三) 罷は能の誤記とする古義説に従ふ。コノクレの繁ワツキ四月といふ意であらう。

(三) 新考に此處二句脱としたのは次句のマテニに捉はれた爲で、來自を意味する言葉なくしてマテニ(又はマテ)を用ひた例は少くないから、脱句の理由とすることは出來ぬ。但しタマヌクマテニは拙い語法で、タマニヌクマテの方が遙によいのであるが、(四一七)にも同一用例があるから、家持が特に好んで之を用ひたものと思はれる。

(四) 何如の二字を略解はイカガ、古義はイカテと訓し、新考はイカガ、イカテは古語に非ずとしてナドカと改めた。イカガはイカイカ又はイカニカの約、イカテはイカニシテの促つたものであるが、ナドカも亦ナニトカの約であるから、五十歩百歩の差である。ナニカと訓むのが最も無難のやうである。

參照 ウラアリ、コノクレ、ウツシ、マコ、シミラ、スガラ

(四一六七)

反歌二首

毎時 彌米頭良之久 咲花乎 折毛不折毛 見良久之余志母
時ごとに彌イめづらしく咲く花を折りも折らずも見らくしよしも

(四一六八)

毎年爾 來喧毛能由惠 霍公鳥 聞婆之努波久 不相日乎於保
美 毎年謂ニ之等之乃波一
年のはに來なくものゆる時鳥聞けばしぬばく逢はぬ日を多み

るが、こゝは六音に誦むべき場合ではないから、家をカの假字として(一四卷に多くの例がある)、久を良の誤としてヤスカラナクニと訓まればならぬ。

參照 ハナタチバナ、アマサカル(枕)、タナリ、ナゲクソラ、オモフソラ、ナゴ(地)、カ(柏)

(四一七〇)

反歌一首

白玉之 見我保之君乎 不見久爾 夷爾之乎禮婆 伊家流等毛
奈之
白玉の見がほし君を見ず久に夷ヒナにし居れば生けるともなし

(一) 古義に流は理又は利の誤としたのは今を以て古を律せんとするもので、古語では此場合イケリ、イケルいづれを用ひてもよかつたのである。

(四一七一)

二十四日應立夏四月節也、因レ此二十三日之暮、忽思ニ霍公鳥曉喧聲ニ作歌二首

常人毛 起都追聞會 霍公鳥 此曉爾 來喧始音
つね人もおきつつ聞かむぞ時鳥此あかときに來なけ初コゑ
(二) 舊訓にはキクソとあり、結句もキナク初コエとあるから、格は一致して居るけれども、題にあはぬ。眞淵が結句をキナクと改めたのは當を得て居るが、第二句が其まゝではと、のはぬ。宜しく神田本

右二十日雖未レ及レ時依レ興豫作也

(四一六九)

爲ニ家婦贈ニ在京尊母ニ所レ詠作歌一首并短歌

霍公鳥 來喧五月爾 笑爾保布 花橘乃 香吉 於夜能御言ニ
朝暮爾 不聞日麻禰久 安麻射可流 夷爾之居者 安之比奇乃
山乃多乎里爾 立雲乎 余曾能未見都追 嘆蘇良 夜須家久奈
久爾 念蘇良 苦伎毛能乎 奈吳乃海部之 潜取云 眞珠乃
見我保之御面 多太向 將見時麻泥波 松柏乃 佐賀延伊麻佐
禰 尊安我吉美 御面謂ニ之美於毛和一

ほととぎす 來ニなく五月ニに 咲きにほふ 花たちばなの 香ぐ
はしき 親の御言を 朝よひに 聞かぬ日まねく あまさかる
夷ヒナにし居れば あしびきの 山のたをりに 立つ雲を よその
み見つつ 嘆くそら 安からなくに 思ふそら 苦しきものを
奈吳ナガの海人の かづき取るちふ 白珠の 見がほし御おもわ
ただ向ひ 見むときまでは 松かへの 榮えいませぬ 尊き吾
がきみ

(一) 新考説の如く乎の字を補うてミコトナと訓むべきである。ナを略してオヤのミコトと六音に誦すべき理由がない。

(三) ヤスケクナクニといふ語法はない。元曆校本に上の久を削つたのは之が爲で、ヤスケナクニと訓ませるつもりであつたらうと思はれる

の訓の如くキカムソと改むべきである。

(四一七二)

霍公鳥 來喧響者 草等良牟 花橘乎 屋戸爾波不殖ニ而

ほととぎす來鳴どよまば草とらむ花たちばなを宿には植ヒゑすて
(一) 此歌は第十卷の「月夜よみ鳴く霍公鳥見まく欲り苦草とれり見む人もがも(一九四)」に基づくものなることは新考の説の通りであるが、不レを衍字としたのは従はれぬ。橘の蔭が鳥影を遮ることをいへばこそウエズテといふたので、ウエテとしては月光に鳥影を見んとする情趣が破壊せられる。特にハといふ助語を加へて八音に誦したのも附近には植ヒゑても庭前だけでは植ヒゑないといふ意を表示する爲とせればならぬ。

(四一七三)

贈ニ京丹比家ニ歌一首

妹乎不見 越國敏爾 經年婆 吾情度乃 奈具流日毛無
いもを見ず越の國邊に年をへば吾が心どの和ナぐる日もなし

(二) 舊訓による。トシフレバと改訓したのは賢らで、書體から見ても律の上からいうてもトシチヘバであらねばならぬ。

(四一七四)

追ニ和筑紫太宰之時春花梅ニ誦一首

春裏之 樂終者 梅花 手折乎伎都追 遊爾可有
春のうちの樂しきはは梅の花手をりて來つつ遊ぶにあるべし

右一首二十七日依興作之

(一) 花は苑の誤寫であらう〔略解〕。

(二) 契沖訓による。「樂の極は」といふ意である。

(三) 乎の字元曆校本及類聚古集に手とあるを可とする。

(四) 契沖訓可。

(四一七五)

詠霍公鳥歌二首

霍公鳥 今來喧會無 菖蒲 可都良久麻泥爾 加流流日安良米也 毛能波三箇辭闕之

時鳥今來なきそむあやめ草かつらくまでに枯るる日あらめや

(四一七六)

我門從 喧過度 霍公鳥 伊夜奈都可之久 雖聞飽不足 毛能波 氏爾乎六箇辭闕之

我が門ゆなき過ぎわたる時鳥いやなつかしく聞けど飽きたらぬ

(一) 舊訓アキタラズとあるが、咏嘆の意をふくませてアキタラヌとあるべきである。

(四一七七)

四月三日、贈越前判官大伴宿禰池主霍公鳥歌、不勝感奮之意、述懷一首并短歌

和我勢故等 手携而 曉來者 出立向 暮去者 振放見都追

めてアレノミシとしたのは従はれぬ。此場合シといふ助語は用ひられぬ。

(二) 爾は南の誤とする略解説可。

參照 ニフ山

(四一七九)

霍公鳥 夜喧乎爲管 我世兒乎 安宿勿令寢 由米情在 ほととぎす夜なきをしつつ我がせを安いな寢しめゆめ心あれ

參照 ユメ

(四一八〇)

不飽感霍公鳥之情述懷作歌一首并短歌

春過而 夏來向者 足檜木乃 山呼等余米 左夜中爾 鳴霍公鳥 始音乎 聞婆奈都可之 菖蒲 花橋乎 貫交 可頭良沼久麻而爾 里響 喧渡禮騰母 尙之努波由 春すぎて 夏來むかへば あしびきの 山よびどよめ さ夜中に なくほととぎす 初こゑを 聞けばなつかし あやめ草 花たちばなを ぬきまじへ かつらくまでに 里どよめ 鳴き渡れども 尙もしぬばゆ

(一) 沼は衍字とする契沖説可。

(二) 從來尙をナホシと訓して居る。其は助語シの原義用途を解せず、シといへば古歌らしく聞えると思つて不用意にそへたもので、こゝ

念鳴^(一) 見奈疑之山爾 八峯爾波 霞多奈婢伎 谿徹爾波 海石

榴花咲 宇良悲 春之過者 霍公鳥 伊也之伎喧奴 獨耳 聞

婆不怜毛 君與吾 隔而戀流 利波山 飛超去而 明立者 松

之佐枝爾 暮去者 向月而 菖蒲 玉貫麻泥爾 鳴等余米 安

寢不令宿 君乎奈夜麻勢

我せこと 手たづさはりて 明け來れば 出立ち向ひ 夕ざれば

ば 振りさけ見つつ 思ひのべ 見なきし山に やつ峯には

霞たなびき 谿邊には 椿花さく うれ悲し 春しすぐれば

霍公鳥 いやしき鳴きぬ 獨のみ 聞けばさぶしも 君と吾

へだてて戀ふる となみ山 とび超え行きて 明けたたは 松

のさ枝に 夕さらば 月に向ひて あやめ草 玉ぬくまでに

鳴きどよめ 安い寢しめず 君をなやませ

(一) 鳴の字元曆校本及類聚古集に暢とあるに従ひ、オモヒノベと訓むべきであらう〔略解〕。

參照 トナミ山

(四一七八)

反歌

吾耳^(一) 聞婆不怜毛 霍公鳥 丹生之山邊爾 伊去鳴爾毛

吾がひとり聞けばさぶしも霍公鳥にふの山邊にいゆき鳴かなも

(一) 類聚古集及細井本の訓に従ふ。古義に舊訓ヒトリノミとあるを改

ではシは助語と同語とせればならぬが、ナホシと指定することゝ要せぬ場合であるから、尙々の意を以てナホモと訓む方がよい。

(四一八一)

反歌三首

左夜深而 曉月爾 影所見而 喧霍公鳥 聞者夏借

さ夜更てあかとき月に影見えて鳴くほととぎす聞けばなつかし

(四一八二)

霍公鳥 雖聞不足 網取爾 獲而奈都氣奈 可禮受鳴金

時鳥聞けども足らず網どりに取りてなづけなかれず鳴くがね

參照 ガネ

(四一八三)

霍公鳥 飼通良婆 今年經而 來向夏波 麻豆將喧乎

ほととぎす飼ひとほせらば今年へて來向ふ夏はまづ鳴きてむを

(一) 類聚古集の訓による。舊訓の如くナキナムチともいひ得るが、上にカヒトホセラバ(口語、飼ひ通したら)とあるから、ナキテムチ(口語、鳴くだらうものを)を可とする。乎をカと訓むべしとする説は此

歌では従はれぬ。

(四一八四)

從三京師贈來歌一首

山吹乃 花執持而 都禮毛奈久 可禮爾之妹乎 之努比都流可毛

山吹の花とりもちてつれもなくかれにし妹をしぬびつるかも

右四月五日從^(一)留^(二)女之女良^(三)所^(四)送也

(一) 女の字を京の誤とする略解の説可。

(二) 元曆校本には女郎とある。

參照 ツレモナク

(四一八五)

詠 山振花^(一)歌一首并短歌

宇都世美波 戀乎繁美登 春麻氣氏 念繁波 引攀而 折毛不
折毛 每見 情奈疑牟等 繁山之 谿徹爾生流 山振乎 屋戸
爾引植而 朝露爾 仁保徹流花乎 每見 念者不止 戀志繁母
江家^(二)

うつせみは 戀をしげみと 春まけて 思しげけば 引きよぢ
て 折りも折らずも 見むごとに 心なぎむと 繁山^(三)の 谷邊
におふる 山吹を 宿に引きうゑて 朝つゆに 匂へる花を
見るとに 思ひはやまず 戀し繁しも

(一) 此二字は元曆校本にはない。次の(四一八六)も同様である。

(四一八六)

反 詠

山吹乎 屋戸爾植氏波 見其等爾 念者不止 戀已曾益禮
山吹をやどに植ゑては見るとに思はやまず戀こそまさされ

藤奈美能 花盛爾 如此許會 浦已藝廻都追 年爾之努波米
藤なみの花の盛にかくしこそ浦こぎたみつつ年にしぬばめ

(四一八九)

贈 水鳥^(一)越前判官大伴宿禰池主歌一首并短歌

天離 夷等之在者 彼所此間毛 同許已呂會 離家 等之乃經
去者 宇都勢美波 物念之氣思 會許由惠爾 情奈具左爾 霍
公鳥 喧始音乎 橘 珠爾安倍貫 可頭良伎氏 遊波^(二)之母^(三) 麻
須良乎乎 等毛毛奈倍立而 叔羅河 奈頭左比浜 平瀬爾波
左泥刺渡 早湍爾波 水鳥乎潛都追 月爾日爾 之可志安蘇婆
禰 波之伎和我勢故 江家

あまさかる 夷としあれば そこもこゝも 同じ心ぞ 家はな
れ 年の經ぬれば うつせみの もの思ひしげし そこゆゑに
心なぐさに 霍公鳥 なく初聲を 橘の 珠にあへぬき かづ
らきて 遊ぶころしも ますらをを 伴なへたてて しくら川
なづさひ上り 平瀬には さでさし渡し 早せには 水鳥をか
づけつつ 且に日に しかし遊ばね はしき我がせこ
(一) 舊訓タハルレバシモとあり、アソバレバシモ、アソバクヨシモな
どいふ訓もあるが、こゝは一段落とすべき所ではない。案するに波
は比の誤記でアサバコロシモと訓むのであらう。鶴を贈與する歌で
あることを忘れてはならぬ。

(四一八七)

六日遊^(一)覽布勢水海^(二)作歌一首并短歌

念度知 大夫能 許能久禮^(三) 繁思乎 見明良米 情也良牟等
布勢乃海爾 小船都良奈米 眞可伊可氣 伊許藝米具禮婆 乎
布能浦爾 霞多奈妣伎 垂姬爾 藤浪咲而 濱淨久 白浪左和
伎 及及爾 戀波末佐禮杼 今日耳 飽足米夜母 如是已曾
彌年能波爾 春花之 繁盛爾 秋葉能 黃色時爾 安里我欲比
見都追思努波米 此布勢能海乎

思ふどち ますらをのこの 木のくれの 繁き思ひを 見あき
らめ 心やらむと 布勢の海に 小舟つらなめ ま權^(四)かけい
漕ぎめくれは をふの浦に 霞たなびき たる姫に 藤なみ咲
きて 濱清く 白波さわぎ しくしくに 戀はまされど 今日
のみに 飽き足らめやも かくしこそ いや年のはに 春花の
しげき盛りに 秋の葉の もみづる時に 有りがよひ 見つつ
しぬばめ 此布勢の海を

(一) 古義は能の字(新考は乃の字)脱とした。いづれにもあれコノクレ
ノと訓むべきことは勿論で、シゲキの枕詞に用ひられたのである。
參照 フセの海、コノクレ、ナフの浦、タルヒメの浦、アリガヨヒ

(四一八八)

反 歌

毛のつを斬とする代匠記の説可從。
(三) 契沖訓による。
(四) 月を且の誤とする新考説可。

參照 アマサカル(枕)、ツツセミ、ナグサ、シクラ川、ナツサヒ、ア
サニケニ

(四一九〇)

叔羅河 湍乎尋都追 和我勢故波 宇河波多多佐禰 情奈具左
爾 江家

しくら河せを尋ねつつ我がせこは鶴川立たさね心なぐさに

(四一九一)

鷓河立 取左牟安由能 之我婆多婆 吾等爾可伎無氣 念之念
婆

鶴川たて取らさむ年魚のしが鱈は吾にかきむけ思ひし思はば

右九日附^(一)使贈^(二)之

(四一九二)

詠 霍公鳥^(一)并藤花^(二)一首并短歌

桃花 紅色爾^(三) 爾保比多流 面輪能宇知爾 青柳乃 細眉根乎
咲麻我理 朝影見都追 媿孀良我 手爾取持有 眞鏡 蓋上山
爾 許能久禮乃 繁溪邊乎 呼等米爾^(四) 且飛渡 暮月夜 可蘇
氣伎野邊 遙遙爾 喧霍公鳥 立久久等 羽觸爾知良須 藤浪
乃 花奈都可之美 引攀而 袖爾古伎禮都 染婆染等母

桃の花 くれなる色に 匂ひたる おもわのうちに 青柳の
細き眉根を 咲みまがり 朝かけ見つつ をとめらが 手にと
り持たる まそ鏡 二上山に 木のくれの 繁き溪邊を 呼び
どよめ 朝とびわたり 夕月夜 かそけき野べに 遙々に 鳴
くほととぎす 立ちくくと 羽ぶりにちらす 藤なみの 花な
つかしみ 引きよちて 袖にこきれつ 染まば染むとも

(一) 從來クレナキイロニと訓んで異としなかつたけれども、色が紅に
匂ふといふのが普通の表現法で、特にクレナキ・イロニ匂フといは
ねばならぬ理由もないやうであるから、或は色紅の轉置であるかも
知れぬ。

(二) 米爾を余米の誤とする契沖説に従ふ。

參照 フタカミ山、コキレ

(四一九三)

霍公鳥 鳴羽觸爾毛 落爾家利 盛過良志 藤奈美能花

一云、落奴倍美、袖爾古伎禮都、藤浪乃花也

ほととぎす鳴く羽ぶりに散りにけり盛すぎぬらし藤なみの花
(散りぬべみ袖にこきれつ藤なみの花)

同九日作之

(一) 從來スガラシと訓して居るが、時格からいへばスギマラシであら
ねばならぬ。

(四一九四)

持之妹

(一) 女の字京の誤なるべきこと上記の通りである。

(四一九九)

十二日遊覽布勢水海、船泊於多祢灣、望見藤花、
各述懷作歌四首

藤奈美能 影成海之 底清美 之都久石乎毛 珠等會吾見流

藤なみの影なる海の底清みしづく石をも玉とぞ吾が見る

守大伴宿禰家持

參照 フセの水海、タコノ浦、シヅク

(四二〇〇)

多祢乃浦能 底左倍爾保布 藤奈美乎 加射之氏將去 不見人
之爲

たこの浦の底さへにほふ藤なみをかざして行かむ見ぬ人のため

次官内藏忌寸繩麻呂

(四二〇一)

伊佐左可爾 念而來之乎 多祢乃浦爾 開流藤見而 一夜可經
いささめに思ひて來しをたこの浦に咲ける藤見て一夜經ぬべし
判官久米朝臣廣繩

(一) 可を目の誤とする新考説を可とする。古義はイササカと訓みイサ
サメと同義であると説いたが、語尾メなるとカなることによつて意の

更怨霍公鳥駢晚二歌三首

霍公鳥 喧渡奴等 告禮騰毛 吾聞都我受 花波須疑都追

ほととぎす鳴き渡りぬと告ぐれども吾聞きつがず花はすぎつ

(四一九五)

吾幾許 斯奴波久不知爾 霍公鳥 伊頭能山乎 鳴可將超

吾がここだしぬばく知らに時鳥いつへの山を鳴きか越ゆらむ

(四一九六)

月立之 日欲里乎伎都追 敲自努比 麻低騰伎奈可奴 霍公鳥

可母

月たちし日よりをぎつうちしぬび待てど來なかぬ時鳥かも

(四一九七)

贈京人一歌二首

妹爾似 草等見之欲里 吾標之 野邊之山吹 誰可手乎里之

妹に似る草と見しより吾が占めし野邊の山吹誰か手折りし

(四一九八)

都禮母奈久 可禮爾之毛能登 人者雖云 不相日麻禰美 念會

吾爲流

つれもなくかれにしものと人はいへど逢はぬ日まねみ思ひぞ吾
がする

右爲贈留女之女郎所詠家婦作也、女郎者即大伴家

異なることは勿論である。

(四二〇二)

藤奈美乎 借廬爾造 灣廻爲流 人等波不知爾 海部等可見良牟

藤なみをかりほに作り浦みする人とは不知あまとか見らむ

久米朝臣繼麻呂

(一) 古義の訓に従ふ。灣はウラ(浦)の假字で、國を巡廻することをク

ニミ(國見)といふと同義に、浦を巡廻することをウラミ(浦見)とい

うたから、廻をミの假字にあてたのである。ウラマの轉呼なる

ウラミとは別語である。

(二) 爾は不知をシラニと訓ませるやうに送り假字として用いたのであ

(四二〇三)

恨霍公鳥不喧歌一首

家爾去而 奈爾乎將語 安之比奇能 山霍公鳥 一音毛奈家

家に行きて何をかたらむあしびきの山ほととぎす一聲もなけ

判官久米朝臣廣繩

(四二〇四)

見攀折保實葉二歌二首

吾勢故我 捧而持流 保實我之婆 安多可毛似加 青蓋

吾がせこが捧けてもたるほほかしは恰も似るか青ききぬかさ

講師僧惠行

參照 ホホカシハ

(四二〇五)

皇祖神之^(一) 遠御代三世波 射布折^(二) 酒飲等伊布會 此保寶我之波 皇みおやの遠御代御代はい重き折り酒のみきといふぞ此ほほ柏 守大伴宿禰家持

(一) 祖神とはあるが、ミオヤと訓むのであらう。
(二) 契沖訓による。或は折布の轉置かと記したのは蛇足である。新考に打手折の誤記とし、ウチタチリと改訓したのは酒柏といふものが葉を重ね折つて作つた匣狀の飲器であることに氣がつかなかつたらであらう。

(三) 飲をノミキと訓めといふ新考説可。

參照 キノカシハ

(四二〇六)

還時濱上仰見月光^(一) 歌一首 之夫多爾乎 指而吾行 此濱爾 月夜安伎氏牟 馬之末時停息 澁谷をさして吾が行く此濱に月夜あきてむ馬しましとめ

守大伴宿禰家持

參照 シブタニ〔地〕

(四二〇七)

二十二日贈判官久米朝臣廣繩 霍公鳥歌怨恨歌一首 并短歌

(四二〇九)

詠霍公鳥歌一首并短歌

多爾知可久 伊敏波乎禮騰母 許太加久氏 佐刀波安禮騰母 保登等藝須 伊麻太伎奈加受 柰久許惠乎 伎可麻久保理登 安志太爾波 可度爾伊氏多知 由布敏爾波 多爾乎美和多之 古布禮騰毛 比等已惠太爾母 伊麻太伎已要受 谷近く 家は居れども 小高くて 里はあれども 霍公鳥 いまだ來なかず 鳴く聲を 聞かまく欲りと 朝には 門に出で立ち 夕には 谷を見渡し 戀ふれども 一聲だにも 未だ聞えず

(四二一〇)

敷治奈美乃 志氣里波須疑奴 安志比紀乃 夜麻保登等藝須 奈騰可伎奈賀奴

藤なみの繁りは過ぎぬあしびきの山ほととぎすなどか來なかね 右二十三日掾久米朝臣廣繩和

(四二一一)

追和處女墓歌一首并短歌 古爾 有家流和射乃 久須婆之伎 事跡言繼 知努乎登古 宇奈比壯子乃 宇都勢美能 名乎競争登 玉剗 壽毛須底氏 相

此間爾之底 會我比爾所見 和我勢故我 垣都能谿爾 安氣左 禮婆 榛之狹枝爾 暮左禮婆 藤之繁美爾 遙遙爾 鳴霍公鳥 吾屋戶能 殖木橘 花爾知流 時乎麻多之美 伎奈加奈久 會 許波不怨 之可禮杼毛 谷可多頭伎氏 家居有 君之間都都 追氣奈久毛宇之

こゝにして そがひに見ゆる 我せこが 垣内の谷に 明けさ れば 榛のさ枝に 夕されば 藤のしげみに 遙遙に 鳴くほ ととぎす 吾が宿の 植木たちばな 花に散る 時をまだしみ 來鳴かなく そこは怨みじ 然れども 谷かたつきて 家居せる 君が聞きつつ 告げなくもうし

(一) 歌によれば霍公について怨を述べたものであるから、此一句には 誤記があらねばならぬ。西本願寺には上の歌の字が削られて居るが 尙妥當なりと思はれぬ。

(二) 此句は意嚮を述べたものであるから、ウラミジとせればならぬ。 ウラミズと訓むは非。

(三) 家ナレルとも訓み得るが、イヘキスルの方がよい。

參照 カタツキ

(四二〇八)

反歌一首

吾幾許 麻氏騰來不喧 霍公鳥 比等里間都追 不告君可母 吾がここだ待てど來なかねほととぎす獨聞きつつ告げぬ君かも

爭爾 權問爲家流 嵯峨等之 聞者悲左 春花乃 爾大要盛而 秋葉之 爾保比爾照有 惜 身之莊尙 大夫之 語勞美 父母

爾 啓別而 離家 海邊爾出立 朝暮爾 滿來潮之 八隔浪爾 塵珠藻乃 節間毛 惜命乎 露霜之 過麻之爾家禮 奧慕乎 此間定而 後代之 開繼人毛 伊夜遠爾 思努比爾勢餘等 黃 楊小櫛 之賀左志家良之 生而際有

いにしへに ありけるわざの くすはしき 事といひつぐ 知 努をとこ うなひをとこの うつせみの 名をあらそふと た まきはる 生命も棄てて あひきほひ 妻どひしける をとめ らが 聞けば悲しさ 春花の にほえさかりて 秋の葉の 匂 に照れる あたらしき 身のさかりすら ますらをの ことい たはしみ 父母に まをし別れて 家さかり 海邊に出で立ち 朝夕に みち來る潮の 八重波に なびく珠藻の ふしの間も をしき命を 露しもの 過ぎましにけれ 奥つ城を ことと定 めて 後の代の 聞きつぐ人も 彌遠に しぬびにせよと つ げの小櫛 しがさしけらし 生ひて靡けり

(一) アラソフといふ語が重複するから、爾を衍字としてアヒキホヒと 訓めといふ新考説に従ふ。

(二) 舊訓による。ニホエはニホ(丹穂)ハエ(映)の約であらう。——シ ダエ又はシナエと訓するは非。

(三) 字について訓めばアキノハであるが、或はモミザバと訓ませるつもりであつたかも知れぬ。

(四) 舊訓ナシキミノ・サカリチスラモとあり、略解に上句をアタラミノと改めたが、新考の説の如く身之の二字を下の句につけ、アタラシキミノサカリスラと訓むべきである。――莊の字金澤本には「壯」とある。

(五) 古義はシガと訓み、菟原處女が土に挿したといふ意味に説き、新考はシカ(然)の意としたが、シガは「其が」で、黄楊小櫛の代名詞、サシケラシは根サシケラシといふことである。

參照「一八九」ニホヒ、ウツセミ

(四二二)

乎等女等之 後能表跡 黄楊小櫛 生更生而 靡家良思母
少女らが後のしるしとつげの小櫛生ひ代り生ひて靡きけらしも
右五月六日依興大伴宿禰家持作之

(四二三)

安由乎疾美 奈吳能浦廻爾 與須流浪 伊夜千重之伎爾 戀渡可母
あゆを早み奈吳の浦みよする波いや千重しきにこひ渡るかも
右一首贈京丹比家

參照 アユ、ウラミ、ナゴの浦

(四二四)

挽歌一首并短歌

まさ鏡 見れども飽かず 玉の緒の 惜しきさかりに 立つ霧
の 失せ行く如く 置く露の 消え行くがごと 玉藻なす 靡
きこい臥し 行く水の とどみかねつと 枉言や 人のいひつ
る 逆言か 人の告げつる 梓弓 つま引く夜音の 遠音にも
聞けばかなしみ にはたつみ 流るる涕 とどめかねつと

(一) 舊訓による。略解の訓の如くナゲカヒイマスともいひ得られるが、こゝは口語に直せば「歎いてゴサルゾ」といふ所であるから、ゾと強く指定することを可とする。新考はナゲキイマスと改訓して使人の口上は之で終ると説いたが、其では二十二句後の留不得常とあるトのかゝる所がない。

(二) 枉を狂の誤としてタハコトと改訓したものがあるが、何故に字の通りマガコトと訓んでは悪いか理由を知るに苦しむ。

(三) オヨヅレカと訓するものがあるが、逆言には少しもオヨヅレといふ意味はない。字の通りサカコトと訓むべきである。マガコト、サカコト共に訃報の意である。――乎はカの假字に用ひられたので他にも例のあることである。

(四) 爪の下に引の字脱とした契沖説に従ふ。「五三」にもツマヒクヨトといふ用例がある。

參照 ウツソミ、ヤソトモノチ、ヒナサカル(枕)、ハシキヨシ、ニハタツミ

(四二五)

反歌二首
遠音毛 君之痛念跡 聞都禮婆 哭耳所泣 相念吾者

萬葉集(卷第十九)

天地之 初時從 宇都會美能 八十伴男者 大王爾 麻都呂布
物跡 定有 官爾之在者 天皇之 命恐 夷放 國乎治等 足
日本 山河阻 風雲爾 言者雖通 正不遇 日之累者 思戀
氣衝居爾 玉梓之 道來人之 傳言爾 吾爾語良久 波之伎餘
之 君者比來 宇良佐備氏 嘆息伊麻須 世間之 厭家口都良
家苦 開花毛 時爾宇都呂布 宇都勢美毛 無常阿利家利 足
千根之 御母之命 何如可毛 時之波將有乎 眞鏡 見禮杼母
不飽 珠緒之 惜盛爾 立霧之 失去如久 置露之 消去之如
玉藻成 靡許伊臥 逝水之 留不得常 枉言哉 人之云都流
逆言乎 人之告都流 梓弧 爪夜音之 遠音爾毛 聞者悲彌
庭多豆美 流涕 留可禰都母
天地の はじめの時ゆ うつそみの 八十伴のをは 大君に
まつろふものと 定まれる 官にしあれば すめろぎの 命惶
み 夷さかる 國を治むと あしびきの 山川へなり 風雲に
言はかよへど ただに逢はぬ 日の重なれば 思ひこひ いき
づき居るに 玉梓の 道くる人の 傳言に 吾に語らく はし
きよし 君は此ごろ うらさびて 嘆きぞいます 世の中の
うけくつらけく 咲く花も 時にうつろふ うつせみも 常な
くありけり たらちねの 御母の命 何しかも 時はあらむを

遠音にも君がなげくと聞きつれば音のみし泣かゆ相思ふ吾は
(四二六) 世間之 無常事者 知良牟乎 情盡莫 大夫爾之氏
世の中の常なきことは知るらむを心つくすなますら男にして
右大伴宿禰家持弔下鞞南右大臣家藤原二郎之喪慈母一患也
也 五月二十七日

(四二七)

霖雨晴日作歌一首
宇能花乎 令腐霖雨之 始水逝 縁木積成 將因兒毛我母
うの花のくたす長雨の水はなによる木つみなす因らむ兒もがも

(一) 舊訓に誤なしとすれば契沖説の如く逝は瀧の誤であらう。水ハナは水頭の意とも解し得られるが、尙霖雨の水ハナ」といひ得られるかは疑問である。元暦校本にはミヅマサリと訓してある。

(四二八)

見漁夫火光歌一首
鮪衝等 海人之燭有 伊射里火之 保爾可將出 吾下念乎
しびつくと海人のともせる漁火のほにか出でなむ吾が下念ひを
右二首五月
(一) 舊訓による。古義はイダサムと改訓したが、イデは古語では自他兩用で思ヒ出スを思ヒ出といふを例としたのであるから、此場合に

限り特に改める必要もあるまい。

參照 シビ

(四二一九)

吾屋戸之 芽子開爾家理 秋風之 將吹乎待者 伊等遠彌可母 吾がやどの萩さきにけり秋風の吹かむを待たばいと遠みかも

右一首六月十五日見芽子早花作之

(四三三〇)

從三京師來贈歌一首并短歌

和多都民能 可味能美許等乃 美久之宜爾 多久波比於伎氏 伊都久等布 多麻爾末佐里氏 於毛徹里之 安我故爾波安禮騰 宇都世美乃 與能許等和利等 麻須良乎能 比伎能麻爾麻爾 之奈謝可流 古之地乎左之氏 波布都多能 和我禮爾之欲理 於吉都奈美 等乎牟麻欲比伎 於保夫禰能 由久良由久良耳 於毛可宜爾 毛得奈民延都都 可久古非婆 意伊豆久安我未 氣太志安倍牟可母

わだつみの 神のみことの 御くしげに たくはひ置きて い つくとふ 玉にまさりて 思へりし 吾が子にはあれど うつ せみの 世のことわりと ますらをの 引きのまにまに しな さかる 越路をさして はふ薦の 別れにしより 沖つ波と をむ肩びき 大船の ゆくらゆくらに 面影に もとな見えつ

都知爾於知米也母 青土よし奈良人見むと我せこがしめけむ紅葉土に落ちめやも

右一首守大伴宿禰家持作之

(四三三四)

朝霧之 多奈引 田爲爾 鳴鷹乎 留得哉 吾屋戸能波義

朝霧のたなびく田ひに鳴くかりを留め得てむや吾がやどの萩

右一首歌者幸於吉野宮之時、藤原皇后御作、但年月未

審詳、十月五日河邊朝臣東人傳誦云爾

(一) トドメエムカモ〔略解〕、トドメエマモ〔古義〕と訓したのもあるが、こゝは「留め得よう」又は「留め得まい」といふ意ではなく、「留め得るだらうか」と疑をかけた御作と思はれるから、古訓の如くトドメ得テムヤとあるべきである。

參照 タキ

(四三三五)

足日本之 山黄葉爾 四頭久相而 將落山道乎 公之越麻久

あしびきの山の黄葉のしづくあひて散らむ山路を君が越えまく

右一首、同月十六日饞之朝集使少目秦伊美吉石竹時、

守大伴宿禰家持作之

(二) 第四句將落の主語は黄葉と思はれるから爾は新考説の如く、であらればならぬ。次句シツクアヒテは「雲にあひて」の意と解すべきある。新考に兩耳相而の誤寫としたのは據を詳にせぬ。

參照 シツク

つ かくこひば 老いつく吾が身 けだしあへむかも

(一) アへは原義により「差加へる」といふ意を以て用ひられたので、之を「敢」「堪」の義として注意をなさぬ。其故に新考は牟を自の誤記としたのであるが、恐らくは作者の本意ではあるまい。

參照 シナサカル〔枕〕、ユクラユクラ、モトナ、アへ、ケダシ

(四三三一)

反歌一首

可久婆可里 古非之久志安良婆 末蘇可我彌 美奴比等吉奈久 安良麻之母能乎

かくばかり戀ひしくあらばまそ鏡見ぬ日時なくあらましものを

右二首大伴氏坂上郎女賜女子大嬢也

(二) 元曆校本に志の字之なきを可とする。新考に久を登の誤とし安を衍として戀シトシラバと改めたは新古今以下の格調で、古語では其場合にはコヒムトシラバというた筈である。

(四三三二)

許能之具禮 伊多久奈布里會 和藝毛故爾 美勢牟我多米爾

母美知等里氏牟

此しぐれいたくな降りそ我妹子に見せむが爲にもみぢ取りてむ

右一首掾久米朝臣廣繩作之

(四三三三)

安乎爾與之 奈良比等美牟登 和我世故我 之米家牟毛美知

(四三三六)

雪日作歌一首

此雪之 消遣時爾 去來歸奈 山橋之 實光毛將見

此雪の消遣する時にいざ行かな山たちばなの實のてるも見む

右一首十二月大伴宿禰家持作之

(四三三七)

大殿之 此廻之 雪莫踏禰 數毛 不零雪會 山耳爾 零之雪

會 由米縁勿 人哉 莫履禰 雪者

おほとのの 此もとほりの 雪なふみそね しばしばも 降らぬ雪ぞ 山のみみ 降りし雪ぞ ゆめよるな 人かも な踏み

そね 雪は

(一) 廻は反歌にも大殿の此母等保利と假字書してあるから、モトホリと訓むのであらうが、廻即ちメグリとタチモトホリ(徘徊)の意のモトホリとを同一視することは出来ぬ。こゝのモトホリは恐らくはモトへ(本邊)の意であらう。

(二) 舊訓アラザル雪とあり、諸家之に従うて居るが、アラザルとアラとを混用するやうになつたのは後世のことと、原義上時格に相違がある。語法要録參照 こゝはアラといはねばならぬ。

(三) 眞淵訓による。

(四) 從來ヒトヤと訓み來り、或は上句につけて八音に誦するものもあ

るが、ヒトカモと訓み四音一句とするを可とする。カは感動詞で人モといふ意である。次のナフミソネ雪ハも五音、三音二句にわけて誦する方が律調にかなふやうである。此歌は作者が古風に擬して詠じたものであらうが、律調の上からいへば寧ろ失敗といはねばならぬ。句法の不整を以て古調なりとするものがあらば大なる誤である。

(四三二八)

反歌一首
有都都毛 御見多麻波牟會 大殿乃 此母等保里能 雪奈布美會禰

ありつつも御見たまはむぞ大殿のこのもとほりの雪な踏みそね
右二首歌者三形沙彌承ニ贈左大臣藤原北卿之語ニ作誦之也、聞之傳者笠朝臣子君、復後傳讀者越中國掾久米朝臣廣繩是也

(四三二九)

天平勝寶三年
新年之初者 彌年爾 雪踏平之 常如此爾毛我
あらたしき年の始はいやとしに雪ふみならし常かくにもが
右一首歌者正月二日守館集安、於時零雪、殊多積、有尺焉、即主人大伴宿禰家持作此歌也

(四三三〇)

于レ是諸人酒酣更深鷄鳴、因レ此主人内藏伊美吉繩麻呂作歌一首
打羽振 鷄者鳴等母 如此許 零敷雪爾 君伊麻在米也母
うちはぶりとりは鳴くともかくばかり降りしく雪に君いまさめやも

(四三三一)

守大伴宿禰家持和歌一首
鳴鷄者 彌及鳴杼 落雪之 千重爾積許會 吾等立可氏禰
鳴く鷄はいやしき鳴けど降る雪の千重につめこそ吾立ちかてね

(一) 新考に鷄鳴者の顛倒としてトリガネハと訓したのは理由のあることであるが、ナクトリハ・イヤシキ鳴ケドといひ得ぬこともないから、尙原字舊訓を尊重すべきである。

(四三三二)

太政大臣藤原家縣犬養命婦奉天皇歌一首
天雲乎 富呂爾布美安多之 鳴神毛 今日爾益而 可之古家米也母
天雲をほろに踏みあたし鳴る神も今日に益りてかしこけめやも

右一首傳誦掾久米朝臣廣繩也

參照 ホロニフミアタシ

(四三三〇)

落雪乎 腰爾奈都美氏 參來之 印毛有香 年之初爾
降る雪を腰になづみてまゐり來ししもあるか年の始に
右一首三日、會ニ集介内藏忌寸繩麻呂之館ニ宴樂時、大伴宿禰家持作之

(四三三一)

于レ時積雪彫ニ成重巖之起、奇巧綵ニ發草樹之花屬
此掾久米朝臣廣繩作歌一首
奈泥之故波 秋咲物乎 君宅之 雪巖爾 左家理家流可母
なでしこは秋さくものを君が家の雪のいはほに咲けりけるかも

(四三三二)

遊行女婦蒲生娘子歌一首
雪島 巖爾殖有 奈泥之故波 千世爾開奴可 君之挿頭爾
雪島の巖におふるなでしこは千世にさかぬか君がかざしに

(一) 舊訓による。ユキノシマと訓むべしとする古義の説は従はれぬ。正しくは「雪ノ島ノ巖」といふべきであるが、五音句とするため、一つ略する必要があるとすれば上のものを削るのが至當である。下のノを除くと呼格と誤たれる處がある。
(二) 字について訓めばウエタルであらねばならぬが、ウエタルといふ語を用ふべき場合ではなく、タテル「略解」といふ訓も心ゆかぬ。尙舊訓によるべきである。

(四三三三)

悲傷死妻歌一首并短歌 作主未詳
天地之 神者無可禮也 愛 吾妻離流 光神 鳴波多熾婦 携手 共將有等 念之爾 情違奴 將言爲便 將作爲便不知爾
木綿手次 肩爾取掛 倭文幣乎 手爾取持而 勿令離等 和禮波雖禱 卷而寢之 妹之手本者 雲爾多奈妣久

天地の 神はなかれや うつくしき 吾が妻さかる 光る神なりはたをとめ たづさはり 共にあらむと 思ひしに 心たがひぬ 言はむすべ せむすべ不知 木綿たすき 肩に取りかけ しづぬさを 手にとりもちて 莫さかりと 我はいのれどまきて寢し 妹がたもとは 雲にたなびく
(一) 爾は送假字である。

(四三三七)

反歌一首
寢爾等 念氏之可毛 夢耳爾 手本卷寢等 見者須便奈之
うつつにと思ひてしかも夢のみに袂まき寢と見るはすべなし
右二首傳誦遊行女婦蒲生是也

(一) 舊訓の如くは寢は誤字であらう。元曆校本には寢とある。新考に二句オモヒテシカモを不適當として、寢爾毛今毛見氏之可の誤とし

たのは理由のないことである。テシカモはタリシカモといふに同じく、カモは感動詞で、「思つたよ」といふ意であるから、間然する所のない語法である。——希望を表示するテシカモはカモに其意があるので此テシカモとは別語である。

(四二三八)

二月三日會集于守館宴作歌一首

君之往 若久爾有婆 梅柳 誰與共可 吾纔可牟

君が行きもし久ならば梅柳誰と共にか吾がかづらかむ

右判官久米朝臣廣繩以正稅帳應入京師、仍守大伴宿禰家持作此歌也、但越中風土梅花柳絮三月初咲耳

(四二三九)

詠霍公鳥歌一首

二上之 峯於乃繁爾 許毛爾之 波霍公鳥 待騰未來奈賀受

二上の峯の上のしじにこもりにし其ほととぎす待てど來なかず

右四月十六日大伴宿禰家持作之

(一) 第三句以下類聚古集には「モリニシカノホトトギスマテド來ナカズ」と訓してある。即ち「毛」の下に「里」の字脱、波は彼の誤、未は衍字とするものである。但し「彼」はソノと訓する方がよい〔新考〕。

(四二四〇)

春日祭神之日藤原太后御作歌一首、即賜入唐大使藤原朝臣清河參議從四位下遣唐使

大船爾 眞梶繁貫 此吾子乎 韓國邊遣 伊波敏神多智
大船にまかぢしじぬき此あごをから國へやるいはへ神たち

(四二四一)

大使藤原朝臣清河歌一首

春日野爾 伊都久三諸乃 梅花 榮而在待 還來麻泥

春日野にいつく三諸の梅の花さかえてありまてかへり來むまで

(四二四二)

大納言藤原家餞之入唐使等宴日歌一首

天雲乃 去還奈牟 毛能由惠爾 念會吾爲流 別悲美

天雲の行きかへりなむもの故に思ひぞ吾がする別れかなしみ

(四二四三)

民部少輔多治真人古作歌一首

住吉爾 伊都久祝之 神言等 行得毛來等毛 船波早家無

墨の江にいつく祝が神ごとと行くとも來とも船は早けむ

(一) 古の字は元曆校本其他に土とあるを正とする。續紀天平十二年の條下に丹治比の眞人士作といふ名が見える。「治」の下に「比」脱とするは〔契沖〕誤。タチヒの原語はタチであるから丹治ともかくのである。

(一) 祝を社の誤とする新考説は理由のないことである。古事記開化天皇の卷にも近淡海之御上祝以伊都玖といふ用例が見え、祝が託宣をするのは常のことであつた。

(四二四四)

大使藤原朝臣清河歌一首

荒玉之 年緒長 吾念有 兒等爾可戀 月近附奴

あらたまの年の緒ながく吾が思へる子らにかこひむ月近づきぬ

(四二四五)

天平五年贈入唐使歌一首并短歌 作主未詳

虚見都 山跡乃國 青丹與之 平城京師由 忍照 難波爾久太
里 住吉乃 三津爾船能利 直渡 日入國爾 所遣 和我勢能
君乎 懸麻久乃 由由志恐伎 墨吉乃 吾大御神 船乃倍爾
宇之波伎座 船騰毛爾 御立座而 佐之與良牟 儀乃崎崎 許
藝波底牟 泊泊爾 荒風 浪爾安波世受 平久 率而可敬理麻
世 毛等能國家爾

そら見つ 大和の國 青によし 奈良の都ゆ おしてる 難波
に下り すみの江の 三津に船のり ひた渡り 日の入る國に
遣はさる わが背の君を かけまくの ゆゆしかしこき 墨の
江の 吾が大御神 船のへに うしはきいまし 船ともに 御
立たしまして さし寄らむ 磯の崎々 こぎはてむ とまりと

まりに 荒き風 波にあはせず 平らけく ぬて歸りませ どの國家に

(一) 伎を侍の誤としてユエシカシヨシと訓まざるべからずとした新考の説は一を知つて二を知らざるものである。形容語尾シとキとは本初は同價值のものとして彼此通用せられたのである。——語法要録

參照。

(二) 舊訓による。

參照 ソラミツ(枕)、アナニヨシ、オシテル(枕)、ウシハキ

(四二四六)

反歌一首

奥浪 邊波莫越 君之船 許藝可敬里來而 津爾泊麻泥

沖つ波へなみな越えそ君が船こぎかへり來て津にはつるまで

(四二四七)

阿倍朝臣老人遣唐時奉母悲別歌一首

天雲能 會伎敏能伎波美 吾念有 伎美爾將別 日近成奴

天雲のそぎへの極み吾が思へる君に別れむ日近くなりぬ

右件歌者、傳誦之人越中大目高安倉人種麻呂是也、但年月次者隨聞之時載於此焉

(四二四八)

參照 ソキ、ソクへのキハミ

以七月十七日遷任少納言仍作悲別之歌贈貽

朝集使掾久米朝臣廣繩之館二首

既滿三六載之期、忽值遷替之運、於是別舊之懷心中、鬱結、拭涕之袖何以能旱、因作悲歌二首、式遺莫忘之

志其詞曰

荒玉乃 年緒長久 相見氏之 彼心引 將忘也毛

あらたまの年の緒ながく相見てし其心びき忘れえめやも

(四二四九)

伊波世野爾 秋芽子之努藝 馬並 始鷹獵太爾 不爲哉將別

いはせ野に秋萩しぬぎ馬なめて初とがりだにせずや別れむ

右八月四日贈之

參照 イハセ野

(四二五〇)

便附大帳使取八月五日應入京師、因此以四

日設國厨之饌於介内藏伊美吉繩麻呂館餞之、于

時大伴宿禰家持作歌一首

之奈謝可流 越爾五箇年 住々而 立別麻久 惜初夜可毛

しなさかる越に五とせ住みすみて立ち別れまく惜しきよひかも

參照 シナサカル

(四二五一)

五日平且上道、仍國司次官已下諸僚皆共視送、於時

射水郡大領安努君廣島、門前之林中預設饌饌之宴、

于時大帳使大伴宿禰家持和介内藏伊美吉繩鷹獵盡之

歌一首

玉梓之 道爾出立 往吾者 公之事跡乎 負而之將去

玉梓の道に出で立ち行く吾は君がことどを負ひてし行かむ

參照 コトド

(四二五二)

正稅帳使掾久米朝臣廣繩事畢退任、適遇於越前國掾

大伴宿禰池主之館、仍共飲樂也、于時久米朝臣廣繩

賜芽子花作歌一首

君之家爾 殖有芽子之 始花乎 折而挿頭奈 客別度知

君が家に植ゑたる萩の初花を折りてかささな旅わかるとち

(四二五三)

大伴宿禰家持和歌一首

立而居而 待登待可禰 伊泥氏來之 君爾於是相 挿頭都流波疑

立ちて居て待てど待ちかね出でて來し君にここに逢ひかさしつ

る萩

(四二五四)

向京洛上依與預作侍宴應詔歌一首并短歌

蜻島 山跡國乎 天雲爾 磐船浮 等母爾倍爾 眞可伊繁貫

伊許藝都追 國看之勢志氏 安母里麻之 掃平 千代累 彌爾

繼爾 所知來流 天之日繼等 神奈我良 吾皇乃 天下 治賜

者 物乃布能 八十友之雄乎 撫賜 等登能倍賜 食國之 四

方之人乎母 安天左波受 愍賜者 從古昔 無利之瑞 多婢末

禰久 申多麻比奴 手拱而 事無御代等 天地 日月等登聞仁

萬世爾 記續牟會 八隅知之 吾大皇 秋花 之我色色爾 見

賜 明米多麻比 酒見附 榮流今日之 安夜爾貴左江

あきつ島 大和の國を 天雲に 岩船うかべ 艦に舳に ま概

しじぬき い漕ぎつつ 國見しせして 天降りまし 拂ひ平ら

げ 千代かさね いや繼々に 知らし來る 天の日つきと 神

ながら 吾が大君の 天の下 治めたまへば もののふの 八

十伴のをを 撫でたまひ ととのへ賜ひ 食國の 四方の人を

も あてさはす めぐみ賜へば 古ゆ なかりし瑞 度まねく

申したまひぬ 手うだきて 事無き御代と 天地と 日月と共

に 萬代に しろしつがむぞ やすみしし 吾が大君 秋の花

しが色色に 見したまひ 明らかれたまひ さかみづく さかゆ

る今日の あやに貴さ

(一) 洛の字元曆校本に路とあるを可とする。

(一) 天を誤字として眞淵はアマサハズ、宣長はアサハズと訓したが「餘さす」をアマサズといふことは語法上あり得ず、アサハズといふやうな語が存在したと思はれぬ。アテサハズもまた無理な語づかひであるが、尙右兩者に勝るやうである。

(二) 古義の訓に従ふ。

參照 アテサハズ、ヤスミシシ「枕」、サカミツク

(四二五五) 反歌一首

秋時花 種爾有等 色別爾 見之明良牟流 今日之貴左

秋の花くさぐさなれど色ごとに見し明らかむる今日の貴さ

(四二五六) 爲壽左大臣橘卿預作歌一首

古昔爾 君之三代經 仕家利 吾大王波 七世申禰

いにしへに君が三代へて仕へけり吾が大君は七代申さね

(一) 王の字類聚古集其他諸本に主とあらため、ワカオホヌシハと訓してある。吾大君はといふと天皇とあやまる虞があるとしたのであらうが、當時は諸王をもオホキミと稱へたから、之に「吾」といふ語を冠したのである。天皇の御事を申上ぐるワカオホキミとは發音又はアクセントによつて區別せられたのであらう。

(四二五七) 十月二十二日於左大辨紀飯麻呂朝臣家宴歌三首

手束弓 手爾取持而 朝獵爾 君者立去奴 多奈久良能野爾

手束の弓 手爾取持りて 朝獵る 君者立去らば 多奈久良能野爾

たづか弓手にとりもちて朝かりに君は立たしぬ棚倉の野に

右一首治部卿船王傳誦之、久邇京都時歌、未詳作主也

(一) 去の字元曆校本に之とあるに従ふ。

參照 タナクラ野

(四二五八)

明日香河 河戸乎清美 後居而 戀者京 彌遠曾伎奴

あすか川かはとを清みおくれてゐて戀ふれば都いや遠そぎぬ

右一首左中辨中臣朝臣清麻呂傳誦、古京時歌也

(四二五九)

十月 之具禮能常可 吾世古河 屋戸乃黃葉 可落所見

神な月しぐれの常か吾がせこが宿のもみぢ葉ちりぬべく見ゆ

右一首少納言大伴宿禰當時賜梨黃葉作此歌也

參照 カムナ月

(四二六〇)

壬申年之亂平定以後歌二首

皇者 神爾之座者 赤駒之 腹婆布田爲乎 京師跡奈之都

大君は神にしませば赤駒の腹ばふ田ゐを都となしつ

右一首大將軍贈右大臣大伴卿作

參照 タキ

(四二六一)

神乃 鎮在國會 四船 船能倍奈良倍 平安 早渡來而 還事
奏日爾 相飲酒會 斯豐御酒者

そらみつ 大和の國は 水の上は 地行く如く 船の上は 床

にをるごと 大神の いはへる國ぞ 四つの船 船の舳ならべ

平らけく 早わたり來て 復り言 まをさむ日に 相飲まむ酒

ぞ 此豐御酒は

(一) 略解の訓に従ふ。

參照 ソラミツ〔枕〕

(四二六五)

反歌一首

四船 早還來等 白香著 朕裳裾爾 鎮而將待

四つの船はや還り來としらかつく朕が裳の裾にいひてまたむ

右發遣勅使并賜酒樂宴之日月未得詳審也

(一) 從來シラカツキ又はシラカツケと讀まれて居るが、イハフ(ユフに

通す)の枕詞で、シラカツクとよむのであらう。

參照 シラカツク

(四二六六)

爲應詔儲作歌一首并短歌

安之比奇能 八峯能宇倍能 都我能木能 伊也繼繼爾 松根能

絶事奈久 青丹余志 奈良能京師爾 萬代爾 國所知等 安美

萬葉集(卷第十九)

大王者 神爾之座者 水鳥乃 須太久水奴麻乎 皇都常成都
作者不詳

大君は神にしませば水鳥のすだく水沼を都となしつ

右件二首天平勝寶四年二月二日聞之即載於茲也

(四二六一)

閏三月、於衛門督大伴古慈悲宿禰家餞之入唐副使

同胡麿宿禰等歌一首

韓國爾 由伎多良波之氏 可敞里許牟 麻須良多家乎爾 美伎

多氏麻都流

から國に行きたらはして歸り來むますら武男に神酒たてまつる

右一首多治比真人應主壽副使大伴胡麿宿禰也

(四二六三)

梳毛見自 屋中毛波可自 久佐麻久良 多婢由久伎美乎 伊波

布等毛比氏 作主未詳

櫛も見じ屋内も掃かじ草まくら旅行く君をいはふと思ひて

右件歌傳誦大伴宿禰村上、同清繼等是也

(四二六四)

勅從四位上高麗朝臣福信遣於難波賜酒肴入唐

使藤原朝臣清河等御歌一首并短歌

虛見都 山跡乃國波 水上波 地往如久 船上波 床座如大

知之 吾大皇乃 神奈我良 於母保之賣志氏 豐宴 見爲今日
者 毛能乃布能 八十伴雄能 島山爾 安可流橋 宇受爾指

紐解放而 千年保伎 保伎吉等餘毛之 惠良惠良爾 仕奉乎

見之貴左江説

あしびきの やつをの上の つがの木の いやつぎつぎに 松

の根の 絶ゆることなく 青土よし 奈良の都に 萬代に 國

知らさむと やすみしし 吾大君の 神ながら おもほしめし

て 豊のあかり めす今日の日は もののふの 八十伴の男の

島山に あかる橋 うすにさし 紐ときさけて 千歳ほぎ ほ

ぎどよもし ゑらゑらに 仕へ奉るを 見るが貴さ

(一) 古義の訓による。

(二) 伎の字元曆校本に之なきを可とする。ホギドヨモシと六音に訓む

べきであらう。雅澄が伎を佐の誤としてホザキドヨモシと訓し

たのも當を得て居るやうであるが、尙ホギといふ語を重ねたものと

見る方がよい。

參照 ツガノキ、ヤスミシシ〔枕〕、ウズ、エラエラ

(四二六七)

反歌一首

須賣呂伎能 御代萬代爾 如是許會 見爲安伎良目米 立年之

葉爾

八四九

すめるぎの御代萬世にかくしこそ見しあきらめめ立つ年のほに

右二首大伴宿禰家持作之

(四二六八)

天皇太后共幸^ニ於大納言藤原家之日、黄葉澤蘭一株

拔取令^レ持^ニ内侍佐佐貴山君^ニ遣^ニ賜大納言藤原卿并陪

從大夫等^ニ御歌一首

命婦誦曰

此里者 繼而霜哉置 夏野爾 吾見之草波 毛美知多里家利

此里はつぎて霜やおく夏の野に吾が見し草はもみぢたりけり

(四二六九)

十一月八日在^ニ於左大臣橘朝臣宅^ニ肆宴歌四首

余曾能未爾 見者有之乎 今日見者 年爾不忘 所念可母

よそのみに見てはありしを今日見れば年に忘れず思ほゆるかも

右一首太上天皇御製

(四二七〇)

牟具良波布 伊也之伎屋戸母 大皇之 座牟等知者 玉之可麻

思乎

(一) 古義に者を乍の誤としてミツツと訓したのは従はれぬ。ミツツは

見ル見ルと同義であるが、「他所に見る」は反復すべきことではな

い。——語法要録參照。

(四二七四)

天爾波母 五百津綱波布 萬代爾 國所知牟等 五百都都奈波

布 似^ニ古歌^ニ未^レ詳

天にはも五百つつな延ふ萬代に國知らさむと五百つ綱はふ

右一首式部卿石川年足朝臣

(四二七五)

天地與 久萬氏爾 萬代爾 都可倍麻都良牟 黒酒白酒乎

天地と久しきまでに萬代に仕へまつらむ黒酒白酒を

右一首從三位文屋智奴麻呂真人

(四二七六)

島山爾 照在橋 宇受爾左之 仕奉者 卿大夫等

島山に照てる橋うすにさし仕へまつるはまへつきみたち

右一首右大辨藤原八束朝臣

(四二七七)

袖垂而 伊射吾苑爾 鬻乃 木傳令落 梅花見爾

袖たれていざ吾が苑にうぐひすの木傳ひちらす梅の花見に

右一首大和國守藤原永手朝臣

(四二七八)

足日木乃 夜麻之多日影 可豆良家流 宇倍爾也左良爾 梅乎

(四二七八)

葎はふいやしき宿も大君しまさむと知らば玉しかましを

右一首左大臣橘卿

(四二七一)

松影乃 清濱邊爾 玉敷者 君伎麻佐牟可 清濱邊爾

松かげの清き濱邊に珠しかば君來まさむか清きはま邊に

右一首右大辨藤原八束朝臣

(四二七二)

天地爾 足之照而 吾大皇 之伎座婆可母 樂伎小里

天地に足はしてりて吾大君しきまさばかもたぬしき小里

右一首少納言大伴宿禰家持 未^レ奏

(一) 眞淵訓に従ふ。

(二) 契沖訓による。

(四二七三)

二十五日新嘗會肆宴應^レ詔六首

天地與 相左可延牟等 大宮乎 都可倍麻都禮婆 貴久宇禮之伎

あめつちと相さかえむと大宮を仕へまつれば貴くうれしき

右一首大納言巨勢朝臣

(一) 結句の伎を衍とする新考説は従はれぬ。感動の意を含めてウレシ

キというたのである。

之奴波牟

あしびきの山下ひかけかづらける上にや更に梅をしぬばむ

右一首少納言大伴宿禰家持

(四二七九)

二十七日林王宅餞^ニ之但馬按察使橘奈良鷹朝臣^ニ宴歌

三首

能登河乃 後者相牟 之麻之久母 別等伊倍婆 可奈之久母在

能登河乃 後者相牟 之麻之久母 別等伊倍婆 可奈之久母在

香

のと川の後は逢はむをしましくも別るといへは悲しくもあるか

右一首治部卿船王

(一) 舊訓ノチニハアハムとあるが、上二句は前提と思はれるから、新考

説の如く「牟」の下に乎を補うてノチハアハムナと訓すべきである。

參照 ノト川

(四二八〇)

立別 君我伊麻左婆 之奇島能 人者和禮自久 伊波比氏麻多牟

立ち別れ君がいまさばしき島の人是我しくいはひて待たむ

右一首右京少進大伴宿禰黑麻呂

(一) ワレジクは我其人の意。こゝでは「のやうに」といふ語をそへて聞

くべきである。——語法要録參照。

(四二八一)

白雪能 布里之久山乎 越由可牟 君乎會母等奈 伊吉能乎爾念
左大臣換尾云、伊伎能乎爾須流、然猶論曰如前誦之也
しら雪の降りしく山を越えゆかむ君をぞもとないきの緒に思ふ
(いきの緒にする)

右一首少納言大伴宿禰家持

參照 モトナ

(四二八二)

五年正月四日治部少輔石上朝臣宅嗣家宴歌三首

辭繁 不相問爾 梅花 雪爾之乎禮氏 宇都呂波牟可母

言しげく相とはなくに梅の花雪にしをれてうつろはむかも

右一首主人石上朝臣宅嗣

(一) 從來「辭」を「事」の意の借字としてシゲミと訓して居るが、若し其意とせば二句をアヒトハナクニとしては意が通ぜぬ。其故に新考は「問」の下に「問」の字脱として、アヒトハヌマニと改訓したのであるが、字の如く辭シゲクと訓めば増補を加へずとも解讀し得られる。即ちアヒトハナクニは「相訪はぬ爲に」の意と見ることが出来るのである。いづれを可とするかは讀者の判断にまかせる。

(四二八三)

梅花 開有之中爾 布敷賣流波 戀哉許毛禮留 雪乎待等可
梅の花咲けるが中にふふめるは戀やこもれる雪をまつとか

右一首中務大輔茨田王

しては現實のこと、聞え題詞にあはぬ。——フレレシ「新訓」といふ語法は古語にもかつて例がない。

(四二八九)

十二月十九日、於左大臣橋家宴見攀折柳條一

首

青柳乃 保都枝與治等理 可豆良久波 君之屋戸爾之 千年保

久等會

青柳のほづ枝よぢ取りかづらくは君が宿にし千年ほぐとぞ

(四二九〇)

二十三日依興作歌二首

春野爾 霞多奈妣伎 宇良悲 許能暮影爾 羸奈久母

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕かけに羸なくも

(四二九一)

和我屋度能 伊佐左村竹 布久風能 於等能可蘇氣伎 許能由

布敝可母

わが宿のいささむら竹吹く風の音のかそけき此夕かも

參照 イササ、ササ、カス

(四二九二)

二十五日作歌一首

宇良宇良爾 照流春日爾 比婆理安我里 情悲毛 比登里志於

萬葉集(卷第十九)(卷第二十)

(四二八四) 新年始爾 思共 伊牟禮氏乎禮婆 宇禮之久母安流可
あらたしき年の始に思ふどちい群れて居ればうれしくもあるか
右一首大膳大夫道祖王

(四二八五)

十一日大雪落積尺有二寸、因述拙懷歌三首

大宮能 内爾毛外爾母 米都良之久 布禮留大雪 莫蹈禰乎之

大宮の内にも外にもめづらしく降れる大雪な踏みそね惜し

(四二八六)

御苑布能 竹林爾 羸波 之波奈吉爾之乎 雪波布利都都

御そのふの竹の林にうぐひすはしば鳴きにしを雪は降りつつ

(四二八七)

羸能 鳴之可伎都爾 爾保敝理之 梅此雪爾 宇都呂布良牟可

うぐひすの鳴きし垣内に匂へりし梅この雪にうつろふらむか

(四二八八)

十二日侍於内裏聞千鳥喧作歌一首

河渚爾毛 雪波布禮禮之宮之裏 智利利喧良之 爲牟等己呂奈

河すにも雪は降れれか宮のうちに千鳥なくらし居むところなみ

(一) 契沖訓による。フレレヤと訓むも妨はないが、フレレシ「新考」と

母倍婆

うらうらに照てる春日にひばりあがり心かなしも獨しおもへば

春日遅々鶴鷓正啼、悽惻之意、非「歌難」撥耳、仍作「此歌」式

展「締緒」、但此卷中不稱「作者名字」徒錄「年月所處緣起」

者、皆大伴宿禰家持作歌詞也

【卷第二十】

(四二九三)

幸行於山村之時歌二首

先太上天皇詔陪從王臣曰、夫諸王卿等宜賦和歌而奏、

即御口號曰

安之比奇能 山行之可婆 山人乃 和禮爾依志米之 夜麻都刀

會許禮

あしびきの山行きしかば山人の我に得しめし山づとぞこれ

(一) 山人は仙の字を二つにわけて訓をつけたものである。

(四二九四)

舍人親王應詔奉和歌一首

安之比奇能 山爾由伎家牟 夜麻妣等能 情母之良受 山人夜

八五三

多禮

あしびきの山に行きけむ山人の心も知らぬ山人やたれ

右天平勝寶五年五月、在_二於大納言藤原朝臣之家_一時、依_レ

奏_レ事而請問之間、少主鈴山田史土鷹語_二少納言大伴宿禰

家持_一曰、昔聞_二此言_一即誦_二此歌_一也

(一) 受は奴の誤とする新考説可從。

(二) 問の字西本願寺本に間とあるを可とする。

(四二九五)

八月十二日、二三大夫等各提_二壺酒_一登_二高圓野_一聊述_二

所心_一作哥_二三首

多可麻刀能 乎婆奈布伎故酒 秋風爾 比毛等伎安氣奈 多太

奈良受等母

高まとの尾花吹きこす秋風に紐ときあけなただならずとも

右一首左京少進大伴宿禰池主

參照 タカマト(地)、タダナラズトモ

(四二九六)

安麻久母爾 可里會奈久奈流 多加麻刀能 波疑乃之多婆波

毛美知安倍牟可聞

天雲に雁ぞ鳴くなる高圓の萩の下葉はもみぢあへむかも

右一首左中辨中臣清鷹朝臣

(一) 元曆校本以下諸本安良多。安良太とあるを可とする。「新に新に」といふ意であらう。

(四三〇〇)

可須美多都 春初乎 家布能其等 見牟登於毛倍波 多努之等

會毛布

霞立つ春の初をけふのごと見むと思へばたぬしとぞ思ふ

右一首左京少進大伴宿禰池主

(四三〇一)

七日天皇、太上天皇、皇太后於_二東常宮南大殿_一肆宴歌

一首

伊奈美野乃 安可良我之波波 等伎波安禮騰 伎美乎安我毛布

登伎波佐禰奈之

印南野の赤ら柏は時はあれど君を吾か思ふ時は實なし

右一首播磨國守安宿王奏 古今未詳

參照 イナミ野、サネ

(四三〇二)

三月十九日家持之庄門槻樹下宴歌_二二首

夜麻夫伎者 奈渥都都於保佐牟 安里都都母 伎美伎麻之都都

可峩之多里家利

山吹はなでつつ生さむありつつも君來ましつつかざしたりけり

(四二九七)

乎美奈弊之 安伎波疑之努藝 左乎之可能 都由和氣奈加牟

多加麻刀能野會

をみなへし秋萩しぬぎさを鹿の露わけ鳴かむ高まとの野ぞ

右一首少納言大伴宿禰家持

(四二九八)

六年正月四日、氏族人等賀_二集于少納言大伴宿禰家持

之宅_一宴飲歌_二三首

霜上爾 安良禮多婆之里 伊夜麻之爾 安禮婆麻爲許牟 年緒

奈我久 古今未詳

霜の上に霞たばしりいやましに吾はまる來む年の緒ながく

右一首左兵衛督大伴宿禰千里

(一) 元曆校本に千室とあるを可とする。

(四二九九)

年月波 安多良安多良爾 安比美禮騰 安我毛布伎美波 安伎

太良奴可母 古今未詳

としつきはあらたあらたにあひ見れど吾が思ふ君はあき足らぬ

右一首民部少丞大伴宿禰村上

右一首置始連長谷

(四三〇三)

和我勢故我 夜度乃也麻夫伎 佐吉曰安良婆 也麻受可欲波牟

伊夜登之能波爾

わがせこが宿の山吹さきてあらば止まず通はむいや年の端に

右一首長谷攀_レ花提_レ壺到來、因_レ是大伴宿禰家持作_二此歌_一

和之

(四三〇四)

同月二十五日、左大臣橘卿宴_二于山田御母之宅_一歌_二一

首

夜麻夫伎乃 花能左香利爾 可久乃其等 伎美乎見麻久波 知

登世爾母我母

山吹の花の盛にかくのごと君を見まくは千歳にもがも

右一首少納言大伴宿禰家持_二時花_一作、但未_レ出之間、大

臣罷_レ宴而不_二舉誦_一耳

(四三〇五)

詠_二霍公鳥_一歌一首

許乃久禮能 之氣伎乎乃倍乎 保等登藝須 奈伎且故由奈里

伊麻之久良之母

木のくれのしげき尾上を時鳥なきて越ゆなり今しくらしも
右一首四月大伴宿禰家持作

(四三〇六)

七夕歌八首

波都秋風 須受之伎由布弊 等香武等會 比毛波牟須妣之 伊
母爾安波牟多米

初秋風涼しき夕とかむとぞ紐は結びし妹に逢はむため

(四三〇七)

秋等伊弊婆 許己呂曾伊多伎 宇多弓家爾 花爾奈蘇倍弓 見
麻久保里香聞

秋といへば心ぞいたきうたてけに花になぞへて見まく欲りかも
(四三〇八)

波都乎婆奈 波名爾見牟登之 安麻乃可波 弊奈里爾家良之
年緒奈我久

初尾花はなに見むとし天の川へなりにけらし年の緒ながく

(四三〇九)

秋風爾 奈妣久可波備能 爾故具左能 爾古餘可爾之母 於毛
保由流香母

秋風になびく川邊のこ草のこよかにしも思ほゆるかも

青波に袖さへ濡れてこぐ舟のかしふる程にさ夜ふけなむか

右大伴宿禰家持獨仰天漢一作之

參照 カシ

(四三一四)
八千種爾 久佐奇乎宇惠弓 等伎其等爾 左加牟波奈乎之 見
都追思努波奈

八千ぐさに草木を植ゑて時毎に咲かむ花をし見つつしぬばな

右一首同月二十八日大伴宿禰家持作之

(四三一五)

宮人乃 蘇泥都氣其呂母 安伎波疑爾 仁保比與呂之伎 多加
麻刀能美夜

みや人の袖つけ衣秋はぎににほひよろしき高まとの宮

參照 タカマト〔地〕

(四三一六)
多加麻刀能 宮乃須蘇未乃 努都可佐爾 伊麻左家流良武 乎
美奈敏之波母

高まとの宮の裾みの野つかさに今咲けるらむ女郎花はも

參照 ツカサ

(四三二七)
秋野爾波 伊麻已曾由可米 母能乃布能 乎等古乎美奈能 波

萬葉集(卷第二十)

參照 ニコケサ

(四三二〇)

安吉佐禮婆 奇里多知和多流 安麻能河波 伊之奈彌於可婆
都藝弓見牟可母

秋されば霧たちわたる天の川石なみ置かばつぎて見むかも

(四三二一)

秋風爾 伊麻香伊麻可等 比母等伎弓 宇良麻知乎流爾 月可
多夫伎奴

秋風に今か今かと紐ときてうら待ち居るに月かたぶきぬ

(四三二二)

秋草爾 於久之良都由能 安可受能未 安比見流毛乃乎 月乎
之麻多牟

秋草におく白露のあかすのみ逢ひ見るものを月をしまたま

(一) 此月を七月の意としても心行かぬので、新考は年爾可の誤とした

が、トシニカマタムというて一年中待タムカといふ意になるとも考

へられぬから、此ツキは太陰の義とし、月光の下に白露のやうに彦

星を飽かず見たいといふ意と解すべきであらう。

(四三二三)

安乎奈美爾 蘇弓佐閉奴禮弓 許具布禰乃 可之布流保刀爾
左欲布氣奈武可

奈爾保比見爾

秋野には今こそ行かめもののふの男をみなの花にほひ見に

參照 モノノフ

(四三二八)
安伎能野爾 都由於弊流波疑乎 多乎良受弓 安多良佐可里乎
須具之弓牟登香

秋の野に露おへる萩を手折らずてあたら盛を過ぐしてむとか

(四三二九)

多可麻刀能 秋野乃宇倍能 安佐疑里爾 都麻欲布乎之可 伊
泥多都良武可

高まとの秋野のうへの朝霧に妻よぶ牡鹿いでたつらむか

(四三三〇)

麻須良男乃 欲妣多天思加婆 左乎之加能 牟奈和氣由可牟
安伎野波疑波良

益ら雄のよび立てしかばさを鹿のむな別け行かむ秋野萩原

右歌六首、兵部少輔大伴宿禰家持、獨憶秋野、聊述拙懷、
作之

(一) 秋野ノ萩原の意か〔新考〕。或は「野」は「ノ」の假字かも知れぬ。

(四三三一)
天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌

可之古伎夜 美許等加我布理 阿須由利也 加曳我伊牟多禰乎
伊牟奈之爾志豆

惶きや命かゞふり明日ゆりやかえがむた寝むいむなしにして

右一首國造丁長下郡物部秋持

(一) 伊の字元曆校本及古葉略類聚鈔に之なきを可とする。次の乎も兩書に牟とあるのが正しいやうである。此二句元曆校本の訓はカエガムタネモ・イムナシニシテとある。

加曳我を新考は多曳我の誤としてタエガは「誰が」の訛であるといふたが、東國に於ても誰ガムタはタガムタというた答でワレガ(アレガ)、タレガといふやうな語づかひは比較的後の世のことである。加之「誰と共に寝む」といふ意ならば「誰と寝む」「誰と相寝む」といふ答であるから、多曳と改めることには従はれぬ。カエはカヤ草の訛とする佐々木説可。

參照 サキモリ

(四三三三)

和我都麻波 伊多久古比良之 乃牟美豆爾 加其佐倍美曳豆
余爾和須良禮受

わが妻はいたく戀ひらし飲む水にかごさへ見えて世に忘れず
右一首主帳丁龜玉郡若倭部身麿

參照 ソカヤマト

(四三三三)

等伎騰吉乃 波奈波佐家登母 奈爾須禮會 波波登布波奈乃

父母が殿の後方ののもよ草百代いでませ、我が來たるまで

右一首同郡生玉部足國

參照 モモヨ草

(四三三七)

和我都麻母 畫爾可伎等良無 伊豆麻母加 多比由久阿禮波
美都都志努波牟

わが妻も畫にかきとらむいつまもがたび行くあれば見つしぬ
ばむ

右一首長下郡物部古磨

二月六日防人部領使遠江國史生坂本朝臣人上進歌數十八

首、但有拙劣歌十一首不取載之

參照 コトリ

(四三二八)

於保吉美能 美許等可之古美 伊蘇爾布理 宇乃波良和多流
知知波波乎於伎豆

大君の命かしこみいそにふりうの原わたる父母をおきて

右一首助丁丈部造人磨

參照 イソニフリ

(四三二九)

夜蘇久爾波 那爾波爾都度比 布奈可射里 安我世武比呂乎

佐吉低己受禰牟

時々の花はさけどもなにするぞ母とふ花のさきて來すけむ

右一首防人山名郡丈部眞磨

參照 ブケム、ハセツカベ

(四三二四)

等倍多保美 志留波乃伊宗等 爾閉乃宇良等 安比豆之阿良婆
己等母加由波牟

とへたほみしるはの磯と贅の浦とあひてしあらば言もかゆはむ

右一首同郡丈部川相

參照 シルハの磯、ニへの浦

(四三二五)

知知波波母 波奈爾母我毛夜 久佐麻久良 多妣波由久等母
佐佐己豆由加牟

父母は花にもがもや草枕たびは行くともささこて行かむ

右一首佐野郡丈部黑當

(一) 新考に母は巴などの誤ではないかとある。いづれにしても父母モとある舊訓は誤りで、父母ハであらねばならぬ。

(四三二六)

父母我 等能志利弊乃 母母余具佐 母母與伊豆麻勢 和我
伎多流麻豆

美毛比等母我母

八十國は難波に集ひ舟かざり吾がせむ日ろを見も人もがも

右一首足下郡上丁丹比部國人

(一) 新考に波は由の誤であらうとあるが、尙原のまゝで「八十國人は」といふべきを略したものと見る方がよい。

(四三三〇)

奈爾波都爾 余會比余會比豆 氣布能日夜 伊田弓麻可良武
美流波波奈之爾

難波津によそひ装ひて今日の日やいでてまからむ見る母なしに

右一首鎌倉郡上丁丸子連多磨

二月七日相模國防人部領使守從五位下藤原朝臣宿奈磨進

歌數八首、但拙劣歌五首者不取載之

(四三三一)

追痛防人悲別之心作歌一首并短歌
天皇乃 等保能朝廷等 之良奴日 筑紫國波 安多麻毛流 於

佐倍乃城會等 聞食 四方國爾波 比等佐波爾 美知豆波安禮

杼 登利我奈久 安豆麻乎能故波 伊田牟可比 加弊里見世受

豆 伊佐美多流 多家吉軍卒等 禰疑多麻比 麻氣乃麻爾麻爾

多良知禰乃 波波我目可禮豆 若草能 都麻乎母麻可受 安良

多麻能 月日餘美都都 安之我知流 難波能美津爾 大船爾

末加伊之自奴伎 安佐奈藝爾 可故等登能倍 由布思保爾 可知
 比伎乎里 安騰母比豆 許藝由久伎美波 奈美乃間乎 伊由伎
 佐具久美 麻佐吉久母 波夜久伊多里豆 大王乃 美許等能麻
 爾末 麻須良男乃 許己呂乎母知豆 安里米久里 事之乎波良
 波 都都麻波受 可徹理伎麻勢登 伊波比倍乎 等許徹爾須惠
 豆 之路多倍能 蘇田遠利加徹之 奴婆多麻乃 久路加美之伎
 豆 奈我伎氣遠 麻知可母戀牟 波之伎都麻良波
 すめろぎの 遠の御門と 白ぬひ 筑紫の國は あだ守る お
 さへの城ぞと 聞こしをす 四方の國には 人多に 満ちては
 あれど 鳥がなく あづま男の子は 出で向ひ かへり見せず
 て 勇みたる 健きいくさと ねぎたまひ 任のまにまに た
 らちねの 母が目かれて 若草の 妻をもまかず あらたまの
 月日よみつ つ 葦がちる 難波の御津に 大舟に ま権しじぬ
 き 朝なぎに 水手ととのへ 夕潮に 梶ひきをり あどもひ
 て 漕ぎ行く君は 波のまを い行きさぐくみ ま幸くも 早
 くだりて 大君の 命のまにま ますら男の 心をもちて
 ありめぐり 事しをはらば つつまはず 歸り來ませと 齋瓮
 を 床邊にすゑて 白たへの 袖折りかへし ぬばたまの 黒
 髪しきて 長き日を 待ちかも戀ひむ 愛しき妻らは

參照 シラヌヒ(枕)、トリガナク(枕)、イクサ、ネギ、タラチネ(枕)、
 サグクミ、ツツミ、イハヒヤ
 (四三三三) 反歌
 麻須良男能 由伎等里於比豆 伊田豆伊氣婆 和可禮乎乎之美
 奈氣伎家牟都麻
 ますら男の靱とり負ひて出て行けば別を惜しみ嘆きけむ妻
 (四三三三)
 等里我奈久 安豆麻乎等故能 都麻和可禮 可奈之久安里家牟
 等之能乎奈我美
 鳥が鳴くあづまをとこの妻別れかなしくありけむ年の緒ながみ
 右二月八日兵部少輔大伴宿禰家持
 (四三三四)
 海原乎 等保久和多里豆 等之布等母 兒良我牟須徹流 比毛
 等久奈由米
 海原を遠くわたりて年歴とも兒らが結べる紐とくなゆめ
 (四三三五)
 今替 爾比佐伎母利我 布奈豆須流 宇奈波良乃宇倍爾 奈美
 那佐伎曾禰
 今かはる新防人が舟出する海原のうへに波な咲きそね

(四三三六)

佐吉母利能 保里江己藝豆流 伊豆手夫禰 可治等流間奈久
 戀波思家氣牟

防人の堀江こぎ出る伊豆た舟梶とるまなく戀はしげけむ

右九日大伴宿禰家持作之

參照 イヅタ舟

(四三三七)

美豆等利乃 多知能已蘇伎爾 父母爾 毛能波須價爾豆 已麻
 叙久夜志伎

水鳥の立ちのいそぎに父母にも言す來にて今ぞ悔しき

右一首上丁有度郡牛麿

(一) 元曆校本には有度郡とある。有度郡の人で無姓又は之を逸したも
 のと解せられぬこともないが、此の國の防人はいづれも郡名を掲げ
 て居らぬから、地名に因む有度郡といふ部又は姓とする方がよいや
 うである。

(四三三八)

多多美氣米 牟良自加已蘇乃 波奈利蘇乃 波波乎波奈例豆
 由久我加奈之佐

たたみけむらじが磯のはなりその母をはなれて行くが悲しき

右一首助丁生部道磨

萬葉集(卷第二十)

(四三三九)

久爾米具流 阿等利加麻氣利 由伎米具利 可比利久麻弓爾
 已波比豆麻多禰

國めぐるあとにかまけり行き廻りかひり來までに齋ひて待たね

右一首刑部虫麿

(四三四〇)

知知波波江 已波比豆麻多禰 豆久志奈流 美豆久白玉 等里
 豆久麻豆爾

父母はいはひて待たね筑紫なる水づく白玉とりて來までに

右一首川原虫麿

(一) 菴子鳥、鴨、鳥と三種の鳥名をならべたもので、「行めぐり」の序で
 ある。

參照 ケリ、アトリ

(四三四一)

江の字古葉類聚鈔に波とあるを正しとする。父母ハと訓まれば意
 が通ぜぬ。

が通ぜぬ。

(四三四一) 多知波奈能 美衣利乃佐刀爾 父乎於伎豆 道乃長道波 由伎加豆努加毛 橋のみえりの里に父をおきて道の長路は行きかてぬかも

右一首丈部足磨

(一) 或る地名の訛音であらうが、正しい呼稱を考へ得ぬ。マチバナはミ(實)にかゝる枕詞(新考)。

(四三四二)

麻氣波之良 寶米豆久禮留 等乃能其等 已麻勢波波刀自於米加波利勢受 まけ柱ほめて作れる殿のごといませ母刀自おめ變りせず

右一首坂田部首磨

(四三四三)

和呂多比波 多比等於米保等 己比爾志豆 古米知夜須良牟和可美可奈志母

我ろ旅は旅とおめほど戀にしておめち瘡すらむわが身かなしも

右一首玉作部廣目

(一) 古は於の誤でオメチと訓むべしとする眞淵説に従ふ。オメチはオモテ(面)の訛である。

歌の意は「私は旅を旅と思つて居るのであるが、實は戀である」と見えて

進九日、歌數二十首、但拙劣歌者不取載之

(四三四七)

伊閉爾之豆 古非都都安良受波 奈我波氣流 多知爾奈里弓母伊波非弓之加母 家にして戀ひつつあらずは汝がはける大刀になりてもいそひてしかも

右一首國造丁早部使主三中之父歌

(一) 波はソの音の假字を寫し誤つたのであらうといふ新考の説可從。イハヒではいかに強辯しても意が通ぜぬ。

(二) 早は元曆校本に日下とあるを可とする。

(四三四八)

多良知禰乃 波波乎和加例豆 麻許等 and 例 多非乃加里保爾夜須久禰牟加母 たらちねの母を別れてまこと我旅のかりほに安く寝むかも

右一首國造丁早部使主三

(一) 早は日下の誤(前出)。

(四三四九)

毛母久麻能 美知波紀爾之乎 麻多左良爾 夜蘇志麻須義豆 和加例加由可牟 百くまの道は來にしを又更に八十島すぎて別れか行かむ

萬葉集(卷第二十)

面やつれのする自身が哀である」といふのであらう。

(四三四四)

和須良牟砥 努由伎夜麻由伎 和例久禮等 和我知知波波波和須例勢努加毛 忘れむと野行き山行き我來れどわが父母は忘れせぬかも

右一首商長首磨

(四三四五)

和伎米故等 不多利和我見之 宇知江須流 須流河乃禰良波 苦不志久米阿流可 わぎめ子と二人わが見しうちえする駿河の嶺らはくふしくめあるか

右一首春日部磨

參照 ウチヨスル(枕)

(四三四六)

知知波波我 可之良加伎奈豆 佐久安禮天 伊比之古度婆會和須禮加禰津流 父母がかしらかき撫で幸くあれていひしことばぞ忘れかねつる

右一首丈部稻磨

二月七日、駿河國防人部領使守從五位下布勢朝臣人主、實

右一首助丁刑部直三野

(四三五〇)

爾波奈加能 阿須波乃可美爾 古志波佐之 阿例波伊波波牟加倍理久麻豆爾 庭中のあすはの神に小柴さし吾は齋はむ歸り來までに

右一首帳丁若麻績部諸人

(一) 此作者は諸人の家族のものであらねばならぬ。歌に敬語が用ひてないから尊屬と見るを可とする。恐らくは父又は母の字を脱したものであらう。「帳」は主帳の略。

參照 アスハの神

(四三五二)

多比己呂母 夜豆伎可佐禰豆 伊努禮等母 奈保波太佐牟志伊母爾志阿良禰婆 旅衣八つ着かさねてい寝れども尙肌さむし妹にしあらねば

右一首望陀郡上丁玉作部國忍

(一) 豆の字元曆校本に部、他の諸本に倍とあるが、キ重ネテとあるを見てもヤツの方がよいやうである。

(二) 新考に爾を等の誤とし、妹トシアラネバと訓したのはシといふ助語を無視した結果である。其意味ならば妹トナラネバといはればならぬ。——語法要録參照。

(四三五二)

美知乃倍乃 宇萬良能宇禮爾 波保麻米乃 可良麻流伎美乎
波可禮加由加牟

道の邊のうまらの梢にはほ豆のからまる君をはかれか行かむ
右一首天羽郡上丁丈部鳥

(四三五三)

伊倍加是波 比爾比爾布氣等 和伎母古賀 伊倍其登母遲豆
久流比等母奈之

家かぜは日に日に吹けど我妹子か家言もちて來る人もなし

右一首朝夷郡上丁丸子連大歲

〔參照〕マリコの連

(四三五四)

多知許毛乃 多知乃佐和伎爾 阿比美豆之 伊母加己己呂波
和須禮世奴可母

立ちこもの立ちのさわぎに逢ひ見てし妹が心は忘れせぬかも

右一首長狹郡上丁丈部與呂鷹

(四三五五)

余曾爾能美 美豆夜和多良毛 奈爾波我多 久毛爲爾美由流
志麻奈良奈久爾

よそにのみ見てやわたらも難波がた雲ぬに見ゆる島ならなくに
右一首武藏郡上丁丈部山代

(四三五六)

和我波波能 蘇豆母知奈豆氏 和我可良爾 奈伎之許己呂乎
和須良廷努可毛

わが母の袖もち撫でて我故に泣きし心を忘れぬかも

右一首山邊郡上丁物部乎刀良

(一) 心を忘ラレヌとはいへぬから、雅澄は乎を乃又は能の誤寫ではな
いかといひ、新考は之の誤として心シとよめと斷定した。兩説共に

理はあるが、此ナは感動詞に通ずるものともいひ得られるから、姑
く原訓に従ふ。

(二) 延は元曆校本に延とあるを可とする。

(四三五七)

阿之可伎能 久麻刀爾多知豆 和藝毛古我 蘇豆毛志保保爾
奈伎志會母波由

葦垣のくま處に立ちて我妹子が袖もしほほに泣きしぞ思はゆ

右一首市原郡上丁刑部直千國

參照 シホホ

(四三五八)

於保伎美乃 美許等神加志古美 伊豆久禮婆 和努等里都伎豆
伊比之古奈波毛

大君のみこと惶み出で來れば我ぬとりつきていひし子なはも

右一首種北郡上丁物部龍

(一) 契沖は泚を淮の誤としてヌエと訓した。和名抄上總國周淮(季)郡
とある地である。

(四三五九)

都久之閉爾 敝牟加流布禰乃 伊都之加毛 都加敝麻都里豆
久爾爾閉牟可毛

筑紫へに舳向る舟のいつしかも仕へまつりて國にへ向も

右一首長柄郡上丁若麻續部羊

二月九日、上總國防人部領使、少目從七位下茨田連沙彌鷹
進歌數十首、但拙劣歌者不取載之

(四三六〇)

陳私拙懷 一首并短歌
天皇乃 等保伎美與爾毛 於之豆流 難波乃久爾爾 阿米能之
多 之良志賣之伎等 伊麻能乎爾 多要受伊比都都 可氣麻久
母 安夜爾可之古志 可武奈我良 和其大王乃 宇知奈妣久
春初波 夜知久佐爾 波奈佐伎爾保比 夜麻美禮婆 見能等母
之久 可波美禮婆 見乃佐夜氣久 母能其等爾 佐可由流等伎
登 賣之多麻比 安伎良米多麻比 之伎麻世流 難波宮者 伎
己之米須 四方乃久爾欲里 多豆麻都流 美都奇能船者 保理
江欲里 美乎妣伎之都都 安佐奈藝爾 可治比伎能保里 由布

之保爾 佐乎佐之久太理 安治牟良能 佐和伎伎保比豆 波麻

爾伊泥豆 海原見禮婆 之良奈美乃 夜敝乎流我宇倍爾 安麻

乎夫禰 波良良爾宇伎豆 於保美氣爾 都加倍麻都流等 乎知

許知爾 伊疾里都利家理 曾伎太久毛 於藝呂奈伎可毛 己伎

婆久母 由多氣伎可母 許己見禮婆 宇倍之神代由 波自米家

良思母

すめろぎの 遠き御代にも おしてる 難波の國に 天の下

知らしめしきと 今のをに 絶えず言ひつつ かけまくも あ

やに惶し 神ながら 我大君の うちなびく 春の初は 八千

種に 花咲きにほひ 山見れば 見のともしく 河見れば 見

のさややく 物ごとに 榮ゆる時と めし賜ひ 明らかたまひ

敷きませる 難波の宮は 聞こしめす 四方の國より 奉る

み調の船は 堀江より 濤引きしつ 朝なぎに 梶ひきのぼ

り 夕潮に 棹さし下り あぢ群の さわぎ競ひて 濱に出で

て 海原見れば 白波の 八重をるが上に 海人小舟 はらら

に浮きて 大君に つかへ奉ると 遠方此方に 漁り釣りけり

そきだくも おぎろなきかも こきばくも ゆたけきかも こ

こ見れば うべし神代ゆ 初めけらしも

(一) 伊麻能乎は「今の世」の意なることはいふまでもない。其故に眞淵

は乎は與の誤とし後の學者皆之に従うて居るが、ヨ、チは相通音であるから、音便によつて態とイマノチと吟じたのであるかも知れぬ。後の句にも「白波の八重ナルがうへに」とある。八重折る意とも解釋せられぬことはないが、其意ならば八重折リノウヘニ(二六六)参照といはればならぬから、これも「八重寄る」の音便と解すべきであらう。末句にソキダクモ、オギロナキカモ、コキバクなどいふ語を用ひた所を見ても、わざと防人の歌らしく詠じたものと思はれる。

(二) 新考に上の都を伎の誤とし、タエズイヒキツと訓むべしとしたのは誤である。句を切るとすればイヒクルといふべきで、キツといふ完了格を用ひる筈もなく、其例も見えぬ。イヒツツはイヒヒヒと同義でカケに言ひかけたのである。

(三) 且を奴の誤としたのは従はれぬ。上句アチムラノとあるはアチ鴨の群のやうにといふ意で騒いで濱に出るといふことの譬喩である。實際上水鳥のさわぐ叙景ならばアチムラハといはればならぬ。

【参照】 オシテル(枕)、シキマス、ミチ、アジムラ、ハララカシ、ソキダク、オギロナキカモ、コキバクモ

(四三六一)

櫻花 伊麻佐可里奈里 難波乃海 於之且流宮爾 伎許之實須奈倍

さくら花今さかりなり難波の海おしける宮に聞こしめすなへ

【参照】 オシテル、ナベ

(四三六二) 海原乃 由多氣伎見都々 安之我知流 奈爾波爾等之波 倍努

比多知散思 由可牟加里母我 阿我古比乎 志留志且都那且

伊母爾志良世牟

常陸さし行かむ雁もがあが戀をしるしてつけて妹に知らせむ

右二首信太郎物部道足

(四三六七)

阿我母且能 和須例母之太波 都久波臣乎 布利佐氣美都都

伊母波之奴波尼

吾がもての忘れもしだは筑波峯をふりさけ見つつ妹はしぬばね

右一首茨城郡占部小龍

【参照】 シダ、フリサケミレバ

(四三六八)

久自我波波 佐氣久阿利麻且 志富夫爾爾 麻可知之自奴伎

和波可徹里許牟

久慈川はさけくあり待てしほ舟にま梶しじぬき我はかへり來む

右一首久慈郡丸子部佐壯

【参照】 クジ川、シホフネ

(四三六九)

都久波禰乃 佐由流能波奈能 由等許爾母 可奈之家伊母會

比留毛可奈之禰

倍久於毛保由

海原のゆたけき見つつ葦が散る難波に年はへぬべくおもほゆ

右二月十三日兵部少輔大伴宿禰家持

(四三六三)

奈爾波都爾 美布禰於呂須惠 夜蘇加奴伎 伊麻波許伎奴等

伊母爾都氣許會

難波津にみ舟下据ゑ八十楫ぬき今はこぎぬと妹に告げこそ

(四三六四)

佐伎牟理爾 多多牟佐和伎爾 伊徹能伊毛何 奈流徹伎已等乎

伊波須伎奴可母

さきむりに立たむさわぎに家の妹がなるべきことを言はず來ぬかも

右二首茨城郡若舍人部廣足

【参照】 ナリ

(四三六五)

於之且流夜 奈爾波能津與利 布奈與會比 阿例波許藝奴等

伊母爾都伎許會

おしけるや難波の津より船よそひ吾はこぎぬと妹とつきこそ

【参照】 オシテルヤ(枕)

(四三六六)

筑波峯のさゆるの花のゆどこにもかなしけ妹ぞ畫もかなしけ

(四三七〇)

阿良例布理 可志麻能可美乎 伊能利都都 須米良美久佐爾

和例波伎爾之乎

霞ふり香島の神を祈りつつすめら御くさに我は來にしを

右二首那賀郡上丁大舍人部千文

【参照】 アラレフリ(枕)、カシマの大神、イクサ

(四三七二)

多知波奈乃 之多布久可是乃 可具波志伎 都久波能夜麻乎

古比須安良米可毛

橘の下吹く風のかぐはしき筑波の山をこひずあらめかも

右一首助丁占部廣方

(四三七三)

阿志加良能 美佐可多麻波理 可閉理美須 阿例波久江由久

阿良志乎母 多志夜波婆可流 不破乃世伎 久江且和波由久

牟麻能都米 都久志能佐伎爾 知麻利爲且 阿例波伊波波牟

母呂母呂波 佐那久等麻乎須 可閉利久麻泥爾

あしがらの 御坂たまはり かへり見ず 吾はくえ行く 荒し

男も たしや憚る 不破のせき くて我は行く むまのつめ

つくしの崎に ちまりして 吾は齋はむ もろもろは さげく
とまをす 歸り來まてに

右一首倭文部可良磨

二月十四日、常陸國部領防人使、大目正七位上息長真人國
島進歌數十七首、但拙劣歌者不取載之

(一) 須を西の誤ならむとしたは新考説は非。マウスは作者自身の言で
ある。

參照 ミサカマハリ、フハ(地)

(四三七三)

那布與利波 可敏里見奈久豆 意富伎美乃 之許乃美多豆等
伊渥多都和例波

右一首火長今奉部與會布

(一) シヨは勇猛の義、醜の意とするは誤解である。——語誌參照。

(四三七四)

阿米都知乃 可美乎伊乃里豆 佐都夜奴伎 都久之乃之麻乎
佐之豆伊久和例波

右一首火長大田部荒耳

參照 サツヤ

都久比夜波 須具波由氣等毛 阿母志志可 多麻乃須我多波
和須例西奈布母

つくひやはすぐは行けどもあもししが玉の姿は忘れせなふも

右一首都賀郡上丁中臣部足國

(一) 月日ハヤといふに同じい。ヤは感動詞である。——月日夜の意と
する説(新考)は非。

(二) セナフは大和語に直せばセヌである。

(四三七九)

之良奈美乃 與會流波麻倍爾 和可例奈波 伊刀毛須倍奈美
夜多妣蘇豆布流

白波のよそる濱邊に別れなばいとすべなみ八たびそでふる

右一首足利郡上丁大舍人部禰磨

(四三八〇)

奈爾波刀乎 已岐渥豆美例婆 可美佐夫流 伊古麻多可禰爾
久毛會多奈妣久

難波とをこぎ出て見れば神さぶる生駒高嶺に雲ぞたなびく

右一首梁田郡上丁大田部三成

(四三八一)

具爾具爾乃 佐伎毛利都度比 布奈能里豆 和可流乎美禮婆
伊刀母須弊奈之

(四三七五)

麻都能氣乃 奈美多流美禮婆 伊波妣等乃 和例乎美於久流等
多多理之母己呂

松のけの並みたる見ればいは人の我を見送ると立たりしもころ
右一首火長物部眞島

參照 モコロ

(四三七六)

多妣由伎爾 由久等之良受豆 阿母志志爾 己等麻乎佐受豆
伊麻叙久夜之氣

右一首寒川郡上丁川上巨老

(四三七七)

阿母刀自母 多麻爾母賀母夜 伊多太伎豆 美都良乃奈可爾
阿敏麻可麻久母

あも刀自も玉にもがもや頂きてみづらの中にあへまかまくも

右一首津守宿禰小黒栖

(一) 母を巴の誤とする説もあるが「新考」、こはモといつても少しも
差支はない。

參照 ミツラ

(四三七八)

國々の防人つどひ船のりて別るを見ればいとすべなし

右一首河内郡上丁神麻績部島磨

(四三八二)

布多富我美 阿志氣比等奈里 阿多由麻比 和我須流等伎爾
佐伎母里爾佐酒

ふたほがみ悪しけ人なりあたゆまひ我がするときに防人にさす

右一首那須郡上丁大伴部廣成

此歌の意從來とき得たものがない。私見は語誌フタホカミ及アダユマ
ヒの項下に述べた通りである。

參照 フタホガミ、アダユマヒ

(四三八三)

都乃久爾乃 宇美能奈伎佐爾 布奈餘會比 多志渥毛等伎爾
阿母我米母我母

津の國の海の渚に舟よそひたし出も時にあもが目もがも

右一首鹽屋郡上丁丈部足人

二月十四日、下野國防人部領使、正六位上田口朝臣大戸進

歌數十八首、但拙劣歌者不取載之

(四三八四)

阿加等伎乃 加波多例等枳爾 之麻加枳乎 己枳爾之布禰乃
他都枳之良受母

あかときの彼は誰タレときに鳥かぎツグをこぎにし舟のたづき知らずも
右一首助丁海上郡海上國造他田日奉直得大理

參照 カハタレトキ

(四三八五)

由古作枳爾 奈美奈等惠良比(二) 志流敏爾波 古乎等都麻乎等
於枳豆等母枳奴
行ツこ先に波ノな音ノゑらびしるへには子をら妻をらおきてどもきぬ

右一首葛籜郡私部石島

(一) 惠良比はオラビ(叫)の訛であらう。同行ではないが、オガエと訛
ることはあり得る。歌の意は行く先では濤がオラビ、後方では別れ
た妻子がドヨメクといふのである。

參照 キサイエ

(四三八六)

和加加都乃 以都母等夜奈枳 以都母以都母 於母加古比須奈
奈理麻之都之母(二)
我ワガかつの五本柳イいづもいづも母が戀オモひすす業セましつつも

右一首結城部矢作部眞長

(一) 舊訓コホスとあり、元曆校本以下諸本「須」とかいてあるから
奈は須の誤なることは明である。恐らくは須の下にあるべき「々」を
誤つて次の奈の下に移した結果であらう。
(二) 契沖説に従つて都之母は都々母の誤とすべきである。

右一首印波郡丈部直大歳

參照 シホフネ

(四三九〇)

牟浪他麻乃 久流爾久枳作之 加多米等之 以母加去去里波
阿用久奈米加母
むばたまの樞クに釘クさしかためとし妹がここりはあよくなめか(二)も

右一首猿島郡刑部志加磨

(一) 浪を波の誤としてムバタマノと訓した略解の説可從。クル(黒に
通ず)にかゝる枕詞であらう。
(二) アヨクナメカモはアヤシクアラメカモの訛であらう。

參照 クル

(四三九一)

久爾具爾乃 夜之呂乃加美爾 奴佐麻都理 阿加古比須奈牟
伊母賀加奈志作
國國の社の神にぬさ奉マツり吾がこひすなむ妹メがかなしさ

右一首結城郡忍海部五百磨

(一) 贖祈スラムの意なりとする説(宜長)は從はれぬ。又國々の神を祀
るものを留守の妻であるとする解釋にも同意しされる。吾が戀スナ
ルの訛とすれば極めてよくわかる歌である。ルをムと訛ることは現
在の關東方言にも行はれて居る。

(四三九二)

萬葉集(卷第二十)

(四三八七)

知波乃奴乃 古乃豆加之波能 保保麻例等 阿夜爾加奈之美
於枳豆他加枳奴(二)

右一首千葉郡大田部足人

(一) 加は知の誤とする古義説を可とする。第三句ホホマレドは逆の歸
結を導く前提であるから、オキテを「置て」の意と解することは出来
ぬ。新考はマキテの誤であらうと説いたが、オキはオコシ(舒)の語
幹であるから、オキテと訓み雷の花を散らしたといふ意と解すべき
であらう。

參照 チバ、コノテカシハ、オコシ

(四三八八)

多妣等敏等 麻多妣爾奈理奴 以弊乃母加 枳世之己呂母爾
阿加都枳爾迦理
旅と言どまたびになりぬ家の妹が着せし衣に垢つきにケかり

右一首占部虫磨

參照 タビ

(四三八九)

志保不臣乃 弊古祖志良奈美 爾波志久母 於不世他麻保加
於母波弊奈久爾
しほ舟の舳スこそ白波ハ俄ハしくもおふホせたまほか思はへなくに

阿米都之乃 以都例乃可美乎 以乃良波加 有都久之波波爾

麻多己等刀波牟

天つしのいづれの神を祈らばかうつくし母にまた言とはむ

右一首埴生郡大伴部麻與佐

(四三九三)

於保伎美能 美許等爾作例波 知知波波乎 以波比弊等於枳豆
麻爲豆枳麻之乎(二)
大君の命にされば父母をいはひ瓮とおきてまゐホでホきにホしを

右一首結城郡雀部廣島

(一) 麻の字元曆校本等に尔とあることを可とする。キニシチと訓むべ
きである(略解)。

參照 イハヒバ

(四三九四)

於保伎美能 美己等加之古美 由美乃美仁 佐尼加和多良牟
奈賀氣己乃用乎
大君の命かしくみゆみのみにさ寝かわたらむ長キけ此夜を

右一首相馬郡大伴部子羊

二月十六日、下總國防人部領使、少目從七位下縣犬養宿禰
淨人進歌數二十二首、但拙劣歌者不取載之

(四三九五)

獨惜龍田山櫻花 歌一首
多都多夜麻 見都都古要許之 佐久良波奈 知利加須疑奈牟
和我可徹流刀禰

立田山見つつ越え來しさくら花ちりか過ぎなむ我がへるとに。
(一)禰の字元曆校本其他に爾とあるを可とする。「我還る時に」の意である。

(四三九六) 獨見江水浮漂糞 怨恨貝玉不依作歌一首

保理江欲利 安佐之保美知爾 與流許都美 可比爾安里世婆
都刀爾勢麻之乎

堀江より朝潮みちによるこづみ貝にありせはつとにせましを
參照 コヅミ、ツト

(四三九七) 在館門見江南美女作歌一首

見和多世婆 牟加都乎能倍乃 波奈爾保比 呂里氏多且流婆
波之伎多我都麻

見渡せば向つ丘のへの花にほひ光りて立てるははしき誰が妻
右三首二月十七日兵部少輔大伴家持作之
(四三九八) 爲防人情陳思作歌一首并短歌

たづが音の 悲しく鳴けば 遙遙に 家をおもひで おひ征箭
の そよと鳴るまで 嘆きつるかも

(一)元曆校本には泥の字がない。之に従へばハカキナデと訓むべきであるが、六音とする必要のない所であるから、新考の説の如く母ハカキナデとあつたのが、刊本にも元曆校本にも誤寫せられたのであらう。

(二)元曆校本には波の字がないが、刊本に従ひツマハトリツキと七音に訓むを可とする。
(三)ガテニと訓するは非。ニはシラニ(不知)のニで、不の意である。
(四)米は未又は未の誤とする契沖説可。音便によりシマミといふ方がよい。

參照 タラチネ「枕」、ワカクサ「枕」、シマミ、ソヤ
(四三九九) 反歌

宇奈波良爾 霞多奈妣伎 多頭我禰乃 可奈之伎與比波 久爾
弊之於毛保由

海原に霞たなびき鶴が音の悲しき宵は國邊しおもほゆ
(四四〇〇)

伊弊於毛負等 伊乎禰受乎禮婆 多頭我奈久 安之弊毛美要受
波流乃可須美爾

家おもふといを寝ず居れば鶴か鳴く葦邊も見えず春のかすみに
右十九日兵部少輔大伴宿禰家持作之

大王乃 美已等可之古美 都麻和可禮 可奈之久波安禮特 大
夫 情布里於許之 等里與會比 門出乎須禮婆 多良知禰乃

波波可伎奈涅泥 若草乃 都麻波等里都吉 平久 和禮波伊波
波牟 好去而 早還來等 麻蘇涅毛知 奈美太平能其比 牟世
比都都 言語須禮婆 群鳥乃 伊涅多知加豆爾 等騰已保里

可弊里美之都都 伊也等保爾 國乎伎波奈例 伊夜多可爾 山
乎故要須疑 安之我知流 難波爾伎爲豆 由布之保爾 船乎宇
氣須惠 安佐奈藝爾 倍牟氣許我牟等 佐毛良布等 和我乎流

等伎爾 春霞 之麻米爾多知豆 多頭我禰乃 悲鳴婆 波呂波
呂爾 伊弊乎於毛比涅 於比會箭乃 會與等奈流麻涅 奈氣吉
都流香母

大君の 命かしこみ 妻別れ かなしくはあれど ますら男の
心ふりおこし 取よそひ 門出をすれば たらちねの 母はか
きなで 若草の 妻はとりつき 平けく 我はいははむ 好く
行きて 早かへり來と 兩袖もち 涙をのこひ むせびつつ
言とひすれば むら鳥の 出立不克 とどこほり 願みしつ
いや遠に 國をきはなれ いや高に 山を越え過ぎ 葦が散る
難波に來居て 夕潮に 船をうけする 朝なぎに 舳向け漕が
むと さもらふと わが居るときに 春がすみ 島みに立ちて

(四四〇一) 可良己呂茂 須會爾等里都伎 奈苦古良乎 意伎豆會伎怒也
意母奈之爾志豆

から衣すそに取りつき泣く子らを置きてぞ來ぬや母なしにして
右一首國造少縣郡他田舍人大島
參照 カラコロモ

(四四〇二) 知波夜布留 賀美乃美佐賀爾 怒佐麻都里 伊波負伊能知波
意毛知知我多米

ちはやぶる神の御坂にぬさ奉りいはふいのちは母父が爲
右一首主帳埴科郡神人部子忍男
參照 チハヤブル「枕」

(四四〇三) 意保伎美能 美已等可之古美 阿乎久牟乃 多奈妣久夜麻乎
古江豆伎怒加牟

大君の命かしこみ青くむのたなびく山を越えて來ぬかむ
右一首少長谷部笠磨
二月二十二日信濃國防人部領使上道得病不來、進歌數
十二首、但拙劣歌者不取載之

大君の命かしこみ青くむのたなびく山を越えて來ぬかむ

二月二十二日信濃國防人部領使上道得病不來、進歌數
十二首、但拙劣歌者不取載之

二月二十二日信濃國防人部領使上道得病不來、進歌數
十二首、但拙劣歌者不取載之

二月二十二日信濃國防人部領使上道得病不來、進歌數
十二首、但拙劣歌者不取載之

(四四〇四)

奈爾波治乎 由伎呂久麻呂等 和藝毛古賀 都氣之非毛我乎
多延爾氣流可母
難波道を行きて來までと我妹子がつけし紐が緒たえにけるかも

右一首助丁上毛野牛甘

(四四〇五)

和我伊母古我 志濃比爾西餘等 都氣志比毛 伊刀爾奈流等母
和波等可自等余
わが妹子がしのびにせよと着けしひも糸になるとも我は解かじ
とよ

右一首朝倉益人

(四四〇六)

和我伊波呂爾 由加毛比等母我 久佐麻久良 多妣波久流之等
都氣夜良麻久母
わがいはるに行かも人もが草まくら旅は苦しと告げやらまくも

右一首大伴節磨

(四四〇七)

比奈久母理 宇須比乃佐可乎 古延志太爾 伊毛賀古比之久
和須良延奴可母

之都追 波呂波呂爾 和可禮之久禮婆 於毛布蘇良 夜須久母
安良受 古布流蘇良 久流之伎毛乃乎 宇都世美乃 與能比等
奈禮婆 多麻伎波流 伊能知母之良受 海原乃 可之古伎美知
乎 之麻豆多比 伊已藝和多利豆 安里米具利 和我久流麻泥
爾 多比良氣久 於夜波伊麻佐禰 都都美奈久 都麻波麻多世
等 須美乃延能 安我須賣可未爾 奴佐麻都利 伊能里麻宇之
豆 奈爾波都爾 船乎宇氣須惠 夜蘇加奴伎 可古登登能倍豆
安佐婢良伎 和波已藝望奴等 伊弊爾都氣已會
大君の 任のまにまに 島守に わが立ち來れば 柞葉の 母
の命は み裳の裾 つみあげかきなで ちちの實の 父の命は
たく綱の 白鬚の上ゆ 涙たり 嘆きのたばく 鹿兒じもの
唯一人して 朝戸出の かなしき吾子 あらたまの 年の緒な
がく 逢見ずば 戀しくあるべし 今日だにも 言とひせむと
惜しみつつ 悲しびいませ 若草の 妻も子どもも 遠近に
さはにかくみ居 春鳥の 聲のさまよひ 白たへの 袖泣きぬ
らし 手づさはり 別れ不克と 引とどめ したひしものを
大君の 命かしこみ 玉梓の 道にいで立ち 岡のさき い廻
る毎に よるづ度 かへり見しつつ はるばるに 別れし來れ
ば 思ふそら やすくもあらず 戀ふるそら 苦しきものを

ひなくもりうすひの坂をこえしだに妹がこひしく忘れぬかも

右一首池田部子磐前

二月二十三日、下野國防人部領使、大目正六位下上毛野君
駿河進歌數十二首、但拙劣歌者不取載之

(一) 池の字元曆校本に他とあるを可とする。

參照 ヲスロの坂、シダ

(四四〇八)

陳防人悲別之情一歌一首并短歌

大王乃 麻氣乃麻爾麻爾 島守爾 我多知久禮婆 波波蘇婆
能 波波能美許等波 美母乃須蘇 都美安氣可伎奈望 知知能
未乃 知知能美許等波 多久頭怒能 之良比氣乃宇倍由 奈美
太多利 奈氣伎乃多婆久 可胡自母乃 多太比等里之氏 安佐
刀望乃 可奈之伎吾子 安良多麻乃 等之能乎奈我久 安比美
受波 古非之久安流倍之 今日太仁母 許等騰比勢武等 乎之
美都都 可奈之備伊麻世 若草之 都麻母古騰母毛 乎知已知
爾 左波爾可久美爲 春鳥乃 已惠乃佐麻欲比 之路多倍乃
蘇望奈伎奴良之 多豆佐波里 和可禮加豆爾等 比伎等騰米
之多比之毛能乎 天皇乃 美許等可之古美 多麻保已乃 美知
爾出立 乎可之佐伎 伊多牟流其等爾 與呂頭多比 可弊里見

うつせみの 世の人なれば 靈きはる 生命も知らず 海原の
かしこき道を 島づたひ いこぎ渡りて ありめぐり わが來
るまでに 平らけく 親はいまさぬ つつみなく 妻は待たせ
と 墨の江の 吾がすめ神に 幣まつり 祈りまをして 難波
津に 船をうけ据ゑ 八十楫ぬき 水手ととのへて 朝びらき
我は漕ぎ出ぬと 家につげこそ
(一) 元曆校本に和我とあるを可とする。
(二) フカレカテニトは「別不克テ」の轉呼である。「別不難ニト」と讀
むは非。其やうな語づかひはあり得ぬ。
(三) 古義の訓による。
(四) 宇の字神田本其他の古寫本に乎とあるを可とする。
參照 ハハソハ「枕」、チチノミ「枕」、タクツヌ「枕」、カコジモノ「枕」、
ワカクサ「枕」、オモフソラ、コフルソラ、ウツセミ「枕」、タマキハ
ル「枕」、ツツミ、アサビラキ
(四四〇九)
反歌
伊弊妣等乃 伊波倍爾可安良牟 多比良氣久 布奈望波之奴等
於夜爾麻宇佐禰
家人のいはへにかあらむ平らけく舟出はしぬと親にまをさね
(一) 宇の字諸本に乎とあるを可とする。
(四四一〇)

美蘇良由久 久母母都可比等 比等波伊倍等 伊弊頭刀夜良武
多豆伎之良受母

み空ゆく雲もつかひと人はいへど家づとやらむたづき知らずも

(四四一一)

伊弊都刀爾 可比會比里弊流 波麻奈美波 伊也之久之久二
多可久與須禮騰

家づとに貝ぞ拾へる濱波はいやくしくしくに高くよすれど

(四四一二)

之麻可氣爾 和我布禰波弓氏 都氣也良牟 都可比乎奈美也
古非都都由加牟

島かけにわが船はてて告げやらむ使をなみや戀ひつつ行かむ

二月二十三日兵部少輔大伴宿禰家持

(四四一三)

麻久良多知 己志爾等里波伎 麻可奈之伎 西呂我馬伎已無
都久乃之良奈久

まくらたち腰にとりはきまかなしきせろがまき來むつくの知ら
なく

右一首上丁那珂郡檜前舍人石前之妻大伴眞足母

(一)母は古寫本の多くに女とあるを可とする。マタリといふ名の女人

比毛等加受禰牟

草まくら旅なるせながまる寝せばいはなる我は紐とかず寝む

右一首妻椋椅部刀自賣

(四四一七)

阿加胡麻乎 夜麻努爾波賀志 刀里加爾豆 多麻乃余許夜麻
加志由加也良牟

赤駒を山野にはがし捕りかにてたまの横山かしゆか遣らむ

右一首豊島郡上丁椋椅部荒虫之妻宇遲部黒女

參照 タマ(地)

(四四一八)

和我可度乃 可多夜麻都婆伎 麻已等奈禮 和我弓布禮奈奈
都知爾於知母可毛

わが門のかた山椿まことなれ我が手觸れなな土に落ちもかも

右一首荏原郡上丁物部廣足

(一)ナレを「汝」の意と解するは誤。フレナナは大和語に直せば觸レジ

ナである。

(四四一九)

伊波呂爾波 安之布多氣騰母 須美與氣乎 都久之爾伊多里氏
古布志氣毛波母

いはろには葦火たけども住よけを筑紫に至りてこふしけ思はも

をマタリメと呼稱したのである。

參照 マクラタチ、マキ

(四四一四)

於保伎美乃 美已等可之古美 宇都久之氣 麻古我弓波奈禮
之末豆多比由久

大君の命かしくみうつくしけ愛子が手はなれ島づたひ行く

右一首助丁秩父郡大伴部少歳

參照 マコ

(四四一五)

志良多麻乎 豆爾刀里母之豆 美流乃須母 伊弊奈流伊母乎
麻多美弓毛母也

しら珠を手に取りもして見るのすも家なる妹をまた見てももや

右一首主帳荏原郡物部歳徳

(一)母也を契沖は也母の顛倒、眞淵は我母の誤記としたが、ヤモは反語

を表示するものであるから、マタモミムヤモとあるべきで、ガモな

らばミテシガモであらねばならぬ。特にテムといふ未來完了格が用

ひられて居る以上、ヤモ又はガモを添へるのは穩でない。字の通り

モヤとよみ感動詞と見て「又見るだらうよ」の意と解すべきである。

參照 ノス

(四四一六)

久佐麻久良 多比由久世奈我 麻流禰世婆 伊波奈流和禮波

右一首橋樹郡上丁物部眞根

(四四一〇)

久佐麻久良 多妣乃麻流禰乃 比毛多要婆 安我弓等都氣呂
許禮乃波流母志

草枕たびの丸寢の紐たえば吾が手とつけろこれのはるもし

右一首妻椋椅部弟女

(一)ハルモシは「針持ち」の訛である。

(四四一一)

和我由伎乃 伊伎都久之可婆 安之我良乃 美禰波保久毛乎
美等登志怒波禰

わが行の息づくしかば足柄の峯はほ雲を見ととしぬばね

右一首都筑郡上丁服部於田

(一)田は由の誤か「古義」。

(四四一二)

和我世奈乎 都久之倍夜里豆 宇都久之美 於妣波等可奈奈
阿也爾加母禰毛

我せなを筑紫へやりてうつくしみ帯は解かなあやにかも寝も

右一首妻服部皆女

(一)此ウツクシミはイトホシミの意に用ひられたのであらうが、ウツ

クシには其意はないから、方言とおもはれる。

(二)トカナナは大和語に直せばトカシナである。
(三)アヤは不正の意。アヤニネは假寝といふことである。

參照 ウツクシ、ナナ、アヤ

(四四三)

安之我良乃 美佐可爾多志豆 蘇涅布良波 伊波奈流伊毛波
佐夜爾美毛可母
足がらの御坂にたして袖ふらばいはなる妹はさやに見もかも

右一首埼玉郡上丁藤原部等母磨

(四四四)

伊呂夫可久 世奈我許呂母波 曾米麻之乎 美佐可多婆良婆
麻佐夜可爾美無
色深くせなが衣は染めましを御坂たばらばまさやかに見む

右一首妻物部刀自賣

二月二十日、武藏國部領防人使、椽正六位上安曇宿禰三國
進歌數二十首、但拙劣歌者不取載之

參照 ミサカタマハリ

(四四五)

佐伎母利爾 由久波多我世登 刀布比登乎 美流我登毛之佐
毛乃母比毛世受
防人に行くは誰がせと問ふ人を見るがともし物念もせず

參照 トモシ

(四四六)

阿米都之乃 可未爾奴佐於伎 伊波比都都 伊麻世和我世奈
阿禮乎之毛波婆
天つしの神に幣おき齋ひつづいませ我がせな吾をし思はば

(四四七)

伊波乃伊毛呂 和乎之乃布良之 麻由須比爾 由須比之比毛乃
登久良久毛倍婆
いはの妹ろ我をしをのぶらしまゆすびにゆすびし紐のとくらく思

(四四八)

和我世奈乎 都久志波夜利豆 宇都久之美 叡比波登加奈奈
阿夜爾可毛禰牟
わがせなを筑紫はやりてうつくしみえびはとかななあやにかも

寝む

(四四九)

宇麻夜奈流 奈波多都古麻乃 於久流我辨 伊毛我伊比之乎
於伎豆可奈之毛

(一)トカナナは解カシナ、アヤに寝るは假寝の意なること既に(四四三)に述べた。

馬屋なる繩たつ駒のおくるがべ妹がいひしを起きてかなしも

參照 ガベ

(四四三〇)

阿良之乎乃 伊乎佐太波佐美 牟可比多知 可奈流麻之都美
伊涅豆登阿我久流
あらし男のいをさ手挟みむかひ立ちかなる間しづみ出でてと吾
が来る

(一)略解に平を本の誤として五百箇と訓み、新考に留と改めて射ル箭と訓したのはイがヤ(箭)の訛であることに氣づかなかつたのであらう。古義にイを接頭語としてイナサを小箭の義としたのは最も牽強附會である。サタバサミのサが接頭語なることはいふまでもない。

參照 カナルマシヅミ

(四四三一)

佐左賀波乃 佐也久志毛用爾 奈奈辨加流 去呂毛爾麻世流
古侶賀波太波母
笹が葉のさやぐ霜夜に七重かる衣にませる兒ろが肌はも

(四四三二)

佐辨奈辨奴 美許登爾阿禮婆 可奈之伊毛我 多麻久良波奈禮
阿夜爾可奈之毛
拒へなへぬ命にあればかなし妹が手枕はなれあやに悲しも

右八首昔年防人歌矣、主典刑部少錄正七位上幣余伊美吉
諸君抄寫贈兵部少輔大伴宿禰家持

(四四三三)

三月三日檢校防人勅使并兵部使人等、同集飲宴作哥
三首
阿佐奈佐奈 安我流比婆理爾 奈里豆之可 美也古爾由伎豆

波夜加弊里許牟

朝なさなあがる雲雀になりてしか都に行きて早かへり來む

右一首勅使紫微大弼安倍沙美磨朝臣

(四四三四)

比婆里安我流 波流弊等佐夜爾 奈理奴禮波 美夜古母美要受
可須美多奈妣久
雲雀あがる春邊とさへになりぬれば都も見えず霞たなびく

(一)考には夜は倍の誤としてサへにと訓し、新考は良の誤とした。姑く眞淵訓に従ふ。

(四四三五)

布敷賣里之 波奈乃波自米爾 許之和禮夜 知里奈牟能知爾
美夜古敏由可無
ふふめりし花の始に來し我や散りなむ後に都へ行かむ

右二首兵部少輔大伴宿禰家持

(四四三六)

昔年相替防人歌一首

夜未乃欲能 由久左伎之良受 由久和禮乎 伊都伎麻左牟等
登比之古良波母

(四四三七)

先太上天皇御製霍公鳥歌一首

富等登藝須 奈保毛奈賀那牟 母等都比等 可氣都都母等奈
安乎禰之奈久母

(四四三八)

陰妙觀應詔奉和歌一首

保等登藝須 許許爾知可久乎 伎奈伎弓余 須疑奈無能知爾
之流志安良米夜母

(四四三九)

冬日幸于親負御井之時、内命婦石川朝臣應詔賦雪
歌一首 諱曰色婆

(四四四二)

五月九日兵部少輔大伴宿禰家持之宅集飲歌四首

和我勢故我 夜度乃奈弓之故 比奈良倍弓 安米波布禮杼母
伊呂毛可波良受

(四四四三)

右一首大原真人今城

比佐可多乃 安米波布里之久 奈弓之故我 伊夜波都波奈爾
故非之伎和我勢

(四四四四)

右一首大伴宿禰家持

和我世故我 夜度奈流波疑乃 波奈佐可牟 安伎能由布弊波
和禮乎之努波世

(四四四五)

右一首大原真人今城

宇具比須乃 許惠波須疑奴等 於毛倍杼母 之美爾之許己呂

萬葉集(卷第二十)

麻都我延乃 都知爾都久麻涅 布流由伎乎 美受弓也伊毛我

許母里乎流良牟

松が枝の土につくまで降る雪を見ずてや妹がこもり居るらむ
干し時水主内親王寢膳不_レ安累日不_レ參、因以_二此日_一太上天

皇勅_二侍孀等_一曰、爲_レ遣_二水主内親王_一賦_レ雪作_レ歌奉獻者、
於_レ是諸命婦等不_レ堪_二作歌_一、而此石川命婦獨作_二此歌_一奏

右件四首、上總國大掾正六位上大原真人今城傳誦云爾年
月未詳

(一) 西本願寺本には邑婆とあるを可とする。

(四四四〇)

女等餞之歌二首

安之我良乃 夜徹也麻故要氏 伊麻之奈婆 多禮乎可伎美等
彌都都志努波牟

(四四四一)

多知之奈布 伎美我須我多乎 和須禮受波 與能可藝里爾夜
故非和多里奈無

奈保古非爾家里

うぐひすの聲は過ぎぬと思へども染みにし心なほこひにけり

(四四四六)

同月十一日、左大臣橘卿宴_二右大辨丹比國人真人之宅_一歌
三首

和我夜度爾 佐家流奈弓之故 麻比波勢牟 由米波奈知流奈
伊也乎知爾左家

右一首丹比國人真人壽_二左大臣_一歌

(四四四七)

麻比之都都 伎美我於保世流 奈弓之故我 波奈乃未等波無
伎美奈良奈久爾

右一首左大臣歌

(一) 伎美の二字に誤なしとすれば「花のみを訪うて止むべき君ではな
い」といふ意であらうが、まぎらばしい語づかひである。其故に新
考は阿禮の誤寫としたが、尙花の縁語としてキミ(ミは實に通ずる)
というたものとも解せられるから猥りに改竄することは出来ぬ。

(四四四八)

安治佐爲能 夜敵佐久其等久 夜都與爾乎 伊麻世和我勢故
美都都思努波牟

あぢさゐの八重さく如くやつ世にをいませ我せこ見つつ偲ばむ
右一首左大臣寄^{ワカ}味狭藍花^{ワカ}詠也

參照 アヂサキ

(四四四九)

十八日左大臣宴^ニ於兵部卿橋奈良磨朝臣之宅^ニ歌三首
奈弓之故我 波奈等里母知弓 宇都良宇都良 美麻久能富之伎
吉美爾母安流加母
なでしこが花とりもちてうつらうつら見まくの欲しき君にもあ
るかも

右一首治部卿船王

(一) ウツラウツラのラは接尾語、ウツは「全」の意であらう。ツラツラ
(熟)といふ語は之から出たものと思はれる。

(四四五〇)

和我勢故我 夜度能奈弓之故 知良米也母 伊夜波都波奈爾
佐伎波麻須等母

我せこが宿のなでしこ散らめやもいや初花に咲きはますとも

(四四五一)

宇流波之美 安我毛布伎美波 奈弓之故我 波奈爾奈會倍弓

高山の岩ほに生ふる菅のねもころころに降りおくしら雪

右一首左大臣作

(四四五五)

天平元年班田之時、使葛城王從^ニ山背國^ニ贈^ル薩妙觀命^ニ
婦等所^ニ歌一首 副^ニ芹子^ニ裝^ル

安可禰佐須 比流波多多婢弓 奴婆多麻乃 欲流乃伊刀末仁

都賣流芹子許禮

茜さす晝はたたびてぬばたまの夜のいとまに摘める芹これ

(一) 薩は西本願寺本による。刊本照とある。

參照 タタビ

(四四五六)

薩妙觀命婦報贈歌一首

麻須良乎等 於母敵流母能乎 多知波吉氏 可爾波乃多爲爾

世理會都美家流

益ら男と思へるものを大刀はきてかにはの田ゐに芹ぞつみける

右二首左大臣讀之云爾 左大臣是葛城王後賜^ニ橋姓^ニ也

參照 カニハのタキ

(四四五七)

天平勝寶八歲丙申二月朔乙酉二十四日戊申太上天皇
太皇太后幸^ニ行於河内離宮^ニ經^レ信、以^ニ壬子^ニ傳^ニ幸於^ニ

美禮杼安可奴香母
うるはしみ吾が思ふ君は撫子が花になぞへて見れど飽かぬかも

右二首兵部少輔大伴宿禰家持追作

(四四五一)

八月十三日在^ニ內南安殿^ニ肆宴歌二首

乎等賣良我 多麻毛須蘇婢久 許能爾波爾 安伎可是不吉弓
波奈波知里都都

少女らが玉裳すそ引く此庭に秋風吹きて花はちりつつ

右一首内匠頭兼播磨守正四位下安宿王奏之

(四四五三)

安吉加是能 布伎古吉之家流 波奈能爾波 伎欲伎都久欲仁

美禮杼安賀奴香母

秋風の吹きこき敷ける花の庭きよき月夜に見れどあかぬかも

右一首兵部少輔從五位上大伴宿禰家持 未奏

(四四五四)

十一月二十八日左大臣集^ニ於兵部卿橋奈良磨朝臣宅^ニ

宴歌一首

高山乃 伊波保爾於布流 須我乃根能 禰母許呂其呂爾 布里

於久白雪

難波宮^ニ也

三月七日於^ニ河内國伎人鄉馬國人之家^ニ宴歌三首

須美乃江能 波麻末都我根乃 之多婆倍弓 和我見流乎努能

久佐奈加利會禰

すみの江の濱松が根の下延へてわが見る小野の草な苺りそね

右一首兵部少輔大伴宿禰家持

(四四五八)

爾保杼里乃 於吉奈我河波半 多延奴等母 伎美爾可多良武

己等都奇米也母 古新未詳

にほ鳥の息長河は絶えぬとも君にかたむ言つきめやも

右一首主人散位寮散位馬史國人

參照 ニホトリ(枕)、オキナガ川

(四四五九)

蘆苺爾 保里江許具奈流 可治能於等波 於保美也比等能 未

奈伎久麻泥爾

葦苺に堀江こぐなるかぢの音は大宮人の皆聞くまでに

右一首式部少丞大伴宿禰池主讀之、即云兵部大丞大原眞

人今城先日他所^ニ讀歌者也

(一) 雅澄は爾を等の誤として葦カルトと訓したが、原のままでも差支
はない。

(四四六〇) 保利江己具 伊豆手乃船乃 可治都久米 於等之波多知奴 美乎波也美加母

堀江こぐ伊豆手の舟のかぢつくめ音しば立ちぬ滯はやみかも

(一)「都久米」といふ語は不可解である。雅澄は中山殿水の説によつて「穢を船のつくへかけて彼方へ引うかすを都久牟流といふべし」と述べたが、聞なれぬ語であるのみならず、此かぢを後世の舵器と同一のものと断することは出来ぬ。新考には都可布の誤ではないかとあるが、上の句のコケと重複する嫌がある。——ローロツクに當る部分を其ころツクメと稱したのであるまいか。ツクメはツクヘ(着く邊)の音便とも解せられる。尙可考

參照 イツタの舟

(四四六一)

保里江欲利 美乎左可能保流 梶乃音乃 麻奈久會奈良波 古非之可利家留

堀江よりみを遡るかぢの音のまなくぞならばこひしかりける

(一) 鳴ラバに奈良ハをいひかけたのである。

(四四六二)

布奈藝保布 保利江乃可波乃 美奈伎波爾 伎爲都都奈久波 美夜故埒里香蒙 船競ふほり江の川の水際に來あつゝ鳴くはみやこ鳥かも

(四四六五)

噓レ族歌一首并短歌

比左加多能 安麻能刀比良伎 多可知保乃 多氣爾阿毛理之 須賣呂伎能 可未能御代欲利 波自由美乎 多爾藝利母多之 麻可胡也乎 多波左美蘇倍豆 於保久米能 麻須良多祁乎乎 佐吉爾多豆 由伎登利於保世 山河乎 伊波禰左久美豆 布美等保利 久爾麻藝之都都 知波夜夫流 神乎許等牟氣 麻都呂倍奴 比等乎母夜波之 波吉伎欲米 都可倍麻都里豆 安吉豆之萬 夜萬登能久爾乃 可之婆良能 宇禰備乃宮爾 美也婆之良 布刀之利多豆氏 安米能之多 之良志賣之祁流 須賣呂伎能 安麻能日繼等 都藝豆久流 伎美能御代御代 加久佐波奴 安加吉許己呂乎 須賣良弊爾 伎波米都久之豆 都加倍久流 於夜能都可佐等 許等太豆氏 佐豆氣多麻徹流 宇美乃古能 伊也都藝都伎爾 見流比等乃 可多里都藝豆氏 伎久比等能 可我見爾世武乎 安多良之伎 吉用伎會乃名會 於煩呂加爾 己許呂於母比豆 牟奈許等母 於夜乃名多都奈 大伴乃 宇治等名爾於徹流 麻須良乎能等母 久かたの 天の門ひらき 高千穂の 嶽に天降りし すめろぎの 神の御代より はじ弓を 手にぎりもたし ま鹿兒矢を

右三首江邊作之

(四四六三)

保等登藝須 麻豆奈久安佐氣 伊可爾世婆 和我加度須疑自 可多利都具麻渥

ほととぎす先づ鳴く朝けいかにせばわが門すぎし語りつぐまで

(一) 元曆校本には自を目と改めてある。目(モ)又はメと訓むとして(で)は勿論意をなさぬが、スギジといふ語が語法に外れて居るが故に、疑を生じたのである。家持は「人に語り告ぐまでどうすれば我門を(通り)過ギズ、アラム」といふ意味でスギジといふ語を用ひたのであらうが、口語で「通り過ぎないだらう」といふと「通り過ぎなからう」との間に相違があると同様に、過ギズ、アラムと同義語として過ギジを用ひることは出来ぬ。スギジといへば寧ろ「過ぎまい」といふ意に聞えるのである。

(四四六四)

保等登藝須 可氣都都伎美我 麻都可氣爾 比毛等伎佐久流 都奇知可都伎奴

ほととぎすかけつつ君がまつかげに紐ときささくる月近づきぬ

右二首二十日大伴宿禰家持依レ興作之

(一) 雅澄が我を乎の誤として君ヲ待ツ意を説いたのは従はれぬ。此歌は「待」と「松」との外に「暦月」と「太陰」とをいひかけた語の戯で必しも待たるゝ人を明示するを要せぬ。

たばさみ副へて 大久米の ますら健男を さきに立て 頼と りおほせ 山河を 岩根さくみて 踏み通り 國覓しつつ ちはや振る 神をこと向け まつろはぬ 人をも和し 掃き清め 仕へ奉りて 秋津島 大和の國の 檣原の 畝傍の宮に 宮柱 太しり立てて 天の下 知ろしめしける 天皇の 天の日繼と つぎてくる 君の御代御代 かくさはぬ 赤き心を すめら方に 極めつくして 仕へ來る 祖のつかさと 言だてて 授け たまへる 産の子の いや嗣々に 見る人の 語りつぎでて 聞く人の かがみにせむを あたらしき 清き其名ぞ おほろかに 心おもひて 空言も 祖の名絶つな 大伴の 氏と名におへる ますら男の伴

(一) 新考に「授け給へる産の子」とはつき難しといふ理由を以て流を禮と讀めというたのは誤で、七句を隔てて「授け給へる清き其名」とかかるのである。レとしては句が切れるか、又はレバの意として次に續くものとせねばならぬが、「授けたまへれば」といふ筈はなく、又句を切つては授けられたものは何かわからなくなる。

(二) こゝに二句脱落せりと断定した新考の説は臆断である。「見る人」「聞く人」が即ち愈々に生まれた「産の子」である。

(三) 氏を婆の誤とする新考説は非。ツギテハ即ち語り繼ぎたらばといふやうな假設前提を用ひる場合でない。カタリツギテといふべき所を七音にする爲にツギテテといふ拙い語を用ひたので、此のやうな

誤解をすらし生じたのである。

(四) 此乎は語法上、に存することを許さぬ。カガミニナセムとあつたのが、誤つて轉置せられたものではあるまいか。或は原歌は見ル人ノ語リツギテ、聞ク人ノ鏡ニセムと六音の二句を用ひた——此例は集中にも折々見受ける——のな後人がさかしらに氏と平とを加へたのであらう。

【参照】ハツ弓、マカゴ矢、オホクメ、ユキ、サクミ、マツロフ、アキツシマ、フトシリ、コトダテ、ムナコト

(四四六六)

之奇志麻乃 夜末等能久爾爾 安伎良氣伎 名爾於布等毛能乎 已許呂都刀米與

しき島の大和の國に明らけき名におふ伴の男心つとめよ

【参照】シキシマ

(四四六七)

都流藝多知 伊與餘刀具倍之 伊爾之敵由 佐夜氣久於比呂 伎爾之會乃名會

劍大刀いよ磨くべし古ゆさやけくおひて來にし其名ぞ

右縁淡海真人三船讒言出雲守大伴古慈悲宿禰解任、是
以家持作此歌也

(四四六八)

臥病悲無常欲修道作歌二首

消殘りの雪にあへ光るあしびきの山たちばなをつとに摘み來な

右一首兵部少輔大伴宿禰家持

(四四七二)

八日讚岐守安宿王等集於出雲掾安宿奈杼磨之家宴
歌二首
於保吉美乃 美許等加之古美 於保乃宇良乎 會我比爾美都都
美也古敏能保流

大君の命かしこみおほの浦をそがひに見つつ都へのぼる

右掾安宿奈杼磨

(一) オホは出雲國意宇郡意宇の訛であらう〔略解〕。

(四四七三)

宇知比左須 美也古乃比等爾 都氣麻久波 美之比乃其等久
安里等都氣已會

うちびさす都の人に告げまは見し日の如く在りと告げこそ

右一首守山背王歌也、主人安宿奈杼磨語云、奈杼磨被差
朝集使、擬入三京師、因此餞之日、各作此歌聊陳所
心也

(一) 此の字元曆校本に之なきを可とする。

【参照】ウチヒサス〔枕〕

(四四七四)

萬葉集(卷第二十)

宇都世美波 加受奈吉身奈利 夜麻加波乃 佐夜氣吉見都都
美知乎多豆禰奈

うつせ身は數なき身なり山川のさやけき見つつ道を尋ねな
(一) カズナキは「物の數にもあらぬ」といふ意であらう。

(四四六九)

和多流日能 加氣爾伎保比呂 多豆禰豆奈 伎欲吉會能美知
末多母安波無多米

わたる日のかげに競ひて尋ねてな清き其道またも逢はむため

(四四七〇)

願壽作歌一首
美都煩奈須 可禮流身會等波 之禮禮杼母 奈保之禰可比都
知等世能伊乃知乎

水粒なす借れる身ぞとは知れれども尚し願ひつ千年の生命を

以前歌六首六月十七日大伴宿禰家持作
(一) ミツホは泡沫の意であらう。

(四四七一)

冬十一月五日夜少雷起、鳴雪落覆庭、忽懷感憐聊
作短歌一首
氣能己里能 由伎爾安倍呂流 安之比奇能 夜麻多知波奈乎
都刀爾通彌許奈

武良等里乃 安佐太知伊爾之 伎美我宇倍波 左夜加爾伎吉都
於毛比之其等久 一云、於毛比之母乃乎
むら鳥の朝立ちいにし君が上はさやかに聞きつおもひしごとく
(思ひしものを)

右一首兵部少輔大伴宿禰家持後日追和出雲守山背王歌
作之

(四四七五)

二十三集於式部少孫大伴宿禰池主之宅飲宴歌二
首
波都由伎波 知敏爾布里之家 故非之久能 於保加流和禮波
美都都之努波牟

初雪は千重に降りしけ戀ひしくの多かる我は見つしぬばむ
(四四七六)

於久夜麻能 之伎美我波奈能 其等也 之久之久伎美爾 故非
和多利奈無
奥山のしきみの花の名の如やくしく君にこひ渡りなむ

右二首兵部大丞大原真人今城

(一) 「奈能」の下には、元曆校本其他に更に奈能の二字がある。之に従ふべきである。

【参照】シキミ

(四四七七)

智努女王卒後、圓方女王悲傷作歌一首

由布義理爾 知杼里乃柰吉志 佐保治乎婆 安良之也之弓牟
美流與之乎奈美
夕霧に千鳥のなきし佐保路をばあらしやしてむ見るよしをなみ

(四四七八)

大原櫻井眞人行_ニ佐保川邊之時作歌一首

佐保河波爾 許保里和多禮流 宇須良婢乃 宇須伎許己呂乎
和我於毛波奈久爾
佐保川に凍りわたれる薄ら氷のうすき心を我がおもはなくて

(四四七九)

藤原夫人歌一首(一) 淨御原御宇天皇之夫人也、
宇曰_ニ水上大刀自也

安佐欲比爾 禰能未之奈氣婆 夜伎多知能 刀其己呂毛安禮波
於母比加禰都毛
朝よひに音のみしなげば焼大刀の利心も吾はおもひかねつも

(一) 次の作者不詳とあるのも此夫人の歌らしく思はれるので、新考に
は_一は_二の誤であらうとある。

參照 ヤキタチ〔枕〕

(四四八〇)

勝寶 九歲六月二十三日、於_ニ大監物三形王之宅_一宴歌一首

一首

宇都里由久 時見其登爾 許己呂伊多久 牟可之能比等之 於
毛保由流加母
うつり行く時見る毎に心いたく昔の人し思ほゆるかも

右兵部大輔大伴宿禰家持作

(四四八四)

佐久波奈波 宇都呂布等伎安里 安之比奇乃 夜麻須我乃禰之
奈我久波安利家里
咲く花はうつろふ時ありあしびきの山菅の根し長くはありけり

右一首大伴宿禰家持悲_ニ物色變化_一作之也

(一) 新考に禰を葉の誤としたのは従はれぬ。山菅の葉も長いものでは
あるが、スゲの根は「長」の枕詞にすら用ひられて居るから、強ひて
葉と改めるにも及ぶまい。

參照 ヤマスゲ

(四四八五)

時花 伊夜米豆良之母 可久之許會 賣之安伎良米晚 阿伎多
都其等爾
時の花いやめづらしもかくしこそめしあきらめ秋立つごとに

右一首大伴宿禰家持作之

萬葉集(卷第二十)

可之故伎也 安米乃美加度乎 可氣都禮婆 禰能未之奈加由
安左欲比爾之豆 作者未詳

かしこきや天の御門をかけつれば音のみし泣かゆ朝よひにして
右件四首傳讀兵部大丞大原今城

(四四八一)

三月四日於_ニ兵部大丞大原眞人今城之宅_一宴歌一首

安之比奇能 夜都乎乃都婆吉 都良都良爾 美等母安加米也
宇惠豆家流伎美
あしびきの八つ丘の椿つらつらに見ともあかめやうゑてける君

右兵部少輔大伴家持屬_ニ植椿_一作

參照 ツバキ、ツラツラ

(四四八二)

保里延故要 等保伎佐刀麻豆 於久利家流 伎美我許己呂波
和須良由麻之目
堀江こえ遠き里までおくりける君が心は忘らゆましじ

右一首播磨介藤原朝臣執弓赴_レ任悲別也、主人大原今城傳

讀云爾

(一) 目の字元曆校本に自とあるを可とする。マシモと誦しては意が通
ぜぬ。

(四四八三)

(四四八六)

天平寶字元年十一月十八日於_ニ内裏_一肆宴哥二首

天地乎 豆良須日月能 極奈久 阿流倍伎母能乎 奈爾加於毛波
牟
天地を照らす日月の極みなくあるべきものを何か思はむ

右一首皇太子御歌

(四四八七)

伊射子等毛 多波和射奈世會 天地能 加多米之久爾會 夜麻
登之麻禰波
いざ子どもたは業なせそ天地のかためし國ぞ大和しま根は

右一首内相藏原朝臣奏之

參照 タハ

(四四八八)

十二月十八日於_ニ大監物三形王之宅_一宴歌三首
三雪布流 布由波禰布能未 鷲之 奈加牟春敵波 安須爾之安
流良之

み雪降る冬は今日のみ鶯の鳴かむ春邊はあすにしあるらし

右一首主人三形王

(四四八九)

宇知奈婢久 波流乎知可美加 奴婆玉乃 己與比能都久欲 可

須美多流良牟
うちなびく春を近みかぬば玉の今夜の月夜かすみたるらむ

右一首大藏大輔甘南備伊香真人

參照 スバタマ〔枕〕

(四四九〇)

安良多末能 等之由伎我敝里 波流多多婆 末豆和我夜度爾
宇具比須波奈家
あらたまの年ゆきかへり春立たば先づ我が宿に鶯はなけ

右一首右中辨大伴宿禰家持

(四四九一)

於保吉宇美能 美奈會已布可久 於毛比都都 毛婢伎奈良之思
須我波良能佐刀
大きくみの水底ふかく思ひつつ裳ひき平らしし菅原のさと

右一首藤原宿奈鷹朝臣之妻石川女郎薄愛離別、悲恨作歌也 年月未詳

參照 スガハラ〔地〕

(四四九二)

二十三日に於治部少輔大原今城真人之宅宴歌一首
都寄餘米婆 伊麻太冬奈里 之可須我爾 霞多奈婢久 波流多
知奴等可

とある。ユラに活用語尾が接着したことの故を以て「玉の緒ユラ
グとはいひ得ず」とする論理はいかに讓歩しても成立せぬ。思ひ違
は誰もあることであるが、之は雅澄がユラグとユラクとは別義の語
ユラクは玉の鳴りひびく意なりとした邪説に迷はされたものと思ふ
から、世を誤らんことを恐れて一言するのである。

參照 ヌナトモモユラニ

(四四九四)

水鳥乃 可毛能波能伊呂乃 青馬乎 家布美流比等波 可藝利
奈之等伊布
水とりの鴨の羽の色の青馬を今日見る人はかぎりなしといふ

右一首爲ニ七日侍宴、右中辨大伴宿禰家持預作此歌、但

依ニ仁王會事、却以ニ六日於ニ内裏ニ召ニ諸王卿等賜酒肆
宴、給祿因レ斯不レ奏也

(一) 白馬節會をいふ

(四四九五)

六日内庭假植樹木以作ニ林帷ニ而爲ニ肆宴ニ歌一首
打奈婢久 波流等毛之流久 宇具比須波 宇惠木之樹間乎 奈
伎和多良奈牟
打なびく春ともしるく鶯はうゑ木の樹間を鳴き渡らなむ

右一首右中辨大伴宿禰家持 不レ奏

(一) 樹間はコマともよみ得るが、恐らくは當時はクマと發音したので

月よめばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか
右一首右中辨大伴宿禰家持作

(四四九三)

二年春正月三日召ニ侍從堅子王臣等令レ侍ニ於内裏之
東屋垣下ニ即賜ニ玉箒ニ肆宴、于レ時内相藤原朝臣奉レ勅
宣、諸王卿等隨レ堪任意作レ歌并賦詩、仍應ニ詔旨各
陳ニ心緒作レ歌賦詩 未得ニ諸人之賦詩并作歌也

始春乃 波都禰乃家布能 多麻婆波伎 手爾等流可良爾 由良
久多麻能乎

はつ春の初子の今日の玉箒手にとるからにゆらく玉の緒

右一首右中辨大伴宿禰家持作、但依ニ大藏政不堪奏之
也

(一) 新考に乎を等の誤としてタマノト即ち玉の音の意とし「ユラグは
もと玉の鳴るを云ひしが、うつりて搖くことなれるにて、ユラグ
といひてタマノ緒とはいふべからず」と説いたのは恐らくは記の誓
の段に見ゆる奴那登母母由良を紀に瓊音瑯々と譯したことを根據と
するものであらうが、甚しい誤解である。記の三貴子出生の條下
に其御頸珠の玉の緒もモユラに取りユラガシとあり、ユラグものは
玉の緒で、誓の段のヌナトも瓊音の意ではない。語誌參照
ユラグのユラはユリ(搖)と同語で、ナキユリ(地震)の如くも用ひら
れ、舊神本紀にも天神御祖の教として「フルへ、ユラユラとフルへ」

あらう。限の意のクマも亦木間から出たのである。

(四四九六)

二月於ニ式部大輔中臣清鷹朝臣之宅宴歌十首
宇良賣之久 伎美波母安流加 夜度乃烏梅能 知利須具流麻涅
美之米受安利家流
うらめしく君はもあるか宿の梅の散り過ぐるまで見しめずあり
ける

右一首治部少輔大原今城真人

(四四九七)

美牟等伊波婆 伊奈等伊波米也 宇梅乃波奈 知利須具流麻且
伎美我伎麻世波

見むと言はば否と言はめや梅の花散り過ぐるまで君が來まさぬ

右一首主人中臣清鷹朝臣

(一) 世波は元曆校本以下諸本に左奴とあるを可とする。

(四四九八)

波之伎余之 家布能安路自波 伊蘇麻都能 都禰爾伊麻佐禰
伊麻母美流其等
はしきよし今日のあるじは磯松の常にいまさね今も見ること
右一首右中辨大伴宿禰家持

參照 ハシキヨシ、アロジ

(四四九)

和我勢故之^(一) 可久志伎許散婆 安米都知乃 可未乎許比能美
奈我久等曾於毛布

わがせこしかくし聞こさば天地の神をこひのみ長くとぞ思ふ

右一首主人中臣清麿朝臣

(一) 舊訓ワガセコガとあるが、契沖説の如くセコシと訓む方むよい。
語法要録參照。

(四五〇)

宇梅能波奈 香乎加具波之美 等保家杼母 已許呂母之努爾
伎美乎之曾於毛布

梅の花香をかぐはしみ遠けども心もしぬに君をしぞ思ふ

右一首治部大輔市原王

(四五〇一)

夜知久佐能 波奈波宇都呂布 等伎波奈流 麻都能左要太平
和禮波牟須婆奈

八千種の花はうつろふ常葉なる松のさ枝を我は結ばな

右一首右中辨大伴宿禰家持

(四五〇二)

鳥梅能波奈 左伎知流波流能 奈我伎比乎 美禮杼母安可奴

右一首治部少輔大原今城真人

(一) 新考には都禰は都麻の誤であらうとある。或は然らむ。

(四五〇六)

依^レ興各思^ニ高圓離宮處^ニ作歌五首

多加麻刀能 努乃宇倍能美也婆 安禮爾家里 多多志伎々美能
美與等保會氣婆

高まとの野の上の宮はあれにけりたたしし君の御代遠そけば

右一首右中辨大伴宿禰家持

(一) 類聚集其他多くの本に多多志々伎美とあるを可とする。

參照 タカマト「地」

(四五〇七)

多加麻刀能 乎能宇倍乃美也波 安禮奴等母 多多志志伎美能
美奈和須禮米也

高まとの丘の上の宮は荒れぬとも立たしし君の御名忘れめや

右一首治部少輔今城真人

(一) 元曆校本に大原今城真人とあるを可とする。

(四五〇八)

多可麻刀能 努敵波布久受乃 須惠都比爾 知與爾和須禮牟
和我於保伎美加母

高まとの野邊はふ葛の末つひに千代に忘れむわが大君かも

萬葉集(卷第二十)

伊蘇爾母安流香母

梅の花さき散る花の長き日を見れどもあかぬ磯にもあるかも

右一首大藏大輔甘南備伊香真人

(四五〇三)

伎美我伊敵能 伊氣乃之良奈美 伊蘇爾與世 之婆之婆見等母
安加無伎彌加毛

君が家の池の白波磯によせしば見とも飽かむ君かも

右一首右中辨大伴宿禰家持

(四五〇四)

宇流波之等 阿我毛布伎美波 伊也比家爾 伎末勢和我世古
多由流日奈之爾

うるはしと吾が思ふ君はいや日けに來ませわがせこ絶ゆる日な
しに

右一首主人中臣清麿朝臣

參照 イヤヒケニ

(四五〇五)

伊蘇能宇良爾 都禰欲比伎須牟 乎之杼里能 乎之伎安我未波
伎美我末仁麻爾

磯の上に常よび來住むをし鳥の惜しきあが身は君がまにまに

右一首主人中臣清麿朝臣

(四五〇九)

波布久受能 多要受之努波牟 於保吉美能 賣之思野邊爾波
之米由布倍之母

はふ葛の絶えずしぬばむ大君のめしし野邊にはしめ結ふべしも

右一首右中辨大伴宿禰家持

(四五一〇)

於保吉美乃 都藝豆賣須良之^(一) 多加麻刀能 努敵美流其等爾
禰能未之奈加由

大君のつぎてめすらし高まとの野邊見ること音のみし泣かゆ

右一首大藏大輔甘南備伊香真人

(一) 此句は時格を誤つて居る。メスマカリシといふ意であらうが、之
をメスラシといふことは出來ぬ。誤寫と推定すべき根據もないから

語の誤用と見ざるを得ぬ(新考)。

(四五一一)

屬^ニ目山齋^ニ作歌三首

乎之能須牟 伎美我許乃之麻 家布美禮婆 安之婢乃波奈毛
左伎爾家流可母

をしの住む君が此しま今日見ればあしびの花も咲きにけるかも

右一首大監物御方王

參照 シマ、アシビ

(四五二)

伊氣美豆爾 可氣左倍見要底 佐伎爾保布 安之婢乃波奈乎
蘇弓爾古伎禮奈

池水にかけさへ見えて咲きにほふあしびの花を袖にこき入な

右一首右中辨大伴宿禰家持

參照 アシビ、ユキレ

(四五三)

伊蘇可氣乃 美由流伊氣美豆 氏流麻涅爾 左家流安之婢乃
知良麻久乎思母

磯かげの見ゆる池水てるまてにさけるあしびの散らまく惜しも

右一首大藏大輔甘南備伊香真人

(四五四)

二月十日於_ニ内相宅_ニ饒_ニ渤海大使小野田守朝臣等_ニ宴
歌一首

阿乎宇奈波良 加是奈美奈妣伎 由久左_(一) 都都牟許等奈久

布禰波波夜家無

あをうな原風波なびき行くさ來_クさつむむことなく舟は早けむ

右一首右中辨大伴宿禰家持 未_レ誦_レ之

(一) ユクサクサは往く時、來る時の意である。——語法要錄接尾語の項下參照。

(四五五)

七月五日於_ニ治部少輔大原今城真人宅_ニ饒_ニ因幡守大
伴宿禰家持_ニ宴歌一首

秋風乃 須惠布伎奈婢久 波疑能花 登毛爾加蘇左受 安比加
和可禮牟

秋かぜの末吹きなびく萩の花ともにかざさず相か別れむ

右一首守大伴宿禰家持作之

(四五六)

三年春正月一日、於_ニ因幡國廳_ニ賜_ニ饗國郡司等_ニ之宴
歌一首

新年之始乃 波都波流能 家布敷流由伎能 伊夜之家餘其騰
あらたしき年の始の初春の今日降る雪のいやしけ_{ヨコト}吉事

右一首大伴宿禰家持作之

附 錄 語 法 要 錄

目次

第一章。音……………八七

一、音符……………八七

二、語音……………九〇

母韻——子音——濁音——撥音——促音

三、音便……………九〇

韻通——普通——撥音便——促音便——補音——約縮

第二章。語構成……………九七

一、通則……………九七

二、接頭語……………九九

三、接尾語……………九五

(イ)名詞語尾——(ロ)形容語尾——(ハ)動詞語尾

第三章。語……………九三

一、名詞……………九四

二、代名詞……………九五

三、數詞……………九七

四、動詞……………九四〇

五、形容詞……………九四

六、副詞……………九四六

七、接續詞……………九五〇

八、感動詞……………九五三

第四章。活用……………九六〇

一、通則……………九六〇

(イ)終止法——(ロ)命令法——(ハ)疑問法附反語

二、時格……………九六三

(イ)現在——(ロ)現在完了——(ハ)過去——(ニ)過去完了——(ホ)未來及未來完了——(ヘ)過去時に於ける未來

三、諸法……………九七一

(イ)間接叙法——(ロ)推量——(ハ)強意——(ニ)使動——(ホ)可能、受動——(ヘ)打消、禁止——(ト)必然——(チ)比況

四、敬語……………九六六

五、呼應……………九六八

第五章。助語……………九九三

一、通説……………九九三

二、各説……………九九五

語法要録

第一章 音

一、音符

國語の語音は左記二様の音符を以て表現せられる。

片	かな	平	かな						
ア	イ	ウ	エ	オ	あ	い	う	え	お
カ	キ	ク	ケ	コ	か	き	く	け	こ
サ	シ	ス	セ	ソ	さ	し	す	せ	そ
タ	チ	ツ	テ	ト	た	ち	つ	て	と
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	な	に	ぬ	ね	の
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	は	ひ	ふ	へ	ほ
マ	ミ	ム	メ	モ	ま	み	む	め	も
ヤ	イ	ユ	エ	ヨ	や	い	ゆ	え	よ

ラ リ ル レ ロ ら り る れ ろ
 ワ キ ウ エ ヲ わ ゐ ろ を

此音符は平安朝初期に於て案出せられたらしく(ン、んは後に追加せられた)、漢字の扁旁をとり、或は草書をくづして作つたもので、眞字(漢字)に對して假字とよばれる。借字の意の假字と紛れる虞があるから、本編に於ては「かな」又は「假名」とかくことにする。

かな發生以前に於ても我國固有の文字(所謂神代文字)が存したといふ説があり、記憶の便に供する爲め或種の形象文字を用ひたことも絶無とはいひ得られぬが、少くとも音符文字はなかつたものゝやうである。漢字輸入後之を國音の表示に専用するやうになつたのも他に之に優るものが存在しなかつた爲であらねばならぬ。漢字は「天」をアメ(又はアマ)、「國」をクニに充つるが如く正譯字を用ひ、或は正訓又は義訓をかりてミツルカモを見鶴鴨と書き、ケブリに火氣、アキ(秋)に金の字をあてるや

うな變則も行はれたけれども、正確を期するには音符を用ひる外はないので、字音によつて左記の如く國語の語音を寫した。

ア 阿〔記、紀、萬〕 婀鞍愛〔紀〕 安〔萬〕

イ 伊〔記、紀、萬〕 異、印〔紀、萬〕 以怡易壹〔紀〕 已移〔萬〕

ウ 宇汗〔記、紀、萬〕 于羽〔紀、萬〕 禹紆優〔紀〕 有雲烏〔萬〕

エ 延〔記、紀、萬〕 叡曳〔紀、萬〕 哀〔紀〕 衣依要〔萬〕 —— 上記の外記、紀、萬葉いづれも「愛」の字をエの假名に用ひて居るが、字音アイの轉訛か又は可愛の意の訓か不明。

オ 於〔記、紀、萬〕 淤隱〔記、紀〕 意〔記、萬〕 飲憶〔紀、萬〕 億〔紀〕 應〔萬〕

カ 加賀可我〔記、紀、萬〕 訶甲〔記、紀〕 迦何〔記、萬〕 河歌

箇俄〔紀、萬〕 伽智苛柯柯俄鶴介勾〔紀〕 架嘉

荷蛾家〔萬〕

キ 伎紀棄疑吉藝〔記、紀、萬〕 岐幾〔記、紀〕 貴〔記、萬〕 支

枳企祇氣〔紀、萬〕 擬儀蟻耆嗜嗜既機基〔紀〕 義

奇寄騎綺忌宜〔萬〕

ク 久玖〔記、紀、萬〕 具〔記、萬〕 苦遇〔紀、萬〕 句勾孔區

跪衢矩俱愚虞〔紀〕 君口九鳩丘求隅〔萬〕

タ 多陀太〔記、紀、萬〕 他〔記、萬〕 駄〔紀、萬〕 當〔記〕 哆黨

陀娜囊儀〔紀〕 丹〔萬〕

チ 知治遲〔記、紀、萬〕 智〔記、紀〕 地〔記、萬〕 致掇池馳

直咎尼泥妮涅賦賦〔紀〕 耻陳〔萬〕

ツ 都豆〔記、紀、萬〕 頭〔紀、萬〕 兎菟徒屠途咎弩逗

圖〔紀〕 通追〔萬〕

テ 帝亘〔記、紀、萬〕 氏底堤提泥〔紀、萬〕 傳殿〔記〕 耐

弟諦涅禰〔紀〕 庭天包尼田代〔萬〕

ト 等刀斗登度騰〔記、紀、萬〕 土杼〔記、萬〕 渡藤〔紀、萬〕

滕〔記〕 苦屠妬覩奴耐鄧劄徒廼杜圖〔紀〕 都澄

得特〔萬〕

ナ 那〔記、紀、萬〕 奈難〔紀、萬〕 乃娜儼〔記〕 南男〔萬〕

ニ 爾邇〔記、紀、萬〕 丹而尼〔紀、萬〕 儼禰耳泥貳〔紀〕

二仁耳人柔〔萬〕

ヌ 奴努怒濃〔記、紀、萬〕 農〔紀、萬〕 弩〔萬〕

禰〔記、紀、萬〕 泥〔記、紀〕 尼〔記、萬〕 泥〔紀、萬〕 倭俚〔紀〕

年〔萬〕

ノ 能〔記、紀、萬〕 乃〔記、萬〕 廼濃〔記〕

ハ 波婆〔記、紀、萬〕 播幡幡破〔紀、萬〕 潘籛巴絆麻麼

ケ 氣祁〔記、紀、萬〕 宜牙〔記、萬〕 介鷄礙〔紀、萬〕 下〔萬〕 稽啓居開戒概慨該導碍凱噎覽〔紀〕 家既計 奚谿價結夏雅〔萬〕

コ 古故胡許〔記、紀、萬〕 高去其基〔記、萬〕 姑居巨孤 己虛吳吾〔紀、萬〕 固願舉莒據五悟語娛誤馭 御〔紀〕 祐庫興後期虞〔萬〕

サ 左佐沙〔記、紀、萬〕 邪〔記、萬〕 紗作社射〔紀、萬〕 奢

〔記〕 娑非焚裝差嗟舍藏〔紀〕 散柴草積者殊謝

〔萬〕

シ 志斯師士自〔記、紀、萬〕 芝〔記、紀〕 紫〔記、萬〕 之寺

詩旨時〔紀、萬〕 色〔記〕 叱始茲嗣試資施伺巳尸

絶矢爾璽璽茸餌珥辭貳泊兒〔紀〕 思偈四子

此指司死緇趾次事慈信進新盡式水〔萬〕

ス 須洲周受〔記、紀、萬〕 殊酒〔紀、萬〕 州〔記〕 素莠輸

秀儒孺〔紀〕 寸珠數清授〔萬〕

セ 世勢是〔記、紀、萬〕 西齊〔紀、萬〕 齋細栖筮〔紀〕 施

暫〔萬〕

ソ 會蘇〔記、紀、萬〕 宗叙〔記、萬〕 素則序增〔紀、萬〕 襲

層贈即泝社助鋤〔紀〕 祖僧憎賊所俗〔萬〕

磨糜魔〔紀〕 方芳房把半伴盤薄泊蕪八馬伐

〔萬〕

ヒ 比斐肥卑毘備〔記、紀、萬〕 非臂鼻〔紀、萬〕 辟避

譬秘俳眉珥媚弭寐糜〔紀〕 悲飛必賓嬖妣婢

尾〔萬〕

フ 布夫〔記、紀、萬〕 賦〔記、紀〕 府敷〔紀、萬〕 服〔記〕 浮父

甫輔苻符俯赴譜步交矛騫霧〔紀〕 不副負否

扶〔萬〕

ヘ 幣閉倍部〔記、紀、萬〕 平辨〔記、萬〕 陛弊霸陪〔紀、萬〕

背沛杯蔽繫鞞珮磨每〔紀〕 敞反返遍便別〔萬〕

ホ 富煩〔記、紀、萬〕 本〔記、萬〕 保朋倍〔紀、萬〕 菩番蕃

品〔記〕 褒哀費報陪〔紀〕 凡寶抱方〔萬〕

マ 麻摩〔記、紀、萬〕 滿〔紀、萬〕 磨糜魔莽〔紀〕 末馬〔萬〕

ミ 美彌微〔記、紀、萬〕 味〔記、萬〕 未〔紀、萬〕 彌彌耳珥

寐〔紀〕 民尾〔萬〕

ム 武牟〔記、紀、萬〕 務夢〔紀、萬〕 尤〔記〕 鷓無謀〔萬〕

メ 咩賣〔記、紀、萬〕 米〔記、萬〕 迷梅味〔紀、萬〕 謎妹每

綿〔紀〕 馬面免〔萬〕

モ 母毛〔記、紀、萬〕 茂〔記、萬〕 暮墓漠謨慕莽望謀

〔紀〕文門問聞蒙忘勿物目木儼〔萬〕
 ヤ夜〔記、紀、萬〕也〔記、萬〕耶野移〔紀、萬〕椰掖益〔紀〕
 揚〔萬〕
 ユ由〔記、紀、萬〕喻〔紀、萬〕愈踰庚悠〔紀〕遊〔萬〕
 ヨ余用與〔記、紀、萬〕豫〔記、紀〕庸譽預〔紀〕餘容欲
 〔萬〕
 ラ羅〔記、紀、萬〕良〔記、萬〕樂〔紀、萬〕邏囉囉〔紀〕浪〔萬〕
 リ理〔記、紀、萬〕利梨里〔紀、萬〕離釐〔紀〕裡隣〔萬〕
 ル留流〔記、紀、萬〕琉〔記〕瑠屢樓廬蘆魯漏〔紀〕類
 〔萬〕
 レ禮〔記、紀、萬〕例〔紀、萬〕黎戾〔紀〕列烈連〔萬〕
 ロ呂〔記、紀、萬〕廬樓〔記、紀〕路侶漏〔紀、萬〕閻廬露
 魯稜〔紀〕
 ワ和〔記、紀、萬〕倭過瀉〔紀〕
 半章〔記、紀〕爲位謂〔紀、萬〕委萎偉威〔紀〕
 エ惠〔記、紀、萬〕衛隈、穢〔紀〕回〔萬〕
 ヲ袁遠〔記、萬〕乎、烏〔紀、萬〕鳴鳩弘廻愧〔紀〕呼惡
 越怨〔萬〕
 萬葉集に見える「則」は叫の變體であらうが、之をヲの假字

に用ひるのは字音ケウの訛か、又は他に理由があるのか之
 を詳にせぬ。
 右の外次の如く一字を以て二語音にあてたものがある。
 アム 淹〔記〕 イニ 印〔記〕
 イチ 壹〔記〕 ウツ 鬱〔萬〕
 オト 乙〔紀〕 オノ 礮〔紀〕
 オフ 邑〔紀〕 カガ、カグ 香〔記、紀、萬〕
 カク 各〔萬〕 カニ 干漢〔萬〕
 カヒ 甘〔記〕 カホ 杲〔萬〕
 カワ(又はカハ) 各考〔紀〕 クニ 郡君〔萬〕
 クリ 群〔記、紀〕 コチ 乞〔萬〕
 コム 感〔紀〕 金今〔萬〕 サガ 相〔記、紀〕
 サク 作〔萬〕 サツ 薩〔紀、萬〕
 サニ 雜散〔萬〕 サヌ 讚〔記、紀〕
 サヒ、サフ 匝颯〔萬〕 サム 三〔萬〕
 シキ 色〔記、萬〕 式拭〔萬〕 シク 鐘〔萬〕
 スク 宿〔記、紀〕 タキ 當〔記、紀、萬〕
 タニ 丹〔記、紀〕 且〔記〕 彈〔萬〕
 タフ 塔〔萬〕 タム 曇〔紀〕

チキ 直〔記〕 チヌ 珍〔萬〕
 ツク 筑〔記、紀〕 竺〔紀〕 ツミ 曇〔記、紀〕
 テム 點〔萬〕 トコ 徳〔紀、萬〕
 ナニ 難〔記、紀、萬〕 ナム 南〔萬〕
 ハカ 博〔記、紀〕 フク 福〔萬〕
 ヘリ 篇〔萬〕 ホム 品〔記、紀〕
 マツ 末〔記〕 マニ 萬〔萬〕
 ミヌ 敏〔萬〕 ムク、モク 目〔記〕
 ラカ 樂〔記〕 ラク 樂落〔萬〕
 ラム 濫藍覽〔萬〕 レム 廉〔萬〕
 ヲチ、ヲト 越〔萬〕
 盡く漢字を以て書いてある古典を解讀するについても、國語
 の語音を攻究する上に於ても、漢字を借り用ひた此音符は極め
 て重要であるから、之を劈頭に掲げたのである。

二、語音

言語を構成する音の單位を語音といふ(言語學二七五頁以下)。
 國語の語音はア、イ、ウ、エ、オといふ五つの母韻と、或る子音が
 之と結びついた若干音例へばカ、シ、ツ、ネ、フ、モの如きものか

ら成立する。子音は獨立しては——換言すれば母韻と結合する
 ことなくしては——言語の構成に用ひられることのないもので
 あるから、之を語音と稱へることは出来ぬ。従つて之が音符も
 存在せぬのである。

語音は決して上掲の五十音だけではなく、カ行、サ行、タ行に
 濁音があり、ハ行に濁音及半濁音がある外、キャ、シャの如き拗音
 も今では普く用ひられる。清(直)音以外の語音が上代には絶對
 に存在しなかつと斷言することは出来ず、打消のジ、ズの如きは
 かなり古くから用ひられたものゝやうであり、f ng khの如き
 子音が母韻と結合した語音も存在した形跡がある所を見ると、
 音符文字は最少限度に於て言語を書きあらはし得る程度を以て
 作製せられたものとせねばならぬ。其故に少しく語音の本質に
 ついて述べる必要がある。

母韻。イ、エにはア行のものとヤ行のものとがあり、ウにも
 ア行のものとワ行のものとがある。本初は勿論發音を異にした
 のであるが、記、紀、萬葉の編輯せられたころには既に其區別が
 なくなつて居たと見えて音符にあてた上記漢字から之を辨別す
 ることは、絶對に不可能ではないとしても、甚困難の業で、我
 我は唯原義上から區別し得るのみである。

上代に於ては一語中に母韻を二ツ以上重ねて用ひることはなかつた。換言すれば重母韻は存在しなかつたのである。母韻を以て始まる語が他の語と複合する場合にも、重疊を厭うて其一を省くか若くは連約が行はれたことは音便の項下に説く通りである。其故に固有の日本語中にはア及オ音を以て終るものは一つもなく、ウマイ(熟睡)、サカエ(榮)、マウス(申)の如くイ、エ、ウが他の語音に連る場合はいづれもヤ行のイ、エ及ワ行のウである。

子音。 カ行以下の語音が母韻と或る一つの子音との結合したものであることは上記の通りであるが、其子音は明白に指示することが出来ぬ場合が多い。ウクスツヌフムユルといふ語音を以て之に擬することは勿論荒唐無稽であるが、西洋の子音をかりて説くにしても、同一子音がア、イ、ウ、エ、オの五母韻に結合して同一行を構成したものと断定することの出来ない場合がある。例へばシ、チが上代常に si ti とのみ發音せられて居たかは疑問で、音譯にあてられた漢字を見ても shi chi 音が其ころ既に存したものとやうに思はれる。之を要するに邦語の子音は尙後日の研究にまたねばならぬ。

五十音の外にも尙若干の語音が存した形跡のある事は上記の

m, n, ng 韻もム、ニ、ウの如き語音に改められたのであるが、中世 n 韻に相當する音が弘通するやうになつたので、ン(ん)の假名が案出せられたのである。此かなはム又はヌにも代用せられるから、獨立語音と認むべきで、西洋の子音 n 又は「眞」「文」等の漢字の韻と同一視することは出来ぬ(言語學三九頁)。

促音。 促音も亦存在しなかつた。其故に漢字音の入聲を口誦するにも本初はフ、ツ(チ)、ク(キ)の如き音を添へたのであるが、原音の模倣に熟するに従ひ、純粹の國語にも此發音が適用せられ、母韻を極度に短縮して促音とすることもある。さりながら之は奈良朝以前の言葉には例のないことである。

三、音便

音便といふ言葉には廣狹二義があるが、本章に於ては語義を變改修飾することなく、單に發音の便宜による音韻の變化を音便と總稱し、之を韻通(同行變化)、音通(同列變化)、撥音便、捉音便、補音、約縮に細別して記述する。

韻通。 五母韻は彼此相通じて用ひられることがある。例へばウヲをイヲ(魚)、イヅクをイヅコ(何處)、カウベをコウベ(頭)タイをテイ(鯛)、タワヤメをタヲヤメ(手弱女)、マヲスをマウス

通りで、カ行の範疇に屬するものうちには kh を子音とするものもあつたらしく、ナ行とガ行との中間音なるリ子音の存在をも認めねばならぬ。ハ行は h の外に p f 子音より成る語音をも包括し(p は後世バ行として獨立した)、ヤ行のイ、エ及ワ行のウも其々獨特の發音を有したものと様である(言語學三九一―三九六頁)。

濁音。 濁音は上代から存在したが、今のアイヌ語、朝鮮語と同じく、音便としてのみ用ひられたらしく、従つて古語に濁音を以て始まるものはないのである。助語のガはナ(ノ)から分化したもので、打消のジ、ズの原語もシ、スであるが(第四章參照)、作爲を意味する動詞シ、スと區別する爲に濁音化せられたものと思はれる。ハカリ(計)を助語として用ひる場合にはバカリといひ、接尾語ヒとビ、キとギとが區別せられたのも(次章參照)同じ趣意によるものとせねばならぬ。恐らくは漢字音の濁母及清濁母を區別する爲に、意識して有聲音(濁音)を用ひた結果、獨立語音と見なされるやうになつたのであらう。古事記は清濁の別に意を用ひたやうであるが、本來音便による變化であるから截然たる區別は不可能であつた。書紀、萬葉には同一音符(漢字)を清濁音に兼用した例が極めて多い。

撥音。 上代には撥音は存在しなかつた。其故に漢字音の

(申)を轉呼することがあるが、之が爲に少しも意義に相違を生ぜぬのである。此變化には何等の準則はないが、アとヲ、イとウ又はエ、ウとヲとの相通が最も多く行はれるやうである。

音通。 同一母韻を有する語音、換言すれば五十音圖の同じ段にある語音は相通することがある。上記の如く濁音(半濁音)は本初は皆清音の音便で、今では獨立語音と見なされて居るけれども、尙明に音便として用ひられる場合が少くはない。例へばシン(新)ハシ(橋)をシンバシ、コン(根)ホン(本)をコンボンと發音するが如きは其で、之を連濁と稱へる。アラバのバ、行ケドモのドモも亦ハ、トモの連濁である(第四章參照)。

音通は多くは發音部位の近い語音の間に起り、同列に於て相通する。即ち

(イ)サ行とタ行。 例 アザ[○]||アダ(仇)、ハナチ[○]||ハナシ(放)、ヤト[○]||ヤソ(八十)。——東歌には天地をアメツシと唱へた例もある。

(ロ)バ行とマ行。 例 ケブリ[○]||ケムリ(煙)、スサビ[○]||スサミ(荒)

(ハ)タ行とナ行。 例 イタダキ[○]||イナダキ(頂)、ハタハタ[○]||ハナハダ(甚)

(ニ)ナ行とラ行。 例 ツヌカ(角鹿)ツルガ(敦賀)、ハンマ
 (播磨)ハリマ、スnga(駿河)スルガ、サカリ(盛)サカ
 ン、ノコリ(残)ノコン。

動詞アリの各活用形がンと發音せられるのも亦此音便によ
 るものである。例へばユエ(故)アリはユエン(所以)、無クア
 ラバ、有ラズアラバ、爲テアリケリは無クンバ、有ラズンバ、爲
 テンゲリとも轉呼せられるのである。

(ホ)ワ行とヤ行。 例 サヤ||サワ(騒)、ヨシヤ||ヨシエ(縦)
 (ヘ)ヤ行とラ行。 助動詞のエ(得)がレとなり、見ヨを見ロと
 いふ外、方言ではツヨイ(強)をツロイ、龍の髯(草名)をヨゴ
 髯ともいふ。

(ト)ハ行の語音はハを除くの外、他語音に連結するに當り、子
 音を失うてイ、ウ、エ、オの如く發音せられる。 例

イヒ(飯)||イイ、トフ(問)||トウ、ハヘ(蠅)||ハエ、シホ
 (鹽)||シオ。

ア行の音がヤ行、ワ行の音に轉ずるのも亦普通といひ得られる
 が、尙正しくは後記補音に屬するものである。右の外左記の特
 種の音通がある。

(イ)ハとワ。 例 ハツカ||ワツカ(僅)、サキハヒ||サイワイ。

撥音便。 固有の撥音の外に、音便によつて普通の語音がン
 と轉呼せらるることがある。ワラハベ(童)をワランベ、ネモコロ
 (懇)をネンゴロ、ヌキイヅ(擲出)をヌキンヅといふが如きは其
 例で、死ニテ、讀ミテ、飛ビテを死ンデ、讀ンデ、飛ンデと轉呼す
 るのも亦此音便に屬する。

促音便。 上記撥音便と同じく、固有の促音の外に、普通の
 語音が音便によつて促められることがある。ヲヒト(男人)をヲ
 ット(夫)、タフトシ(貴)をタツトシ、ヤツコ(家子)をヤツコ
 (奴)、勝チテを勝ツテ、引キ立テをヒツタテ、トク(疾)トをト
 ットといふが如く、通例は漢字音の入聲の轉寫に用ひられる語
 音、即ちヒ、フ、ツ、チ、キ、ク等が促音化するのであるが、動詞語
 尾のりも亦促音となることがある。例へば欲リスをホツス、降
 リテをフツテ、アリタリをアツタリといふ。助動詞のタリ、ケリ
 が口語でタ、ケとのみ發音せられるのも、極度に促めた結果リ
 の音が消えたので、之を省略したのではあるまい。其故にダツ
 ケ(タリケリ)とつゞける場合には、リの音が促音の形に於て再
 現するのである。

補音。 國語では音便の爲に語音を補ふ事は絶無であるが、
 母韻の重疊を避ける爲に後續母韻をヤ行又はワ行に轉じて用ひ

(幸)、ワカ||ハカ(墓)。——東歌にはワカレ(別)をハカレと
 訛つた例もある。口語で人ハを人ワと發音するのも此音便に
 屬する。これは恐らくはハがfaに近く發音せられた爲であら
 う。waはfaの有聲音である。

(ロ)カ行とア行。 不定代名詞のカ(彼)はア(彼)とも稱へられ
 (次章代名詞の項下参照)、キサキの宮をキサイの宮、行キテを行
 イテ、寒クシテを寒ウシテともいふ。但しケ、コをエ、オと轉
 呼した例はない。

此音便は上記の如くカ行の子音中にkh音が存し、k音を失
 うて單にhとなり、更に其發音が聞えなくなつた結果と思は
 れる。漢字河、寒、漢、行、好、和、禾等が朝鮮では常は行に發
 音せられるのもkh子音が存在した一證である。

(ハ)ムとン。 ンは上記の如く第二次生の語音で、撥音のムを
 も代表し、爲ム、行カムをセン、ユカンといふやうになつたの
 である。

韻通の行はれた語音が更に普通變化をも受けることがある。例
 へば言ヒタリを言ウタリ、飲ミテを飲ンデと唱へるのはイヒが
 一旦イフとなり、更にイウと轉呼せられ、ノミがノムと轉じ、
 更にノンと變化したのである。

た。換言すれば兩母韻の中間に一子音を補うたのである。此は
 固有の國語には殆ど例のないことであるが、漢字音譯に於てあ
 らはれ、スイ(水)、ルイ(類)等はルキ、ルキと發音せられ、シ
 ア、クア、リオ等とすべき拗音をもシヤ(舍)、クワ(火)、リヨ(旅)
 等と轉呼した。

漢語ゼンアク(善惡)はゼンナク、サムキ(三位)はサムミ、ウン
 ウン(云々)はウンヌン、クワンオン(觀音)はクワンノン、セツイ
 (雪隠)はセツチンの如く唱へられる。此は母韻をヤ行又はワ
 行に轉呼することの代りに、前續語音の子音m n tを補綴した
 もので、一種の類化ともいひ得る(言語學三七頁)。

約縮。 或る種の言葉は音便によつて短縮せられることがあ
 る。ニハ(庭)をバ(場)、フミヒト(文人)をフピト(史)、ホシシ
 シ(乾肉)をホジシ(脯)、オホキミマチ(大君町)をオホギマチ(正
 親町)と唱へる類で、簡約せられた形には濁音を含有することを
 例とするから、假に之を約濁と命名する。ナニツをナゾ(ナド)、
 ノリタマハク(曰)をノタバクといふのも之に屬する。行ケド、
 見レド等のドも亦トモを縮めたもので、助語のデはシテ、ニシ
 テ、モチテ又はヨリテの約濁、打消に用ひられるデはズテの共
 である。

國語は母韻の重疊を不可としたので、複合の爲に二母韻が相踵ぐ場合には轉呼の必要があることは既に述べた通である。之が爲には其一を除くか、若くは二母韻に代へるに他の一母韻を以てするか、二者いづれかの方法を執らねばならなかつた。前者は又後續母韻を省く場合と、前續母韻が除かれる場合とに分れた。

後續語の語頭がア、イ、ウの如き接頭語(次章參照)である場合には複合に際し、之を除くことは當然で、野麻(ヌ、アサ)はヌサ、假廬(カリイホ)はカリホ、青馬(アラウマ)はアラマといふのであるが、然らざる場合にも後續語頭の母韻は省畧せられることがある。例

- 長雨(ナガアメ) ナガメ
- 御軍(ミイクタ) ミクサ——(萬葉二〇卷)
- 忍海(オシウミ) オシミ——押見ともかく
- 汝を置きて ナヲキテ——(記上卷)

ト云フがトフ、ト思ヒがトモヒとなるのも亦此例に屬する。助動詞アリも亦他語と結合する場合にはラム、ラン、ラレ、ラクの如く上畧して用ひられる。——ナリ(有)のアは或は接頭語であるかも知れぬ。

前續母韻が省かれた場合には遊離した子音は後續語頭の母韻と結合して一語音を形成する。例

- 吳の藍(クレノアキ) クレナキ(紅)
- 我が家(ワガイヘ) ワギヘ
- 荒海(アラウミ) アルミ
- 中臣(ナカツオミ) ナカトミ

助動詞ナリ(ニ、アリ又はノ、アリの約)、タリ(テ、アリ又はト、アリの約)、ケリ(キ、アリの約)、カリ(ク、アリの約)、ザリ(ズ、アリの約)も亦之に屬し、動詞ハヒ、アヒ等が他で動詞に結合する場合にも同様の連約が行はれるのである(第四章參照)。

此方式は漢語の反切法と軌を一にするものであるが、國語に在つては決して之を以て通則とすることはなく、左記のやうに二母韻に代ふるに他の一母韻を以てすることがある。

- 行キアリ 行ケリ 乾シアリ ホセリ
- 飲ミアリ 飲メリ 降りアリ 降レリ
- ト云フ テフ

アフ(逢)、タヒ(鯛)、エフ(醉)等が音便によつてアウ、タイ、エウとなつた結果、二母韻が重疊するのでアフはオー、タイはデー、エウはヨーの如く轉呼せられる。此も亦此音便に屬するものと

見るべきである。

附記。支那の反切法の如く二語音を約して前續字音と後續母韻とを結びつけることは國語に在つては例外である。住ミハヒがスマヒ、壽キ、ハヒがホガヒとなるのはハ行の語音がア行に近いからで、ヤ行、ワ行も往々之に準じて連約せられるのであるが、其他の語音間には反切は行はれぬ。例へばツバクラ(燕)を約してタカ(鷹)とすることは絶對にあり得ぬのである。先學が反切法を語釋に濫用し、更に其から逆推して一語音を二語音に分拆することが可能であるとした(之を延言又は伸言というた)のは甚しい妄誕で、之が爲に國語學の發展を阻止したことは既に拙著「日本語學」に詳論した通りである(二九頁以下)。

第二章 語構成

一、通 則

外來語を除き、言葉の多くは比較的少數な原語から分派せられたものである。我々が單語と見なして居る短い言葉も仔細に

検討すると、更に簡單な原語に復元することが出来る。例へばユフベ(夕)はユフ(夕)とへ(方)との二語から成り、ユフは亦ヨ(夜)フ(經)の轉呼で、——其故にヨヒ(宵)ともいふ——之に對立するケ(日)フ(經)は今日の意に用ひられるのである。右の如く二つ以上の原語を結びつけて一語を構成する外に、母韻變化によつて新語が分化せられる事がある。一二例を擧ぐればメ(芽)、ミ(實)、ム(産)は全然別語とは思はれず、ヒ(秀)、ホ(穂)、ハ(葉)、フ(生)も同一源から出たものゝやうである。ヤ(矢)はエ(枝)から分化し、轉じてイ(射)といふ動詞となり、射器を名づけてユミ(弓)と稱へる。大體に於て原語から新語が導かれる方式は此二者を出でず、此のやうにして言葉が作られることを語構成といふのである。

言葉の構成を明にすれば原語を検出することが容易で、原語を知れば原義は自ら明になるから、語學の研究はまづ之から始めねばならぬ。國語に於ては上記二方式中第一のもの即ち二つ以上の原語の結合による構成が大部分を占め、母韻變化の方式は動詞形容詞の活用に於ては大に發展したけれども、名詞としては比較的例が少いから、之を次章用言の項下にゆづり、こゝでは専ら結合様式について記述する。

結合語には三語以上から成るものもあるが、原則としては先づ二語が結合し、更に其に他語が結びつくものであるから、二語の結合様式を説けば之を以て類推する事が出来る。結合分子は各別の二語である場合と、同一語が重疊する場合とがある。通例前者を複合語と呼び、後者を疊語と稱するのであるが、便宜の爲め本章では先づ疊語から説くことにする。疊語は名詞に在つては複數となり、形容詞に在つては意を強める爲に用ひられ、動詞に在つては動作行爲の反復を表示する。例

- (イ) 名詞。 人々 國々 山々 木々 日々 夜々
- (ロ) 形容詞。 遙々 久々 黒々 高々 更々
- (ハ) 動詞。 行く行く 見る見る

二語音以上より成る原語に在つては、右の外に語頭又は語尾の語音のみを重疊することがある。疊語はツヅキ(續)、ハハキ(等)、コゴト(言辭)、ヲヲリ等の如く、ツギ(次)、ハキ(掃)、コト(言)、ヲリ(居、折)の語幹のみを重ねたもので、トホトホシ(遠々シ)、カルガルシ(輕々シ)等も之に屬する。疊尾語は之に反し、母韻を以て始まる語が連約によつてアサナサナ(朝な朝な)、イトド(最々)、ウツツ(現々)のやうに語尾のみ重疊するもの、並に接尾語を反復したコトド(言辭)、シミ(繁密)、ツララ(連々)の

「結び」であらねばならぬ。

「かゝり」が常に先行するといふことは國語の語排列の原則で、結合語にあらすとも二つの語が連れて用ひられる場合には常に此法則に支配せられるのである。西洋語の前置詞に相當する語が國語に於ては後置せられることを例とするのも、助動詞が動詞に後續するのも此理由にとづくもので、文構成の根本則はこゝにある。本編では作文法を説かぬから、此機會に於て之を一言する。

複合に際しては前章音便の項下に述べたやうに、往々連約及連濁が行はれる。又上記疊頭語と同様に語幹のみが複合に用ひられる場合も少くはない。例

- サナヘ(挿苗)。——サはサシ(挿)の語幹
- トタル(富足)。——トはトミ(富)又はトヨ(豊)の語幹
- ヌシ(塗師)。——ヌはヌリ(塗)の語幹
- カナ(假字)。——カはカリ(假)の語幹
- ヨゴト(壽詞)。——ヨはヨキ(佳)の語幹

結合分子は本質上いづれも有意義の語であるべき筈であるが、或は獨立を失ひ、又は廢用となつた爲に、今では原語と認められぬものがあり、又結合の結果其語義が多少變化するものがある。此種の接合分子は通例接合語と呼ばれ、語頭に接着するものを接頭語といひ、語尾に添へられるものを接尾語と稱へる。

如きものをいふ。疊頭、疊尾の結果は上記の例によつても明なるが如く、往々意義に多少の變化を來す事があるのである。

全然別個の二語を結合する場合には二つの組合せ方がある。即ち甲、乙の順序に排列するか、或は此と反對に乙、甲とするかである。其によつて意義に相違を生し、時としては其一方は言葉として成立せぬことがある。例へばノミ(飲)とミヅ(水)との二語を結合する場合、ノミミヅといへば飲料水の義と解せられるが、之を轉置してミヅノミとすると、水を飲む容器といふ意になる。又シホミヅ(潮水)とはいふが、ミヅシホと排列しては意をなさぬ。此は理由のあることで、文章に起承轉結があるやうに、言葉の序列にも思想を展開するものと、之を收結するものがあるからである。上例のノミミヅの場合についていへばノミ(飲)といふ語を以て展開した思想をミヅ(水)を以て收結したので、此關係を私は「日本語學」中に「係り」「結び」といふ言葉を以て表示した(同書二頁)。此場合外國語に於ては、必しも「かゝり」が常に先行するものと限られず、例へばフランス語ではロー・ポタブル(飲用)といひ、決してラ・ポタブル・オー(水)といふ之に反して、ミヅノミ(水呑)にあつては、湯呑、酒呑、茶呑といふ語もあるから、ミヅが「係り」で、ノミは之を收結する語、即

「ウチ聞く」「タチ別れ」「サシ出す」「トリ亂す」等のウチ(打)、タチ(立)、サシ(差)、トリ(取)の如きは語勢を強めることを目的とし、語義に重きを置かぬものであるから、接頭語といひ得べく、「物ドモ」「友ダチ」「殿バラ」「上ツガタ」のトモ、タチ、ハラ、カタ等も共、達、原、方とは意味を異にするから、接尾語と見ることが出来るが、單語としても用ひられるので、接合の場合之を判別することは容易である。然るに獨立を失うたもの若くは希用(廢用)の語に在つては熟合して原語の觀を呈するので、イキホヒ(勢)のイ、タマヒ(給)のヒが接合分子であることに氣づかぬものが多い。之が爲に言葉の分析と原語の検討とになやみ、正しい語義を求め得ぬ場合が多いやうであるから、本章に於ては特に單語としては獨立し得ざる(或は廢用又は希用の)接合分子を詳述することにした。

二、接頭語

ア。原義を明にせぬが、恐らくは發聲の便宜上添へられたのであらう。例

- イロ(色)——アイロ コガレ(焦)——アコガレ(憧憬)
- マタ(又)——アマタ(多數) マネク(間無)——アマネ

ク(普) ツマヤ(尖屋) — アツマヤ(四阿)

麻の原語はサで(八重山語では今もスといふ)、此接頭語を冠して通例アサと稱へられるが、野生をヌサ(野麻)、圃生をフサ(生麻)とよび、幣ヌツ、總フツは其轉義 — 麻緒を約してソともいふのである。此接頭語は支那、朝鮮及ミクロネシア諸島語にも用ひられる。

イ。朝鮮語のイと同じく、原義は「此」であらうと思はれるが(次章代名詞の項下参照)、國語に於ては語勢を強める爲に用ひられる。例

ヤ(八) — イヤ(彌) キホヒ(鏡) — イキホヒ(勢)
シ(磯) — イシ(石) マダ(尙) — イマダ(未)
モ(婦) — イモ(妹) ヲ(魚) — イヲ(魚)

此接頭語は動詞の活用形にも接合し、「イ取らむ」「イ切らむ」「イ隠り」「イかき渡り」の如き用例が古歌に數多く見える。

ウ。原義は「大」である。恐らくはオフの約轉で、ワ行のウに屬するのであらう。接頭語としても本初は此意味に用ひられたものゝやうである。例

ウマ(馬)。 — マは神、人以外の有情(生物)を意味する原語であるから、大マに對して少なるものをコマ(駒)とい

同様に、大の意のオを接頭してオモと稱へるやうになつたのであらう。

オヤ(親)。 — ヤは「屋」の義。大屋に住む人といふ意を以て尊屬に對する稱呼に用ひられたものと思はれる。父母にも祖先にも共通であるが、古典には母親の義に用ひた例が多い。

オキナ(翁)。 — キはコ(子)の轉呼で、男子の通稱。ナは敬語である。

オミナ(女)。 — ミはメ(女)の轉呼。ナは敬稱で、老婦人を尊んでオミナとよび、オウナと訛つて今も媼の意と解せられるが、原語オミナは女人の通稱となつた。

オサカ(大坂)。 — 關西では大坂(市)をオホサカとはいはず、オサカとのみ稱へる。大和の忍坂(大坂の意)も記紀にはオサカと假字書せられて居る。

附記。「大」に對するコ(子、小)を接頭した語は極めて多いが、獨立した單語として存立し、之を辨別し易いから、接頭語中にはあげぬ。

オウ。漢字「御」の朝鮮音であるが、夙に移入せられて美稱ミに代用せられた。 — オホミ(大御)の轉オホムをオンと訛り、

ひ、晝間眠るコマをネコマ(猫)、マの神をマカミ(狼)ともいふのである(語誌參照)。

ウシ(牛)。 — シはシシ(宍、鹿、猪)の原語で、食物の意から食用獸の稱呼に轉用せられ、鹿をシカともカのシシともいひ、カモ(麩)を産する獸をカモシシ(山羊)ともいふのである。ウシは大獸の義によつて命名せられたのであらう。

ウヲ(魚)。 — ヲは漢字「魚」の朝鮮音であるが、夙に我國に移入せられ、ナ又はマナ(魚)に代用せられた。其故に上記の如く接頭語イを冠してイヲとも稱へ、其大なるもをはウヲといふのである。記には大魚をオフヲと假字書してある。

ウミ(海)。 — 大水の意。鹹水にも淡水にも用ひられる。
ウメ(梅)。 — 大實の轉呼。
ウシロ(背)。 — 大尻の轉呼。

オウ。「大」の意のオフ(オホ)は又約せられてオとなり、接頭語的に用ひられる。例

オモ(面)。 — モはセ(脊)に對する原語で、「面」の意をも有するのであるが(語誌)、ウシロが背の意に用ひられると

更に之を略してオとしたといふ舊説は誤りである。斯の如き變化は國語にはあり得ぬ(言語學三頁) — 此接頭語はオ宮、オ上、オ髪、オ願ひの如く現代語に於ても普く用ひられ、撥音便によつてオンと轉呼し、オン大將、オン前などもいふ。口語では字音によりゴと發音し、ゴ前、ゴ殿、ゴ飯、ゴ免の如くも用ひられる。

カ。原義は「日」で、アカ(赤)、カガ(赫)、イカ(嚴)等の原語であるが、接頭語としては「顯著」の意に用ひられる。例

カ黒シ カ精シ カ細イ カ弱イ
右の如く語義上形容語に接頭することが多いが、古歌には「カ寄りあはば」と用ひた例もあり、カヨヒ(通)も亦ヨビ(呼)に此カを接頭したもので、本初はヨビ又はヨバヒ(娉)と同義に用ひられたものゝやうである。

ケ。上記カの轉呼で、「ケ長し」「ケ爽が」の如く用ひられ、口語に於ても「ケおされる」「ケだるい」などいふ。之をキへ(來、經)の約なりとする説は論ずるに足らぬ(言語學三頁)。此語はケシ(シは後記形容語尾)の形に於て形容詞としても用ひられたらしく、今もケシカラズ(ケシク、アラズの約)といふ語が残つて居る。之に恠(異)の字をあてるものがあるが、其

では意味が正反對になる。

サ。サは促し進める意味の感動詞であるから、接頭語としても發聲を促す爲に用ひられる。例

サ霧 　　サ雨 　　サ山 　　サ蓆

サ牡鹿 　サ蕨 　　サ衣 　　サ夜中

サ渡り 　サ迷ひ 　サ走り 　サもらひ(侍)

此サを狭、小、細、近、早等とかくのは當字で、狭、些にもサといふ訓はあるけれども、右諸語には少しも其意味は含まれて居らぬ(言語學三七頁)。

サ。サシ(挿)の語幹で、左の諸語にのみ用ひられる。

サ月。——挿苗月の意。略々舊曆の五月にあたるから、五月ともかく。

サ苗。——挿苗即ち苗代田から移植する苗をいふ。早苗とかくのは當字である。

サ小女。——挿苗女の意。早乙女とかくのは當字で、ことに乙女はかな違ひである。

サ開き。——挿苗開始

サ上り。——挿苗終了

サミダレ(梅雨)を五月雨とかくのは此月(舊曆)に降ることを

板擧の意に用ひられるが、古歌に「身をタナ知りて」などとあるのは直中を知るといふ意で、今の言葉でいへば内省である。直長の意を以ては「霞タナ引」「タナ曇り」の如く用ひられ、トノとも轉呼せられる。

タ枕、タ巻、タ綱(繩)、タ助、タ力等のタはテ(手)の音便で、原義を存して居るから、普通の複合語と見るを至當とする。タモトホリ(徘徊)は「立ち戻り」の意、タクハ(蓄)は「足加へ」で、同じく複合語である。

マ。マはマコト(誠)、マゴコロ(赤心)の如くも用ひられ、口語に於ても「マに受ける」「本マに」といへば「眞」の意と了解せられる。接頭語としてのマも亦「眞」若くは「純」の意で用ひられたものと見なすべき場合がある。例

マナ(魚)。——ナは今では専ら「菜」の意と了解せられるが原義は魚、菜、果其他の食品の總稱で、サカナ(肴)、ナムラ(魚群)、タチバナ(橘子)の如く用ひられた。其故に特に魚類を表示する爲にマを冠してマナといふやうになつたのである。口語には餘り用ひられぬが、マナ板(俎)といふ語が弘通して居る。
マカモ(鴨)。——カモは鳥鴨類の總稱であるが「語誌」、其

例とするからであるが、五月にサの訓があるわけではなく、語義は「サ雨足」で、サミダレは其轉呼である(言語學三七頁)。附記。サのみ、サ程、サばかり等のサは「然」の意で、今も尙獨立單語として用ひられる。

タ。タタ(唯、直)の原語で、ヒタの意であるが、接頭語としてはウチ(打)、トリ(取)、サシ(差)等と同じく原義には重きを置かず、單に語を強めることを目的とする。例

タ童(童) 　　タ然(確) 　　タ平(平) 　　タ易く 　　タ弱く

タ祈(頼) 　　タ謀(欺) 　　タ走り 　　タ太き(尊)

左の諸語の如きは原語であるかのやうに見えるが、尙此タを冠した結合語である。

タマ(玉)。——マはマル(丸)、マタ(全)、マト(的)、マトカ(圓)等の語幹で、直圓の意。タミ(廻)、タメ(撓)は之から分化した語である。

タカ(高)。——カはカミ(上)の語幹であるから、タカは直上を意味する。鷹、嶽、竹、丈等も之から出たのであらう。タワ(撓)。——ワは輪の意。トヲとも轉呼せられる。タナ(棚)。——ナはナカ(中)とナガ(長)との語幹であるから、タナは「直中」又は「直長」を意味する。口語では専ら

一種、俗に青頸とよぶものをマカモと稱へ、アチカモ、タカベ等と區別した。丹頂の鶴をマナヅル(ナはノと同語)とよぶのも同じ趣である。

マユミ(弓)。——ユミは射器の總稱で、上代にはハジユミ(彈弓)、ツクユミ(弩)其他色々の種類が存したから、其最も普通な型をマユミと呼ぶやうになつた。即ち今も用ひる大弓、半弓のことである。

マミヅ(水)。——鹹水に對して淡水をマミヅといひ、清水をマシミヅと稱へる。

マソボ(丹)。——ソボはソボニ(染土)の略で、赭土又は赤色礦物の總稱であるから、特に丹砂を指示するはマソボと稱へたものゝやうである。

右によればマは意味の廣い名稱中から或る典型的のものを區別する爲に用ひられたものゝやうであるが、マ牡鹿をサヲシカと同義に用ひ、マ熊野をミクマ野ともいふ所を見ると、「眞」又は「純」の意とのみ解することは出来ぬ。案ずるに此語音は感動詞のマアと同じく自然の發聲で、發音の便を助け、且語意を強める爲に接頭せられたもので、其結果「眞」「純」の義をも生じたのであらう。マコトといふ語も古事記に本牟智和氣

命マコトトハズとあるのは物いひ給はぬといふことで、コト(言)と同義に用ひられて居る。マゴコロ(赤心)、マサ(正)の如きもココロ(心)及サ(然)に其意があるので、マを獨立して「真」の意に用ひた例は古書には見えぬ。左に此接頭語が明に強意の爲に用ひられたと思はれる數例をあげる。

- マツブサに取よそひ。——ツブサ(委曲)
- マサキクませ。——サキ(幸)くませ
- マカナシミ。——カナシ(愛)み
- マクハシ——クハシ(精美)

マ。金、マ鹿兒矢、マ木綿、マ葛等のマも之に屬するもので、黒は既記のカ黒と大差はない。

此マは口語では促音便または撥音便を用ひ、マッ白、マッ直、マッ先、マン丸などといふ。之に純白、真直、最先、正圓等の字をあてては妨はないが、マッ最中、マッ逆さま、マンマン中の如く漢字に譯することの出来ぬ場合もあるのである。

附記。マといふ語には種々の意義があるので、他語と結合した場合往々上記の接頭語と誤たれることがある。参考の爲に左に若干例を掲げる。

- (イ) 兩の意のマ。例 マテ(左右手)、マソデ(兩袖)、マ

帆(片帆に對する言葉で兩帆を意味する)、マカイ又はマカヂ(左右兩舷に装着するによつて此名がある)。

- (ロ) 目の意のマ。例 マユ又はマヨ(眉)、マブタ(瞼)、マタタキ(瞬)

- (ハ) 馬の意のマ。例 マ草(秣)、マ銚(耙)、マセ(馬せき用の垣)

- (ニ) 間の意のマ。例 マ違ヒ、マ遁る(免)
- (ホ) (ミ) (水) の轉呼のマ。例 マコモ(菰)

上記のマの轉音と思はれるミも亦接頭語として用ひられる。例

- ミ山 ミ雪 ミ空 ミ中 ミ吉野 ミ熊野

之に深山、深雪、御空等の字をあて、「深」又は「御」の意であるかのやうに説くのは誤りで、ミ中は口語のマン中にあたり、ミ熊野はマクマ野とも稱へられることは上記の通りである。

語原を詳にせぬが、最も古い美稱で、通例御の字をあてる。例

- ミカド(御門) ミソ(御衣) ミハカシ(御佩)
- ミコ(皇子) ミキ(御酒、神酒) ミヨ(御代)
- ミツギ(御調、貢)

此ミにオホ(大)を冠したオホミはオホムとも轉呼せられ、最高美稱として至尊又は之に準ずべき神及貴人に對してのみ用ひられる。例

- オホミ身 オホミ手 オホミ屋(大宮)
- オホムベ (大御饗)

上記オ(御)の撥音便オンを此オホムの約縮と解することの誤りなるは既に述べた通りである。

附記。水、三等が他語と結びついた水滌(禊)、水際、三重等は普通の複合語と見るべきである。

ヲ。原義は「小」であるが、ヲシの形に於ては愛惜の意に用ひられ、轉じて美稱となつたものゝやうである。例

- ヲ草 ヲ岫 ヲ簾 ヲ野 ヲ田

之に「小」の字をあてるのは決して不當ではないが、小さいといふ意と解してはならぬ。

附記。ヲには「小」の外に雄、長、丘(峯)、尾、緒等の意があり其の他語と結びついたものは右の接頭語と誤たれることがあるが、語義を稽へて之を辨別せねばならぬ。左に其若干例をあげる。

- (イ) 小の意のヲ。例 ヲ川 ヲ舟 ヲ門 ヲ止み

- (ロ) 緒の意のヲ。例 ヲ鈴
- (ハ) 尾の意のヲ。例 ヲ花
- (ニ) 雄又は男の意のヲ。例 ヲ健び ヲ松

三、接尾語

接尾語には接合の結果名詞形を生ずるものと、形容詞又は動詞となるものがある。便宜上之を區別して記述する。

- (イ) 名詞語尾

カ(ク、コ)。「處」といふ意である。獨立語として用ひられた例はないが、ヲカ(岡)、ホカ(外)、ナカ(中)、サカ(坂)、クガ(陸)、ミアラカ(御舍)等のカが「處」の意であることは疑の餘地もなく、現代語でもアリカ(在所)、スミカ(住所)、ヤマガ(山處)、カクレガ(隱處)の如く用ひられる。

此カはコとも轉音してトコ(床)、ソコ(底)、ヨコ(横)、ミヤコ(都)の如き語を生じ、——トコロ(處)も亦トコ(地盤)に接尾語ロを連ねたものであらう——代名詞に接合してココ(此處)、ソコ(其處)、カシコ(彼處)、ドコ(何處)、イツコ(何處)といふ。イツコは又音便によつてイツクとも稱へられる。

附記。三日、五日、十日などいふカは勿論「日」の意で、古語

では太陽及曆日を表示するにヒトカ(ケとも轉呼せられる)との二語を併用したのであるが、カは廢れて曆日を計へる場合にのみ其名残を留めたのである。

ク。代名詞コ(此)から分化したものらしく、接尾語としてはコト(事)と同じく動詞から抽象名詞を作るに用ひられる。例へば「行くこと」を古語ではユカク。「戀ふること」を戀フラク。「遠きこと」を遠ケクと稱へた。今では此語法は全く廢れたけれども、尙イハク(曰)、オモハク(思)の如き熟語として面影が残つて居る。此接尾語は動詞の各時格に連ねて用ひることが可能で、従つて動詞の活用を述べた後に之を説くことを便とするから、助語中に加へて第五章に於て再述する。

ケ。氣の字をあて風ケ、雨ケ、露ケ、面白ケ、苦シケ、悲シケ、欲シケの如く用ひる。古典には用例が見えぬが、「心ありゲに」を「心あるカニ(又はガニ)」ともいひ得られるから、疑問助語カの轉呼と見るべきであらう。

サ。(一) 形容語尾シ(其項下参照)から分化したもので、サ(然)、サマ(狀)の意を含み形容詞に接着せられる。此形は「花の赤サ」「道の遠サ」「聞くが悲しサ」の如く述語的にも用ひられるのであるが、尙一種の體言で、主語としては其形容詞の含蓄する

るので、結合語とは思はれぬものもあるが、尙次の如く分解することが出来る。

マタ(又)。——マはモ(助語)の轉呼。

ハタ(將)。——ハは助語である。

モとハとは相對と絶對を表示する助語であるから(第五章参照)、タを接合した結果接續詞となつたけれども、意義に於ては變りはなく、マタは併立を意味し、ハタは對峙を表示するに用ひられる。

ムタ(共)。——此ムも亦モ(助語)の轉呼で、マタとは用途が違ふけれども、畧々同義である(語誌)。

アシタ(旦)。——アシはアサ(朝)の轉呼。

カラダ(身軀)。——カラはヤカラ(共屋團體)、ウカラ(氏族團體)の如くも用ひられ「體」の意がある。

ココダ(許多)。——ココは古韓語コ(巨)の疊語で、「九」の意もあるが(文章數詞の項下参照)、ヤ(八)がイヤ(彌)の義に用ひられるやうに、多數をも表示する。其故にコキン(ココシの轉呼)ともいふので、シは後記の如く形容語尾である。——萬葉集の東歌にはサハ(多)をサハダとした例がある。

る意義の程度を表示する。例

廣サ。幾干。寒サ。加はる。悲シサも一しほ

あらゆる形容詞は赤サ、黒サ、重サ、輕サ、多サ、長サ、狭サ、清サ、賢サ、大きサ、忙しサ、悔しサの如く、いづれも此形をとり得る。

サ。(二) 「頃」「間」等を意味する原語で、サタ(タは後記接尾語)の形に於て、若くはシダと轉呼して、古は此意味に用ひられた「語誌」。接尾語としても次の例の如く此原義を保有する。

行くサ。來サ。歸るサ。逢ふサ。離るサ。

口語に於て之を行きシナ、來シナ、歸りシナといふのは上記シダが更に轉訛したものと思はれる。

右の如く接尾語としては通例或る種の動詞に添付せられて名詞形となるのであるが、ヒサ(日間)、ユフサ(夜間)——口語ではヨサといふ——のサも之に屬するものであらう。ヒサが「久」の意となつたのは轉用である。

タ。(一) 接頭語タと同じくタダ(唯)の原語であるが、接尾語としても原義に重きを置かず、語意を強める爲に添付せられるものゝやうである。例へばエ(枝)をエダというても語義に實質的變化を與へぬ。之を接尾した言葉は人の耳によく熟して居

タ。(二) カタ(方)のタで、ト(處)から分化したものらしく、後記の如くチともテとも轉呼せられる。タの形に於てはアナタ

(彼方)、ソナタ(其方)、コナタ(此方)、カナタ(彼方)の如く用ひられる。——ナはノと同語(第五章参照)——ヒナタ(日向)も亦日ノ方(カタ)の意である。

チ。上記タの轉呼で、アチ(彼方)、ゴチ(此方)、ソチ(其方)の如く用ひられる。次の二語のチも亦之に屬する。

ヲチ(遠)。——ヲの原義は上記の如く「小」であるが、遠方のものは小く見えるから、ヲチといへば「遠」の義となるのである。古語ではヲチは年少の意に用ひられ、「若かへる」ことをヲチカヘルとも、うた。ヲトメ(少女)、ヲトコ

(少男)のヲトも亦此ヲチの轉呼である。

ノチ(後)。——ノはノビ(伸)の語幹で、延長を意味する。

テ。上記ヲチ、ゴチにモ(面)を結びつけた語がヲテモ(遠面)、コテモ(此面)と轉呼せられて萬葉集時代に用ひられた。此テも亦タの轉音で、今も上テ、下テ、横テ、山のテ、大テ、搦テの如く用ひられる。——手とかくのは借字である——此テの接着したものとしては左記の諸語をあげ得る。

ウシロテ(後方)。——ウシロ(背)の方の意。

オモテ(表)。——オモ(面)の方の意。
クマテ。——クマ(隈)即ち蔭のある方といふ意。
タダテ。——直接の意の古語。タダチ(直)と轉呼して今も用ひられる。

古書に見えるサカテ、ハタテ、マサテ等のテも之に屬する(「言語學」巽、四七頁)。

テ、ト。(一) 上古「事」「物」を意味するトといふ語があつたらしくコト(言、事)の形に於て今も用ひられて居るが、コは「事」に在りては「此」の意、「言」に在りてはク(口)の轉呼と思はれる。此接尾語のついた語は多くはよく熟して判別困難であるが、玉代とかいてタマテと訓み、酒代をサカテといふのは此トの轉訛であらねばならぬ。トの形に於ては千座のオキト(置戸)、トコヒト(詛戸)、ノリト(祝詞)の如く用ひらる。

テ、ト。(二) ヒト(人)といふ語は結合の場合、ヒが約せられてトなり、テとも轉呼せられる。——或はヒトのトも「者」を意味し、ヒは秀又は靈能の義で「語誌」、萬物の靈長といふ意を以て「人」をヒトと呼ぶやうになつたのかも知れぬ——トの形に於てはヲヒト(男人)をヲツト(夫)、イモヒト(女人)をイモウト(妹)、オトヒト(乙人)をオトウト又はオトト(弟)といひ、テ

であるが、イへ(家)といへば人間は容れる器と了解せられるやうに、フネも亦大木を二つに割つて中を刳りぬいた一種の容器の名となり、槽、柩の義にも用ひ、獨木舟の稱呼にも轉用せられたのである。然るに今では船舟の意に専用せられ、サカフネ(酒槽)、御フネイリ(入柩)といふ語すら世俗に通ぜぬやうになつた。

イハネ(磐根)はイハホ(磐秀)に對する言葉で、カキネ(垣根)はカキモト(垣本)とも呼ばれるから、「根」の原義を存するものと見てもよいが、今では往々イハ(磐)及カキ(垣)と同義に用ひられることがある。

ヤ。後記のラの音便である。之を語尾に接着した語は今では獨立しては用ひられぬが、古語にはニコヤ(柔)、ナゴヤ(和)、カガヤ又はカクヤ(赫灼)、タワヤ(楚々)の如き用例があり、主として形容詞を名詞形とするに用ひられた。ニコヤカ(莞爾)ナゴヤカ(穩和)、カガヤカ(赫灼)、タワヤカ(楚々)等は之に更に形容語尾カを添付したものである。——後記形容語尾の項下参照。

ラ。後記のレ、ロと同じく動詞アリから出た語分子で、存在の意を以て名詞形語尾として用ひられるやうになつたものと

と轉訛しては射テ、爲テ、討テ、捕テ、賣テ、買テなどいふ。之に「手」の字をあてるのは假借である。

ネ。原義は「根」であるが、接尾語としては多くは一音の語に接着し、之を他の同音異義の語と區別するに用ひられる。一音の語は概して多くの意義を有し、甚まぎれ易いので、接頭または接尾語を添へて區別することを必要とした。例へばハ(羽、磐)、ヤ(彌、屋)の如き語はイハ(岩)とハネ(羽)、並にイヤ(彌)とヤネ(屋)とに分たれるが、羽、屋を單にハ、ヤというても決して誤用ではないのである。然るに慣用上ネのついた形を特別の意味に専用し、ネが接尾語であることが忘れられんとして居るものもある。例

キネ(杵)。——「杵」は古語では單にキといひ、出雲の杵築、肥前の彼杵の如きは今もキツキ及ソノキとして知られて居る。之に反し古は「木」をもキネというたらしく、萬葉集十三卷には三野の枕詞として百小竹と同様に、百キネ(衆木の意)といふ言葉が用ひられて居る。

ムネ(胸)。——ムナともいひ、ム(身)と同義で、身像をムナカタと稱へた。胸は古語ではタカムナ(高身)といふ。フネ(船)。——フの原義はへで、一般に容器を意味するの

思はれる。此接尾語は上述の如くヤとも轉呼せられ、形容詞に接着することを例とし、アキラ(明)、ホガラ(朗)、サカシラ(小慧)の如く用ひられ、「長ラ」の宮、「ウマラ」に聞しもちをせ」などいふ用例もある。長ラカ、明ラカ、朗ラカ、高ラカ等が此ラに更に形容語尾カを添付したものであることは後述の通りである。

此接尾語は又動詞及名詞と結びついたものもあるが、多くはよく熟合して單語のやうに見なれて居る。左に其若干例をあげる。

- サク(咲)——サクラ(櫻) マク(卷)——マクラ(枕)
- へ(綜)——へラ(篋) カハ(皮)——カハラ(瓦)
- ハシ(桿)——ハシラ(柱) ノ(野)——ノラ又はノロ
- ヨ(夜)——ヨラ又はヨロ

コチラ(此方)、ソチラ(其方)、アチラ(彼方)のラが此接尾語に屬することは勿論で、「今日ラ」「此處ラ」といふのも上記夜ラと同用法であるが、今では「今日あたり」「此邊」の意と了解せられるやうになつた。萬葉集第五卷山上憶良の歌に「憶良ラは今ほまからむ」とあるのは複數表示ではなく、憶良一個人の事であるから、人名にも添へて用ひられたものとせねばな

らぬ。— 複數表示のラについては次章名詞の項下に述べる。
 右のラの一變形で、ワレ(我)、カレ(彼)、ナレ(汝)、コレ
 (此)、ソレ(其)、タレ(誰)の如く、ワ(我)、カ(彼)、ナ(汝)、コ
 (此)、ソ(其)、タ(誰)等に添へて用ひられる。イヅレ(孰)の古
 語はイヅラで、ワレはワロともいふから「東歌」、ラ、ロと通
 用せられたことは疑がない。

ロも亦ラ、レと同語、異形で、萬葉集の東歌及防人歌には
 上記の如く野ヲを野ロ、夜ヲを夜ロ、ワレ(我)をワロとし、峯
 ロ、伊香保ロ、巖ロの如く用ひた例もある。方言ばかりではな
 く大和語に於てもオホ(大)からオホロ(隴)、ウツ(空)からウ
 ツロ(洞)といふ語を派出し、ヨラシ(良)はヨロシと轉用せら
 れた。口語のワル(悪)は昔はワロといひ、アラ(荒)と同一原
 から分化したものゝやうである(ワ、ア相通)。

ロにカモを添付したロカモといふ複合語尾も亦「大君。ロカ
 モ」「をだて。ロカモ」「ともしき。ロカモ」「かしこき。ロカモ」の
 如く、古語に屢々用ひられた。此は「大君ナルカモ」うたて
 アルカモ」「美しきことカモ」「惶きことカモ」といふ意で、
 上記のロ及其變形なるラ、レがアリ(在)から出たものである
 と同時に、名詞形を表現するものなることの確證である。

の接尾語となり、其原義を失うて「ナツカシ。の君」の如くシと
 ノとの重複をも厭はぬやうになつたのである。

形容詞には右の如き修飾的用法の外に述語的用法がある。
 シを添へて作られた形容詞は「年久シ」「母戀シ」のやうに其
 儘述語に用ひられるが、クロ(黒)、フル(古)の如き固有形容詞
 に在つては之に准じて特にシを添へて「色黒シ」「家古シ」と
 いふことを必要とした(次章形容詞の項下参照)。之を原義に還
 元すると「年久其」「母戀其」「色黒其」「家古其」となつて甚
 理に合はぬやうであるが、隣民族語就中マール語の語
 法では形容詞を述語に用ひる爲には「其」といふ意味の語を添
 へることを絶對的條件とするから(排列の順序は常に國語と
 は反對であるが)、南方種族によつて將來せられた着想である
 とも了解せられる(拙著「マール語の研究」参照)。之を要する
 にシは原義を離れて形容詞を表示する接尾語となつたのであ
 るが、尙其本質上固有の形容語と轉用語との間に用法につい
 て若干の相違を生じたのである(次章形容詞の項下参照)。

動詞を形容詞とするには上記のコヒシの如く、原形(次項參
 照)にシを接着する事を原則とするが、コホ(戀)シ、クルホシ
 (狂)シ、ウトマ(疎)シ、イサマ(勇)シ、オモホ(思)シ——約して

(ロ) 形容語尾

シ。形容詞にはクロ(黒)、フル(古)、トホ(遠)、サム(寒)の如
 く本來形狀を意味するものゝ外に、ヒサシ(久)、コヒシ(戀)、
 カナシ(悲)、カルガルシ(輕々)のやうに、シといふ語音を添付
 することによつて始めて形容詞となるものがある。後者から
 シを除いたヒサ(名詞)、コヒ(動詞)、カナ(感動詞)、カルカル
 (副詞)は決して形容詞として用ひることが出来ぬから、シに
 此等諸語を形容詞化する性能があるものとせねばならぬ。

シの原義は「其」で、ソの形に於ては代名詞及助語として用
 ひられるが、原語は寧シであつたやうである(言語學六頁)。
 此語は其語義上、助語ノと同様に、前續語が修飾的に用ひら
 れたことを表示する場合がある。例へば「春の夕」を「春其夕」
 というても意に於ては變りはない。上代に於てはシは屢々此
 用途に充てられ、タラチネノ母をタラチシ母(ネは敬稱であ
 るから之を省いても義に變はない)といふが如く、アラチシ、
 ヤスミシシなどいふ枕詞はアラチ(有力主)ノ、ヤスミシ(大屋
 主)ノと同義である。其故にカナ(愛惜)シ、ウツシ。國の如く
 カナ、ウツ(全)が修飾語として用ひられたことを表示する爲
 にシを挿入したのであるが、轉じて一般的に形容詞を作る爲

オボシ(覺)といふ——の如く語幹を變化することがある。其
 は動詞シ(爲)又は助動詞シ(令)と連ねたコヒシ(戀爲)、クル
 ヒシ(狂爲)、クルハシ(令狂)、ウトミシ(疎爲)——口語ウトン
 ジ、——イサミシ(勇爲)、オモハシ(令思)といふ語も成立し得
 るので、之と區別する爲に特に音便が用ひられたものと思は
 れる。

附記。ゴトシ(如)及ナシ(無)は今では助動詞と見なされて
 居るが、其語尾によつて明なるが如く、本質は形容詞であ
 る。又モシ(若)、ケダシ(蓋)、タダシ(但)等の語尾も之に屬
 するが、述語として用ひられることなく、從つて後記のケ、
 キを接着した形を缺くのである。

カ。接頭語カと同じく顯著の意を以て名詞又は語幹に添付し
 て形容詞を作るに用られる。例

- | | | | |
|------|-------|-------|--------|
| 遙カ。 | 定カ。 | 靜カ。 | オロカ(愚) |
| 明ラカ。 | 高ラカ。 | 清ラカ。 | 長ラカ。 |
| 朗ラカ。 | なだらカ。 | おほろカ。 | まろカ(圓) |
| | | | 平ラカ。 |

形容詞に既記の接尾語ヤ(音便によつてヨとも轉呼せられる)
 又はラ(ロ)が接着して生まれた名詞形は更に此カを連結する
 ことによつて形容詞に復元する。例

廣ヤカ^{カガ} 赫ヤカ^{カガ} 夾ヤカ^{サハ} 撓ヤカ^{タワ} 和ヤカ^{ナヨ}
 柔ヤカ^{ニコ}(ニコヨカ) 些ヤカ^{ササ} 些ヤカ^{ササ} まめヤカ^{マメ} なよヤカ^{ナヨ}
 しめヤカ

後世此由來を忘れてヤカ(ヨカ)を一個の接尾語であるかのやうに取扱ひ、名詞、動詞にも連ねて、華ヤカ、福ヨカ、忍びヤカの如く用ひるやうになつたが、尙少數の語に限られる。

此カのついた形は黒、古等の固有形容詞と同じく、述語に用ひる爲にはシを添付して耻カシ、懷カシ等とせられるのであるが、此場合音便によつてカはケと變化する。例

遙カ——遙ケシ 靜カ——靜ケシ
 明ラカ——明ラケシ 安ラカ——安ラケシ
 些ヤカ——些ヤケシ 爽ヤカ——爽ヤケシ

露ケシは露ケといふ名詞形から出たもので(名詞語尾ケの項ト参照)、異例である。

ケ。上記カの變形で、形容詞に接着して活用基礎形として用ひられたのであるが、中世以降此接尾語自體がキ、ク、ケレと活用(屈折)するやうになつたので、原形は却つて世に忘れられた。さりながら萬葉集の用例によると、遠ケ、悲シケの形に於て終止法として用ひられる外に、次の如く活用せられたも

は遠キ國、悲シキ秋の如くキの形のみを充當するのが慣例である。

口語に於てはシの形は用ひられず、キを音便によつてイト轉呼して専ら之を使用する。例

遠イ國 國は遠イ
 悲シイ秋 秋は悲シイ

ク、ケレの用法については次章に於て詳述する。

タシ。タリ(足)の語幹タに上記シを連ねた形容詞で、「笹葉にうつや霞のタシダシに」「記下」の如く用ひられた例もあるが、中世以降獨立を失ひ、常に他語に接着して具足の意を表示し轉じては希望を表現するにも用ひられる。例

メデ(愛)タシ 見タシ
 ウレ(憂)タシ 起タシ
 聞タシ 寝タシ

此故に助動詞的に用ひられるにも拘はらず、尙形容詞活用によるのである。

此タはオメデタのやうに名詞語尾とした例もあり、又見タガリ、聞タガリの如くも用ひられる。

ラシ。此語は本來助動詞で、動詞に連用せられるものであるが、轉義によつて「擬似」といふ意を生じ、名詞に直接する形

の、やうである。——括弧内は現在の活用を示す。

遠ケむ(遠カラむ) 悲シケむ(悲シカラむ)
 遠ケ(カ)ば(遠ケレ)ば 悲シケ(カ)ば(悲シケレ)ば
 遠ケ(カ)ども(遠ケレ)とも 悲シケ(カ)ど(悲シケレ)ども
 遠ケく(遠キこと) 悲シケく(悲シキこと)

遠ケク、悲シケクを上記靜ケシ、安ラケシ等の一活用形なる靜ケク、安ラケクと同一視してはならぬ。此クは上述の名詞語尾で、ケは同じくカから分化したものであるが、靜ケ(靜カ)等が體言形でシを添付することによつて始めて活用せられるに反し、此は自體が既に活用形であることに留意するを要する。——遠、悲は遠カ、悲シカとは用ひられぬ語であるから、遠ケシ、悲シケシといふこともあり得ぬ。

キ、ク、ケレ。上記のケ自體の變化で、動詞の活用に准じて用ひられる(次章形容詞の項下参照)。例

遠キ 遠ク 遠ケレ
 悲シキ 悲シク 悲シケレ

之と上記のシの接着した形、即ち此例を以ていへば遠シ、悲シとが併用せられるので述語(終止法)には遠キ、遠シ(又は悲シキ、悲シ)の二形を生じたが、連體法として用ひられる場合に

容語尾として用ひられるやうになつた。例

其ラシイものは見えぬ。
 遠く聞えるのは波の音ラシイ

此から更に轉じて「相當」といふ意味にも用ひられる。例
 子供は子供ラシクせねばならぬ。
 男ラシイ人である。

ガマシ。カマの原義は音に聞えるといふことで、今では「喧」の義とのみ了解せられるが、カバネ(カマ名の轉呼)は有名な氏姓といふことである。之にシを連ねたカマシも亦「風聞」といふ意の形容詞であつたと思はれるが、獨立を失うて接尾的にのみ用ひられる。例

人ガマシ をこガマシ かごとガマシ
 隔てガマシ 濫ガマシ 勝手ガマシ
 議論ガマシ

メカシ。動詞語尾メキ(其項下参照)にシを添へたもので、夏メカシキ風、古メカシクの如く用ひられる。古メカス、古メカセバなどとも云ふ所を見ると、恐らくは動詞語尾が移つたものであらう。

(ハ) 動詞語尾

タマ(玉)がタマヒ(賜)となり、ツナ(綱)からツナギ(繫)といふ語が出たやうに、動詞中には明に接合語と認められるものがあるが、多くはよく耳に熟して居るので、從來之が分析を企てたものもないやうである。さりながら逐語に研究を進めると、我等の祖先が動作行爲を表示する爲に故意に特種の接尾語を用ひたことは畧々疑の餘地を存せず、我國語ばかりでなく、此着想はミクロネシア諸語中マーシャル語に於ても之を見るのである。勿論動詞が盡く結合語であるわけではなく、原語が其儘用ひられたものもあり、原語でないとしても今では分解不可能のものも少くはないから、一律に之を論ずることは出来ぬが、我々の知る限りに於て明に接合分子と認定せられるものを動詞語尾と呼ぶのは不當ではあるまい。

動詞は次章以下に詳述するやうに語尾の韻を變化して用ひるので、諸形中いづれを原形と見なすべきかといふことについては從來確説がなく、漫然ウ韻で終る形、例へばタマフ、ツナグ等が原形で、其から他の形が出たものと了解せられて居たやうであるが、其誤れることは次に掲ぐる諸接尾語の原義によつても明白で、其尙判明せぬものもあるが、大體に於て私は名詞形として用ひられるイ(又はエ)韻を以て終るものが原形であると斷言

することを躊躇せぬ(次章動詞の項下参照)。イ韻の動詞語尾が接合した場合には一、二の例外を除き、四段活に用ひられること(エ韻のものは下二段活)も亦注意を要する特色である。之が活用を述べることは次章以下に譲り、こゝには原形(即ち名詞形)のみについて説明する。

動詞語尾には一語音から成るもの(單語尾)と、其から分派せられた複語尾とがある。單語尾はカ行以下各行に之を求め事が出来るが、唯ア行には之を見ず、此行の語音を以て語尾とする動詞もエ、ウ(得)といふ一語があるのみで、其とても上代に於てはエ、ユと變化するヤ行の語であつたことは後記の通である。此は前章に於て述べたやうに、國語に於ては母韻の重疊を不可としたから、單獨母韻より成る語分子が他の語尾につくことを許さなかつた爲である。以下先づ單語尾から五十音の順を追うて列擧するが、自他を區別する爲に四段(又は上二段)活から下二段活に轉用したもの、例へばソメ(染)、フレ(折)のメ、レ等は假令其原語ミ、リが接尾語であるとしても之に加へぬことにした(次章参照)。

キ。(一) 原義は「來」で、行動を表示する。例
ユキ(行)。——ユはヨ(寄)の轉呼であらう。イキともいふ。

他の語尾と取かへると、同義又は類似した意味の自動詞となるのである。

- カヘシ(返)——カヘリ(還) クダシ(貶)——クダリ(降)
- ケガシ(穢)——ケガレ(穢) コシ(越)——コエ(越)
- サトシ(諭)——サトリ(悟) タシ(足)——タリ(足)
- ナガシ(流)——ナガレ(流) ナシ(爲)——ナリ(成)
- ノガシ(免)——ノガレ(遁) ノボシ(上)——ノボリ(登)
- マワシ(廻)——マワリ(廻) ミダシ(紊)——ミダリ(亂)
- モシ(燃)——モエ(萌)

右の外カザシ(挿頭)——カザリ(鏘)、サガシ(探)——サグリ(摸)は兩形共に他動詞であるが、意義に多少の相違があり、カシ(貸)——カリ(借)は行爲の方向を異にする。又左記諸語には之に相當する自動詞はないが、此接尾語を添付したものと見るべきである。

マシ(坐)。——ミシの轉呼で、原義は御爲であるが、アリ(在)の意の敬語に轉用せられ、更にイ又はミを接頭したイマシ又はミマシは「汝」の意の敬語として用ひられる。メシ(召)。——目爲の意から轉じて「召」の義となり、或は思シメン、聞シメンの如く、單に敬語として動詞原形に連

アリキ(歩行)。——有來の意なることはいふまでもない。
ツキ(着)。——ツはト(虛)の轉呼であらう。古歌には屢々トキと用ひられた。
サキ(避)。——サリ(去)と語幹を同するものと思はれる。今では下二段活として用ひられる。

- ノキ(退)。——ノはノチ(後)の語幹と同原であらう。
- キ。(二) 原義は不明であるが、左記諸語に在つてはキが接合分子で、行爲を表現するものなること明白である。
- カ(香)——カギ(嗅) ツナ(綱)——ツナギ(繫)
- タ(手)——タギ(手工) ツム(錘)——ツムギ(紡)
- ト(利)——トギ(研) マタ(股)——マタギ(跨)
- ユラ(搖)——ユラギ(震)

右の外他にも例が少くはない。此キが盡くギと發音せられるのは上記キ(來)と區別する爲らしく、打消のズが濁音として用ひれると同様に(第四章参照)、外來語には稀ならざる例で、恐らくはマーシャル語の活用語尾キ(ク、ケ)と同一源から出たのであらう(拙著「マーシャル語の研究」参照)。

シ。「爲」を意味する原語で、動詞及助動詞としても用ひられるが、接尾語としては他動又は作爲を表示する。其故に之を

ねて用ひられる。

タダシ(糺)。——タダ(直)シ(爲)の意。

上例の如く此シは直接語幹に連ることを例とするが、或る種の動詞に在つては未來分詞形(第四章参照)に連結する。例

出デ——イダシ。

落チ——オトシ。

照リ——テラシ。

乾ヒ——ホシ。

湧キ——ワカシ。

テラシ、ワカシ等は今では純然たる他動詞と了解せられるが、本初は令シ照、令シ沸、令シ出、令シ落、令シ乾を意味した使動詞であつたかも知れぬ。

右の外自他の變化を起さずして上記と同様の形を呈する二つの場合がある。一は敬語マシを連用すると同一價値を有するもので、勿論敬語であるが、他は動詞ナシ(爲)の意のシを添へたので、其有無によつて語義の増減を來すことのない上代の一語法である(言語學「眞頁」)。例

原形	敬語	特種語法
知リ	シラシ(知リマシ)	シラシ(知リナシ)
行キ	ユカシ(行キマシ)	ユカシ(行キナシ)
摘ミ	ツマシ(摘ミマシ)	ツマシ(摘ミナシ)

カチ(勝)。——カは漢語「加」と同源で、優勝を意味するものゝやうである。

タチ(立)。——タは「直」の意。

モチ(持)。——モチテをモチともいふから、語幹はモ一音で、モロ(諸)のモと同語であらう。

イラチ(苛)。——語幹はイラで、イラクサ(葶麻)、イラダチ(苛立)の如くも用ひられる。

イサチ(勇)。——イサナ(勇魚)といふ語もあり、イサミとも用ひられるから、語幹はイサであらねばならぬ。

タギチ(湍)。——タキは瀧の意で、タギリとも用ひられる。右の外接尾語シの轉音かと思はれるチがある。ケン(消)はケチともいひ、クダシ(貶)、ハナシ(放)はクダチ、ハナチとも用ひられる。ワカチ(頌)も亦ハガシ(剝)と同語から分化したものであるかも知れぬ。

上例に於て見るが如く、此接尾語を連ねた動詞は皆四段活で、ハヂ(耻)、ヒヂ(濕)、ネヂ(振)、ヲチ(若)の如き根元を異にするものは二段活であることに留意すべきである。但しオチ(落)はオシ(押)、オリ(下)と同源から分化したもので、チは接尾語と思はれるけれども二段に活用せられ、ミチ(満)、マチ

ナシの意のシのついた形は今では全く廢用となつたが、尙方言中に「何處へ行くか」をユカスカといふことのあるのは其名残であらう。

セ。セは動詞シ(爲)の命令法から分化した下二段活の助動詞で、後章に説くが如く使動法を表現するものであるが、一音の動詞又は語幹とは熟合して接尾語のやうに用ひられる。例

原形	新語	語幹	新語
キ(着)	——キセ。	ノ(乘)	——ノセ。
シ(死)	——シセ(弑)	ヨ(寄)	——ヨセ。
ニ(似)	——ニセ(贗)	オ(押)	——オセ。
ミ(見)	——ミセ。	フ(伏)	——フセ。

但しカセ(收斂)、ハセ(走)、ムセ(噎)、ウセ(失)等のセは接尾語ではなく、カセはカサ(瘡)から轉成し、ハセ、ウセはハシリ(走)、ウシナヒ(失)の語幹ハシ、ウシの轉呼、ムセはムセビともいひ、ムシ(蒸)から出たものゝやうである。

チ。原義は靈又は主で「語誌」、「主^{ツカサ}どる」といふやうな意味に於て接尾語となつたものと思はれる。——マシナル語にも行爲を意味するチ(ト、テ)といふ活用語尾があるが、同源であるか否やを詳にせぬ。——例

(待)、ウチ(打)等のチは接尾語ではないやうであるが、四段活である。

テ。助語トと同源から出た語で、「外」の意であるが(第五章参照)、接尾語に用ひられる場合之を濁ることのあるのは、タテ(立)、ミテ(充)の如きチの變形と區別する爲であらう。例

イデ(出)。——語幹イはヨ(寄)の音便で、イキ(行)、イリ(入)の如く用ひられる。

ステ(棄)。——語幹スは「巢」の義で、ステは巢を去るといふ意から出た語であらう。

メデ(愛)。——ホメ(秀目)が賞美の意となつたのと同様にメ(目)に接尾語テを添付して愛重の義を生じたのであらう。——ミヅ(瑞)も之から分化したものと思はれる。

ユデ(沸)。——ユ(湯)から出るといふ意であらう。他にもイデ(出)が結合したものと思はれるマキデ(詣)、マカデ(罷)の如き語がある。

ニ。助語ニと同語で、原義は「内」であるが、完了時格を表示する助動詞として用ひられ(第四章参照)、其意味を以て左記二語に於て接尾語に轉用せられた。

イニ(去)。——イはイデ(出)、イリ(入)、イキ(行)に共通の

語幹である。

シニ(死)。——シは單獨でも「死」を意味し、上述の如くシセとも用ひられるが、シといふ語音には他にも多くの意義があつて紛れ易いので、死去の意のシニが一般的に用ひられるやうになつたのであらう。

ヒ。(一) ヒは能力を意味する原語で「語誌」、接尾語としては行爲を表示する。例

ウタヒ(謡)。——語幹ウタ(歌)。

オモヒ(思)。——オモの原義は母、乳で「語誌」、オモシ(重)とも用ひられる。

カコヒ(圍)。——語幹カコ(籠)。

カヒ(交、買)。——カはカリ(借)、カシ(貸)の語幹と同語。交易の意から買の義に轉じたのであらう。

カヒ(飼)。——カはコ(子)の轉呼と思はれる。

クヒ(食)。——クは飲食の概念を表示する原語で「語誌」、之を攝取する器官もクチと呼ばれる。

コヒ(乞)。——乞は古典にはコソとも訓ませあるから、コを語幹とせねばならぬ。カ(ガ)と轉呼せられて希望の意を含む感動詞としても用ひられる。

サカヒ(境)。——語幹サカ(坂)。

タケビ(誥)。——語幹タケ(健)。

トヒ(問)。——トはオト(音)の原語であるから、トヒの原義は發音であるが、問の意に轉用せられたのであらう。さればコトトヒといへば發音の意となるのである。

ノビ(伸)。——ノは伸の意の原語で「語誌」、ノシ(伸)とも用ひられる。

ハヒ(延)。——ハは經歷の意のフ(へ)の轉呼であらう。

マネビ(學)。——語幹マネ(眞似)。

マヒ(舞)。——マはタマ(玉)、マル(丸)、マワル(廻)等の語幹で、旋廻の意から舞の義を生じたのであらう。

モチヒ(用)。——モチ(持)から出たのである。——モチキとする假字遣は非(言語學)頁)。

ヨビ(呼)。——ヨは「寄」の義。今では専ら呼び寄せる意に用ひられるが、古は此方から寄ることをもヨビというた。

——英語の call と同様である——其故にカヨヒ又はヨバヒ(ヨビ、ハヒの約)の形に於ては先方に行くことを意味するのである。

エヒ(醉)。——エはエミ(笑)、エラグ(喫樂)の如くも用ひ

られ、歡喜を意味する原語である。

右の外アヒ(合)、イヒ(言)、オヒ(負)、シヒ(強)、ソヒ(副)、スヒ(吸)、ユヒ(結)の如くヒを接尾語としては釋明が困難な語が少くない。其中には原語(又は變形)もあり、早く廢れた語幹から派成せられたものもあるのであらう。

附記。ヒを語尾とする言葉のうちにはアヒ(合)、カヒ(交)、ハヒ(延)を連ねた結合語が連約の結果、前續語音を失ひ、ヒのみ残つたものがある。此等は接尾語と目すべからざることは勿論である。——ハヒについては第四章活用の條下に再述する。——例

スマヒ(住宅)——住ミ、ハヒ　　ホガヒ(壽)——ホギ、ハヒ

ムカヒ(向)——向キ、アヒ　　ヨバヒ(娉)——呼ビ、ハヒ

イサカヒ(争)——勇カヒ　　アテガヒ(質)——當ガヒ

ビ。(二) 上記のタケビ(誥)、ノビ(伸)、マネビ(學)、ヨビ(呼)等は音便によつて濁音となつたものであるが、其外にアラビ(荒)、ニギビ(柔)、オキナ(翁)ビ、オトナ(大人)ビの如く、常にビと發音せられる別種の接尾語がある。此は上記ヒが四段活であるに反し、上二段に活用せられることによつて區別せられ、口語のブル又はフリスル——金持ブル、色男ブル、知つたかブ

リスルの如き——に相當し、フリ(振)、フルフ(奮)と同源から出たものゝやうに思はれる。此接尾語のついた動詞としては尙次の如きものを挙げ得る。

コビ(媚)。——コは上記コヒ(乞)の語幹。

サビ。——サはサ(然)、サマ(狀)の意。此語は後記の如く複合語尾として用ひられる。

スコビ。——スコはスコシ(少)の語幹である。此語は今では用ひられぬが、其一活用形スコブル(頗)が副詞として残つて居る。

トビ(飛)。——トはトリ(鳥)の原語。トリのフリをするといふ意から生まれたのであらう。

ネビ(老成)。——ネはアネ(姉)のネで、アニ(兄)ともいひ、年長の義に轉用せられたのである。

右の外次項所説の接尾語ミも亦音便によつてビと發音せられることがある。

憐レビ(アハレミ)　　悲シビ(カナシミ)

樂シビ(タヌシミ)　　睦ビ(ムツミ)

ミ。原義は「見」で、接尾語としても左記諸語に於ては尙よく原意があらはれて居る。

イミ(忌)。——イはユ(齋)とも發音せられ、神聖の意を表
示する原語で「語誌」、之にミ(見)を添へたイミは齋戒、禁
忌の意となり、轉じて厭忌の義を生じた。但し神職を意
味するイミは齋身の意で、動詞には用ひられぬ。

トミ(富)。——トはトヨ(豊)、トシ(稔)の語幹で、タリ(足)
のタと同一語原から分化したもののやうである。「足見」
が「富」の義に轉じたのは極めて自然である。

ナミ(蔑)。——ナは「無」の意。ナシと見るといふことであ
る。

ヤミ(病)。——ヤはヤセ(瘠)、アヤ(過)等の語幹。ヤが見
えるといふ意から、疾病の義を生じたのであらう。

ヨミ(讀)。——ヨは「良」の意。されば古語では計數をもヨ
ミというた。

清シ、悲シ、樂シのやうに形容詞に接着したものにあつて
は一層「見」の義が明瞭であるが、轉義により「と思ふ」又は「感
ずる」といふ意味にもなり、重シ、寒シ、苦シ、惜シの如く
も用ひられる。「降りミ降ラズミ」「泣キミ笑ヒミ」等のミも亦
之に屬するものである。

此接尾語は往々原義を失うて單に語幹と同意義の動詞を作

る爲にも用ひられる。例

スミ(住)。——スは居住を意味する原語で「語誌」、今も巢の
意として用ひられる。

フミ(蹈)。——フリ(振)と語幹を同うするものであるが、
尙原義を詳にし得ぬ。

ヤスミ(休)。——ヤス(安)の意の動詞。
ユルミ(弛)。——ユルはユルシとも用ひられ、ユラ(搖)の
轉呼と思はれる。

但しアミ(網)、ウミ(産)、ツミ(摘)及ノミ(祈)等はメ(目)、ム
(産)ツメ(爪)、ノミ(伸身)から轉じた語で、此接尾語をそへ
たのではない。其他カミ(咬)、ノミ(飲)、ハミ(喰)、ヤミ(止)
の如き分析不可能の語も少くはないのである。

接尾語としてのミは原則にもれず、四段活であるが、複合
語として用ひられた場合には上一段又は上二段に活用せられ
ることを注意すべきである。例

一段活

ウシロミ(後見)

ウラミ(裏見)——恨

ココロミ(心見)——試

ユメミ(夢見)

オモヒミ(思見)——オモンミ(願)

二段活

エ。動詞エ(得)は今ではア行下二段活に用ひられるが、本來
ヤ行のエであるから、古はエ、ユと活用せられ、接尾語とし
てもヤ行下二段の動詞を派成した。

オボエ(覺)。——オモハエ(思得)の轉呼。

キコエ(聞)。——キカエ(聞得)の轉呼。

コエ(越)。——コシともいふから、コが語幹であらねばな
らぬ。

サカエ(榮)。——原語はサキ(幸、咲)である。

ハエ(生)。——ハ(葉)エ(得)の意から出たのであらう。

フエ(殖)。——原義はフ(生)エ(得)か。

ミエ(映)。——ミ(見)を語幹とする事はいふまでもない。

右の外ホエ(吼)、フエ(瘁)等のエも接合分子であらうと思は
れるが、尙之を分解し得ぬ。

リ。活用語尾リは動詞アリ(有)の上略(又は其原語)で、語幹
に含まれる意義の實演を表示する。カゲ(蔭)リ、ヤド(宿)リ、
クモ(雲)リ、ケム(煙)リ、ナホ(直)リ等は最も明白な例である
が、尙既記の如く他動詞語尾シ(又はチ)に對して自動詞を表
示するに用ひられる(第五頁參照)。アツカヒ(扱)——アツカ
リ(預)、マガヒ(紛)——マガリ(曲)の如きも同例に屬する。

此等は盡く四段正格に活用せられるが、「存在」の意なるアリ
が結合した左記二語は動詞アリと同じく變格である(次章動詞
の項下參照)。

フリ(居)。——キ(坐)、アリ(在)の轉呼。

ハベリ(待)。——ハヒ(匄)、アリ(在)の連約。

アタリ(當)、ツモリ(積)、トマリ(止)、カカマリ(屈)等は他動
詞アテ、ツミ、トメ、カカメにアリ(有)を結合して自動詞とし
たもので、連約の爲に上記リが接着したものであるかのやう
に見えるけれども、尙純然たる複合動詞である。ナサルとい
ふ敬語も亦原義はナン、アルで、此種類に屬するものである。

カリ。(一) 上記形容語尾ク(ケの一變形)が助動詞アリ(有)と連約
せられたカリは一動詞語尾を形成する。例へば遠、悲シに之
を接着して遠カリ、悲シカリとすれば純然たる動詞になるの
である。但し之を接尾語と見るよりも、寧ろ形容詞活用の一
變形として説く方が便宜であるから、次章形容詞の項下に於
て述べる。

カリ。(二) 名詞語尾ゲに上記リが接合したもので、ゲと同じ意味
の活用語尾である。例

オモシロゲ——面白ガリ

悲シゲ——悲シガリ

苦シゲ。——苦シガリ。 欲シゲ。——欲シガリ。

此複語尾は古歌には見えぬが、イトホシガリ〔崇峻紀〕、ナゲカシガリ〔竹取〕の如く、かなり古くから用ひられ、後世哀ガリ、厭ガリ、氣の毒ガリの如く用途が擴張せられた。又上掲形容語尾タシの語幹タと連結して見タガリ、聞キタガリの如くも用ひられる。

サビ。 單語尾ビの項下に掲げたサビは「様子ブル」といふ意を以て神サビ、山サビ、翁サビ、男サビ、少女サビの如く接尾語として用ひられる。此を單に「狀をする」又は「眞似る」意と解するのは誤で、神サビ、山サビは神、山が其威容を示すこと、ヲトメサビ、ヲトコサビは少女ブリ、青年ブリを發揮することをいふのである。

秋サビテ、宿サビテなどいふサビは全く別語で、寂の意である。恐らくはサム(寒)から出たのであらう。

タリ。 助語トとアリ(有)とが連結せられたもので、體言就中漢語に添へて之を准動詞とするに用ひる。例

兄タリ難く弟タリがたし 肅然タリ
帝國の軍人タリ

次章に掲ぐる助動詞タリはテ、アリの約で此タリとは全然別

語である。

ナヒ。 ナは「中」の原語。ヒは既記の如く行爲を表現する動詞語尾であるから、ナヒは立入つた行爲を意味する。——綯ナヒは長ヒの義で同音別義である。——例

音ナヒ(訪) 共ナヒ(伴) 商ナヒ(賈)
荷ナヒ(擔) 率ナヒ(誘) 幣ナヒ(賂)
アガナヒ(贖)、オギナヒ(補)、オコナヒ(行)、トナヒ(徇)、ツグナヒ(償)、マカナヒ(賄)、マジナヒ(禁厭)等のナヒも亦之に屬し、語幹はアゲ(上)、オキ(置)、オキ(行)、ト(音)、ツキ(附)、マケ(設)、マジ(呪)であらう。

ナリ。 助語ニとアリ(有)との連約で、體言に直接して准動詞を作るに用ひられる。例

道遙カナリ 勢猛ナリ
我も人なり、彼も人ナリ

南朝第一の忠臣は楠正成ナリ

後の用法から「楠と云ふ人の意を以て「楠ナル人」の如く用ひることもある。上代の語法ではないが、必しも誤用として排斥することは出来ぬ。

「春日ナル三笠の山」などいふナルはニと「在」の意のアルと

を連約したもので、一種の慣用語法ではあるが、「春日ニ在リ」を「春日ナリ」と約することは出来ぬから、複合接尾語と目すべきではない。

ハヒ。 單語尾ヒの派成語で、同じく行爲を表示する。例

齋ハヒ(祝) 幸ハヒ 靈ハヒ

ハミ。 蝕ミの意なることは疑なく、虫ハミ、黄ハミ、赤ハミなどいふ用法から一轉して或種の名詞又は動詞に連ねて其狀を呈することを表示するやうになつた。例

氣色ハミ 老ハミ 枯ハミ

ブリ。 單語尾ビとアリ(有)との連約で、意義に於てもビと變りはないが、自動詞として四段に活用する事を異りとする。

例

賢ラブリ 色男ブリ 高ブル

チハヤブルといふ枕語のブルも亦之に屬し、チは靈の意、ハヤは健捷の義である。

メキ、メカス。 メ(目)から出た語で、キは形容語尾キと同じく顯著を意味し、「見える」「思はれる」といふ意の接尾語として古メク、心時メキ、春メケバの如く用ひられる。之に更に動詞語尾シを連結したメカシは口語では扮装の意の動詞に用ひ、

複語尾としては心時メカシテの如く單に行爲を表示し、或は古メカス、今メカスのやうに「見せる」といふ意味となる。——形容語尾のメカシとは略々同義であるが用法を異にする(其項下参照)。

上述の外クミ(涙グミ、はぐクミ等)、シミ(汗ジミ、油ジミ、年寄ジミ)、タチ(目ダチ、巢ダチ)、ツキ(色ヅキ、氣ヅキ)又は「交」の意のカヒ(伺ガヒ、行カヒ)、「連」の義から出たツラヒ(引ヅラヒ、言ヅラヒ、丹ヅラヒ)等接尾語的に用ひられるものもあるが、獨立した動詞であるから、寧ろ結合語と見るべきである。

第三章 語

形態上から國語を品辭別することは困難である。例へばトミ(富)、カリ(獵)の如き名詞はトム、カルと變化して動詞にも用ひられ、「君」「私」等の代合詞、「昨日」「東」のやうな副詞、「及」「而」の如き接續詞も名詞又は動詞の轉用であり、「遠」「悲シ」等の形容詞は「遠カラム」「悲シカレバ」の形に於ては動詞と活用を同うするのである。其故に江戸時代の國學者は語尾の變化せぬ語(體言)と、變化する語(用言)とに大別し、其以外の獨立

しては用ひることの出事ぬ語をテニヲハ(助語)と名付けて區別したのである。

さりながら意味及用法上からは西洋文法の名詞、代名詞、數詞、動詞(助動詞)、形容詞、副詞、接續詞、前置詞、感動詞に相當する差別が認められ、且此やうに細分して説くことを便利とする場合があるから、本章に於ては體言、用言、助語といふ稱呼を用ひると同時に、大體に於て右の順序を追ふことにした。唯助動詞及前置詞に相當する助語は語論よりも寧ろ作文法に屬するものであるから、章を改めて説くことにする。

一、名詞

構成上からは前章所説の名詞語尾の接着したもの、外、何等特徴はないが、體言中代名詞以下の品彙に專屬せざるものは總て名詞と見なすことが出来る。動詞も亦既述のやうに多くは名詞から出たもので、其原形は名詞として用ひられるのである。

名詞は不變で、インド・ゲルマン語のやうに、男女(中)性、單複數による變化はなく、若し特に自然性を區別する必要がある場合には雄松、雌犬の如くヲ(男)、メ(女)といふ語を冠して之を表現し、複數を示す爲には左の方法を用ひる。

(イ)山々、國々、島々、人々のやうに同語を重疊すること
(ロ)數詞又は多數を意味する修飾語を冠すること。例 ヤソカミ(八十神)、ココノカ(九日)、ココラ(許多)の花
(ハ)ヲ、ハラ、トモ、ドチ(タチ)等複數を意味する語を添付すること。例、彼ヲ、殿バラ、子ドモ、神タチ、友ドチ
右のうち最も普通に用ひられるのはラ(等)で、ハラと同語から出たものと思はれる。
一句(文)中の一名詞と他の語との相對關係を表示する爲には特種の單語を添付する。「人」といふ名詞について例をあげると

- 人ノ親 人ガ見る 人モ知る
- 人ハ死ぬ 人ニ乞ふ 人ト語る
- 人ヲ助く 人デあらう 人ゾ聞く
- 人コソ行かぬ 人カラ取る 人ヨリ先
- 此人へ 此人マデ 此人ノミ

等の如く表現せられるのである。西洋文法では此うちの或ものを格と稱へ、名詞自體を變化することによつて之を標識し、或ものは前置詞を添加して表示するのであるが、國語に於ては名詞は常に不變で、之に後置せらるるノ、ガ、モ、ハ、ニ、ト、ヲ、デ、ソ、コソ、カラ、ヨリ、ヘ、マテ、ノミ等は總て同一の性質を有し、

單獨では意をなさぬ一種の語彙である。從來之をテニヲハと稱へ、或は助辭(助詞)とも名づけたが、其限界が判明せぬから、本篇では此種の獨立し得ぬ單語を總括して助語と呼び、別に一章を設けて記述することにした(第五章参照)。

二、代名詞

廣い意味に於ける代名詞は名詞に代はるべき一切の言葉を含み、其中には「君」「僕」「お前」「人々」のやうに名詞から轉用せられたものもあるのであるが、本項に述べんとするのは名詞其他の品辭とは全然性質を異にする固有代名詞である。其は少數の原語から分化したもので、西洋文法の如く人稱代名詞、指示代名詞、疑問代名詞等に類別せらるべき性質のものではないから、一括して之を記述する。

代名詞の原形はワ(ア)、オ、ナ、コ、ソ(シ)、カ(ア)、タ(ド)、イの八語で、ワ(ア)、オ、ナ、コ、ソ(シ)の五語は自他の表示に用ひられ、カ、タ(ド)、イは第三者又は不定者を表現する。此諸語は單獨又は次の形に於て用ひられる。

- ワ、ア(我) アレ
- ワレ(ワロ)、ワシ(ワツチ)

- オ(己)。 オレ(オラ)、オノ、オノレ
- ナ(汝)。 ナレ、ナネ、ナムヂ
- コ(此)。 コレ、コチ、コチラ、コナタ、ココ
- シ、ソ(其)。 ソレ、ソチ、ソチラ、ソナタ、ソコ
- カ、ア(彼) カレ、カヤツ(キャツ)、カナタ、カシコ
- アレ、アヤツ(アイツ)、アナタ、アソコ、アチ、アチラ
- タ、ド(誰) タレ
- ドレ、ドヤツ、ドナタ、ドコ、ドチ、ドチラ
- イツ、イヅレ、イヅカタ、イヅコ
- イ(幾) イカ、イカガ(イカイカ)
- イク、イクラ、イクダ

右の外に外來語ナニ(何)及アから出たアル(或)も亦疑問若くは不定を表示する代名詞と見ることが出来る。上記諸語を逐一説明することは煩はしいから、各原形について總括的に記述する。
ワ(ア)。 ワ、アいづれを原語とするか判明せぬが、同一語から分化したものであることは疑がない。此語は第一人稱であるが、ワレの形に於ては第二人稱としても用ひられる。

オ。右のア(ワ)の轉化であらう。原形は代名詞としては用ひられぬが、オレ(オラ)の形に於て第一人稱を表示する。之に次のナ(汝)の原語ノを添へたオノは我汝の意となるから、接尾語レを接着したオノレは第一人稱にも第二人稱にも用ひられ、オノがジシ(其々)、オノオノ及オノモオノモは「各自」を意味するのである。——オノに「各」の意があるとする説は誤といはねばならぬ。

ナ。朝鮮語曰(汝)と同源から出た語で、國語では第二人稱に専用せられる。ナネ(ネは敬稱)、ナムチ(汝眞主の轉呼)はいづれも敬語であるが、ナネは廢用となり、ナムチは慣用上同輩以下に用ひられるやうになつたので、オマヘ(御前)、アナタ(彼方)、キミ(君)の如き語を之に代用し、或は種々の漢語を用ひるけれども、純粹の代名詞でない事は既述の通である。

コ。「此」の意で、次のソ(其)と共に對立二者の區別稱呼に用ひられる。其故に事物、方位、場所の表示の外に、コチ(此方)、コチラ、ココ(此處)許等の形に於ては第一人稱、コナタ(此方)は第二人稱をも意味するのである。

シ、ソ。シは漢語之、是、斯、爾等と語原を同うし、大陸に於て弘通した語であるが、我國に於ては上記コと對峙して「其」の

意に用ひられ、通例ソと發音せられる。其故に事物、方位、場所等の表示の外に、シの形に於ては第三人稱ともなり、ソチ(其方)、ソチラ、ソナタ(其方)、ソコ(其處)許等は第二人稱にも用ひられるのである。

カ(ア)。カとアとは本來同語でカの如く發音せられたのがkaとhaとに別れ、haから更にaに轉じたものと思はれる。恐らくは漢語の何、假等と源を同うするのであらう。カナラズ(必)、アル(或)等の語幹としては不定を意味するものゝやうであるが、代名詞としてはワ(我)、オ(己)、ナ(汝)以外の人稱にも、コ(此)、ソ(其)以外の事物、方位、場所を指示するにも用ひられる。

タ、ド。本來一般的疑問代名詞であるが、タの形は夙に人代名詞に専用せられて「誰」の字をあて、事物については専ら次號のイを用ひるやうになつたので、古歌には尙イヅレの意を以てタ、タレを用ひた例があり、口語に於てはドと轉呼して人稱にも事物(方位、場所)の指示にも相通じて用ひる。例へばドナタ、ドチラといへば何方の意にも、誰の義(敬語)にもなるのである。

イ。原形の儘では用ひられぬが、イツ(孰)、イカ(如何)、イク

三、數 詞

上代人の數の觀念は概して幼稚で、我國に於ても基本數及二位數の外は多くは概數を用ひたやうであるが、人智が進歩するに伴ひ、精密なる計數を要求すると同時に、表現の簡潔ならん事を欲したので、比較的早く漢數詞が弘通したやうである。其は今日我々の用ひて居る所のもので、漢數詞を除外しては殆ど成立せぬのであるが、其用法は特に説明を要せぬから、こゝには純日本數詞のみについて述べる。

國語の數詞は左記の三形を具備する。

原形	形容詞形	名詞形
一 ヒ	ヒト	ヒトツ
二 フ	フタ	フタツ
三 ミ	ミ	ミツ
四 ヨ	ヨ	ヨツ
五 イ	イツ	イツツ
六 ム	ム	ムツ
七 ナナ	ナナ	ナナツ
八 ヤ	ヤ	ヤツ

(幾)の形に於て、若くは之に接尾語を附して種々の意味の疑問代名詞に使用することは上表の通りである。イツのツは數稱(次項参照)、イカのカは形容語尾で、イクはイカの轉呼である。——何時をイツといふのはイツのトキの畧であらう。

右の外イが汝の意に用ひられた例がある「神武紀」。此は朝鮮語(此)と同語で、上古我國に於ても用ひられた名殘であるらしく、イマン(汝)のイも之に屬し(マンは敬語)、今も關東方言では第二人稱をイシといふ事もあるのである。——シはワシ(我)のシと同じく、「其」の意から轉化した接尾語であらう。

ナニ(何)は朝鮮語の疑問助語ナニ又はナニと同源で、名詞的に用ひられる。上記諸原語のやうに變化せぬ所を見ると、稍後代の移入語と思はれる。

之を要するに國語固有の代名詞は對立二者を區別する語(ワ、オ、ナ、コ、ソ)と其以外のものを指示する語(カ、タ、イ)とに二大別せられるが、判然と人と事物、若くは自他及第三者を區別するものではなかつたのである。されば西洋文法の例に倣うて之を類別することは不可能ではないとしても、徒に繁瑣を加へるのみで、語法上益する所がないから、寧ろ代表的意味を有する名詞の一種として之を見ることを可とする。

九	ココ	ココノ	ココノツ
十	ト	トラ	トラ
五十	イ	イ	イツヂ
百	モモ	モモ	モモチ
千	チ	チ	チヂ
萬	ヨロ	ヨロ	ヨロヅ

數詞は少數を除くの外日本語獨特で、其原義を明にし得ぬものもあるが(言語學「西頁以下」)、ヒ(一)、ミ(三)、ヨ(四)が母韻變化によつてフ(二)、ム(六)、ヤ(八)といふ倍數表示となつたことは畧々疑がなく、イといふ語音に五及五十の義がある所を見ると、或は上記不定代名詞が轉用せられたのであるかも知れぬ。ナはナミ(並)、ナカ(中)等の語幹であるから、ム(六)とヤ(八)との中間數といふ意を以て七にあてられたものらしく、ココ(九)はココダ(許多)の語幹で、原語は古語コ(巨)であらう。ト(十)は「止」の意、モモ(百)はモロ(諸)の原語モを重ねたものと思はれる。五百、八百をイホ、ヤホの如く稱へるのも、モが音便によつてホと轉じたのであらねばならぬ。チ(千)及ヨロ(萬)は古韓語から出たものゝやうであるが、チが今もチ(千)の形に於て計數の意に用ひられることは注意を要する。上記の如く名詞形の語

尾がチ又は其音便なるツで終つて居るのも一數(ヒトツ)、二數(フタツ)……百數(モモチ)等を意味したのであらう。形容詞形の語尾タ、ト、ツも其轉呼と思はる。
數詞は本初原形のみで、クロ(黒)、シロ(白)等の如き形容語(體言)と同一性質のものであつたらしいが、便宜上他の二形が分派せられたものと思はれる。其故に原形と形容詞形とが相異なるのは一、二、五、七、九、十のみで、名詞形は十を除いては盡く形容詞形にチ又はツ(數)をそへたに過ぎぬ。各形の用法は次の通である。

原形。數を計上する爲には今も獨立して用ひられ、結合分子としてもハタチ、——ハタはフト(二十)の轉呼——イソ(五十)、イホ(五百)、ミへ(三重)の如き例があるが、單語音は不便であるので、慣用語の外は餘りに用ひられず、計數にも韻を伸ばしてヒイ、フウ、ミイ、ヨオ、イイ、ムウ、ナア、ヤア、トオと發音することがある。

形容詞形。此形はフタモモ(二百)、ナナソ(七十)、ココノチ(九千)の如き結合數詞を作ることの外に、計數にも用ひられ、又ヒトクチ(一口)、フタミチ(二道)、イツモト(五本)、ナナガリ(七曲)、ココノへ(九重)の如く、修飾語的に用ひら

れる。——述語としても「淡海の海泊八十あり」の如き用例

があるが、通例後記の如く名詞形が之に充當せられる。

名詞形。常用の數詞で、計數の用にも供せられ、ヒトツマツ(一松)、フタツボシ(二星)、ミツクミ(三組)、ナナツクラ(七倉)、ヤツカシラ(八頭)の如く用ひられる事もある。述語としては之に助動詞アリ(ナリ)をそへて活用せられる。

二位數以上の端數を表示する爲にはトラ餘ヒトツ、ヤソ餘ムツのやうに、上位の數は形容詞、下位は名詞形を以て唱へ、中間にアマリ(餘)——約してマリ——といふ語を挿入するを例とするが、モモトラズ(百不足)五十、ツエ(丈)不足ヤサカ(八尺)などいふ枕詞のある所を見ると、二十九をミソ不足ヒトツといふたこともあり得る。漢數字が輸入せられて以來、二位以上の數は之を以て唱へるを便としたので、國語固有の稱へ方を固執しなかつたものゝやうである。神代紀に自天孫降臨以逮于今、一百七十九萬二千四百七十餘歳とあるのも恐らくは音讀させるつもりであつたのであらう。——上代には此のやうな精密な計數觀念が存在しなかつたことは既述の通である。

數詞は右の一種(三形)のみで、特別の數稱を必要とする場合には其に相當する語を添へて表示するのであるが、日數及人數

に限り左記の如き慣用語がある。

日數	人數
一日	ヒトヒ 一人
二日	フツカ 二人
三日	ミカ 三人
四日	ヨカ 四人
五日	イツカ 五人
六日	ムイカ 六人
七日	ナヌカ 七人
八日	ヤカ(ヤウカ) 八人
九日	ココノカ 九人
十日	トラカ 十人

カとヒとはいづれも曆日を意味する語で、上代は併用せられたのである(名詞語尾カの項下参照)。人數の稱呼は數詞の述語形から轉用せられたものらしく、ヒト・アリ、フタ・アリ、ミツ・アリ、ココノツ・アリが約せられて上記の如く稱へられ、人ニアリ、人三アリ等の意を以て人數に專用せられたものと思はれる。されば古は「大和の高さじ野をナナ行く少女ども」「神武記」の如く用ひて「ナナタリ行く」とはいはなかつたのである。

四、動詞

厳密にいへば動詞は動作行為の實演を表示する言葉である。「運動」「勉強」の如き漢語は明に動作行為を意味するにも拘はらず、之にスルといふ語を添へねば動詞にはならぬが、ミル(見)、ユク(行)、ナヅ(撫)等は其自體に此條件を備へて居るのである。此諸語の原形はミ、ユキ、ナデで、前章に述べたやうに單語と見なすべきものと、特種の接尾語の連結したものとに別れ、殆ど除外例なしにイ韻若くはエ韻を以て最終母韻とする。例へばミ(見)の原語はメ(目)、ナデ(撫)の原語はナヅである。「語誌」ことは明であるが、ミ、ナデの形が動詞の原形を表現するに適當と認められたのである。

其理由を案ずるにはイは既記の如く「此」を意味する古語であるから、——今も朝鮮語、マレー・ミクロネシア語等に於ては其意味に用ひられて居る——漢文で動詞を表現する爲に見之、書之の如く「之」の字を添加すると同一の趣意を以て、メ(目)イ(イ)を約してミとしたのであらう。此は動詞の構成が邦語と極めて類似するマインシャル語に於ても例のあることである。エを原形とするのはイの轉呼又は變形

か。若くは動詞語尾エの接着した結果である。

原形は動作行為を意味するけれども尙名詞形で、現實の活動を表示する爲には更に標識を設くる必要ありとせられた。之が方法は新語構成の場合と同じく、(一)語自體の變化によるか、(二)他の語を連結して之を表示するかの外はないのであるが、國語に於ては此二者を拆衷して一種獨特の様式を作り出した。即ち語幹にアリ(有)をそへて動作行為の實演を表示すると同時に、語尾の韻を變化して活用の基礎を形成する。此は他國語に其類を見ざるものである。

「有」を意味する語が現實行動の表現に用ひられることはウル・アルタイ語系にも、マレイ語系にも共通で、今の朝鮮語、アイヌ語、琉球語に於てもその通である。國語でもヲリ(居)、ハベリ(侍)の如く、キ(坐)、ハヒ(匍匐)といふ語にアリが結合したものは其儘動態表示となるのであるが、——私は之に動格といふ名を與へた——一方に於てはアリをアルと變化して動格とする方法が行はれた。例へば上記ミルはミ(見)にアルの約ルをそへたものであるが、ユク、ナヅはユキ(行)、ナデ(撫)の最終母韻の變化によつて生まれのたのである。

時格の觀念が發生するに及び、ユク、アルの如き一形のみでは

るのみである。

原形	第一變形(動格)	第二變形
(一) 見	見ル	見レ

型式上から(一)は四段活と呼ばれ、(二)は原形の語尾がイ韻なるか又はエ韻であるかによつて上(下)一段活と稱へられる。現代の口語の基本活用様式は此二種である。

右の外兩様式を拆衷した一種がある。其は原形が一轉してウ韻の動格に變化した後、第二様式に従うて之にル(アル)、レ(アレ)を添付して活用せられるもので、原形の語尾がイ韻なるか、エ韻なるかによつて上二段又は下二段活と稱へられる。例

原形	第一變化(動格)	第二變化
(二)	上二段	下二段
	落ち	撫デ
	(a) 落ツ	(a) 撫ツ
	(b) 落ツル	(b) 撫ヅル
	落ツレ	撫ヅレ

動格(第一變形)がa、b二形に分れるのは此様式にあつては當然のことで、性質に於ては少しも變りはない。然るに之を全然別種のものと思はした結果、誤用、誤解を來したことは後記の通りである。——此様式は文語にのみ限られ、口語では全く用ひ

不十分なりとして、ユキをユクとし、アリをアルと變化したと同一筆法を以て、ユケ、アレの如き一變形を加へ、之を以て今より以前に起つた實演を表示し(至今格)、ユク、アリ(ル)は今より以後の表示(自今格)に用ひられるやうになつた。即ち此時代に於ては文法の「時」は現利那を境として其前後にわかれたので、——チャモロ語に於ては現に此二格に區別せられて居る——終止法としてユケ、アレの如き形が用ひられるやうになつたのも此理に由るものである。之について未然を表示する他の一形ユカ、アラが生まれたのは當然の發展で、其結果動詞自體は次の四形に分かれた。

原形	第一變形(動格)	第二變形	第三變形
(一)	行キ	行ク	行カ
	アリ	アル	アラ

但し第三變形は之に後記の助動詞ム(メ)を連ねて始めて完全なる未來格となるものであるから、私は之を未來分詞形と呼ぶことにした。

然るにミ(見)の如く助動詞アリを連ねて動態を表示するものに在りては、ミレとは變化するが、ミラといふ形はなく、未來表示の基礎には原形を其儘用ひるので、次の如く三形を具備す

られず、之に代ふるに上下一段活用を以てすること左記の通である。

落ち 落チル 落チレ
撫デ 撫デル 撫デレ

古事記神代卷に見えるイサチル、續紀宣命の荒ビル如き用例のある所を見ると、此用法は上古の活用の名残で、決して訛言といふべきものでないのみならず、上記の如き動格の重複が除かれ、誤用、誤解の虞がなくなるから、寧ろ語法上の一進化といふべきである。

時としては同一語が四段活と二段活との兩様に用ひられることがある。此場合若干の音便變化が起り、或は缺脱形があるので、變格と稱へられる。即ち

カ行變格 キ(來) ク クレ コ(カの音便)

サ行變格 シ(爲) ス スレ セ(サの音便)

ナ行變格 イニ(去) イヌ イヌレ イナ

シニ(死)も亦此活用に從ふ。

動詞アリは四段正格であるが、原形アリは上記の如く最古の式に從ひ、其儘動態表示(終止法)に用ひられることを異りとする。之を上記に准じて表示すると次の如き形式となる。

アリ(有、在) アリ アレ アラ

此故を以て通例之を四段變格と稱へるのである。動詞居リ、侍リの活用も亦之に從ふ。

國語では本初動作、行爲の方向を區別することを必要としなかつたらしく、第二次生の語に在つてはカシ(貸)、カリ(借)の如く語尾によつて區別し、或はウリ(賣)、カヒ(買)のやうに別語を以て表現することもあるが、ワタリ(渡)は向から此方へ渡る意にも、此方から向へ渡ることをいふ場合にも用ひられ、キ(來)、ユキ(行)の相違も決して方向の如何によるものではなかつた。タマヒ(賜)は授受兩用であつたのであるが、後日之を區別する必要上タマハリ又はタビといふ形を用ひるやうになつたのである。されば敬語に轉用する場合には對手のことをいふは勿論、自身の動作行爲を表示するにも、「侍リ」「仕へ奉リ」と同様に用ひられるのである。自他の別も亦上古に於ては嚴重ではなかつたと見え、一語で自他兩様を兼ねるものが少くはない。例へば

フク(吹)は「風吹ク」(自)とも「毛を吹ク」(他)のやうにも用ひられる。マシ(増)、ワスレ(忘)等も亦自他兩用であるが、必要のあるものは接尾語(自)、シ(他)を以て區別せられることは既に前章に述べた通である。右の外四段活又は上二段活の語を下二段活に轉用して自他の別を表示することがある。例

(四段)

開キ(自)——開ケ(他) 合ヒ(自)——合ヘ(他)
入リ(自)——入レ(他) 染ミ(自)——染メ(他)
立チ(自)——立テ(他) 折リ(他)——折レ(自)

(上二段)

生キ(自)——生ケ(他) 伸ビ(自)——伸ベ(他)

右の合へ、生ケ等を合ハセ、生カセの約なりとする説もあるが、其やうな約縮法の存せぬことは第一章に論じた通である。

上記動詞自體の變化は活用の基礎となるものであるが、完全に動詞を活用せんが爲には他語の助をからねばならぬ。此用途に充てられる語も亦多くは動詞の一種であるが、獨立しては意をなさぬか、若くは意味に多少の相違があるので、助動詞と稱へて區別せられる。動詞と助動詞との連絡及助動詞自體の變化等については特に一章を設けて之を記述する。

動詞の原形は既記の如く本來一種の名詞形であるから、名詞に准じて用ひられるのは當然で、スキ(歛)、タテ(楯)、コシ(輿)の如く物の名稱となつたもの、或は財産をトミ(富)、狩獵をカリと云やうに、常用名詞として用ひられるものもあるが、然らざるもヨミ、カキ(讀、書)、ユキ、カヘル(行、歸)、オモヒ(念)、カムガ(考)の如く用途によつて名詞と了解せられるのである。

原形は又他の名詞に連つて「見物」「行先」「落口」の如き複合名詞となり、或は他の動詞と結合して「見渡シ」「行キ着キ」「落ち下ル」のやうに複合動詞を構成するのであるが、其動格(第一變形)が名詞に先行する場合には修飾語と見なされる。例へば「行ク道」「落ツル水」「見ル人」等は道、水、人を限定する爲にユク、オツル、ミルといふ動格を冠したのである。——體言に連るといふ意を以て之を連體法と稱へる——此場合上下二段活動詞に在つては動格(第一變形)二種の中b型を用ひることを慣例とするので、此型を連體形と呼稱するものもあるが、決して之に限られた譯ではなく、古典にはa型を用ひた例も少くはない。若しa、bの區別用法が絶対に必要なものであるとすれば、一段活及四段活動詞にも其一形が加へられた筈で、比較的語數の少い、しかも第二次生と思はれる二段活動詞にのみ之を存する理

由がない。——此事は次章の通則中終止法及助動詞との連用の項下に於て再述する。

動詞の諸形は又助語に連つて行クニ、行クト(トモ)、行クハ、行ケバ、行ケド(行ケドモ)、行カバの如く副詞又は前提句を構成することがある。此用法の説明は次の副詞及接續詞の項下並に第五章に譲る。

上記の如く原形は複合動詞を作り、或は助動詞に連るので誤まつて連用形(用言に連るといふ意)と命名せられたけれども、

——「花咲キ鳥語フ」の如き呼應的用法については次章第四目に述べる——他の動詞(助動詞)に連るのは必しも此形ばかりではなく、第二、第三變形も亦見ル。如シ、行ク可シ、行カムの如く用ひられることがあり、其外にも見ニ、見テ、行キニ、行キテの如クニ、テを原形に添へた特種の形がある。此語分子は助語ニ、トと同原から分化したもので、原義は「中」「外」であるが、此場合には動體の實現を表示し、他の動詞(助動詞)との聯絡の用をなすものである。例へば見行クと見ニ行ク、行キ見ルと行キテ見ルとの間には前續語の用途に抽象的と實際的との差異があり、見ケリと見ニケリ、行キキと行キテキとは後章に説くやうに、時格が相違するのである。此微妙な用法上の差別は隣民族語に

類のないもので、唯マーシャル語に於て之に似た語法を見るのみである(拙著「マーシャル語の研究」參照)。此形は多くの場合他語と結合して始めて完全なる意味をなすものであるから、私は便宜上之に分詞といふ名を與へた。
兩語分子は同時に完了時格を表現する助動詞として活用せられるが、之が説明は次章に譲る。

五、形容詞

形容詞に固有のものとしといふ語尾を添へて作られたものと二種があることは既に前章形容語尾の項下に詳述した。——説明の便宜上之を甲種、乙種とよぶことにする——兩者共に本來一種の體言で、名詞に先行して「黒駒」「古里」「寒風」「クハシ女」「カナシ妹」「ウツシ國」の如く用ひられ、又助語ノを挿入して「長の旅」「ナツカシの君」などいふこともある。

國語の原則として修飾語は常に係りとして被修飾語に先行することを要するのであるが、狀態の實現を表示せんが爲には之を述語即ち結びに用ひねばならぬことがある。此場合には歐洲語の如くアリ(有)の意の助動詞を結びつけて之を表現するのが最も普通の形式で、今の朝鮮語琉球語にも行はれて居るが、國

語に於ては其以外に特種形式を用ひた。即ち前章に掲げた接尾語シ及ケを添付して之を標識するのである。

ケは既記の如く無變化で、終止法として用ひられると同時に、活用の基礎ともなつたのであるが、動詞自體を變化したと同様の着想から、ケレといふ一形を分派し、ケとケレとによつて今より以後と今より以前の二時格を表現した。ケは後日キと轉呼せられ、更にクといふ一形を分派した外、上記のシのついた形をも併用して特種の用言を現出した。例

原形	第一變形(動格)	第二變形	第三變形
遠	(a) 遠シ	遠ケレ	遠ク
	(b) 遠キ		
悲シ	(a) 悲シ	悲シケレ	悲シク
	(b) 悲シキ		

右は動詞自體の變化の模倣で、動格に二形のあることも亦二段活動詞と趣を同うし、第二變形は時としては終止法にも用ひられるのである。但し第三變形のクは四段活動詞の第三變形とは全然性質を異にし、略々上記動詞のニ、テの形(見ニ、行キテ等)に相當するものであるから、同じく分詞形と呼び得る。

第一、第二變形の用法は動詞の其と大差はなく、動格中のb型

は終止法にも連體法にも用ひられるが、a型は終止法に限り、——カナシ妹、ウツシ國等は既記の如くカナシ、ウツシといふ原形を名詞に直接したもので、黒駒、古里等と同一用法である——今では文語に残存するのみで、口語に於ては殆ど用ひられぬ。同ジキ年をオナジ年(音便オナイドシ)といふことはあるが、年が同ジといふよりも同ジイ(同ジキの音便)とするを可とし、道が寂シイ、聲が悲シイを決して道が寂シ、聲が悲シとはいはぬのである。

形容詞の原形は動詞(助動詞)とは直接連用することが出来ぬから、未來、過去の諸時格を始め、諸語法はクの形にアリを連結したカリ(ク、アリの約)を以て表現せられる。例へば遠、悲シは遠カリ(遠ク、アリ)、悲シカリ(悲シク、アリ)といふ複合形を原形として次の如く活變する。

遠カリ	(a) 遠カリ	遠カレ	遠カラ
	(b) 遠カル		
悲シカリ	(a) 悲シカリ	悲シカレ	悲シカラ
	(b) 悲シカル		

此形式は純然たる動詞であるが、形容詞自體の變形と混用せられるので頗る紛らはしくなつた。さりながら其本質は全然相違

するから、重複する形は多少異つた意味に用ひられることもある。例

古語	自體の變化	動詞形
遠ケ(終止)	遠キ(終止)	遠カル(終止)
遠ケ里	遠キ里	遠カル里
遠ケ(カ)バ	遠クバ	遠カラバ
遠ケバ	遠ケレバ	遠カレバ
遠ケ(カ)ドモ	遠クトモ	遠カリトモ
遠ケドモ	遠ケレドモ	遠カレドモ
遠ケム	遠カラム	

即ち自體の變化を用ひて事足りる場合には動詞形を用ひることなく、遠カリ、遠カル等は「遠ク在リ」「遠ク在ル」の意——換言すればアリを助動詞と見ず、存在の義の動詞と解した意味——に用ひられるのである。

之を要するに形容詞自體の變化はケの接着した形に於てのみ起り、シは徹頭徹尾無變化で、——口語では廢用となつた——此兩者を合せても完全なる活用をすることが出来ぬので、カリを語尾とする動詞形を以て之を補ふのである。カリを接着した

形は上記の如く純然たる動詞であるから、之が爲に特に説明を施さず、次章に於て他の動詞と一括して記述する。

六、副詞

國語に於ては副詞の限界を定めることは困難であるが、こゝでは形容詞及動詞を修飾する單語の外に、廣く副位に立つ言葉(句)をも副詞(句)と解したい。何となれば「南ニ行く」「何ト見る」の南ニ、何トは副詞で、「市ニ行く」「花ト見る」の市ニ、花トは副詞ではないといふ論理は、意味の上からはともかくも、語法上成立せぬのである。

或る言葉が副位に立つことを表示する爲には上例の如く助語ニ及トを用ひる。此兩助語が名詞(代名詞)に接着したものは尙主語又は述語の補足——其名詞(代名詞)についていへば補格に用ひられたもの——と見ることも可能であるが、爾餘の品詞に連る場合には明白に副詞である。例

第一ニ數へる	疾クト思考する
平カニ安し	行クトすれば
疾クニ歸れり	悲シト聞く
遠キニ及ぶ	

見ルニ如かず

又ト見ぬ

又句(若くは節)にニ、トを添付すると往々副詞句を構成する。

例

「久しき時」ニ逢へる君かも
「今日を限り」ト散る櫻かな

動詞の分詞形も亦ニ及トから轉化したテを添付したものであるから、同じく副詞的に用ひられることがある。例

シキリニ(頻)憂ふ ミダリニ(妄)行ふべからず
カヘリテ(却)不可なり マシテ(況)憊ばる

形容詞の分詞形も亦之に准じて用ひられる。

多ク語らず 悲シク侘びし
遠ク長し 劇シク憤る

形容詞は又之を反復することによつて副詞を形成する。例

ハルバル(遙々) カルガル(輕々)
ナガナガ(長々) ヒロビロ(廣々)

動詞も亦之に准じてユクユク(行々)、カハルカハル(代々)、マスマス(益々)の如く副詞に用ひられることがある、

右の外昔、今、一年、昨日、東、西、露、萬の如き體言も副詞に流用せられることがあるが、之に専用せられる單語は絶無という

てもよい。左記の諸語の如きは固有の副詞であるかのやうに見えるけれども、其原語原義を繙ぬるに於ては他の品辭から轉用せられたもの、若くは漢字を訓讀する爲に特設せられたものであることが明にせられる。

ア(豈)。朝鮮語の否定動詞の語幹^アハ(音アニ)から出たものらしい。^アハ^オ(約して^アと^オといふ)は「爲す」の反對で、「豈爲さんや」の意である。此語は萬葉集第三卷に「價なき寶といふとも一坏の濁れる酒に^アニまさらめや」とある外、古歌にも二、三の用例がある。

アマタ(夥多)。原語はマで、モモ(百)、モロ(諸)のモと同語であるが、マタ(タは接尾語)の形に於ては、又、複、再等の意に用ひられ、之に接頭語^アを冠したアマはアマリ、アマシ(餘)の語幹となつた。アマタは其頭尾に^アと^タとを接着したもので、本來は名詞形であるから、「アマタは寐ずと」「尤恭紀」、

「アマタの人」の如くも用ひられるのである。
アマネク(普)。マナシ(間無)の轉呼マネシに^アを接頭したアマネシ(形容詞)の分詞形である。
イト(太)。原語ト(銳)。イタシの形に於ては形容詞として用ひられる。

ウタタ(轉)。ウツリ、ウツシ(移)の語幹ウツ、又はウトシ、ウトミ(疎)の語幹ウトに名詞語尾タを添付したウツタ又はウトタの轉呼で、原義により「轉々」と「憂沖」の二意がある。——古語ではヲタテとも稱へられた。

ウベ(宜)。動詞ベシ(可)の語幹べに「大」の意のウを冠したもので、原義は「大に然り」といふことである。——ムベとも轉呼せられる。

オソラクハ。「恐ることは」といふ意。——第五章助語の項下参照。

オヨソ(凡)。オホヨソの約。オホは「大」の意であるが、オホシ(凡)の義にも用ひられる。ヨソは「外」の意である(語誌)。カタガタ(旁)。カッ(加)カッ(加)の轉呼。カッの原形はカテ

で、同じ意を以てカテラ、カテリとも用ひられる(第五章助語の項下参照)。

カツテ(會)。カテ(加)テの音便。古は「花かつみカツテも知らぬ戀もするかも」(萬四)の如く、スベテと同意に用ひられ、「都」の字をあてたが、後世「從來」の義に轉じたのである。

カナラズ(必)。「假に^カあらず」といふ意。カは不定代名詞及疑問助語としても用ひられ、事の不確實なる事を意味する原語

である。——此語は恐らくは漢字の「必」を訓する爲に作られたのであらう。

ケダシ(蓋)。キザシ(兆)の轉呼であらう。モシ(若)と同意に用ひられるのは轉義である(語誌)。ケダシクハ(蓋シ此ハ)といふ熟語から轉じて、今では「其は」といふ意に了解せられる。サテ(扱)。サは「然」の意。之に分詞形語分子テが直接したもので、「然シテ」と同義である。其故に「而」の意の接續詞として「老いたる人サテハ少きも」の如く用ひられたが、轉義により「却説」の意と了解せられるやうになつたのである。

シバシ、シマシ(暫)。シマ、シバ(繁間)の形容詞形。寸間の意で、シバラクともいふ。シバラクは恐らくはシバラカ(ラカは形容語尾)の轉呼であらう。

シバシバ(屢)。右のシマ(繁間)の疊語で、隙間なく繰返すといふ意味から頻々の義を生じたのであらう。

スコブル(頗)。スコ(少)ビの一活用形。——活用語ビの項下参照。

スナハチ(乃、則)。古は登時(ソノトキ)の意にも用ひられた。恐らくはソノハシ(其間)またはソノハテ(其終)の轉呼であらう。

なつたのである。ヒタブル、ヒタモノともいふ。

ホト(程)の疊語。ホトの原義はハ(端)ト(處)であらう。

ホノボノ(微明)。ホノ(仄)の疊語。ホボ(畧)。ホは秀の義か。ハツハツと畧々同義である。

マダ(未)。助語モには「尙」の義もある(其項下参照)。マダは之に名詞語尾タを接着したマタの轉呼で、「亦」の意のマタと同源異義である。イマダはイマ(今)マダ(未)の約か、若くはマダに接頭語イを冠したものであらう。

マツ(先)。古語には見えぬから、韓語^マツ(長、初等の意)の轉用であらう。

モシ(若)。未來助動詞ムに形容語尾シが接着したムシの轉呼で、尙疑のあることを意味する。

モツバラ(專)。マ(接頭語)ツバラ(詳)の轉呼。モトモ(最)。上記^マに助語モを添へたものゝやうである——

口語ではモットモと發音する。モハヤ(最早)。モは接頭語マの轉呼か、又は上記^マの約であらう。

ムシロ(寧)。上記モシ(若)に接尾語ロを添付したものであら

ソモソモ(抑)。其モ其モの意。接續詞として用ひられた抑は寧ろハタと訓むべきで(次項参照)、此字の用途から逆推してソモソモといふ語を句頭に用ひてはならぬといふ説の如きは論ずるに足らぬ。

タダ(唯)、タダシ(但)。原語タに「唯」の意があり、タダは其疊語である。タダシは形容詞形。

タチマチ(忽)。「立待」の意なることはいふまでもない。タトヒ(縦)。動詞タトヒ(譬)の轉用。タトヒは誰問^{タトヒ}の意から轉じたものゝやうである(語誌)。

ツラツラ(熟)。連々^{ツラツラ}の意。ツクツク(續々)と同じく、「不斷」の義からヨクヨクといふ意味に轉じたのであらう。

ナホ(尙)。ナホリ、ナホシ(直)の語幹で、「復」の意が含まれて居る。

ネモコロ(懇)。原義は「共根」であるが「語誌」、親誼の意を以て「懇切」をいふに轉用せられたのである。

ハナハダ(甚)。ハタの疊語ハタハタの轉呼。——次項接續詞ハタの條下参照。

ヒタスラ(只管)。ヒタ(眞)とスラ(尙)との結合語。スラの原義は「其」であるから(第五章助語の項下参照)、一途といふ意に

う。無乃の義に轉じた徑路は尙之を詳にせぬ。モト(固)。本、原の意のモトと同語である。モトヨリといふ形に於ても副詞として用ひられる。

ヤガテ(聽)。ヤ(彌)カテ(加)の意か。ヲサヲサ。ヲサ(長)の疊語であらうが、「宗^{ムネ}として」といふやうな意味に用ひられる。

之を要するに國語には固有の副詞は存在せず、用途について此稱呼が與へられるに過ぎぬのである。

七、接續詞

接續詞も亦副詞と同じく特別の語彙をなすものではなく、名詞若くは他の品詞を轉用し、就中助語によつて語句の接續を示す場合が多い。助語ノ、ガも亦二語(句)を連繫する用に供せられるものであるから、嚴密にいへば接續詞であるが、「山ノ雪」「梅が香」の如き用法は前續名詞が修飾の目的を有し、後續名詞と資格を異にするので、通例接續詞とは見なされず、「山ト河」「梅マタハ櫻」のやうに同位の語を連繫するために用ひられる場合のみが此品彙に屬するものと了解せられて居る。さりながら右の二語も亦明白に接續の用をなすことは次々に説く通で

ある。

同位の二語(句)を連繫する場合にも同類接續と異類接續との別がある。例へば「山ト川」「梅及櫻」といへば山と川又は梅と櫻とは同種類のものに見なされたのであるが、「山又は川」「梅若くは櫻」といふ場合には、前後の二名詞は異種類のものとして取扱はれたのである。此差別は前提と歸結とを接續する複文に在ては其相對關係の順逆に於て現はれる。「行ケバ達ス」は順であるが、「行ケドモ達セズ」といへば前提と歸結とは反對になる(逆)。其故に此種の接續を反接といふのである。

同位同類の接續は通例左の諸語を以て表示せられる。

ト(助語)。原義は「外」であるが、對立の意を含むので(第五章參照)。「月ト花」「君ト我」の如く接續詞としても用ひられる。「月ト花トいづれか勝れる」「君ト我ト共に見む」といふやうにトを重ねて用ひることもあるが、之によつて始めて接續の効力を生ずるのでないから、萬葉には「むろの木ト棗がもと」「天香樹ト棗トの下といふ意)、「なく千鳥かはづト二つ」(千鳥ト蛙ト二つといふ意)の如く用ひた例もあるのである。さりながら「兄と弟の子」というては「兄の子及弟の子」の意か、

接續の爲に用ひられることがある。古は之が爲に往々助語ノを用ひた。例

(萬三) 天地にくやしきことノ世の中にくやしきことは

(萬五) 風まじり雨降る夜ノ雨まじり雪降る夜は

此語法は廢れたが、口語に於て「何ノ彼ノ」「酒だノ飯だノ」の如く助語ノを用ひるのは其名残で、之に連繫の性能があるから、上記のとと同様に、接續詞ともなり得るのである。されば此ノに代ふるにトを以てして「何トカ彼トカ」「飯トカ酒トカ」といふても意に於て大差はないのである。

同位異類の接續には上記ト、ノのやうに助語を原形の儘用ひることはないが、之に供用せられる接續詞に左記の如く助語ハから出たもの、若くは之を接續したものが多しは、ハに絶對の義が含まれて居るからであらう。

ハタ(將)。助語ハに名詞語尾タを添へたもので、モタの轉呼なるマタが同類接續詞なるに反し、ハタは異類接續に用ひられるのは原語モとハとの相違にもとづくものである。此に漢字「將」を充てるのは妥當であるが、求^レ之^レ歟抑^レ與^レ之^レ歟(論語)の「抑」の如きも亦ハタと訓すべきで、之をソモソモ(其も其も)の訓むのはソモソモ誤である。

又は「弟の子及兄」の意か判明せぬ場合があるので、前者を明示せんが爲には「兄ト弟トの子」の如くトを重ねることを可とする。されば尋常の場合、「金ト銀」「國家ト國民」の如く用ひるのは正當で、後續語の下にあるべきトを省略したものとする説は誤とせねばならぬ。

マタ(又)。助語モに名詞語尾タを接着した一體言で、モの原義により對偶の意を以て接續詞として用ひられる。例、山マタ山、山を超えマタ水を渡る

オヨビ(及)。重疊を意味する動詞の原形であるが(語彙)、接續詞としては上記ト及マタと同義に用ひられる。

ナラビニ(並)。動詞ナラビ(並)の分詞形である。

カツ(且)。動詞カテ(加)の轉用で、加へるといふ意味を以て接續詞に用ひられる。例、飲みカツ食ふ

スナハチ(即)。副詞スナハチの轉用で、「其ものは」といふ意味に用ひられる。例、富スナハチ財産

シカシテ(而)。シカ(然)爲^シテの意から接續詞に轉用せられたもので、口語に於てソシテ又はソウシテといふのもサ(然)爲^シテの轉呼である。

尋^{ツイ}デ、仍^{ツイ}テ(依テ)、從^{ツイ}ウテ、就^{ツイ}テ、斯^{ツイ}クテ等の副詞形も亦句(文)の

マタハ。上記のマタ(又)に助語ハを添へたものであるが、其表現する意味は大に異り、「雨マタハ風」といへば雨か風かどちらかといふ意になるのである。

モシハ、モシクハ。モシ(若)は事の疑はしきを表示する副詞であるが(其項下参照)、之に直接又は名詞語尾ク(此)を介して、助語ハを添へ、異類を連繫する接続詞として用ひる。

アルハ、アルヒハ。アル(或)はア(彼)と同源の不定代名詞であるが(其項下参照)、助語ハを添付すると異類接続詞になるのである。近世アルヒハといふ言葉を之と同義に用ひるのは恐らくはアルイヒ(或謂)ハの約であらう。

サテハ。副詞サテ(扱)の項下に述べたやうに、此語の原義は然而であるから、シカシテと略々同義であるが、助語ハを添付した結果、マタハと同じく異類接続詞に用ひられるのである。例、槍、大刀サテハ弓矢まで

シカラザレバ。シカリ(然アリの約)といふ動詞の否定語シカラズの一活用形で、口語ではサウデナケレバともいふ。

右の外副詞タダ(唯)はタダシ(但)の形に於て除外例の意を以て接続詞に用ひられる。モトモ(尤)が略々同様に轉用せられるのは殊絶の義を含蓄するからであらう。

前提と歸結とを連繫する助語も亦一面に於て接続詞であるといひ得る。此場合歸結の順逆によつて用語を異にし、順當の歸結を導く爲には助語ハを用ひる。例

風吹カバ寒カラム

風吹ケバ寒シ

落チバ摧ケム

落ツレバ摧ク

道遠カラバ 日晩レム

道遠ケレバ日晩レヌ

上段はハが動詞の未然格(次章参照)に接合したもので、未來の事を意味するから、假定(條件)となり、従つて其結びも亦未來格を用ひる。之に反して下段は已然格(次章参照)に連り、事の現實(既定條件)を表示し、述語の原由を意味するので、結びも現在又は現在完了格となるのである。口語では假定に吹クナラ、落チタラの如く活用語尾ナリ、タリの未然格をかりて用ひ、現實を表示する爲には行ケテ、落チレアと訛り、或は假定にも現實にも共通に行クト、落チルトの如く、動格に助語をそへた形を用ひるので、近代人は文語を草する場合にも往々行カバを行ケバと書くが、其誤なることはいふまでもない。

逆の歸結を導く爲には助語トモ(ド)を用ひる(第五章参照)。

例

風吹クトモ寒カラザラム

風吹ケドモ寒カラズ

落ツトモ全カラム

落ツレド全シ

遠クトモ行キ着カム

遠ケレドモ行キ着キヌ

上段と下段とが假定と現實とに分かれ、結びが之に相當することとの場合と同様である。口語では兩者共に行キテモ、落チテモ、遠ウテモの如く、テのついた副詞形にモを添へて表現する。前提と歸結とが別個の文をなす場合に於ても右に准じ、サ、シカ(然)にハ又はトモ(ド)を連結した熟語を以て接続詞とする。即ち

假定

順 サラバ、然ラバ

現實 サレバ、然レバ

逆 サリトモ、然リトモ

サレド、然レドモ

後者は假定、現實共にサリナガラ(然シナガラ)といふことがあり、サレバ、サレド等の代りに「是故に」「是を以て」「とはいへ(とはいへども)」を用ひることもある。——口語に於ては其々相當の表現が用ひられる。

右の外、助語ヲ及ガも亦句の接続の用に供せられることがある。例

音に聞きつるヲ目にはさやにも見ず

やん事なき際にはあらぬガすぐれで時めき給ふありけり

此は聞キツレド、アラネドといふに同じく、ヲもガも反接の用に供せられたものともいひ得る。ヲは反語を意味するモノ(第五章モの項下参照)と連ねたモノヲの形に於て最も多く用ひられ、ガは今も「其人も悪いガ君もよくない」といふやうな用法があり、獨立しても或はデアルガの訛ダガ(チャガ)の形に於ても接続詞的に使用せられる。例

とても生きては居られぬ。ガ、考へて見ると

さうかも知れぬ。ダガ(チャガ)此方にも理窟がある。

八、感動詞

感動詞は未だ言葉となるに至らぬ心の動きを發露する聲で、單獨でも他の語に連ねても用ひられるが、具體的の意味をなさぬものである。されば其性質上寧ろ助語に屬するのであるが、便宜の爲めこゝに一項を設けて記述する。

カ。感動の聲である。原形を以て用ひられた例は古歌に之を見るのみであるが、後記のナ及モと結合したカナ、カモは今も感動詞として知られて居る。此外に疑の意を含むカといふ助語があり(第五章参照)、カモとも用ひられ、甚まぎれ易いので「言語學」三頁、中世以降詠歎には専らカナを用ひるやうに

なつた。カナが形容詞カナン(悲、愛)の語幹となつたことは既に述べた通である。

カナ(哉)の外に、カに形容語尾シを添へたカシも亦中世以降感動詞として「見むカシ」「思ひつカシ」「ばかりぞカシ」「おはしめすめるカシ」「行きねカシ」の如く普く用ひられた。大和物語に「さても君忘れけりカシ」とあるのは誤寫または誤用であらねばならぬ。――口語に於てはカは勿論カモ、カナ、カシ共に用ひられることがない。

ガ。カの轉音コはコヒ(乞、戀)の語幹で、希求の意を含有する。感動詞法(カモ、カナ)も亦此意味に轉用せられ、通例ガ、ガモ、ガナと濁つて發音して區別せられる。例

- (記、明宮) かもガと我が見し子ら、かくもガと我が見し兒に
- (萬六) さ丹塗の小舟もガモ、玉卷のまかひもガモ
- (古今) 耳なしの山の口なし得てしガナおもひの色の下染にせむ

古歌に「吾いのち常に有らヌカ」「萬三」、「久方の雨も降らヌカ」「萬四」、「瀧の常磐トキハの常ならヌカモ」「萬六」の如く用ひられたヌカ、ヌカモは次號の感動詞ナの轉音ヌに此カ、カモを添付したもので、兩語分子共に希求の意を含有するから、強く希

望を表現する爲に用ひられたものであらねばならぬ。
ナ。ナは自然のかけ聲で、念を押す意味を以て次の如く用られた。

- (記、日代宮) うべナうべナ君待ちがたに
- (同) 空はゆかず足よ行くナ
- (同、明宮) あから少女をいさささばよらしナ
- (萬九) 明日よりは我は戀ひむナ

上記のカナのナも之に屬し、又後記の感動詞モを添へてナモともいうた。此形は萬葉集には唯一つ用例があるのみであるが(三七七)、續紀の宣命には屢々用ひられ(詔三三三、三三三)、更にナンと訛つて平安朝以降就中文章に數多く見える。例

- (古今) 袂よりはなれて玉をつつまめや此ナン其とうつせ見むカシ
- (古今序) 其始を思へばかかるべくナンあらぬ
- (同) 柿本の人麻呂ナン歌の聖なりける
- (同、詞) 此歌はまだ殿上許されざりける時めしあげられて仕うまつるとナン

此ナンは文法家によつてソと同義の助語と説かれて居るが、甚しい誤で、ゾに近く聞えるのは念を押す意があるからであ

る。上例のウベナウベナと同意を以てウベコソと用ひた例もあるが(記、高津宮)、ナンが感動詞であることは語原上明白で、貫之の土佐日記にも「心あるものは耻ぢずゾナン來ける」と、ゾに重ねて用ひてあるのである。

此ナはノ、ネとも轉呼せられ、ナア、ノウ、ネエと韻を延ばしては「ノウ其處な人」「ナア君」「ネエあなた」の如く呼びかけにも用ひられるのである。

ナ(ネ)。古は上記のナ又は其轉音ネを動詞の未來分詞に連ねて意嚮又は希望表示に用ひた。例

- (萬一) にぎ田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今はこぎでナ
- (同七) あぶり干す人もあれやもぬれ衣を家にはやらナ旅のしるしに
- (同二四) たかき峯トキに雲のつくのす我さへに君につきなナ高嶺と思ひて
- (記白橋原宮) うかひが伴今トモすけに來コネ
- (同高津宮) たか行くや隼別ささぎ取らさネ
- (萬二) 此をか茶つます子家のらへ名告らさネ

又上記のやうにヌとも轉呼せられ、アラヌカ、アラヌカモの如

く用ひられた。ネギ(願)といふ語も此ネから出たものと思はれる。
(註) 聞きネカシ、行きネカシなどいふネは助動詞ニの命令法で此とは別語である。感動のネは常に動詞の未來分詞に連るに反し、之は原形に續くから容易に判別し得られる。此ナから出たナン(恐らくはナモの轉呼であらう)は中世以降の歌文に右のナと同じ意味を以て普く用ひられて居る。例

- (古今) わすれ草枯れもやするとつれもなき人の心に霜は置かナン
- (同) 人知れずおもふ心は春かすみ立ち出でて君が目にも見えナン
- (後撰) しら雲の行くべき山も定まらず思ふ方にも風はよせナン

此例歌には未來を意味する心もちもあるので、ナンのンは未來助動詞ムの轉呼と説くものもあるが、未來の意は未來分詞其ものに含まれて居るので、ナンがナメと活用せられた例のない所を見ても、之を助動詞とするは誤といはねばならぬ。――助動詞にもナンといふ語があるが(次章參照)、其は常に動詞の原形に連るから、識別は極めて容易である。

モ。 助語のモとは全然別語で、後記のマアと同じく自然の發聲と思はれるが、次の例の如く感傷的の意を表示する爲に用ひられたものゝやうである。

(記高津宮) 梯だての倉椅山をさかしみと岩かきかねて我が手取らすモ。

(萬二) さゞ波の國つみ神のうらさびて荒れたる都見れば悲しモ。

(同三) 我が行くは久にはあらじ夢のわた瀬とはならずて淵にてあれモ。

(同) ものゝふの八十字治川のあじろ木にいざよふ波の行方知らずモ。

(同四) 逢はむ夜はいつもあらむを何すとか其よひ逢ひて言のしげきモ。

(同五) 秋の夜を長みにかあらむなごこばいの寝られぬモ。獨ぬればか

此モは上記の如く、感動詞カ、ナに接着してカモ、ナモとなる外、後記のヤ及助語のゾ、ハとも連ねて用ひられる。例

(萬三) こもりくの初瀬をとめが手に巻ける珠はみだれて在りといはずヤモ。

(古今) 色よりは香こそ哀とおもほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ゾモ。

(萬二) 晝ハモうらさびくらし、夜ハモいきづきあかし

(記日代宮) さねざし相模の小野にもゆる火のほなかに立ちて問ひし君ハモ。

ハモと「あつまハヤ」等のハヤとの相違については色々説をなすものがあるが、ハは原意を失はず、モもヤも感動詞として添へられたもので、唯モに感傷の意のあることを異りとするのである。

平安朝以降上記モの用法は殆ど廢れ、實朝卿が「海人の小舟の綱手悲シモ」と詠じたのは寧ろめづらしい例であつたが、最近の新派短歌と稱するものには盛に之に用ひ、聊か濫用に近い傾がある。古歌ならばカ又はヤとあるべき場合にも之を用ひたのは、若し萬葉集に倣うたものであるとすれば、誤解であると言はねばならぬ。

口語に於てはモは感動詞には用ひられず、之と同源と思はれるマアは「オヤマア」「其はマア」の如く驚歎の意を寓するものゝやうである。「其はモウ」「モウ安心」「モウ澤山」「モウ少し」などいふモウもマアから分化したのであらうが、今で

を接続する爲にも用ひられることがある。之から一轉して左の如き用法を生じた。

石見のヤ。高つぬ山 淡海のヤ。鏡の山

菅原ヤ。伏見の里 さざ波ヤ。しがの浦

大原ヤ。をしほの山

此等のヤは上の地名が下の地點を包括する總名であることを表示するのであるが、次の句に地名を明示せぬ場合にも之を准用することがある。例へば「伊勢の海ヤ。釣する海人」「難波江ヤ。葦のかり寝」等の上の句は直接釣、葦にかゝるべきものではないが、ヤといふ助語によつて連絡を保たせたのである。後世之を濫用して「ゆふしでヤ」「さむしろヤ」「萩の葉ヤ」等の如く、あらゆる名詞に添付せられるやうになつた。「高砂ヤ。此浦舟に帆をあげて」の如きも其一例で、謡曲、俚歌に最も多く使はれて居る。

「これヤ。此」「はたヤ。はた」「いかにヤ。いかに」のやうに同語を重疊する場合にもヤを以て連繫する事がある。中世以降の歌文に「花ヤ。紅葉」「雨ヤ。みぞれ」「歌ヤ。詩」の如く用ひられたのも此用法の一變化で、下の語にもヤを重ねて「詩ヤ。歌ヤ」「花ヤ。紅葉ヤ」のやうにも用ひられ、口語では「踊るヤ。跳るヤ。ラ」

は「モハヤ安心」「今少し」等の意に了解せられ、「マア一服」などいふマアはマヅ(先)の意のやうである。呼びかけに用ひるモシは或は上記副詞のモシ(若)の轉用であるかも知れぬ。附記。未來助動詞ムも往々モと轉呼せられるが、別語であることはいふまでもない。

ヤ。 疑問助語のヤとは全然別語で、自然のかけ聲である。神武紀の歌にはヤイといふ囉が見え、今も氣合にはヤ、エイといふ聲を發し、「ヤアしばらく」「ヤイ此奴め」の如く呼びかけにも用ひられる。感動詞としてのヤは本初は全然間投詞的に用ひられたらしく、次の諸例に於ては之を省いても意味に於ては少しも變りはないのである。

(記神代卷) 少女のなすヤ。板戸をおそぶらひ

(同遠飛鳥宮) 笹葉にうつヤ。霞のたしだしに

(同朝倉宮) みもろにつくヤ。玉垣つきあまし

(古今) 難波津に咲くヤ。此花冬ごもり今を春邊と咲くヤ。此花

(同) 思へどもおもはずとのみ言ふなればいなヤ。思はじおもふかひなし

右の外「天なるヤ。おとたなばた」「我が待つヤ。鳴はさやらず」「おしてるヤ。難波」「つぎねふヤ。山城」のやうに單に句と句と

「時計ヤラ指輪ヤラ」の如くヤラ(ラは接尾語)と稱へるやうになつた。

・此ヤに形容語尾シを添へたヤシも亦間投詞として誰ヤシ、ハシキヤシ、ヨシエヤシの如く用ひられる(語誌参照)。

歌には此ヤを感歎の表示として用ひた例が多い。左に其二三を擧げる。

(記神代卷) あぢしき高彦根の神ゾヤ。

(同日代宮) 少女の床のへに我が置きし劍の大刀、その大刀ハヤ。

(同近飛鳥宮) おき女モヤ近江の置女あすよりはみ山がくり

て見えすかもあらむ

(後拾) 心あらむ人に見せバヤ津の國の難波わたりの春のけしきを

例中ヤの上に接するゾ、ハ、モ、バ等は各固有の意味を保持する。例へば「置女モヤ」の歌は置女モ。明日からは山に隠れて見えぬだらうといふ意である。此等の助語は往々省略せられて「あれバヤ」を「あれヤ」といふこともあり、又助語を省いて其位置にヤを配することもある。例
汝が皇子ヤつひに知らむと雁は卵産らし(記高津宮)

古池ヤ蛙とびこむ水の音

前例のヤはハに、後例はニとかへて聞くべきものである。又ヤの上にあるべき言葉を畧する場合もある。例

哀なる我身のはて(ナリ)ヤ浅みどりつひには野邊の霞とおもへば(古今)

菊の香(ノスル)ヤ奈良には古き佛たち

括弧内は省略せられた言葉である。此語法の俳句に多いのは十七字に制限せられて居るからであらう。

ヤに上記のモを添へたヤモが感動詞に用ひられることは既に例示した通であるが、助語ハを接着して感動を強めることがある。例

おく露に色もかはらぬ柳葉の香をヤハ人のとめて來つらむ

(新古今)

此等のヤモ、ヤハは反語のヤモ、ヤハとは全然別語である。疑問助語のヤと感動詞のヤとは頗る紛れ易いが、前者は句の切れる場合の外用ひられぬものであるから(第五章参照)、句中のヤは盡く感動詞と見るのが安全で、從來ヤの係りと稱へ、之を疑問助語と見たのは誤解であつたと言はねばならぬ(言語學「三七頁以下」)。

1. 上記ヤの轉音らしく思はれるものにイといふ感動詞がある。

夙に廢用となり、且用例も餘り多くはないから、沿革を詳にし得ぬが、間投詞的に用ひられたものゝやうである。例

(一) いなといへど語れかたれと詔るにこそ志斐イはまませ強語りとのる(萬三)

(二) 玉の緒の絶えずイ妹と結びたる(萬三)

(三) 我が背子の跡ふみ求め追ひ行かば紀の關守イとどめなむかも(萬四)

(四) むかつをの若かつらの木しづ枝とり花まつイ間になきつるかも(萬七)

(五) 藤原朝臣鷹等伊負圖龜一頭献止(續記詔)

右の外續紀詔敕及同じ時代の宣命體文章には此イを用ひた例が彼是見える。韓語に主格を表現する(「此」の意)といふ助語があるから、同源から出たものとも考へられるが、第二、第四例のやうに前續語が主格でない場合にも用ひられた所を見ると、尙ヤの轉音で、感動の意を含む間投詞とすべきであらう。但し奈良平安朝に於て一時流行した原因は朝鮮語の影響であつたかも知れぬ。

ヨ。ヤから分化したもので、畧々と同様に用ひられる。例

古池ヤ蛙とびこむ水の音

前例のヤはハに、後例はニとかへて聞くべきものである。又ヤの上にあるべき言葉を畧する場合もある。例

哀なる我身のはて(ナリ)ヤ浅みどりつひには野邊の霞とおもへば(古今)

菊の香(ノスル)ヤ奈良には古き佛たち

括弧内は省略せられた言葉である。此語法の俳句に多いのは十七字に制限せられて居るからであらう。

ヤに上記のモを添へたヤモが感動詞に用ひられることは既に例示した通であるが、助語ハを接着して感動を強めることがある。例

おく露に色もかはらぬ柳葉の香をヤハ人のとめて來つらむ

(新古今)

此等のヤモ、ヤハは反語のヤモ、ヤハとは全然別語である。疑問助語のヤと感動詞のヤとは頗る紛れ易いが、前者は句の切れる場合の外用ひられぬものであるから(第五章参照)、句中のヤは盡く感動詞と見るのが安全で、從來ヤの係りと稱へ、之を疑問助語と見たのは誤解であつたと言はねばならぬ(言語學「三七頁以下」)。

(記神代卷) 吾はもヨ女にしあれば

(神代紀) さ寝床もあはぬかもヨ濱つ千鳥ヨ

(萬四) 今は我は死なむヨ吾が背生けりとも我によるべしといふといはなくに

「吾はもヨ」は「吾はモヤ」といふに同じく、「與はぬカモヨ」は「能はぬカナヤ」ともいひ得る。既記のハシキヤシ、ヨシエヤシがハシキヨシ、ヨシエヨシとも用ひられた所を見ると、ヤに通用することは疑がない。現代語に於ても「行かうヨ」「遠いヨ」「さうだはヨ」の如く、感動を表示するに用ひられるのである。

命令法に添へて用ひる「よく見ヨ」「之を力めヨ」のヨも亦之に屬するもので、イ又はロと訛つて「よく見イ」「努めロ」といふこともある。

同じ意味に於てヨは上例の「濱つ千鳥ヨ」の如く、呼格をも表現し、口語でも「龜ヨ龜さんヨ」「諸君ヨ」などいひ、ヤと轉呼しては「坊ヤ」「爺ヤ」のやうに用ひられる。但し「ヨウシばらく」「ヨウ今日は」などいふヨウは前號のヤアの轉呼である。此ヨは上古ヲとも轉呼して用ひられた。萬葉集第十卷に「渡守船渡せヲとよぶ聲の」とあるのは船渡せヨの意なること

動詞に在つては已然格、一段及二段活に在つては原形を用ひ、但しサ行及カ行變格は未然格と同様にセ、コと轉呼する。之に感動詞ヨを添へることもある。例

千はやぶる人を和ハセと、まつろはぬ國を治メと〔萬三〕
芳野よく見ヨよき人よく見〔萬二〕
之を力メヨヤ

此語法に限り命令語たる動詞は受命者たる名詞に先行するこ
とがある。例

高天原に氷木高知りて居レ、是奴〔記神代卷〕
道のくまみにしめ結へ我が背〔萬二〕

口語ではヨの代りにイ又はロを添付することがある〔前章感動
詞ヨの項下参照〕。例

見イ。 來イ。 止メイ。
見ロ。 落チロ。 止メロ。

〔ハ〕疑問法〔反語〕。動詞を以て疑問を表示する爲には通常
助語カ又はヤを動格に添付する。例

ヤ。 行クヤ。 落ツヤ。 有リヤ無シヤ
カ。 行クカ。 落ツルカ。 有ルカ無キカ

右の如く動格に二型がある場合にはヤは常にa型に連り、カは

b型(所謂連體形)に接続することを例とするが、其は此兩助語
の性質の相違に因するものである。——次章ヤ及カの項下参照。
——其他疑問代名詞にゾを連用して之を表示することもある
が、其は次章助語ゾの項下に述べる。

疑問法は右の如く極めて簡單であるが、口語に於ては今も「行
く?」「ある?」といふやうに、カ、ヤを畧して語勢のみを以て表
現することがある。我國字には?の如き記號がないので、之を
其儘文字に寫すと誤解を招く虞があるから、文章に於ては必ず
右の兩助語の一を添へることを例としたが、歌詠は語音の數に
制限があり、且口誦のまゝを筆寫したものが後世に傳はつたの
であるから、疑問助語の省畧せられたもの、或は之を倒叙した
ものもある。例へば「幾夜寝つるカ」「いかにすべきカ」の如く
疑問助語が先行する場合には、之にカを讓つて「幾夜カ寝つる」
「如何にカすべき」といひ(次章カの項下参照)、「妹が來ませるハ現
にカ夢にカ、戀の繁きによつて惑へるは我カ」といふ意を歌には
「うつつにカ。妹が來ませる夢にカモ吾カ惑へる戀のしげきに」と
詠まれて居る〔萬三〕。然るに「浮寝やすべき尙ヤ。漕くべき」今カ
咲くらむ」「雪カモ降れる」の如く、感動詞ヤ、カ、カモ等が句中
に挿入せられたものが此語法に似て居るので、後人之を誤解し

いはサヤモ

〔古今〕山城の音羽の山の音にだに人の知るべく我がこひめ

カモ

〔同〕春の夜の暗はあやなし梅の花いろを見えね香ヤハ

かくるる

〔後撰〕くれなゐの涙の色になりけりかはるは人の心のみ

カハ

此等は「空しかるべからず」「人に知れるやうには戀はせぬ」「香
はかくれず」「人の心のみではない」といふことを反語的にいひ
表はしたのである。——但しヤは疑問助語ではない(第六章参照)
——口語では「可愛ではないか」「さうだらうか」の如く多くは
打消又は未來時格の問の形式を以て表現せられる。

二、時 格

現刹那を境として「自今」と「至今」との二様に分けられた時格
の觀念が發達して過去、現在、未來の三時格が認められ、其に伴
うて活用基礎形が發達したことは既に前章動詞の項下に述べた
通である。さりながら過去、現在、未來の中にも亦種々の時相が
あるから、之を細別する必要を生じた。國語に於ては之を表現

てヤ、カ、カモ等と動格(二段活及形容詞に在りてはb型)とが呼
應して疑問の表現を完うするものと考へるやうになつたが、少
しも理由のない事である。上例は「浮寝すべきカ尙漕くべきカ」
「今咲くらむカ」「雪降れるカ」のカを畧したもので、ヤ、カ、カモ
に疑の意があるのではない。或は既に疑問句である以上感動詞
を挿入することは有り得ぬと考へるものがあるかも知れぬが、
中世の歌には「何とカヤくさの姿もおもほえて」「拾遺」の如く、
カ(疑問)とヤ(感動)とを續けて用ひた例さへあるのである。此
誤解を根據としてカ、ヤの結びが常にb型であらねばならぬ
と斷定した所謂中段の結びの法則が幻覺に過ぎぬことは勿論で
ある。

反語。 疑のないことを問の形式を以て表示すれば反語とな
る。例へば「彼に劣らむヤ」は言葉の上からは「劣るだらうカ」と
いふ問であるが、劣らぬといふ自信のある場合には反語的に優
越を表現するのである。此は前後の文脈と語勢とによつて自ら
明になることで、別に之を標識する語を添へることはないが、
同じく反語の意のあるモを連ね(次章モの項下参照)、若くは助語
ハを添へて語意を強めて表示することがある。例

〔萬三〕こもりくの初瀬少女が手にまける玉は亂れてありと

する方式即ち動詞の時格活用が異常の發達を遂げ、過去、現在、未來を通じて實に三十有三時格に分たれるのであるが、——口語に於ては此語法が甚しく衰退したことは後に述べる——之に用ひられる助動詞は左記五語に過ぎぬ。便宜の爲め先づ其自體の變化を表示する。

原形	動格	已然格	未然格	分詞
アリ	{(a)アル (b)アリ	アレ	アラ	{(a)アリニ (b)アリテ
ニ	{(a)ヌル (b)ヌル	ヌレ	ナ	(b)ニテ
テ	{(a)ツル (b)ツル	ツレ	タ	
キ	{(a)シ (b)キ	シカ		
ム	ム	メ		

此五助動詞の性能は畧々次の通である。

アリ。「存在」の意の動詞であるが、他の動詞(又は助動詞)に運用せられる場合には或る時間動作行爲が繼續することを表示する助動詞となる。例へば落チアリは或る時の以前から今の刹那まで落ちつゞいて居ることをいふのである。此は過去現在、未來いづれの時格にもあり得べき現象で、——私は之に繼續(時)格といふ名を與へた——常にアリを連結することに

分詞語分子なるが故で、ニテと重ねて用ひた例も極めて僅少である。テがアリと連約せられてタリとなり、繼續完了時格を表示することは既に述べた。

キ。動詞キ(來)の轉義であらう。キの原義には運動の方向による區別はなく、「往」の意をも含むから(前章動詞の項下参照)、既往の意を以て過去表示に轉用せられたものと思はれる。母韻變化によつて活用せられる動詞キ(來)と區別する爲に、此助動詞は子音變化によりシといふ一形を分派した。——サ行を選んだのはカ行と音が近いからであらう。沖縄方言ではキシ通用例が多く、歐洲語に於てはchiはシともキとも發音せられるのである。——此形は本初已然格として用ひられたもののやうであるが、一般には動格の一種b型と見なされ、已然格としては別に之にカ(形容語尾)を添付したシカの形が用ひられる。此助動詞及次のムは常に終尾に位し、他の助動詞が其後に連ることがないから分詞形は存せぬのである。繼續時格を表示する爲にキにアリを連ねる場合には上記の如く約せられてケリとなる。

ム。マ(間)の轉呼で、時の間隔の意から未來を表現するやうになつたものと思はれる。さればマシ、マクの如く他語と連

よつて表示せられる。即ち未來格に在つては助動詞ムにアラ(アリの未來分詞)を冠した形を用ひ、過去に於ける繼續時格を表現せむが爲には上記の助動詞テ及キに之を連ねて左記の二複合助動詞を形成した。——此本支三語の用法は後記各時格の説明の項下に叙述する。

タリ(テ、アリの約) } アリと同様に變化する。
ケリ(キ、アリの約)

ニ及テ。既記の分詞語分子であるが(前章動詞の項下参照)、助動詞として用ひられる場合には現刹那に動作行爲の完了した(若くはせんとする)ことを表現する。——之を現在完了時格と稱へる——ニとテとの差別は原義の相違に基くもので、ニは「中」を意味し、テはト(外)から出た語であるから、助動詞として示す時相にも内面的(主觀)と外面的(客觀)との差があるのである。其故に「花を見ツ」とはいふが、「花を見ヌ」とはいへぬことはないとしても、普通の場合には用ひられぬ。又「都へ行キヌ」と「都に行キツ」との相違は「都へ行クニ金が足らぬ」と「都ニ行クト金が足らぬ」といふ表現を對照すればおのづから明白である。

る場合にはマの形に復元するのである。ムは中世以降ンと轉呼せられ、口語ではウとも發音せられる。

上掲諸動詞も亦終止法には動格(a, b二型とも)と已然格とが併用せられるのであるが、以下の説明に於ては煩を避ける爲、常に動格(a型)のみを以て記述する。

國語の時格は次の如く分類して考察することを便とする。

(イ) 現在

動詞自體の變化中動格は現在を表示するものと一般に了解せられて居るが、嚴密にいへば不定時格で、既記の如く「風吹ク」「花咲ク」は必しも何時の事とは限られず、遠い昔についても或はまだ見ぬ後の世についても用ひ得られ、過去及未來助動詞は終止法を用ひても決して現在の表示にはならぬのである。時は寸刻も停止せず、今の未來もやがては現在となり、現在といつても一瞬の後には過去となるのであるから、動作、行爲又は形態の現在には實に一刹那に過ぎぬ。其故に上代人は時格を「至今」と「自今」とに分けたので、文法でいふ現在も或時の前後から現刹那に互る實演又は實現を意味するものであらねばならぬ。國語では此觀念が極めて明白に次の二格によつて表現せられる。進行格。現刹那から尙引つゞき或る時間動作行爲又は形態

の進行することを意味するもので、次の方法によつて表示せられる。

(一) 動格を疊合すること。例

(萬一) 國原は煙立龍、海原は鷗立たつ

(同三) 海人ならましを玉藻刈々

此場合複合名詞と見てタチタツ又はカリカルといつても差支はないが、意味は同じく反復進行である。

右の語法は口語にも其俤を留め、「見イ見イ」「食ヒ食ヒ」のやうに用ひられることがあるが、文語に於ては寧ろ希用で、ツツといふ助語を之に代へて用ひることを例とする。即ち上例の玉藻刈々と同義を萬葉集十一卷には「海人ならましを玉藻刈リツツ」とし、雪は降りツツ、花は散リツツ等というた。さりながらツツは純然たる助語で(次章其項下參照)、助動詞ではないから、――降りツツ等を降りツツ降りツツの約とする説もあるが、完了時格を表現するものではなく、又散リヌを散リヌヌと約した例もないから、誤解とせねばならぬ――之を活用の一形と見ることは出来ぬ。見ツツアリなどいふ見ツツは副詞的用法、アリは「在」の義の動詞で、過去、未來諸格にも活用せられるのである。

(二) ハヒ(延)といふ動詞を連用すること。例

ツギ(續)――ツガヒ(ツギ、ハヒの約)

シハブキ(咳)――シハブカヒ(シハブキ、ハヒの約)

ホギ(壽)――ホガヒ(ホギ、ハヒの約)

然るに此種複合詞も亦慣用上、原語とは多少異つた意味を示す單語と目せられ、進行を意味せぬやうになつた。例

スミ(住)――スマヒ(居住)

カタリ(語)――カタラヒ(談合)

ハカリ(計)――ハカラヒ(措置)

後の語法も亦活用といふことは出来ぬから、純粹の進行格活用はカルカルの如き一種のみで、口語には之に相當するものがないのである。

繼續格。或時以前から現利那まで繼續することを意味し、既記の如く助動詞アリを接着することによつて表示せられる。此場合一段及二段活動詞に在つては見アリ、落チアリのやうにアリを連用するのであるが、四段活動詞に在つては左記の如く連約が行はれる。

咲キ、アリ――咲ケリ 爲シ、アリ――爲セリ

勝チ、アリ――勝テリ 行ヒ、アリ――行ヘリ

富ミ、アリ――富メリ 降り、アリ――降レリ

咲ケリ、爲セリ等が往々過去表示に用ひられることのあるのも、此時格の性質が然らしめるので、或る繼續現象を其最も遠い端についていへば過去であるからである。――口語ではアリの代りにキルを用ひることは後記の通である。

繼續格は現在のみではなく、既述の如く以下の諸時格にも存するのである。

(ロ) 現在完了

現在と過去との中間に現利那に於て正に其動作行爲等が完了したことを表示する一時格が存し、分詞語分子ニ及テを活用して之を標識することは既記の通である。

此時格の繼續格を表示するにはテに在りては上記の如くタリ(テ、アリの約)を用ひるが、ニはナリ(ニ、アリの約)の形に於て用ひられることはなく、――恐らくは既記の活用語尾ナリ(第二章參照)と紛れることを厭うた爲であらう――ニに右のタリを連ねたニタリを以て表現する。例

風吹キタリ 花咲キニタリ

第一の例は風が或時以前から現利那の直前まで吹きつゞいたことを意味し、第二例も時格からいへば畧々同様であるが、花が

咲き出た(咲キタリ)とは少しく意味を異にし、開了してあるといふことになる。其故にニタリの形は特に之を必要とする場合の外は用ひられず、單に完了時格を表示するにはタリの形のみが專用せられる。

右の如くタリは遠い過去から今の直前にまで互る長い時間を表示するので口語では之を約してタと稱へ、過去諸時格に通用する。さりながら吹キタリ、咲キタリを吹キテアリ、咲キテアリと同義とするのは大なる誤で、後者に在つては吹キテ、咲キテは副詞、アリは「在」の義の動詞として用ひられたのであるから、其表示する時格は完了ではなく現在である。されば之を口語に譯せば咲キタリは咲イタであるが、咲キテアリは咲イテアルといはねばならぬ。――アリが動詞として用ひられたか、助動詞であるかによつていづれの場合にも意味が相違するから、常に大なる注意を要する。

(ハ) 過去

過去の表示に助動詞キ(シ、シカ)を用ひることは既述の通である。此は純過去を意味するのであるが、多くの場合動作、行爲又は形態の實現は或る時の間隔に互るものであるから、此格によつて表現せられる場合は稀である。其故に口語では全く廢れ

て、上記の如くタ(タリ)の約)が之に代用せられるやうになつたので、文語に於ても次の繼續時格ケリの方が多く用ひられる。ケリ(キ、アリの約)は過去時に於ける動作、行爲又は形態の實現の繼續を表示するものであるが、過去は現利那の直前までを含むのであるから、時としては現在に極めて近い時相ともなることは上述の現在完了繼續格と同一である。此理を解せずしてケリに疑又は詠歎の意があると主張し、或は過去にあらぬ場合にもケリ、ケルカナ等を濫用するのは大なる誤である。

(ニ) 過去完了

精しくいへば過去時に於ける完了を表示する時格で、上記完了助動詞ニ及テに過去助動詞キを連ねたニキ及テキが之に供用せられる。例へば花咲キニキ、風吹キテキは「花さきぬ」「風吹きつ」といふ表現を用ふべき事件が過去時に起つたことを意味するのであるが、若し「花咲」「風吹」が繼續的現象であつたならば、花咲キニタリキ、風吹キタリキと言はねばならぬ。其故にニタリキ及タリキも亦過去完了を表示する活用語尾である。

口語では上記のやうにキといふ助動詞は用ひぬやうになつたが、尙過去の事實を物語る場合には「五年前大風が吹いたツけ」(吹キタリキの訛)といふやうに、ケの形に於て再現することが

ある。

此時格に於て過去が或る期間に互るものである場合には、キの代りに繼續時格を表示するケリを用ひねばならぬ。即ち

ニキ は ニケリ ニタリキ は ニタリケリ

テキ は テケリ タリキ は タリケリ

となるのである。例へば花咲キニタリケリは「咲きにたり」といふ形式を以て表示せらるべき開花状態が過去時に於て存続したことを意味するのである。此やうな微妙な時相を表現し得る言葉は私の知る限に於ては諸外國中に求め難く、我々の言語が少くとも此點に於て異常の發達を遂げたことを證明するものであるが、現代の口語が此妙用を失うたことは實に遺憾とすべきである。

(ホ) 未來及未來完了

上記諸助動詞が常に動詞の原形に連なるに反し、未來を表示するムは四段活動詞にあつては第三變形(即ちア韻を以て終るもの)に連る。二段、一段活には此形を缺くので、原形を以て代用せられるが、尙全く性質を異にする用途であるから、四段活の第三變形と共に未然格と呼稱せられ、其名の示すが如く、其自體に未然を意味するのである。されば行カナ、見バ、落チバだ

けでも未來(假定)の意が含まれるが、述語としてはム(メ)を添へて行カム、見ム、落チムの如く用ひられるのである。

此形は單に今後の事を言ふもので、其實現の如何は問ふ所ではないから、話者自身の意嚮を表示するに用ひられることもある。例へば「願くは花の下にて我死なむ其きさらぎの望月の頃」は必ず花下に於て生命が終るといふ意ではなく、死にたいといふ意嚮を表明したので、欲レ死といふ意である。其故に有り得べきことを豫言する場合には完了助動詞の未來時格を用ひる。其は此形が既記の如く將來に於て完了することを意味するからである。例へば我行カムといへば意嚮とも取られる事があるが、我行キナム、我行キテムは我將レ行の意で、我欲レ行と譯することは出来ぬ。——口語では未來完了格がないから推量の助動詞をかりて行クダラウといふ——勿論此場合にも必ず實現するとは限つて居らぬから、豫想に過ぎぬこともあるが、行キテムの形に希望の意をも含むと解するのは大なる誤で、古語では其場合には行キテナ(ナは希望を表示する感動詞)といひ、決して行キテムとはいはなかつた。

更に未來完了と尋常の未來との相違の例をあぐれば、風吹キナム、花咲キテムは漫然今後の事を意味する風吹カム、花咲カム

とは異り、吹キヌ、咲キツといふ表現を用ふべき事件が未來に起るといふ意で、漢字を以て表現すれば垂レ吹、垂レ咲である。

未來及未來完了時格にも亦繼續を表現する語法のあることは既に述べた通で、同じ例を以て言へば花咲ケラム、花咲キニタラム、花咲キタラムの如く、現在及現在完了の未然格にムを添へて表現せられるのである。此時格の含蓄する意義は咲ケリ、咲キニタリ、咲キタリといふ形を以て表現せらるべき開花状態が今後に現出するといふことで、之も亦未來時格の一相なるべきことは勿論である。

(ハ) 過去時に於ける未來

上記の外、過去に遡つて其當時尙未だ實現しなかつた事件に言及する必要がある事がある。其最も單純なものは過去助動詞キの未然格にムを添へたケムであるが、過去完了諸時格ニキ、テキ、ニタリキ、タリキも亦ニケム、テケム、ニタリケム、タリケムとして其々の時格に於ける未發事項を表示するに用ひられる。或る期間に互る過去時についていふ場合にはケムに代ふるに繼續時格を表示するケリの未來形ケラムを以てすべきことは勿論で、次の如く變化する。

ケム——ケラム ニケム——ニケラム

テケム——テケラム ニタリケム——ニタリケラム
タリケム——タリケラム

此諸形が表示する時格は上記(ニ)過去完了と照し合はせて會得すべきである。

以上は文語に於て普通に用ひられる時相の表現法で、不定時格の外に三十有二種に分れ、各種二型乃至三型の終止形があるから(其項下参照)、通計八十二様の變化がある。之に後記の間接叙法を並算すると一語の時格活用は實に百六十四變し、精微を極めたものである。然るに口語に於ては上記の如く完了及過去諸時格がタリの約なる夕に統一せられた結果、遙に簡約になつたけれども、之が爲に細微な時相表現が不可能になり、西洋語の翻譯にさへ悩むのは遺憾なことであると言はねばならぬ。口語法を説くことは本編の目的ではないが、文語との相違を明にし、且上述諸時相の通覽に便にする爲に、動詞咲キについて左に文語と口語との活用を對比する。

時格 尋常時格
不定 文語 口語
咲ク 咲ク

進行	咲ク 咲ク
完了	咲キヌ
過去	咲キツ
過去完了	咲キニキ
未來	咲カム
未來完了	咲キナム
過去未來	咲キケム
繼續時格	咲キニケム
	咲キテケム
	咲キニタラム
	咲キタラム
	咲イタラウ

文語のアリの代りに口語ではキル(居)を用ひ、原形の代りに

動詞の分詞形をうける。キルと變化したのは恐らくは咲イテ在ルのアルと區別する爲であらう。

時格	文語	口語
現在	咲ケリ	咲イテキル
完了	咲キニタリ	咲イテキタ
過去	咲キケリ	咲イテキタ
過去完了	咲キテケリ	咲イテキタツケ
	咲キニタリケリ	
未來	咲ケラム	咲イテキヨウ
未來完了	咲キニタラム	
	咲キタラム	
過去未來	咲キケラム	咲イテキタラウ
	咲キニケラム	
	咲キテケラム	
	咲キニタリケラム	
	咲キタリケラム	

三、諸法

上記動詞自體の變化によつて表現せられるもの、外、動詞の諸語法は皆助動詞を連用することを要する。前例に倣ひ、先づ之に用ひられる諸動詞を列擧して次に逐語の用法を説くことにする。

用途	原形	動格	已然格	未然格	分詞
間接叙法	ナリ	(a)ナリ	ナレ	ナラ	ナリニ
		(b)ナル		ナラ	ナリテ
推量	ラム	ラム	ラメ		
	ラシ	(a)ラシ	ラシケレ		ラシク
	マシ	(b)ラシキ			
	メリ	(a)メリ	メレ	メラ	
		(b)メル			
強意	シ	(a)ス	スレ	セ	シニ
		(b)ス			
使動	セ(サセ)	(a)ス	スレ	セ	
	シメ	(b)シム	シムレ	シメ	
		(a)シムル			
		(b)シムル			